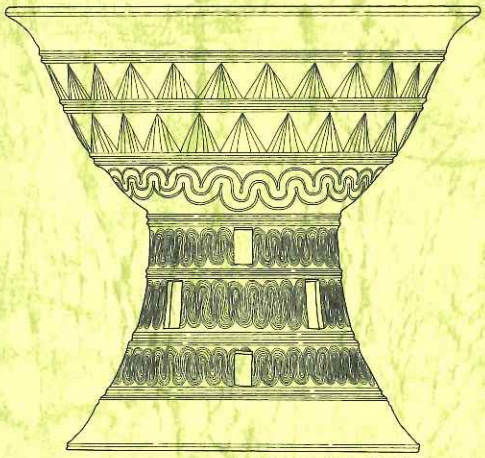
兵庫県文化財調査報告　第357冊

赤穂郡上郡町

竹万宮ノ前遺跡

－(主)姫路上郡線住宅宅地関連道路整備事業に伴う発掘調査報告書－



出土須恵器器台想定復元案

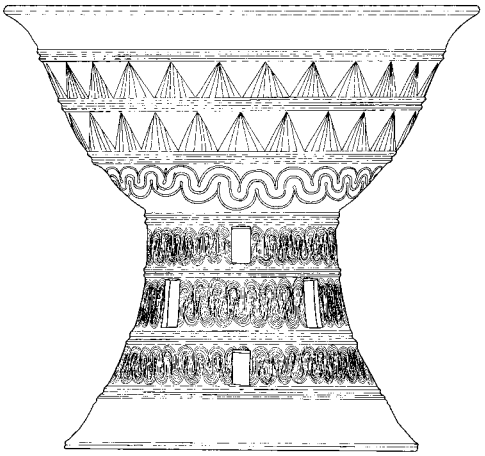
2009(平成21)年3月
兵庫県教育委員会

兵庫県文化財調査報告　第357冊

赤穂郡上郡町

竹万宮ノ前遺跡

－(主)姫路上郡線住宅宅地関連道路整備事業に伴う発掘調査報告書－



出土須恵器器台想定復元案

2009(平成21)年３月

兵庫県教育委員会

赤穂郡上郡町

竹万宮ノ前遺跡

－(主)姫路上郡線住宅宅地関連道路整備事業に伴う発掘調査報告書－

2009(平成21)年3月
兵庫県教育委員会

例　　言

1．本書は、兵庫県赤穂郡上郡町竹万に所在する、竹万宮ノ前遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査及び整理作業については、上郡土木事務所の依頼を受けて、発掘調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が、整理作業は兵庫県立考古博物館が実施した。なお、発掘調査および整理作業にかかる担当者や調査期間、委託業者に関しては第１章第２節に明示した。

3．出土遺物整理は兵庫県中播磨県民局長の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が平成19年度･20年度に実施した。

4．本書に使用した写真のうち、遺構については調査員が撮影したものを、発掘調査中の空中写真測量は空中写真測量会社に委託して撮影したものを使用した。また、遺物写真については株式会社タニグチ・フォトに委託して撮影したものを使用した。

5．本書の執筆は第４章の自然科学分析を除いた部分は上田が行い、本書の編集は宮田麻子・西村美緒の補助を得て上田が行った。また、第４章においては、須恵器の胎土分析について大阪大谷大学の三辻利一氏から玉稿を賜り（第２節）、パリノ・サーヴェイ株式会社にも土器胎土分析を依頼しその結果を掲載している（第１節）。

6．本書に関わる写真・図面などの記録、出土した遺物などは、兵庫県立考古博物館において保管している。

7．発掘調査および整理作業にあたっては、以下の方々からご指導、ご教示、ご協力を得た。記して感謝の意を表します。（順不同敬称略）

今里幾次、小田　賢、加藤史郎、金関　恕、亀田修一、岸本道昭、合田幸美、酒井将史、常松幹雄、露原有紗、中久保辰夫、永野　仁、松本正信

凡　　例

1．挿図の座標値は、平成14年４月１日の測量法改正に伴い、世界測地系に基づく平面直角座標系の数値に補正している。なお、平面直角座標系は第Ⅴ系を使用し、方位は座標北を示す。また、標高値は東京湾平均海水準（Ｔ.Ｐ.）を基準としている。

2．遺物は原則として、掲載順に通し番号を付けている。また、石器にはＳ、鉄器にはＦをそれぞれの頭に付加し、土器と区別を図っている。

3．弥生土器および土師器、陶磁器については実測図の断面部分を白抜きにしているが、須恵器は断面部分を黒塗り、また陶磁器は断面部分に網掛けを施すことによって区別している。

4．本書の図版１の地図は国土地理院発行の1/200,000「姫路」を利用し、図版２の地図は国土地理院発行の1/50,000「上郡」､「播州赤穂」を利用した。また図版３・４の地図には上郡町発行の「都市計画基本図56」（1/2,500）を利用した。

目　　次

第１章 調査に至る経緯と経過
第１節　発掘調査に至る経過・・1
第２節　発掘調査の経過と体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第３節　整理作業・報告書作成の経過と体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

第２章　遺跡をめぐる環境
第１節　地理的環境・・3
第２節　歴史的環境・・4

第３章　発掘調査の成果　・・7

第４章　自然科学的分析
第１節　竹万宮ノ前遺跡出土土器の胎土分析　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
第２節　竹万宮ノ前遺跡出土須恵器（古墳・奈良）の産地問題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43

第５章　まとめ
第１節　弥生時代後期の遺構と遺物について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
第２節　古墳時代における渡来系の要素を持つ遺物について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
第３節　律令期の遺構と遺物について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
第４節　平安時代後半期の遺構と遺物について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・58

表　目　次

第１表　竹万宮ノ前遺跡周辺の主要遺跡　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第２表　出土土器一覧表　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
第３表　出土石器一覧表　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
第４表　出土鉄器一覧表　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
第５表　分析試料一覧および胎土分類　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
第６表　剥片観察結果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
第７表　竹万宮ノ前遺跡出土須恵器の分析データ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44

挿図目次

第１図　現在の調査区付近の様子 ・・・・・・・・ 1
第２図　千種川の流域と勾配 ・・・・・・・・・・ 3
第３図　調査区の杭№と発掘調査体験学習区 ・・ 25
第４図　包含層出土鉄滓 ・・・・・・・・・・・・ 28
第５図　包含層（３～５層）出土土器 ・・・・・ 34
第６図　各粒度段階における鉱物･岩石出現頻度 ・ 38
第７図　胎土中の砂の粒径組成 ・・・・・・・・・ 39
第８図　砕屑物・基質・孔隙の割合 ・・・・・・ 40
第９図　分析対象試料 ・・・・・・・・・・・・・ 44
第10図　丸山群と陶邑群の相互識別 ・・・・・・ 45
第11図　古墳時代の須恵器の産地推定（１） ・・ 45
第12図　古墳時代の須恵器の産地推定（２） ・・ 45
第13図　相生窯群出土須恵器の両分布図 ・・・・ 46
第14図　相生群と加古川群の相互識別 ・・・・・ 47
第15図　８世紀代の須恵器の産地推定 ・・・・・ 47
第16図　竹万宮ノ前遺跡の円筒形土器と類例 ・・ 50
第17図　コンパス文の施文具と文様 ・・・・・・ 51
第18図　大成洞古墳群のコンパス文の施された
　　陶質土器 ・・・・・・・・・・・・・・・ 51
第19図　竹万宮ノ前遺跡の初期須恵器と類例 ・・ 52
第20図　ヘラ描きコンパス文の例 ・・・・・・・ 53
第21図　竹万宮ノ前遺跡須恵器器台の想定復元図 ・ 54
第22図　コンパス文・流水様波状文の施された
　　須恵器器台出土分布図 ・・・・・・・・ 56
第23図　律令期須恵器杯・皿の法量分布 ・・・・ 57
第24図　平安時代後半期の椀の法量分布 ・・・・ 58
第25図　平安時代後半期の小皿の法量分布 ・・・ 59
第26図　須恵器小皿底部糸切りの各種 ・・・・・ 59

図版目次

図版１　兵庫県・上郡町・竹万宮ノ前遺跡の位置
図版２　竹万宮ノ前遺跡と周辺の遺跡
図版３　事業計画地と調査位置
図版４　確認調査トレンチおよび本発掘調査の
　　調査区
図版５　調査区平面図・土層断面図
図版６　調査区北部平面図
図版７　調査区南部平面図
図版８　SH01
図版９　SH02
図版10　SB01
図版11　SB02 ・ SB03
図版12　SB04 ～ SB06 ・ SB09
図版13　SB07
図版14　SB08
図版15　SB10 ～ SB15
図版16　SB16 ～ SB20
図版17　SB21 ～ SB24
図版18　柱穴列１～４
図版19　柱穴列５～９ ・ SD01 ～ SD04
　　土層断面図・ SX01
図版20　土坑（ SK01 ～ SK13 ）
図版21　出土土器①（竪穴住居跡①）
図版22　出土土器②（竪穴住居跡②）
図版23　出土土器③（掘立柱建物跡）
図版24　出土土器④（柱穴列・柱穴①）
図版25　出土土器⑤（柱穴②）
図版26　出土土器⑥（土坑①）
図版27　出土土器⑦（土坑②）
図版28　出土土器⑧（包含層①）
図版29　出土土器⑨（包含層②）
図版30　出土土器⑩（包含層③）
図版31　出土土器⑪（包含層④）・出土土製品
　　（土錘①）
図版32　出土土製品（土錘②）・出土石器・
　　出土鉄器

写真図版目次

写真図版 1	空中写真	上	竹万宮ノ前遺跡遠景（北から）
		下	竹万宮ノ前遺跡遠景（南から）
写真図版 2	空中写真	上	竹万宮ノ前遺跡遠景（北西から）
		下	竹万宮ノ前遺跡近景（北西から）
写真図版 3	遺跡		調査区全景（空中写真）
写真図版 4	遺跡	上	調査区全景（南から）
		下	調査区全景（北から）
写真図版 5	遺構	上	SH01（北から）
		中	竈検出状況（西から）
		下	竈と円筒形土器（南西から）
写真図版 6	遺構	上	SH01・SH02（北から）
		中	SH02（西から）
		中右	高杯出土状況（南東から）
		中左	中央土坑Ｂ土層断面（西から）
		下右	小型甕出土状況（南東から）
		下左	甕出土状況（南から）
写真図版 7	遺構	上	SB01～SB03（南から）
		中	SB04・SB05（南から）
		下	SB07・SB08（南から）
写真図版 8	遺構	上	SB24P1（南から）
		中	柱穴列１P3（西から）
		下	SD01（東から）
写真図版 9	遺構	上	SX01（南西から）
		中	SK02（北から）
		下	SK03（北から）
写真図版 10	遺構	上	SK08と柱穴列４P4との切り合い（南から）
		中上	SK07（南から）
		中下	SK12（西から）
		下	SK13（南から）
写真図版 11	遺物	上	絵画土器
		中	コンパス文須恵器器台片
		下	古大内Ⅱ式（小犬丸式）軒丸瓦
写真図版 12	遺物	上	SH02出土主要土器
		下	古墳時代の渡来系の要素を持つ遺物
写真図版 13	分析		土器胎土の顕微鏡写真①
写真図版 14	分析		土器胎土の顕微鏡写真②
写真図版 15	遺物		出土土器①（竪穴住居跡①）
写真図版 16	遺物		出土土器②（竪穴住居跡②）
写真図版 17	遺物		出土土器③（竪穴住居跡③）
写真図版 18	遺物		出土土器④（竪穴住居跡④）
写真図版 19	遺物		出土土器⑤（掘立柱建物跡）
写真図版 20	遺物		出土土器⑥（柱穴列・柱穴・溝・不明遺構）
写真図版 21	遺物		出土土器⑦（土坑①）
写真図版 22	遺物		出土土器⑧（土坑②）
写真図版 23	遺物		出土土器⑨（包含層①）
写真図版 24	遺物		出土土器⑩（包含層②）
写真図版 25	遺物		出土石器・金属器
写真図版 26	普及		発掘調査体験学習会・現地説明会風景

第１章　調査に到る経緯と経過

第１節　発掘調査に至る経緯

１ 主要地方道姫路上郡線と事業の概要

本報告書に所収した竹万宮ノ前遺跡の発掘調査成果は、主要地方道姫路上郡線住宅宅地関連道路整備促進事業に伴うものである。

主要地方道姫路上郡線（兵庫県道５号線）は、姫路市田寺１丁目と上郡町落地の全長約36．8㎞を結んでいる。このうち、上郡町大持から上郡町山野里の区間は主要地方道赤穂佐伯線（兵庫県道90号線）と重複している。この重複区間付近では、姫路上郡線が与井から国道373号線を経て北上し、上郡町の市街地を折れ曲がりながら通過し、JR山陽本線南側の上郡町川原に至るやや複雑な経路となっていた。

第１図　調査区付近の現在の様子（平成20年12月）

平成12年度より西播磨都市計画事業の一環として、上郡町の推進する竹万地区のJR山陽本線より南側一帯を対象とする区画整理事業とともに、上郡土木事務所によって姫路上郡線および赤穂佐伯線の整備が主要地方道姫路上郡線住宅宅地関連道路整備促進事業として計画された。すなわち、上郡姫路線を与井から千種川や国道373号線を横断し竹万を経て川原に至る東西方向を直線的に結び、それに直行して南北に、上郡橋（栄町）から千種川右岸沿いにJR線の下をトンネルにして通過し竹万の赤穂佐伯線まで接続する道路と、路線を新規に結ぶものである（図版３）。

２　埋蔵文化財の対応

主要地方道姫路上郡線住宅宅地関連道路整備促進事業の計画に伴い、兵庫県教育委員会と兵庫県上郡土木事務所とが埋蔵文化財調査の取扱いに関する協議を行った。事業予定地内には竹万宮ノ前遺跡・竹万山田遺跡、山野里四ツ日遺跡が所在する。平成12年度に竹万地区のJR山陽本線より北側の地区（遺跡調査番号2000234）および与井地区（遺跡調査番号2000298）と確認調査を行った。このうち竹万宮ノ前遺跡の範囲に関しては、平安時代の遺構・遺物を確認したため、上郡土木事務所が兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に本発掘調査を依頼した。与井地区に関しては遺構・遺物は発見されなかった。

また、竹万山田遺跡の所在する範囲は平成13年度に(二)千種川河川改良事業に伴って確認調査（遺跡調査番号2001205）を実施し、平成14年度に(主)赤穂佐伯線道路改良事業として本発掘調査を行っている。また、山野里四ツ日遺跡の所在する範囲については、平成16年度に(主)姫路上郡線道路改良事業として確認調査を経て本発掘調査を実施している。

なお、上郡町土地区画整理組合による竹万土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについては、別途、上郡町教育委員会が平成12年度から14年度にかけて事業地内の試掘調査および竹万京免遺跡の全面調査を行っている。

第２節　発掘調査の経過と体制

１　確認調査（遺跡調査番号：2000234）

調査日時：平成 12 年度９月 20 日　　調査担当職員：企画調整班　多賀茂治

２　本発掘調査（遺跡調査番号：2001003）

調査期間：平成 13 年５月 24 日～８月 24 日　調査対象面積：1833 ㎡

調査担当職員：調査第４班　種定淳介・上田健太郎

調査補助員：春名祐太　　室内作業員：阪口智香

調査請負業者：山一土木株式会社（発掘調査工事）・株式会社大設（空中写真測量）

３　普及活動

本発掘調査時には県民を対象とした現地説明会や、近隣の上郡小学校・山野里小学校の児童を対象とした発掘調査体験学習会を行っている（写真図版 26）。現地説明会は平成 13 年８月４日に開催し、約 80 名の参加が得られた。発掘調査体験学習会は小学校６年生を対象として企画し、山野里小学校は平成 13 年７月４日および５日にわたり２クラス 62 名、上郡小は７月９日に１クラス 28 人が参加した。

発掘調査体験学習会は、遺跡の概要と注意事項を説明した後、包含層上面にビニールテープで１m四方のメッシュを区画し（第３図）、各自１㎡のグリットを深さ 10 ㎝以内で 30 分間移植ごてを用いて掘削し、土器など出土品を探し出し取り上げるものである。７月５日の発掘調査体験学習会において、山野里小学校６年生の深澤正寛君が遺物包含層中から大変稀有な初期須恵器の破片（コンパス文の施された器台片）を発見した。各紙はもちろんジャパンタイムス紙にまで大々的に報じられたところである。

第３節　整理作業・報告書作成の経過と体制

出土品整理事業は平成 19 年度から２年間、兵庫県立考古博物館で実施した。主として嘱託員等が整理作業等を行い、発掘調査担当者が作業指示等を行い、これに整理保存班の工程管理担当職員が加わって実施した。また、金属器保存処理は、整理保存班の担当職員の指導のもとに当博物館で行った。

１　平成 19 年度（土器接合から遺物実測まで）

工程管理担当：岸本一宏　　保存処理担当：岡本一秀

整理作業担当：上田健太郎　　遺物実測担当：宮田麻子・西村美緒

土器接合担当：眞子ふさ恵・伊藤ミネ子・早川有紀・荻野麻衣・谷脇里奈・的場美幸

金属器保存処理：栗山美奈・大前篤子・藤井光代・清水幸子

２　平成 20 年度（トレースから報告書刊行まで）

工程管理担当：篠宮　正　　整理作業担当：上田健太郎

遺物実測・トレース：宮田麻子・西村美緒

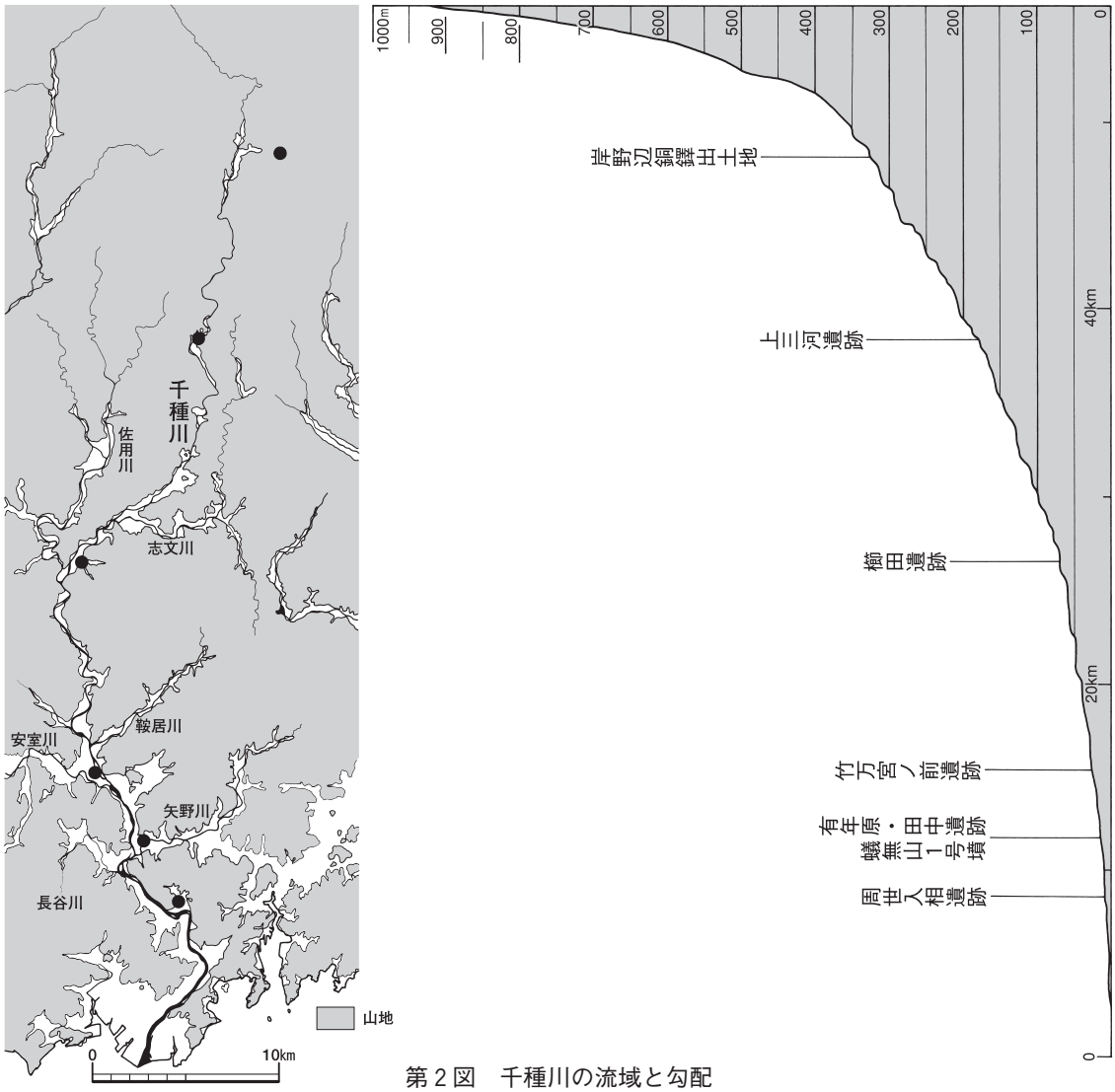
土器復元担当：眞子ふさ恵・西口由紀・蔵　幾子・宮野正子・早川有紀・又江立子・嶺岡美見・藤池かづさ・小谷桂加

第２章　遺跡をめぐる環境

第１節　地理的環境

竹万宮ノ前遺跡が所在する上郡町は兵庫県域の南部最西端にあって、町域の規模は東西 14.3 ㎞、南北 10.5 ㎞、面積は 150.28 ㎢であり、林野面積は町域の 73 %を占める。行政区画としては赤穂郡に属し、南に赤穂市、東に相生市、北に佐用町とたつの市、西は岡山県備前市に接しており、人口は 17,755人（平成 20 年 11 月 30 日現在）を数える。三方を山に囲まれ、南側が開けて瀬戸内海に通じている。

平均気温は 14.1℃と温暖で、寒暑の差は比較的小さい。しかし、瀬戸内海沿岸に比べると気温は低く、降水量も年間 1260㎜（アメダス上郡 1982-2001 平均）とやや多く、瀬戸内気候と内陸性気候の中間的な様相を呈している。産業面では水稲を中心に葡萄、茄子、椎茸の栽培が盛んな農業をはじめ、播磨臨海工業地帯の後背地としてコンクリート、電機、化学などを中心とした産業構造を形成している。昭和６１年からは町北東部から佐用町・たつの市にかけての一帯に、大型放射光施設（Spring-8）を有する播磨科学公園都市（通称テクノ）の建設が始まり、公共施設・研究施設を包括する学術公園都市の整備が進んでいる。平成６年には智頭急行が開業し、京阪神地域と鳥取を結ぶ交通結節点の機能を担っている。



第２図　千種川の流域と勾配

竹万宮ノ前遺跡の所在する上郡町の市街地一帯は上郡中央低地と呼ばれる千種川の中流部下流域の沖積低地（谷底平野・氾濫原）に該当する。この沖積地を形成した千種川は、中国山地に属する宍粟市千種町西河内の江浪峠（兵庫・岡山・鳥取各県の県境、標高 1098 m）に源を発する二級河川である（第２図）。宍粟市からほぼ南流し佐用郡佐用町、赤穂郡上郡町、赤穂市を経て播磨灘に注ぐ、西播地域随一の河川である。全長 67.6 ㎞を測り、その流域面積は 730 ㎢に及ぶ。また、兵庫県下一の清流でもあり、環境省の名水百選にも選定されている。中流域では、全体を通して上流に比べると谷幅の広い谷底平野を呈する。まず佐用町内で千種川本流と佐用川や志文川に分岐するが、この付近では谷幅が 500 m に満たない狭さで、丘陵群を発達させている。上郡町域に入り、岩木川の合流点である大枝新付近で谷幅が一旦１㎞規模となるがすぐに窄まり、東側から鞍居川が合流したのち、西側から安室川が合流する谷幅２㎞規模の上郡中央低地となる。これより下流では再び谷幅 500 m 規模となって赤穂市域へと至っている。

第２節　歴史的環境

千種川の中流部下流域では、確実な旧石器時代の遺物は未発見である。縄文時代では早期から前期とされる赤穂市西有年・馬路池遺跡の石器群があり、町域での最古の土器としては八保・岸ノ下遺跡で採集された中期末の北白川Ｃ式である。梨ノ木遺跡で後期初頭の福田ＫⅡ式のほか晩期の土器が、八保・川添遺跡では後期中葉の縁帯文土器が出土している。赤穂市域では有年原･クルミ遺跡や上菅生遺跡で後期前葉から中葉の、東有年･沖田遺跡では後期から晩期にかけての土器や遺構群が確認されている。

弥生時代では、前期の集落は新段階に属するものが千種川下流部や中流部上流域、佐用川流域では知られるものの、中流部下流域では未発見である。中期前葉には、赤穂市域の東有年･沖田遺跡や有年原･田中遺跡で集落が営まれ、後期まで安定した規模を維持し続ける。中期中葉から後葉にかけてこの両遺跡を中心に有年地区に遺跡が増加する。上郡町境に近い千種川右岸の野田遺跡でも、中期中葉を中心に中期後葉から後期の土器や石器が採集されている。上郡町域では、竹万山田遺跡で中期後葉の土器と柱状方刃石斧が、西山遺跡では口縁端部に退化凹線が施される壺と柱状方刃石斧が採集されている。苔縄片山遺跡では、中期から後期まで集落が存続する。他に西野山･堀遺跡では柱状方刃石斧が出土し、梨原遺跡や船坂･土井ノ西遺跡では太形蛤刃石斧が、八保･岸ノ町遺跡では打製石庖丁が採集されており、弥生時代中期から後期前葉頃の集落の存在が想定される。

後期には、竹万宮ノ前遺跡で後期前葉および庄内併行期の集落が認められるほか、神子田遺跡では庄内併行期の竪穴住居跡が２軒検出され、うち１軒は最大径 12.5 m と大型である。竹万宮ノ前遺跡と千種川を挟んで対岸の斜面に立地する東町遺跡では、庄内併行期の土器が採集されている。市街地北部に位置する井上遺跡や、西部の丘陵突端部の羽山遺跡では土器棺が発見されている。また、千種川の左岸の釜島遺跡では後期前葉を中心とする土器や石器が採集されている。

墳墓では、東有年･沖田遺跡の中期中葉の円形周溝墓が古く、有年原･田中遺跡の墳丘墓が後期中葉から後葉にかけてとされ、近年の調査では有年牟礼･山田遺跡の方形周溝状遺構が陸橋と貼り石を伴い、古墳時代初頭とされる。井ノ端墳墓群では方形の 7号墓や円形の 8号墓でも貼り石を伴い、竪穴式石槨・箱式石棺・木棺直葬の３種の埋葬施設に小型仿製鏡や破鏡、鉄剣、鎌、鉇、玉類などが副葬されている。

青銅器関連遺物は、別名遺跡で平形銅剣が、赤穂市上高野遺跡で扁平紐式の銅鐸鋳型が、奥山遺跡では小型内行花文鏡が出土している。なお、有年原･田中遺跡では銅鐸形土製品が出土している。

古墳時代では、従来千種川流域において明確な前方後円墳が確認されていなかったが、最近、初期の

前方後円墳が２基確認された。正福寺北谷田古墳は墳丘測量の結果、前方部が撥形となる全長約 39 mの前方後円墳と判明し、３世紀後半段階のものと推察される。また、中山 13 号墳が、中山 15 号墳を前方部として取り込んで全長 57 mの前方後円墳であることが確認された（上郡町教委 2008）。前方部はやはり撥形を呈する古い形態のもので、前期でも古い段階とされる。昭和 26 年に調査が行われた西野山３号墳は調査時には直径 17 m、高さ３ mの円墳とされたが、町史編纂に伴う近年の墳丘測量により全長約 40 mの前方後円墳ないしは前方後方墳である可能性が指摘されている。主体部は粘土槨で、棺内には久津川車塚古墳出土鏡と同笵鏡の三角縁神獣鏡をはじめ、鉄剣、鉄鏃、銅鏃、鉄斧、刀、ヤリガンナ、漆塗繊維製短甲、勾玉や管玉、切子玉などの玉類が副葬されていた。このように古墳時代前期の前方後円墳が高田地区に集中して築かれるが、周辺では相生市若狭野町の全長 57 mの前方後円墳である大避山１号墳が長大な前方部を持ついわゆる讃岐型前方後円墳で、３世紀後半と考えられている。

中期古墳では、高田地区で一辺約 25 mの方墳の中山１号墳で円筒埴輪と楯形埴輪が、西野山７号墳で円筒埴輪が採集されている。有年地区では直径約 52 mの円墳ないし帆立貝式古墳である蟻無山１号墳が築かれ、５世紀中葉前後とみられる。円筒埴輪のほか馬・家・楯などの形象埴輪や、初期須恵器（第５章第２節参照）が採集されている。山野里地区では山野里釋迦堂古墳が直径約 24 mと目立ち、周囲には初期須恵器が採集された大酒古墳群や５世紀末頃の須恵器が副葬された井の端９･12 号墳、直下の平野部に西田古墳群が造営される。また、納経山古墳からは鋸歯文が刻まれた滑石製紡錘車が採集されている。

後期古墳では、早い段階（６世紀中葉）のものとしては中山３号墳が知られるが、主体部は木棺直葬である。有年地区ではほぼ同じ段階に東有年･沖田３号墳に横穴式石室が設けられるが、上郡町域で横穴式石室が採用されるのは井上１号墳など６世紀後葉以降と考えられる。全長 26 mの小型の前方後円墳である井の端６号墳も横穴式石室を採用したとされる。野田２号墳（祇園塚）では横穴式石室に玄門を持つ。

積石塚の赤穂市与井谷口古墳群は 33 基を数えるほか、赤穂市高取山古墳群では６基が積石塚である。

終末期古墳としては、方墳の與井１号墳（一辺約 30 m）や鳳張１号墳（一辺約 21 m）が大型の横穴式石室を持つ。また、與井７号墳や飯坂４号墳、栗原釋迦堂２号墳、赤穂市北山３号墳などが赤穂郡に集中する横口式石槨であり、鳳張１号墳や木虎谷２号墳は石棚を持つ点で特筆される。栗原釋迦堂古墳群や飯坂古墳群は６世紀末から７世紀後半にかけての群集墳であり、近年調査された飯坂 10 号墳では飛鳥Ⅲの時期の幅 1.3 mの横穴式石室が確認された。なお上郡町内では、土師質の陶棺が丸尾古墳･赤岩鼻古墳や竹万山田遺跡、惣尻１号墳において確認され、須恵質のものが尾長谷１号墳で認められる。

古墳時代の集落は、有年原･田中遺跡において５世紀後半頃から６世紀にかけての竪穴住居跡が、東有年･沖田遺跡では６世紀中葉から末の竪穴住居跡が、竹万宮ノ前遺跡で６世紀後半の竪穴住居跡が確認されている。なお、有年原･田中遺跡の旧河道から初期須恵器や韓式系土器が出土している。

律令期には有年地区で西有年･長根遺跡や有年原･田中遺跡の官衙的関連遺構が知られるが、古代山陽道は上郡町域を東西に通る。野磨駅家は近年の調査により落地･八反坪遺跡に第一次駅家（８世紀前半）の掘立柱建物群が、落地･飯坂遺跡に第二次駅家（８世紀後半以降）の瓦葺礎石建物群が明らかになり、高田駅家推定地は神明寺遺跡が想定されている。近年、赤穂郡唯一の古代寺院である與井廃寺で塔基壇が調査され、７世紀後葉の創建とされる。隣接する與井遺跡は赤穂郡衙推定地とされている。

参考文献（紙幅の都合により、各調査報告書については割愛した。）
上郡町史編纂専門委員会（編）2008『上郡町史　第一巻』本文編Ⅰ　上郡町
上郡町教育委員会 2008『中山古墳群発掘調査現地説明会資料』
西播流域史研究会（編）1991『有年孝古館蔵品図録』財団法人有年孝古館

第１表　竹万宮ノ前遺跡周辺の主要遺跡（図版２と対応）

図版2	遺跡番号	遺跡の名称	遺跡の所在地	時代	種類
1	480178	苔縄城跡	赤穂郡上郡町苔縄・岩木	中世	城館
2	480263	苔縄片山遺跡	赤穂郡上郡町苔縄字片山	弥生・中世	集落
3	480282	岩木遺跡	赤穂郡上郡町上郡岩木乙	弥生	散布地
4	480077～480081	鍛冶１号墳～４号墳	赤穂郡上郡町岩木甲鍛冶	古墳	古墳
5	480177	大枝城跡	赤穂郡上郡町大枝・苔縄	中世	城館
6	480083	惣尻１号墳	赤穂郡上郡町尾長谷惣尻	古墳	古墳
7	480086	尾長谷１号墳	赤穂郡上郡町尾長谷尾長谷	古墳	古墳
8	480175	駒山城跡	赤穂郡上郡町井上	中世	城館
9	480005	井上遺跡	赤穂郡上郡町井上	弥生	集落・墳墓
10	480004	羽山遺跡	赤穂郡上郡町山野里羽山	弥生	墳墓
11	480203	コンピラ山遺跡	赤穂郡上郡町山野里有明山	中世	散布地
12	480202	山野里小学校前遺跡	赤穂郡上郡町山野里行波	古墳	散布地
13	480278	山野里宿遺跡	赤穂郡上郡町山野里	中世	散布地
14	480259	山野里四ツ日遺跡	赤穂郡上郡町山野里	中世	集落
15	480205	赤岩鼻古墳	赤穂郡上郡町上郡赤岩鼻	弥生・古墳	古墳
16	480206	納経山古墳	赤穂郡上郡町上郡丸尾	古墳	古墳
17	480065	丸尾古墳	赤穂郡上郡町上郡丸尾ノ上	古墳	古墳
18	480174	柏原城	赤穂郡上郡町段町	中世	城館
19	480204	東町遺跡	赤穂郡上郡町上郡東町	弥生	散布地
20	480260	竹万宮ノ前遺跡	赤穂郡上郡町竹万	弥生～中世	集落
21	480261	竹万京免遺跡	赤穂郡上郡町竹万京免	中世	集落
22	480010	竹万山田遺跡	赤穂郡上郡町竹万山田	縄文・弥生	集落
23	480066	山田古墳	赤穂郡上郡町竹万山田	古墳	古墳
24	480091～480094	大谷１号墳～４号墳	赤穂郡上郡町山野里大谷	古墳	古墳
25	480197	平野遺跡	赤穂郡上郡町山野里平野	古墳・平安	散布地
26	480095～480114	大酒１号墳～20号墳	赤穂郡上郡町山野里大酒	古墳	古墳
27	480115～480126	井ノ端１号墳～12号墳	赤穂郡上郡町山野里大酒・猪ノ鼻	古墳	古墳
28	480242～480249	西田１号墳～８号墳	赤穂郡上郡町山野里西田	古墳	古墳
29	480127～480135･480262	飯坂１号墳～10号墳	赤穂郡上郡町山野里字サヌキ山	古墳	古墳
30	480257	山野里釋迦堂古墳	赤穂郡上郡町山野里釋迦堂	古墳	古墳
31	480163･480228･480229	栗原釋迦堂１号墳～３号墳	赤穂郡上郡町栗原釋迦堂	古墳	古墳
32	480136～480140･480226･480227	井谷１号墳～７号墳	赤穂郡上郡町船坂井谷	古墳	古墳
33	480007	別名遺跡	赤穂郡上郡町別名前山	弥生	他
34	480160	鳳張１号墳・２号墳	赤穂郡上郡町船坂方張	古墳	古墳
35	480147～480159	釜ヶ谷１号墳～13号墳	赤穂郡上郡町船坂釜ヶ谷	古墳	古墳
36	480171	落地飯坂遺跡	赤穂郡上郡町落地飯坂	奈良・平安	官衙
37	480233	落地八反坪遺跡	赤穂郡上郡町落地八反坪	奈良・平安	集落・官衙
38	480172	奥井廃寺	赤穂郡上郡町奥井寺前	奈良・平安	寺院
39	480172	奥井遺跡	赤穂郡上郡町奥井寺前	奈良・平安	散布地
40	480170	奥井瓦窯址	赤穂郡上郡町奥井	奈良	生産遺跡
41	480041	奥井１号墳	赤穂郡上郡町奥井西山	古墳	古墳
42		西山遺跡	赤穂郡上郡町奥井	弥生	散布地
43	480173	神明寺遺跡	赤穂郡上郡町神明寺中山	奈良・平安	官衙
44	480003	神子田遺跡	赤穂郡上郡町中野神子田	弥生・古墳	集落
45	480025	中山１号墳	赤穂郡上郡町西野山	古墳	古墳
46	480026	中山13号墳	赤穂郡上郡町西野山	古墳	古墳
47	480013～480024	西野山１号墳～12号墳	赤穂郡上郡町西野山	古墳	古墳
48	480213	西野山堀遺跡	赤穂郡上郡町西野山堀	奈良～中世	集落・城館
49	480001	梨ノ木遺跡	赤穂郡上郡町中野梨ノ木	縄文	散布地
50	480012	休治遺跡	赤穂郡上郡町休治	弥生	散布地
51	480276	高田宿跡	赤穂郡上郡町宿	中世	散布地
52	480008	佐用谷遺跡	赤穂郡上郡町佐用谷下池	弥生	散布地
53	480176	高田城跡	赤穂郡上郡町奥	中世	城館
54	480064	正福寺北谷田古墳	赤穂郡上郡町正福寺北谷田	古墳	古墳
55	480168	正福寺窯址	赤穂郡上郡町正福寺北山	古墳	生産遺跡
56	480232	釜島遺跡	赤穂郡上郡町釜島	弥生	散布地
57	130078	山田奥窯跡	赤穂市有年牟礼	古墳～平安	生産遺跡
58	130017	野田遺跡	赤穂市有年楢原	弥生	集落
59	130012～130016	野田１号墳～５号墳	赤穂市有年楢原	古墳	古墳
60	130018	上所二又溝遺跡	赤穂市有年楢原	弥生	集落・散布地
61	130019	上所山田遺跡	赤穂市有年楢原	弥生	集落・散布地
62	130020	精谷山遺跡	赤穂市有年楢原	弥生	墳墓
63	130034～130040	奥山１号墳～７号墳	赤穂市有年原	古墳	古墳
64	130154～130156	蟻無山１号墳～３号墳	赤穂市有年原	古墳	古墳
65	130160	有年原･田中遺跡	赤穂市有年原	弥生～中世	集落・墳墓
66	130161～130162	有年原･田中１号・２号墳丘墓	赤穂市有年原	弥生	墳墓
67	130179	奥山遺跡	赤穂市有年原	弥生・古墳	散布地
68	130163～130177	木虎谷１号墳～15号墳	赤穂市有年原	古墳	古墳
69	130181	有年原･北畠遺跡	赤穂市有年原	弥生～中世	集落
70	130318	有年原･クルミ遺跡	赤穂市有年原	縄文～中世	集落・散布地
71	130319	有年牟礼・井田遺跡	赤穂市有年牟礼	弥生～中世	散布地
72	130001	西有年・馬路池遺跡	赤穂市西有年	縄文	集落・散布地
73	130082	西有年･長根遺跡	赤穂市西有年	弥生～中世	集落・墳墓
74	130083	西有年･香山遺跡	赤穂市西有年	弥生	集落
75	130086	西有年･垣内田遺跡	赤穂市西有年	弥生・古墳・中世	集落
76	130087	西有年･畑田遺跡	赤穂市西有年	弥生	集落
77	130004	北山３号墳	赤穂市西有年	古墳	古墳
78	130088～130120	与井谷口古墳群	赤穂市西有年	古墳	古墳
79	130122	西有年･与井谷口遺跡	赤穂市西有年	平安・中世	集落
80	130128	東有年･沖田遺跡	赤穂市東有年	縄文～中世	集落・古墳
81	130129～130131	東有年・沖田１号墳～３号墳	赤穂市東有年	古墳	古墳
82	130133	上菅生遺跡	赤穂市東有年	弥生～中世	集落
83	130204～130230	周世宮裏山１号墳～27号墳	赤穂市周世	古墳	古墳
84	130233	周世･入相遺跡	赤穂市周世	弥生～中世	集落
85	130240～130244	真殿･門前１号墳～５号墳	赤穂市真殿	古墳	古墳
86	130246	真殿･門前遺跡	赤穂市真殿	弥生～中世	集落

第３章　発掘調査の成果

１　基本層序

調査前の状況は、北端部は宅地であるが、それ以外の部分は１枚強の田圃で、標高は概ね 26 ｍを測る。盛土層及び旧耕作土層が地表において土壌化した旧表土層以下は耕作土層ないしは床土層（１層）で構成され、土壌化した遺物包含層（２層）の下は基盤層（４層）である（図版５）。なお、東壁土層断面では２層が北部においてとぎれているが、調査区北部の大部分においては２層が基盤層上部を覆っていた。

各遺構は４層上面において、検出した。この遺構検出面は、現地表面より 30 ～ 80 ㎝下であり、概ね標高 26.3 ～ 26.4 ｍを測る。なお、南端から約 28 ｍの範囲では検出面以下でに河川堆積層が認められ（３～６層）。このうち３～５層では弥生時代後期前葉から終末にかけての土器が認められ（第６図）、弥生時代後期以降の洪水などに起因するものと考えられる。

２　竪穴住居跡

調査区北端部分において、弥生時代後期末と古墳時代後期の竪穴住居跡計２棟を検出した。

ＳＨ０１（図版８・写真図版５）

検出状況　調査区北部に位置し、弥生時代後期末の SH02 を切り、SB23 に切られる。床面のレベルは概ね 26.25 ｍであり、壁は７㎝程度しか残存していなかった。屋内施設は、４本の主柱穴と西壁際に竈の痕跡を確認し、周壁溝は認められなかった。

形態・規模　南北 5.37 ｍ、東西 5.56 ｍを測る正方形に近い方形プランの竪穴住居跡である。角はやや丸く、隅丸方形気味を呈する。主軸方向はN1.1°Ｗと、ほぼ正方位をとる。

屋内施設　主柱穴は４本であり、柱穴の大きさは直径 36 ～ 43 ㎝、深さは８～ 28 ㎝を測る。南側２本の柱内部では、東からそれぞれ直径 17 ㎝・ 23 ㎝の柱痕跡を確認した。

竈は西側の中央壁際に設けられ、奥行き 32 ㎝、中央部の最大幅 27 ㎝、焚き口の幅 11 ㎝と焚き口が窄まった構造となっている。袖は上部幅で８～ 13 ㎝程度である。焚き口の床面は固く焼土化していた（写真図版５・中段）。竈内部やこの焼土化した部分の周囲には散漫な焼土ブロックの堆積が認められ、焚き口付近に竈内から掻き出された焼土が集積した可能性が考えられる。これらの焼土塊および焼土ブロックの直上に、円筒形土器（６）が割竹状に割れて内面を上に向けた状態で検出された（図版８下図）。なお、中央付近のやや東寄りでも埋土中に焼土ブロックが集中する箇所があったが、床面より浮いており、密度も散漫であったため、２次的な堆積によるものと思われる。

出土遺物

土器（図版 21・写真図版 12･15･18）　弥生土器甕（１）・高杯（２・３）、須恵器杯身（４）、土師器小型平底鉢（５）・円筒形土器（６）が出土している。

１の甕底部は、外面にはタタキのち縦ハケに近い板ナデ調整を、内面はハケ調整を施す。底径わずか 3.1 ㎝の底部にもタタキが施される。２は裾の広がる高杯の脚部で、脚部外面には縦方向のヘラミガキが入念で、内面はヘラケズリが施される。杯部底部付近は外面はわずかに縦ハケ調整が認められる。３は円筒状に直立し脚部に、欠損する下部で裾が開くタイプの高杯で、弥生時代後期前葉頃のものの混入であろう。外面は摩耗が激しいが本来縦方向のヘラミガキが施されていたように観察され、内面はヘラケズリが施される。４は須恵器の杯身で、口縁端部はにぶい受け部から内傾しつつ短く立ち上がる。底

部は回転ヘラケズリの後、さらに底部中央は直線方向に、立ち上がり付近は囲むようにヘラケズリにより掻き取っている。5は韓式系土器の小型平底鉢で、底部を欠く。やや丸みを帯びる胴部からわずかに屈曲しつつ直立気味に口縁が立ち上がる。このあまい屈曲部内面側ではわずかに肥厚し、古墳時代後期の土師器甕の特徴を備える。外面は縦ハケ調整、内面はヘラケズリを施す。6は円筒形を呈する土器(土製品)で、韓式系土器と思われる。残念ながら上下両端を欠損するが、器壁の厚さから上下を図のように判断した。横断面形は楕円形をなし、長径は残存する最下部分の13.2㎝が最大、残存する上端部分の9.6㎝が最少である。上半の径にさほど差はなく筒形を呈するが、下半では若干裾広がり気味となり、特に残存する下端から12㎝ほどのところでより開き気味となる感がある。外面は非常に長い単位のタテハケ調整が施される。内面は粘土紐の継ぎ目が顕著であるが、部分的には縦方向の長い指ナデで整形を行う。その後斜め方向にハケ調整が施される。外面には黒斑のほかに、暗褐色を呈する変色が波状に留まり、煤の付着した可能性が考えられるが、内面には目立った変色は認められない。

時期　出土土器から判断して、古墳時代後期と考えられる。

ＳＨ０２（図版９・写真図版６）

検出状況　調査区北東端付近で検出した。古墳時代後期のSH01、SB23に切られる。中央床面のレベルは概ね26.13ｍであり、検出面から中央床面までの深さは21㎝を測る。

竪穴住居跡埋土と周囲の土壌化したベース土とは両者の土質が非常に近似しており、検出に際しては困難を極め、調査終了間際にサブトレンチを設けた際に認識した経緯がある。結果的には竪穴住居跡内に含まれると思われる範囲の床面を検出したものの壁は明確に把握できず、ここでは以下に示すように屋内施設の配置状況および検出面周辺の土壌色調の状況から平面プランの復元を試みることにする。

検出した屋内施設は、主柱穴と中央土坑であり、周壁溝や高床部(ベット状遺構)は認められなかった。なお、中央土坑と考えられる土坑は２つ確認され、南から中央土坑Ａ、中央土坑Ｂと呼称する。これら２つの土坑の存在により、当初は複数の住居跡が切り合って存在する可能性も想定していたが、以下に示すように土坑どうしの平面形や深さ、埋土の炭の含み具合などが異なり、両者で接合する土器も含まれることからも、現時点では､｢イチマル型中央土坑｣として同時存在したものと考えるに至っている。

形態・規模　検出したプランは長径6.08ｍ、短径5.62ｍのいびつな楕円形を呈する。主柱穴とそれに対応する中央土坑Ｂの配置から、空中写真および遺構個別写真などの検出面の土壌色調の差異等を考慮しつつ復元を試みると、長径8.9ｍ、短径8.5ｍほどの楕円形の範囲が推定される。

屋内施設　中央土坑Ａは長さ146㎝、幅81㎝の長円形で、中央床面からの深さ18㎝と中央土坑Ｂと比べて浅い。埋土には炭が含まれ、特に下部に集中が認められた。中央土坑Ｂは長さ125㎝、幅86㎝の長円形で、中央床面からの深さは39㎝を測る。埋土は中央土坑Ａの埋土に比べ若干粘性が強く下半は若干灰を含み暗褐色を呈する。

主柱穴は５本を検出したが、配置状況から本来６本存在するものと考えられる。柱掘り方の直径は16～32㎝を測り、内部に柱痕跡が確認できたものでは直径12㎝程度を測る。

出土遺物

土器（図版21･22・写真図版12･15～18）

７・８は検出面付近において出土した弥生土器である。７は広口壺で、球形の胴部に短く開く口縁が取りつく。外面はタタキの後縦方向のヘラミガキが施される。内面は縦方向の板ナデが施されるが、下

半では粘土の継ぎ目が残る。8は甕で、強く屈曲した口縁が水平に近く寝るタイプ。外面は縦ハケが顕著である。内面は指オサエによる整形後板ナデ調整を施す。

9～16は中央土坑Ｂから出土した土器である。9～12は甕。9は倒卵形の体部から「く」字状に屈曲した口縁部が短く直線的に開き、端部は上方に弱くつまみあげる。器形、胎土ともに讃岐地方の特徴を呈する。外面は縦方向のヘラミガキが顕著で、内面はヘラケズリ後に指ナデで調整される。10・11は球形の体部からく字形に屈曲して内湾しつつ開く口縁部を持つ。両者とも外面は横ハケ調整、内面は粗い板ナデにより粘土を掻き取っている。12は体部外面に右上がりのタタキを施す。13は壺の球形を呈する体部下半からわずかに突出する底部にかけてが残存し、外面は縦方向のヘラミガキを施す。14～16は高杯。14・15は浅く皿状に内湾する底部から長く外反する口縁を持つ杯部に、低い円錐形の脚台がのび、15では円形の透かし孔が確認できる。14では杯部の口縁と底部の境界に稜が認められるが、15では認められない。16は杯部が鼓形器台の上台部のような二重口縁状を呈し、この山陰地方の特徴をよく示す杯部に在地でよく見られる裾広がりの脚裾部がつく。裾部に穿たれた円孔は間隔が均等ではないものの3ヵ所が残り、本来4ヵ所穿たれたものと思われる。胎土は乳白色を呈する。

17～25は甕で、20・23～25は口径がやや小さく器高の低い小型品。

17は屈曲し短く立ち上がり気味の口縁を持ち、残存する肩部にかけては開き気味である。18は9のような讃岐地方の甕の影響を受けた甕で、倒卵形の体部から屈曲して短い口縁が外反する。ただし体部外面はハケ調整で、内面は粗い板ナデで粘土を掻き取る在地の手法で整形･調整を行う。19は屈曲して立ち上がる口縁の端部に平坦面を設け、底部は尖底に近いがわずかに面をつくる。外面は縦ハケが顕著に施され、内面は板ナデが施される。20・21は口縁部に最大径をもつ。20は外面ハケ調整で、内面は粗い板ナデで粘土を掻き取る。21は丸みをもったやや長胴の体部からスムーズに尖底に近い底部に移行する。外面は右上がりのタタキののち縦ハケでタタキを消し、内面は縦ハケないし板ナデが顕著である。22は丸く膨らむ球形の体部に丸みを帯びた平底の底部を持つ外面は板ナデを施すが、内面はヘラケズリでかなり器壁を薄くしている。23～25は小型品で、23は球形の体部に端面を持つ口縁が屈曲して開く。外面は右上がりのタタキ、内面は板ナデを施す。24は突出する底部に穿孔する。25は内面にヘラケズリが認められるものの器壁は分厚く、手にするとずっしりと重量感を感じる。

26は壺口縁で直立する頸部から口縁が外湾して大きく開く。頸部外面に板状原体の先端で列点文を連続的に施す。27～29は甕底部。27は底部がやや突出するが、突出気味の底部内面がやや内湾し、28にいたっては顕著にくぼむ。30は台付甕の脚部付近で、底部は内外ともに縦ハケ調整を施す。脚部内面は一見絞り痕のようであるが、指調整によってらせん状に整形されたのちナデ消して上部のみ指調整の痕跡が残る。

31は小型の鉢で、底部から丸く立ち上がる。底部は周囲をヘラ状工具で掻き取ることで、体部の最下端のすぼまった形をつくり、また底面を平滑にしている。体部は内外面とも縦方向に丁寧にヘラミガキを施す。32は大型の鉢で、床面から10㎝ほど浮いたレベルからぐしゃっと潰れた状態で出土した。わずかに窪む平坦な底部から内湾しながら丸く開く体部をもち、さらに口縁は「く」字形に屈曲して直線的に開く。体部上位には大型の耳状把手が張り付けられ、いずれも鉢の片側に向かって若干傾くように、カーブの具合まで互いが両側に対称形になるよう取り付けられている。体部外面には斜め方向のヘラミガキが顕著であるが、体部上端や底部付近にはミガキに掻き消されながらもタテハケを留めているのが散見される。内面は縦方向の板ナデが施され、口縁端は弱くつまみあげられる。

33～36 は高杯。33・34 は、低い受け部に大きく外反する口縁部が開く。33 は口縁部外面は縦方向のヘラミガキを連続して施し、内面はタテハケで仕上げる。34 は口縁部は内外面ともに水平方向のヘラミガキを施すが、受け部内面はヨコハケを施す。35・36 は丸い受け部に中空の脚柱部がつく。脚裾部は脚柱部から屈曲して長く直線的に開き、屈曲部直下に円形透かし孔を穿つ。

37・38 は器台裾付近。37 は裾端部を肥厚させ、端面には退化凹線を 1 条めぐらす。外面は放射状に沈線を設け、内面は板ナデで仕上げる。38 は裾端部を下方に屈曲させ、屈曲部外面に突帯をめぐらす。この突帯上と裾上部、下端に刻み目をつけている。39 は手焙形土器で、鉢の上部に覆部がつく付近のみ残存する。鉢部外面は縦方向の板ナデを施し、口縁付近に板状原体の当たりが認められる。

鉄器（図版 32・写真図版 25）　刀子（F1）の刀身部分の破片が床面から出土している。

時期　出土土器から判断して、弥生時後期末（庄内併行期）と考えられる。

3　掘立柱建物跡

調査区のほぼ全体にわたって 24 棟を検出したが、南北にそれぞれ集中するまとまりが認められる。柱穴の番号は原則として北西端を基準に P1-1 とし、東に P1-2 、P1-3 ‥と、南に P2-1 、P3-1 ‥とする。

ＳＢ０１（図版 10・写真図版 7）

検出状況　調査区北部に位置し、SB02・16 ～ 20 、柱穴列 3 ～ 6 と重複する範囲に位置する。北東隅の柱穴が東壁土層断面において確認されており、東側が調査区外に延びる可能性がある。

形態・規模　東壁付近などの未検出の柱穴を含むものの、南北 5 間（10.5m）×東西 5 間（12.55m）以上の総柱建物である。床面積は 131.52 ㎡、主軸はＮ 7.5°Ｗを測る。柱掘方は直径 21～34㎝、検出面からの深さは 29～70㎝を測る。西側および南側に近接して主軸方向の一致する柱穴列が存在し、特に西側の列では柱間の間隔も近い配列である。掘立柱建物を構成する柱穴の並びとは西側で 1.8 m、南側では 60㎝を測る。

出土遺物

土器（図版 23）　40 は須恵器の小皿。底部を欠くが、体部内外面は回転ナデを施す。41 は土師器の小皿で、口縁端がわずかに外反する。底部はヘラ切り未調整、体部内外面は回転ナデを施す。

時期　出土土器から判断して、11 世紀代と考えられる。

ＳＢ０２（図版 11・写真図版 7）

検出状況　調査区北部に位置し、SB02・03・16～19 、柱穴列 3 ～ 6 と重複する範囲に位置する。建物の東側が調査区外に延びる可能性がある。

形態・規模　東壁寄りに未検出の柱穴を含むが、南北 4 間（3.4 m）×東西 4 間（5.6 m）以上で、主軸はＮ 13.5°Ｗを測る。床面積は 88.94 ㎡。柱掘方は直径 22～36 ㎝、検出面からの深さは 33～58 ㎝を測る。

出土遺物

土器（図版 23・写真図版 19）　42 は土師器の小皿で回転ナデで仕上げられる。43 は律令期の土師器鍋で、口径は 27.1 ㎝。他に平高台の突出のあまい、もしくはほとんど突出しない須恵器椀の破片、須恵器甕や土師器椀、甕などの小片が出土している。

時期　出土土器から判断して、12 世紀中葉から後半にかけての可能性が考えられる。

ＳＢ０３（図版 11・写真図版 7）

検出状況　調査区中央部のやや北寄りに位置し、SB02・16、柱穴列２と重複する範囲に位置する。最北列がSB02の最南列と重複するライン上に存在する。

形態・規模　南北３間（5.7m）×東西３間（6.7m）を確認した。床面積は38.38㎡、主軸はＮ9.8°Ｗを測る。柱掘方は直径21～38㎝、検出面からの深さは22～57㎝を測る。

出土遺物

土器（図版23・写真図版19）　柱穴内より出土した須恵器椀１点を図示した（44）。底部は回転糸切りによって切り離された平底で、直線的に体部が開くが底部から体部への移行がスムーズである。

鉄器（図版32・写真図版25）　F5は方頭（斧箭）鏃で逆台形をなし、断面形は厚みの均一な六角形状を呈する。茎は細長くのびる。

時期　出土土器から判断して、12世紀代と考えられる。

ＳＢ０４（図版12・写真図版７）

検出状況　調査区中部のやや南寄りに位置する。SB05と重複する範囲に位置する。

形態・規模　南北２間（5.8m）×東西２間（3.8m）の側柱建物である。床面積は22.10㎡、主軸はＮ18.6°Ｗを測る。柱掘方は直径23～32㎝、検出面からの深さは25～66㎝を測る。

出土遺物

土器（図版23）45・46は須恵器椀で、いずれも底部を欠くが浅い。

時期　出土土器から判断して、12世紀代と考えられる。

ＳＢ０５（図版12・写真図版７）

検出状況　調査区中部のやや南寄りに位置する。SB04・09・10と重複する範囲に位置する。

形態・規模　未検出の柱穴を含むものの、南北４間（9.9m）×東西３間（6.3m）である。床面積は63.02㎡、主軸はＮ15.4°Ｗを測る。柱掘方は直径19～43㎝、検出面からの深さは20～61㎝を測る。

出土遺物

土器（図版23）　47は弥生土器の壺で、口縁端は下方に拡張し凹線３条を施す。他に柱穴内より図化には耐えないが、須恵器椀Ｃの平高台のわずかに突出した底部片のほか、須恵器杯Ａ・壺、土師器甕、土師皿の小片などが出土している。

石器（図版32・写真図版25）　S4は花崗斑岩製の砥石で、粗砥ぎ用か。

時期　出土土器から判断して、12世紀前半の可能性が考えられる。

ＳＢ０６（図版12）

検出状況　調査区中部のやや南寄りに位置する。建物の東側が調査区外に延びる可能性がある。

形態・規模　南北１間（2.3ｍ）以上×東西４間（9.5ｍ）の側柱建物に復元される。床面積は21.8㎡以上、主軸はＮ12.6°Ｗを測る。柱掘方は直径32～38㎝、検出面からの深さは35～63㎝を測る。

出土遺物

土器　小片のみで図化に耐えない。

時期　出土した土器からは判断できない。

ＳＢ０７（図版 13・写真図版７）

検出状況　調査区の南部、SB08 ～ 12 、柱穴列９と重複する範囲に位置する。南端の桁行上にSK12がかかる。

形態・規模　南北４間（9.6m）以上×東西３間（9.5m）のやや平行四辺形気味を呈する総柱建物に復元される。床面積は91.25㎡、主軸はＮ 18.5°Ｗを測る。柱掘方は直径24～57㎝、検出面からの深さは42～66㎝を測る。柱穴のうち２ヵ所底部に根石を施したものがあり、一方は最も深い柱穴である。

出土遺物

土器（図版 23・写真図版 19）　52 ～ 56 は土師器の托状皿で、突出した平高台の底部から口縁がほぼ水平方向に伸びる。底部は回転糸切りによって切り離されている。52・53 は突出する平高台が外方に踏ん張り気味であるが、54・55 は底面付近でわずかに外方に張り出す程度で、56 では突出せず底体部境はスムーズに移行する。

57 ～ 61 は土師器の小皿で、いずれも口縁部がやや内湾気味に直線的に開く。底部は回転ヘラ切りで、58 は丁寧にナデ消し、60・61 もナデ消そうとしている。62 は生焼けの須恵器の小皿で、体部は内湾気味に立ち上がった後、口縁部は外反する。底部はヘラ切りの後ナデ消している。

63 ～ 67 は土師器の椀でいずれも平高台が突出し、66・67 は特に突出の顕著な椀C3 と呼ばれるタイプ[1)]。底部は 63 が回転ヘラ切りであるほかは、回転糸切りで切り離し、67 は丁寧にナデ消している。

68 ～ 70 は須恵器の椀である。68 は突出した平高台からやや内湾気味に斜めに開き、口縁端を丸く収める。底部は回転糸切りによる切り離し痕が認められる。69 は内湾気味に開く体部に、口縁端部は外反気味に肥厚する。70 も体部は内湾気味に開き、口縁端部はわずかに外反する。

鉄器（図版 32 ・写真図版 25）　F9 は握鋏で、握部は横断面方形、鋏部は横断面三角形を呈す。

時期　出土土器より、11 世紀前半から中ごろにかけてと考えられる。

ＳＢ０８（図版 14・写真図版７）

検出状況　調査区南部に位置し、SB07･11 、柱穴列９と重複する範囲に位置する。南端の桁行上にSK 13 がかかる。梁行方向の東側の列の柱穴には東壁土層断面において確認されるものがあり、建物の東側が調査区外に延びる可能性がある。

形態・規模　東壁付近などの未検出の柱穴を含むものの、南北４間（9.0m）×東西３間（7.4m）以上の総柱建物である。床面積は67.02㎡以上、主軸はＮ 28.4°Ｗを測る。柱掘方は直径23～34㎝、検出面からの深さは27～56㎝を測る。なお、南側および東側・西側に近接して主軸方向の一致する柱穴列が存在する。特に東側および西側の列では柱間の間隔も近い配列であり、西側の北端の柱穴には根石が配されていることなども含めてそれぞれ梁行となる可能性も考えられる。ただし、例えばこの根石の設けられた柱穴が深さ21㎝であるなど、やや浅めの柱穴が多く含まれることから慎重に考えたい。掘立柱建物を構成する柱穴の並びとは南側では1.8m、西側で2.8m、南側では2.0mを測る。

出土遺物

土器（図版 23）　48 は土師質の土錘。49 は托状皿の底部付近で、底部は外方へのふんばりが顕著で回転糸切り未調整である。50 は底部が突出する土師器椀。他に須恵器椀Ｃの平高台の突出した底部片のほか、弥生土器片が出土しているが、図化には耐えない。

時期　出土土器から判断して、11 世紀前半と考えられる。

ＳＢ０９（図版 12）

検出状況　調査区の南部、SB05・07・10 ～ 12 と重複する範囲に位置する。

形態・規模　南北３間（7.0m）×東西２間（4.6m）のやや平行四辺形気味を呈する側柱建物に復元される。床面積は 32.21 ㎡、主軸はＮ 15.9°Ｗを測る。柱掘方は直径 23 ～ 40㎝、検出面からの深さは 28 ～ 61㎝を測る。

出土遺物

土器（図版 23・写真図版 19）　71 は坩堝。内面が黒く変色し、断面から変色が内部にまで及んでいることが確認できる。他に平高台の突出した底部の土師器椀Ｃや須恵器椀口縁、弥生土器の小片などが出土しているが図化に耐えない。

時期　出土土器から判断して、11 世紀前半と考えられる。

ＳＢ１０（図版 15）

検出状況　調査区中部のやや南寄り、SB05・07・09 と重複する範囲に位置する。

形態・規模　南２間（4.1m）×東西１間（2.1m）に復元される。床面積は 8.53㎡、主軸はＮ 17.8°Ｗを測る。柱掘方は直径 20 ～ 35㎝、検出面からの深さは 22 ～ 47㎝を測る。

出土遺物

土器　須恵器椀の口縁から体部にかけての破片が出土している。

時期　出土土器から判断して、11 世紀代の可能性が考えられる。

ＳＢ１１（図版 15）

検出状況　調査区の南部、SB07 ～ 09 と重複する範囲に位置する。

形態・規模　南北２間（4.5m）×東西１間（2.0m）に復元される。床面積は 8.74 ㎡、主軸はＮ 20.5°Ｗを測る。柱掘方は直径 23 ～ 33㎝、検出面からの深さは 18 ～ 34㎝を測る。

出土遺物

土器（図版 23・写真図版 19）　72 は土師杯Ａで口縁部が直線的に開く。底部は回転ヘラ切りで切り離した後、ナデ消している。

時期　出土土器から判断して、11 世紀代と考えられる。

ＳＢ１２（図版 15）

検出状況　調査区の南部、SB07・09・10 と重複する範囲に位置する。

形態・規模　南北２間（3.4m）以上×東西３間（4.7m）に復元される。床面積は 16.10 ㎡、主軸はＮ 35.４°Ｗを測る。柱掘方は直径 23 ～ 29cm、検出面からの深さは 26 ～ 39cmを測る。

出土遺物

土器（図版 23・写真図版 19）　73 は土師器の鍋で、口径は 34.5㎝。口縁端部の摘みあげは弱い。内外面ともに横ハケで調整する。74 は須恵器椀の底部で、回転糸切りの底部に輪高台を取り付ける。75 は土師器杯Ａで口縁部が直線的に開く。底部は回転糸切りで切り離す。

時期　出土土器から判断して、10 世紀後半から 11 世紀前半にかけてと考えられる。

ＳＢ１３（図版 15・写真図版４）

検出状況　調査区の南端部に位置し、SB14 の範囲内に収まる。

形態・規模　南北２間（4.0m）×東西３間（8.0m）に復元される。床面積は 32.0 ㎡、主軸はＮ 23.3°Ｗを測る。柱掘方は直径 14 ～ 31㎝、検出面からの深さは 22 ～ 43㎝を測る。

出土遺物

土器　柱穴内から弥生土器片と中世の須恵器小片が出土している。なお、弥生土器片は周囲の河川堆積層を掘り込んだ際に混入したものと思われる。

時期　出土土器から判断して、11 世紀後半から 12 世紀前半にかけてと考えられる。

ＳＢ１４（図版 15・写真図版４）

検出状況　調査区の南端部に位置し、SB13 と完全に重複してさらに少し外側にはみ出る。

形態・規模　南北２間（4.6m）×東西３間（9.5m）の建物に復元される。未検出の柱穴を含むものの、桁行方向の東から２列目では両側の柱の中間に対応する柱穴が存在するために総柱建物と考えたい。床面積は 45.59 ㎡、主軸はＮ 21.0°Ｗを測る。柱掘方は直径 13 ～ 25㎝、検出面からの深さは 22 ～ 43㎝を測る。

出土遺物

土器　柱穴内から弥生土器片と中世の須恵器小片が出土している。なお、弥生土器片は周囲の河川堆積層を掘り込んだ際に混入したものと思われる。

時期　出土土器から判断して、中世と考えられる。

ＳＢ１５（図版 15）

検出状況　調査区の南部に位置し、SD03 を切る。建物の西側が調査区外に延びる可能性がある。

形態・規模　南北４間（7.2m）×東西１間（1.7m）以上の側柱建物に復元される。床面積は 12.60 ㎡、主軸はＮ 14.6°Ｗを測る。柱掘方は直径 20 ～ 33㎝、検出面からの深さは 17 ～ 53㎝を測る。

出土遺物

土器　柱穴内から土師器椀Ｂ・椀Ｃ1 の小片が出土しているが、図化には耐えない。

時期　不明である。

ＳＢ１６（図版 16）

検出状況　調査区の南部、SB01 ～ 03、柱穴列３・４と重複する範囲に位置する。建物の西側が調査区外に延びる可能性がある。

形態・規模　未検出の柱穴を含むものの、南北４間（8.5m）×東西２間（1.7m）以上の総柱建物に復元される。この場合、床面積は 32.97 ㎡に復元され、主軸はＮ 17.8°Ｗを測る。柱掘方は直径 24 ～ 38㎝、検出面からの深さは 23 ～ 46㎝を測る。

出土遺物

土器（図版 23・写真図版 19）　土師器皿（76）が出土している。底部は回転ヘラ切りで切り離され、ナデ消されている。他に奈良時代の土師器皿・鍋、須恵器杯Ｂ蓋・杯Ａ・甕の小片が出土している。

時期　出土土器から判断して、奈良時代以降であるが詳細な時期は不明である。

ＳＢ１７（図版 16）

検出状況　調査区の北部、SB01・02・18、柱穴列４と重複する範囲に位置する。

形態・規模　南北２間（4.6m）×東西１間（2.2m）以上の総柱建物に復元される。床面積は 32.97 ㎡、主軸はＮ 7.7°Ｗを測る。柱掘方は直径 22 ～ 27㎝、検出面からの深さは 16 ～ 37㎝を測る。

出土遺物

土器（図版 23・写真図版 19）　77 は轆轤成形の土師皿で、回転ヘラ切りののち、ナデ消している。他に須恵器大甕の破片や、弥生土器の小片などが出土している。

時期　出土土器から判断して、11 世紀後半と考えられる。

ＳＢ１８（図版 16）

検出状況　調査区の北部、SB01・02・17・19、柱穴列４と重複する範囲に位置する。

形態・規模　南北４間（9.3m）×東西２間（5.1m）の総柱建物に復元される。この場合、床面積は 47.53 ㎡、主軸はＮ 15.5°Ｗを測る。柱掘方は直径 26 ～ 52㎝、検出面からの深さは 13 ～ 45㎝を測る。

出土遺物

土器（図版 23・写真図版 19）　78 は土師皿で、底部は回転ヘラ切り未調整である。

時期　出土土器から判断して、平安時代後期の可能性が考えられる。

ＳＢ１９（図版 16）

検出状況　調査区の北部、SB01・02・18 と重複する範囲に位置する。検出した範囲の北側には攪乱が及ぶが、攪乱の北側には対応する柱穴が検出されておらず、さらに梁行方向がさらに北側には伸びることはないと思われる。

形態・規模　南北３間（6.8m）×東西１間（2.6m）に復元される。この場合、床面積は 17.76 ㎡、主軸はＮ 9.4°Ｗを測る。柱掘方は直径 27 ～ 37㎝、検出面からの深さは 22 ～ 48㎝を測る。

出土遺物

土器（図版 23）　79 は須恵器椀で、底部が若干突出した平高台がかろうじて残る。

時期　出土土器から判断して、12 世紀代と考えられる。

ＳＢ２０（図版 16）

検出状況　調査区の北部、SB01 と重複する範囲に位置する。

形態・規模　未検出の柱穴を含むものの、南北２間（3.7m）×東西２間（3.9m）に復元される。この場合、床面積は 14.17 ㎡、主軸はＮ 7.7°Ｗを測る。柱掘方は直径 25 ～ 31㎝、検出面からの深さは 23 ～ 46㎝を測る。

出土遺物

土器（図版 23・写真図版 19）　80～85 はすべて南東隅の柱穴１つから出土している。80～84 は手捏ね成形の土師皿で、82～84 は底部中央が上方へとくぼむいわゆる「へそ皿」である。85 は土師器杯Ａ。

時期　出土土器から判断して、12 世紀代と考えられる。

ＳＢ２１（図版 17）

検出状況　調査区北部に位置し、SB01と重複する範囲に位置する。

形態・規模　南北１間（2.5m）×東西３間（6.9m）の側柱建物に復元される。床面積は16.98㎡、主軸はＮ16.5°Ｗを測る。柱掘方は直径24～43㎝、検出面からの深さは23～43㎝を測る。

出土遺物

土器　柱穴内より図化には耐えないが、須恵器･土師器･弥生土器などの小片が出土している。

時期　出土した土器からは、判断できない。

ＳＢ２２（図版17）

検出状況　調査区北部に位置し、SB01･柱穴列６と重複する範囲に位置する。

形態・規模　南北３間（4.3m）×東西３間（7,7m）の側柱建物に復元される。床面積は34.18㎡、主軸はＮ14.9°Ｗを測る。柱掘方は直径23～39㎝、検出面からの深さは20～44㎝を測る。

出土遺物

土器　柱穴内より須恵器椀・稜椀、土師器甕、弥生土器などの小片が出土しているが図化には耐えない。

時期　出土した土器からは、判断できない。

ＳＢ２３（図版17）

検出状況　調査区北西部に位置し、SH01・02を切る。柱穴列７・８と重複する範囲に位置する。

形態・規模　未検出の柱穴を含むものの、南北３間（6.3m）×東西３間（8.0m）の側柱建物に復元される。床面積は50.75㎡、主軸はＮ20°Ｗを測る。柱掘方は直径21～44㎝、検出面からの深さは４～32㎝を測る。

出土遺物

土器　柱穴内より図化には耐えないが、平高台の突出した底部をもつ須恵器椀C1や弥生土器の破片などが出土している。

時期　出土土器から判断して、11世紀前半の可能性が考えられる。

ＳＢ２４（図版17・写真図版８）

検出状況　調査区北西部に位置し、西側は調査区外に及ぶ。柱穴列８と重複する範囲に位置する。

形態・規模　未検出の柱穴を含むものの、南北４間（6.4m）以上に復元される。P1-P2間1.34m、P4-P5間1.92mとばらつきはあるが、平均すると柱間1.6mである。なお、梁行方向の1.3m程外側に、対になる柱穴があり、棟持柱として伴う可能性がある。主軸はＮ17.4°Ｗを測る。柱掘方は直径43～58㎝、検出面からの深さは７～33㎝を測る。

最も北側の柱穴P1では柱痕跡部分、掘り方ともに直径６～15㎝大の礫が多く含まれるほか、掘り方埋土から高杯杯部が出土した。柱部分の腐食により空洞化した箇所に上部から礫や高杯が滑り落ちた状況が考えられる。なお、礫の含まれない柱痕跡部分は新しい時期に上部から掘り込まれた可能性を残す。

出土遺物

土器（図版23・写真図版19）　87はP5から出土した弥生時代後期末の甕。短く外反して開く口縁の端部を丸く仕上げる。外面は右上がりのタタキ、内面は板ナデを施す。88はP1掘り方から出土した高杯。直線的に大きく開く受け部から稜をもって短く直立する口縁がつく。

時期　出土土器から判断して、弥生時代後期末と考えられる。

4　柱穴列

柱穴列１・柱穴列２（図版 18・写真図版８）

検出状況　調査区中央部に位置する。SD03 を切り、北端では SB03 と重複する範囲に位置する。ほぼ平行に２列の柱穴列を検出したが、両者の柱穴は対応関係を有せず、それぞれの柱間や柱穴の数も異なり掘立柱建物を構成していた可能性は考えにくい。西から柱穴列１、柱穴列２とする。両者の間隔は 4.0～4.4mを測る。

形態・規模　柱穴１は７本の柱穴（P1～P7）を有し、６間（11.8m）を数える。主軸はＮ 12.5°Ｗを測る。柱掘方は直径 34 ～ 60㎝、検出面からの深さは 25 ～ 54㎝を測る。P3 では根石が設けられている。

柱穴２は５本の柱穴（P1～P5）を有し、４間（9.1m）を数える。主軸はＮ 10.3°Ｗを測る。柱掘方は直径 67 ～ 89㎝、検出面からの深さは 37 ～ 60㎝を測る。P1～P3 では一見二段掘りのような断面を呈するが、周囲のベース層を構成する黄褐細粒砂から中粒砂は緊密度が低く柱根が沈み込んだと考えられる。なお、P1 では根石が設けられている。

出土遺物

土器（図版 24）　89 ～ 94 は柱穴列２、95・96 は柱穴列１の出土である。

89 は須恵器蓋。天井部が丸みを持ち、端部は残存しないものの器高が高いタイプである。90～93 は末器杯Ｂで、いずれも口縁が外方へ斜めに開き気味となり、高台が底部の内側気味に付される。92 は底面に「小」字状に３本の沈線が認められ、ヘラ記号的なものと考えられる。

94 は須恵器の皿で、底体部境があまく、口縁が外方へと開く。95 は須恵器の皿で、口縁が外方へ斜めに開く。96 は土師質の土錘で、中央付近に最大径を持つラグビーボール状を呈する。

時期　出土土器から判断して、奈良時代後半と考えられる。

柱穴列３・柱穴列４（図版 18・写真図版 10）

検出状況　調査区北部に位置する。SB01・02・17・18 と重複する位置にある。２列の柱穴列を検出したが、両者の交わる P5 の切り合いは不明である。南北方向のものを柱穴列３、東西方向のものを柱穴列４とする。柱穴列４は P2 で SK08 を切る。なお、いずれも土坑状の掘り方を呈するが、内部から柱痕跡を検出することはできなかった。

形態・規模　柱穴３は６本の柱穴（P1～P6）を有し、５間（13.2m）を数える。主軸はＮ 62.0°Ｅを測る。柱掘方は直径 38 ～ 69㎝、検出面からの深さは 23 ～ 43㎝を測る。

柱穴４は４本の柱穴（P7～P10）を有し、３間（7.5m）を数える。主軸はＮ 37.6°Ｗを測る。柱掘方は直径 47 ～ 71㎝、検出面からの深さは 28 ～ 39㎝を測る。

出土遺物

土器　柱穴内より図化には耐えないが、両柱穴列から須恵器椀Ｃ1 底部、土師器椀などの破片が出土しており、柱穴列４では白磁碗の破片が含まれている。

時期　出土土器から判断して、柱穴列３は 12 世紀中葉もしくは後半と考えられる。柱穴列４は 12 世紀初頭ないし前半の土器を中心とするが、SK08 を切るため 14 世紀以降と考えられる。

柱穴列 5（図版 19 ）

検出状況　調査区北部に位置し、SB01・17 と重複する箇所に位置する。

形態・規模　５本の柱穴を有し、４間（7.7m）を数える。主軸はＮ 18.2°Ｗを測る。柱掘方は直径 23 ～ 38㎝、検出面からの深さは 12 ～ 35㎝を測る。

土器　柱穴内より土師器小片１点のみが出土している。

時期　不明である。

柱穴列 6（図版 19 ）

検出状況　調査区北部に位置し、SB01・19・22 と重複する箇所に位置する。

形態・規模　５本の柱穴を有し、４間（8.8m）を数える。主軸はＮ 19.3°Ｗを測る。柱掘方は直径 30 ～ 34㎝、検出面からの深さは 19 ～ 41㎝を測る。

土器（図版 24 ）　97 は土師器の皿で、底体部境は明瞭であり、口縁が短く直線的に開く。他に須恵器突帯椀の破片や土師器皿の小片などが出土している。

時期　出土土器から判断して、平安時代中期から後期にかけての可能性が考えられる。

柱穴列 7（図版 19 ）

検出状況　調査区北部に位置し、SB23 と重複する箇所に位置する。

形態・規模　５本の柱穴を有し、４間（西端の柱穴２つのうち柱間が平均に近い東の柱穴とした場合は 6.8m）を数える。主軸はＮ 76.0°Ｅを測る。柱掘方は直径 20～42㎝、検出面からの深さは 18～41㎝を測る。

土器　柱穴内より図化には耐えないが、須恵器椀、土師器皿などの小片が出土している。

時期　出土土器から判断して、平安時代後期の可能性が考えられる。

柱穴列 8（図版 19 ）

検出状況　調査区北部に位置し、SB23・24 と重複する箇所に位置する。

形態・規模　５本の柱穴を有し、４間（9.3m）を数える。主軸はＮ 76.6°Ｅを測る。柱掘方は直径 21 ～ 61㎝、検出面からの深さは６～ 38㎝を測る。

土器　柱穴内より須恵器甕口縁や椀の破片、土師器の小片などが出土している。

時期　出土土器から判断して、12 ～ 13 世紀代の可能性が考えられる。

柱穴列 9（図版 19・写真図版 7 ）

検出状況　調査区南部に位置し、SB07・08・SK12 と重複する箇所に位置する。

形態・規模　５本の柱穴を有し、４間（9.6m）を数える。主軸はＮ 53.0°Ｅを測る。柱掘方は直径 28 ～ 35㎝、検出面からの深さは 25 ～ 58㎝を測る。

土器（図版 24・写真図版 20 ）　98～100 は土師器椀の底部付近の破片で、いずれも回転糸切り未調整である。98・99 は平高台がわずかに突出する椀Ｃ1、100 は平高台の突出が大きく外方にふんばり、見込み部がくぼむ椀Ｃ3。他に土師器鍋・小皿、須恵器壺・椀などの小片、土錘が出土している。

時期　出土土器から判断して、11 世紀代と考えられる。

5　柱穴

出土土器（図版 24･25 ・写真図版 20 ）

101～109 は弥生土器。101 は広口壺の口縁付近で、直立する頸部から口縁が短く開く。口縁端は上下に拡張され、二条の凹線を施す。102 は台付き直口壺の胴部か。最大径付近に稜に近い角張った膨らみをもつ。103 は壺底部で底径は小さい。104 は底部がわずかに突出する甕底部で、外面は右上がりのタタキが施される。105 は椀形の受け部をもつ高杯で、残存する中空の脚柱部から、緩やかに脚裾部が広がると考えられる。106 は高杯の円錐形を呈す脚部で内面には絞り痕が認められる。108 は裾端部を下方に屈曲させ、屈曲部外面に突帯をめぐらす。この突帯上と裾下端に刻み目を施す。109 は裾端部を外方に肥厚させ、外面は放射状に沈線を設ける。110 は器台の胴部片で５本のヘラ描き沈線の上に上下の向きの鋸歯文帯を、下には上向き鋸歯文帯を配置する。

111～116 は古墳時代および飛鳥時代の土器。111 は土師器の有段口縁の高杯である。器表の全体が磨滅しているが、杯部は稜を持つ。112～116 は須恵器。112・113 はＴＫ209 併行の杯身。114 は高杯で、円錐形の脚部中位に２条突帯をめぐらす。115 は横瓶で外面はかすかにヘラミガキが、内面は同心円タタキが施される。116 は杯Ｇh と思われるが、口径 13.0㎝と大きい。

117 は土師器の甕。長胴になるか。118 は土師質の土錘。119～127 は奈良時代の須恵器。119 は円面硯。120・121 は杯Ａ。122～124 は杯Ｂ蓋。125 は体部最大径となる肩付近に丁寧なミガキを施す稜椀の一種。126 は杯Ｂで、高台がやや内側につくタイプ。127 は椀で口縁部下に段がつき、短い口縁が外反しつつ直立する。

128～132 は土師器の小皿であり、底部はいずれも回転ヘラ切りで切り離す。130・131 は口縁部が内湾気味に緩やかに開く。133 は小皿に含めたが、土師質の椀に近い形状を呈す。底部は回転ヘラ切り未調整。134 は須恵器の小皿であるが底部を欠損する。135 は平高台が突出し、底部内面が大きくへこむ椀Ｃ3 である。口縁から底部にかけては直線的に傾く鉢形の器形となる。136～139・141～143 は須恵器の椀である。136～139 は底部が若干突出し、138・139 は底部が回転糸切り未調整である。13８は突出した底部から内湾気味に開き、口縁で若干外反させ丸く収める。139 はやや突出のあまい平高台から体部はやや内湾気味に斜めに開いた後、口縁部は若干外反させ、丸く収める。140 は土師器椀で、体部下半の回転ヘラ削り調整が顕著である。底部回転糸切り。141～143 は底部が丸みを持ち、底体部境があいまいな椀で、141 は回転糸切り、142 は回転ヘラ切りで底部を切り離す。

鉄器（図版 32 ･写真図版 25 ）　F2 は刀子の刀身から茎が完存する。F3 も刀子と思われるが、刀身の刃先には端面を設け刃部がつくりだされていない。F6 は雁股鏃。刃先は断面が鋭い二等辺三角形状を呈し、基部・茎は断面方形をなす。F7 は釘である。

6　溝

ＳＤ０１（図版 7･19 ･写真図版 8 ）

検出状況　調査区南端、SD01 に位置する。

形態･規模　ほぼ直線的に伸び、幅 110～151㎝、検出面からの深さ 52㎝を測る。断面形はＵ字形をなす。底面のレベルはほぼ一定であるが、東壁断面で観察したところ西端より 8㎝低く、地形同様西から東に緩やかに傾斜しているとみられる。

出土遺物

土器（図版25・写真図版20） 144・145は須恵器杯Ｂ。144は丸い底部から口縁が大きく開く。145は口縁が直線的に開き、断面方形の高台を付ける。146は須恵器皿で、緩やかに内湾する底部に外反する口縁がつく。類例が西後明41号窯に求められ、近隣では赤穂市奥山田窯跡でも採集されている。147は須恵器壺で胴部がわずかに膨らみ、頸部がすぼんで小さく開く徳利状の形状を呈する。肩部に3条ずつの沈線が2ヵ所施されている。148は須恵質の把手で、甑についていたものであろうか。149は須恵器甕。内面に同心円タタキを施す。

時期　出土土器には奈良時代後半の土器を含むものの、遺構の時期としては平安時代前期と考えられる。

ＳＤ０２（図版6･19）

検出状況　調査区中央よりやや南寄り、柱穴列1・2の南側に位置する。

形態･規模　ほぼ直線的に伸び、幅57㎝、検出面からの深さ16㎝を測る。断面形はＵ字形をなす。

出土遺物

土器（図版25・写真図版20）　須恵器杯Ａ（150）、杯Ｂ蓋（151）、杯Ｂ（152）が出土している。151は平坦な天井部から若干内湾気味に端部に移行し、かえりを持つ。

時期　出土土器から判断して、奈良時代後半と考えられる。

ＳＤ０３（図版6･19）

検出状況　調査区中央部に位置し、SB15･柱穴列1・2に切られる。

形態･規模　ほぼ直線的に伸び、幅65～87㎝、検出面からの深さ22㎝を測る。断面形はＵ字形をなす。底面のレベルは地形同様、西から東に傾斜している。

出土遺物

土器　須恵器杯Ａ・Ｂの底部付近の破片、古墳時代の須恵器杯蓋、弥生土器の小片が出土している。

時期　出土土器及び切り合いの状況から奈良時代前半から中頃にかけてと考えられる。

ＳＤ０４（図版6･19）

検出状況　調査区北部のやや南寄りに位置し、柱穴列4P2とSK08に切られる。

形態･規模　ほぼ直線的に伸び、幅57㎝、検出面からの深さ16㎝を測る。断面形はＵ字形をなす。

出土遺物

土器（図版25）　須恵器椀底部（153）や口縁部の破片、回転台成形の土師器小皿が出土している。

時期　出土した土器より、12世紀代と考えられる。

7　不明遺構

ＳＸ０１（図版19・写真図版9）

検出状況　調査区北部に位置する。南側を撹乱により損なう。

形態･規模　楕円形を呈するが、断面形は上部で周縁から緩やかに傾斜した後、中央に向かって急激に落ち、壁状に立つ。長径108㎝、短径91㎝、検出面からの深さ45㎝を測る。

埋土は4層からなる。2・3層はベース土をブロック状に混じりつつ埋まっており、その後1層は緩やかな傾斜の上部とともに埋没している。

出土遺物

土器（図版 25・写真図版 6） 154 は手捏ねの土師皿。全体をナデで整形する。

時期　出土した土器より 12 世紀代の可能性が考えられる。

8　土坑

ＳＫ０１（図版 20）

検出状況　調査区北端部に位置する。

形態・規模　楕円形を呈し、長径 119cm、短径 114cm、検出面からの深さ 26cmを測る。底部は平坦で周縁にむかって緩やかに傾斜した後、急激に壁状に立ちあがり、断面形はＵ字形を呈する。埋土は２層からなる。

出土遺物

土器（図版 26・写真図版 21） 155～161 は弥生土器甕。155～157 は体部からく字形に短い口縁が外反しつつ屈曲し、口縁端を上下にわずかに拡張し、端面つくり中央を凹ませている。158・159 では上方に比べ下方への拡張が大きく、158 では3条、159 では2条の退化凹線をめぐらす。159 は体部内面は板ナデにより粘土を掻き取って器壁を急激に薄くしている。160・161 は底部片。162 は高杯裾部の可能性も拭い切れないが器台裾部か。下端に３条の凹線が巡っている。163 は器台で、残存する底部から体部中位付近には２段８ヵ所の円孔を穿つものと思われる。裾部下端に４条の沈線が巡っている。

時期　出土した土器より、弥生時代後期前葉と考えられる。

ＳＫ０２（図版 20・写真図版 9）

検出状況　調査区北端部に位置する。

形態・規模　西側の若干膨らみがちな隅丸方形に近い形状を呈する。長さ 186cm、最大幅 125cm、検出面からの深さ 26cmを測る。底部は比較的平らだが、周縁に近づくにつれ立ち上がり、断面形は皿状を呈する。埋土は１層からなるが、直径５～ 15㎝大の円礫が非常に密に含まれている。

出土遺物

土器（図版 26・写真図版 21）　弥生土器の甕（164～168）、壺（169・170）、高杯（171）が出土した。164・165 は口縁端をわずかに上下に拡張し、164 では退化凹線を２条めぐらす。いずれも体部内面はヘラケズリを施す。166～168 は甕底部。167 は底部中央に焼成前に穿孔する。169・170 は広口壺の口縁部で上下に拡張する。169 では口縁端面に斜格子文を施し、二重の円形浮文をつける。内面口縁直下に斜格子文の上部に４本足の首が長く尾を持つ竜のような動物が描かれており、動物の中央には二等辺三角形状に山形の直線文が施されている（写真図版 11）。170 は口縁端面に退化した幅広めの凹線が２条めぐり、その上から櫛状の工具による列点文が連続的に施される。171 は高杯の脚部と思われ、透かし円孔を穿つ。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は接合痕をナデており、裾部は内外面ともにハケ調整を施す。

時期　出土した土器より、弥生時代後期前葉と考えられる。

ＳＫ０３（図版 20・写真図版 9）

検出状況　調査区北部に位置する。北西側は攪乱をうける。検出面付近において弥生土器が広がる。

形態・規模　平面形は西側が尖る楕円形をなし、断面形は皿状をなす。長径131㎝、短径87㎝、検出面からの深さ14㎝を測る。

出土遺物

土器（図版26・写真図版21）　弥生土器の高杯（172・173）、鉢（174）が出土している。172は大きな椀形の受け部で、口縁下に4条の沈線をめぐらす。173は浅く内湾する受け部に外反する口縁が開く。脚部は円錐形の中空の脚柱部から屈曲して脚裾部が開く。円形透かし孔を穿つ。174はわずかに突出する底部から丸みをもって開く体部に短い口縁が屈曲して若干内湾気味に開く。

時期　出土土器から判断して、弥生時代後期末（庄内併行期）と考えられる。

ＳＫ０４（図版20）

検出状況　調査区北部に位置する。南側は撹乱をうける。

形態・規模　南北に長い長円形を呈する。底部中央が若干盛り上がるが、周縁に向かって壁がゆるやかに立ち上がる断面形皿状を呈する。長径51㎝以上、短径66㎝、深さ18㎝以上を測る。

出土遺物

土器（図版27・写真図版22）　遺構検出面において出土した175は口径36㎝を測る大型の土師器甕。口縁は体部から屈曲して斜め方向に開くが、中程でさらに屈曲して垂直方向立ち上がる。他に平高台の突出のあまい土師器椀Ｃなどが出土している。

時期　出土した土器から、12世紀代と考えられる。

ＳＫ０５（図版20）

検出状況　調査区中央部北寄りに位置する。

形態・規模　平面形は隅丸方形状の楕円形で、底面はほぼ平坦であるが中央に向かって緩やかに傾斜し、周縁付近で立ち上がる。長径104㎝、短径88㎝、検出面からの深さ26㎝を測る。

出土遺物

土器（図版27・写真図版22）　176は土師器の長胴甕で、開き筒形の体部から口縁が屈曲して開く。177は須恵器の杯Ａで、外湾気味の底部から口縁も外湾しつつ斜め外方に開く。178は須恵器の杯Ｂで、高さ５㎜の高台を施すものの、底面が外反し接地する。高台は底面を外方に見せる接地面が内面となる形で付されている。

時期　出土した土器より８世紀後半と考えられる。

ＳＫ０６（図版20）

検出状況　調査区中央部やや北寄りに位置する。

形態・規模　南側に尖り気味な隅丸の逆三角形状を呈する。底面はほぼ平坦であるが中央に向かって緩やかに傾斜し、周縁付近で立ち上がる。長径102㎝、短径73㎝、検出面からの深さ14㎝を測る。

出土遺物

土器（図版27・写真図版22）179は土師器の長胴甕で、筒形の体部から口縁が外湾気味に開く。180は製塩土器の口縁付近。181・182は杯Ａ。181は底体部境があまく、182は浅い器高で口縁は斜め外方に開く。183は底部から口縁に向かって開く杯Ｂ。高さ５㎜の高台を施すものの、底面が外湾し接地

するぎりぎりのところで収まっている。184・185は土錘で、いずれも土師質。ともに中央部付近に最大径を持つが、明確な稜を持たない。

時期　出土した土器から、奈良時代後半と考えられる。

ＳＫ０７（図版20・写真図版10）

検出状況　調査区中央付近、柱穴列1・2のほぼ中間に位置する。

形態・規模　西側に開き気味の楕円形を呈し、断面形は逆台形状を呈する。長径100㎝、短径78㎝、検出面からの深さ43㎝を測る。埋土は3層に分かれ、最下層には基盤層がブロック状に含まれている。

出土遺物

土器（図版27・写真図版22）　186は最大径を口縁部に持つ鉢形の器形を呈する鍋であり、口径42.8㎝を測る。底部を欠くが、丸みを持ちつつ大きく開く体部に水平に近い口縁が緩やかに屈曲する。口縁端は上下に摘み出し、しっかりとした端面を持つ。内外面ともにハケ調整が顕著である。

時期　出土した土器から8世紀頃と考えられる。

ＳＫ０８（図版20・写真図版10）

検出状況　調査区中央部北寄りに位置する。中央部分を柱穴列4のP2に切られ、SD04を切る。

形態・規模　平面形は楕円形を呈し、断面形は中央部がくぼむが逆台形状に近い。長径87㎝、短径75㎝、検出面からの深さ38㎝を測る。

出土遺物

土器（図版27・写真図版22）　187・188は須恵器椀。187は平高台がわずかに突出するタイプで回転糸切りで切り離す。188は回転糸切りされた平坦な底部から丸い体部に移行する。189・190は須恵器の小皿。189は回転ヘラ切り、190は回転糸切りで切り離す。191は備前焼の擂鉢である。胎土は非常に精緻で、還元炎焼成により（須恵器と変わらない）青灰色である。体部は内湾気味に開くボール形を呈する。口縁上端は平坦面をなし、外傾する。残存している範囲ではスリメは認められないが、残存部位がわずかであるため、本来ないのかスリメとスリメの間の破片であるのかは判然としない。間壁編年Ⅲ期で14世紀前半と考えられる。

石器（図版32・写真図版25）　S6は安山岩質の石材を用いた台石か。平担な上面には複数の浅いくぼみが認められる。

時期　出土した土器は12世紀代が中心となるものの、備前焼の編年観から14世紀前半と考えられる。

ＳＫ０９（図版20）

検出状況　調査区中央部北寄りに位置する。

形態・規模　ほぼ正円形を呈する。周縁間近で急激に壁が立ち、断面形は長方形に近い逆台形状を呈する。直径約71㎝、検出面からの深さ36㎝を測る。

出土遺物

土器（図版27）192は須恵器椀で、底部は回転糸切りによって切り離す。他にも底部回転糸切りの須恵器椀や須恵器甕、弥生土器の小片、土錘などが出土しているが、図化には耐えない。

時期　出土した土器より、12世紀代から13世紀代にかけてと考えられる。

ＳＫ１０（図版 20）

検出状況　調査区北部やや南寄りに位置する。

形態・規模　正円形に近い楕円形を呈する。底面はやや西側に傾き、下端からゆるやかに傾斜しつつ周縁間近で急激に壁が立ち、断面形は長方形に近い逆台形状を呈する。長径 72㎝、短径 68㎝、検出面からの深さ 28㎝を測る。

出土遺物

土器（図版 27・写真図版 22）　193 は土師器皿で口径 14.8 ㎝に復元される大皿。194～196 は須恵器小皿で、いずれも底部は回転糸切りによって切り離すが、糸の撚りの軌跡が螺旋状に認められるタイプ。

時期　出土した土器より、12 世紀中頃から後半にかけてと考えられる。

ＳＫ１１（図版 20）

検出状況　調査区南部やや北寄りの東壁際に位置する。東側は調査区外に及ぶ。

形態・規模　平面形は楕円形を呈する。底部はほぼ平坦で周縁より緩やかに傾斜し、立ち上がりは斜めとなるため横断面形は逆台形状である。長さ 83㎝、幅 44㎝以上、検出面からの深さ 20㎝を測る。

出土遺物

土器（図版 27・写真図版 22）　197 は土師器皿。口縁が外反し、底部は回転ヘラ切りの後ナデが施されている。他に底部がやや突出し、回転糸切りで切り離される須恵器椀Ｃが出土している。

鉄器　鉄滓が出土している。

時期　出土した土器より 11 世紀前半から中頃にかけての時期の可能性が考えられる。

ＳＫ１２（図版 20・写真図版 10）

検出状況　調査区南部に位置し、SB07 の梁行方向の南端軸線上に位置する。西側立ち上がり中央付近において、底部中央に向かって傾斜した状態で椀（198）が出土した。

形態・規模　北側に膨らむ長円形状を呈し、北端では二方向に突出気味である。底部は西側に傾斜し、周縁に向かって立ち上がる逆台形状を呈する。長さ 119㎝、最大幅 73㎝、検出面からの深さ 16㎝を測る。

出土遺物

土器（図版 27・写真図版 22）　198 は平高台が突出する土師器椀で、回転糸切りによって切り離される。

時期　出土した土器より、11 世紀代と考えられる。

ＳＫ１３（図版 20・写真図版 10）

検出状況　調査区南部に位置し、SB08 の南側柱穴列上に位置する。

形態・規模　平面形は南側が尖り気味の逆三角形状の円形を呈する。底部からかなりゆるやかに傾斜してたちあがり、断面形は皿状を呈する。長さ 151㎝、幅 142㎝、検出面からの深さ 17㎝を測る。

出土遺物

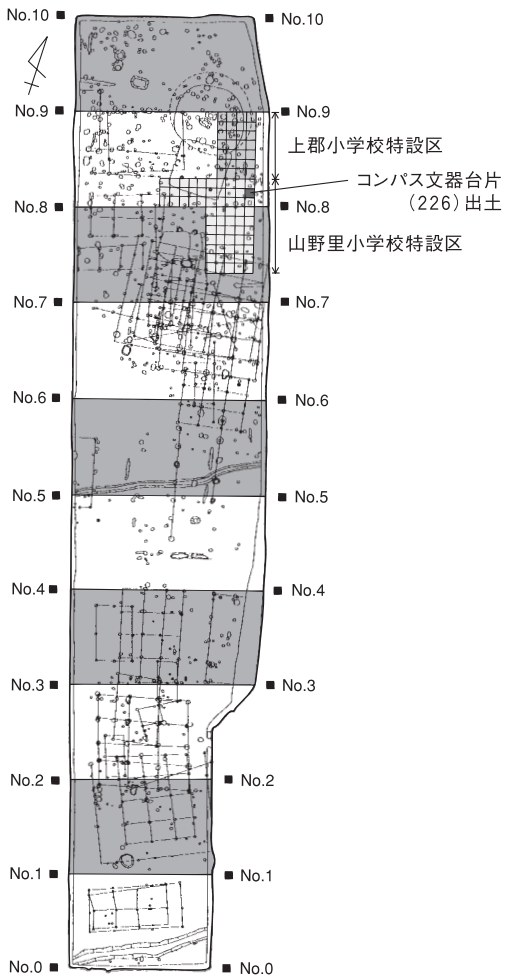
土器　内面に同心円タタキを施す須恵器甕の頚部から胴部の破片、弥生土器の小片が出土している。

時期　出土した土器より、時期を特定することは困難である。

9　包含層出土の遺物

出土遺物の大半は黒褐色を呈する包含層（1・2層および8層上部の土壌化層）から出土している。

なお、本章末尾に設けた遺物一覧表（第2表）には、取り上げ位置の目安に用いた測量杭の番号を記載している。また、小学校児童の体験発掘学習会の際に出土したものは各小学校の特設区名を明示した。それらの位置・範囲は第3図のとおりである。



第3図　調査区の杭№と発掘調査体験学習区

土器（図版28～32・写真図版16）

199～210は弥生時代後期前葉の土器、206～215は弥生時代後期末（庄内併行期）の土器。

199～202は壺。199は沈線を施す頸部から球形の胴部に移行し、境界付近の沈線下には櫛描き列点文を連続的に施す。胴部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリを施す。備前地域の上東式系（V-2様式）[2]の特徴を持つ。200は長頸壺の口頸部で胴部からわずかに外反し開きつつ直立する。201も長頸壺か。直立する頸部から比較的口縁端に近いところで外反して開く。

218～231は古墳時代の須恵器。

218はTK10併行の蓋。219・220はTK23～TK47併行の杯身。221はTK43～TK209併行の杯身。222～224は高杯。222は中実の脚部で、円錐状の脚裾部が外反気味に下方に広がる。脚裾部内面は回転ナデが顕著である。蛍光X線分析を用いた産地推定により陶質土器の可能性が指摘されている（第4章第2節参照）。223は脚部中位付近に円形の透かし孔を穿ち、その直下で下方へ屈曲する段を有し、下端では突帯をめぐらす。224は裾部を外方へ屈曲させ、ゆるやかに開く。

225～230は器台。227以外は、すべて同一個体の可能性が考えられる。225は器台脚部で、透かし孔の穿たれた直下に2条突帯をめぐらす。2条突帯より下位は無文であり、若干内湾気味に屈曲することから、230同様脚裾部付近の破片と考えられる。226は杯部の体部から底部に移行する部分の破片である（写真図版11）。コンパス文を施す文様帯が区画され、その上位には1条突帯で放射状の鋸歯文を施す文様体を隔て、下位には脚部に区画されたであろう文様帯の最上段とを隔てる突帯をかろうじて残存する。コンパス文は、二重の同心円の半円を上下に反転させつつ横方向に繰り返す。同心円は最も外側が直径3.62㎝、外側から2番目が直径1.86㎝を測り、水平方向の重なりから左から右の方向に向って施文されている。

227は3条以上の波状文を施した器台脚部で、6世紀代のものであろう。

228～230は2条1組の突帯によって文様体を区画する器台脚部片。228・229も器台脚部の破片で、2条1組の突帯どうしの間で波状文を施す文様帯を区画し、透かし孔を穿つ。波状文は、流水文のように櫛描きをU字形に連続して往復を繰り返し、左から右往復の縦幅（ストローク）が長く、折り返し部分

が尖らずにゆっくりと一定の横幅を持って折り返されているのに対し、一往復あたりの横幅は狭く非常に密である。230は脚部裾の文様帯最下段であり、2条1組の突帯のすぐ上位に透かし孔を穿つ。下半で内湾気味に屈曲し、端部が緩やかにのび、端面を設ける。

231は甕口縁で、2条の波状文の間に沈線がめぐる。

232～239は古墳時代の土師器である。

232は外反する口縁部が直立気味に開く。端部は丸みを持っている。233は口縁部は短く直線的に開き、わずかではあるが外方に段状に肥厚する。234は球形の胴部から口縁部が屈曲して内湾気味に開き、口縁端部が尖り気味で二重口縁が退化したような形状である。内外面ともに細かいハケ調整を念入りに施す。235・236は口縁部は外反し、端部をわずかに摘みあげる。ともに内面はヘラケズリされ、235はその後板ナデを施す。237（実213）は韓式系土器の小型平底鉢である。ややあまく球状を呈する底部から、ゆるく屈曲しつつやはり丸みを帯びながら緩やかに開く胴部に、短い口縁部が外反して開く。平行タタキが体部のみならず底部にも及び、体部外面の指頭圧痕は底部にタタキを施した際のものか。

238は椀形の高杯で、脚部は円板充填で接合する。239は高杯脚裾部で、緩やかに傾斜する裾に直径1.2㎝の透かし孔が2ヵ所残存するが、本来4ヵ所穿たれていたと考えられる。240は土師器皿で、口縁が短く外側に開いた後、さらに口縁端部が内側に肥厚する。241は土師器の直口壺で、丸い胴部から短い口縁部が直立する。

242から247は口頸部が大きく開く土師器の長胴甕で、体部は口径よりも小さい。244・246は口縁部が外反するのに対し、242・243は内湾気味で、245は若干外反気味だがほぼ直線的に開く。247は口径が59.8㎝にも復元される超大型品。

248は移動式竈の破片で、焚き口と庇のコーナー部分がわずかに残る。

249は製塩土器の底部。摩滅が激しいが、外面底部付近に指オサエ痕跡をとどめる。

250・251は丸瓦。250は丸瓦で凹面には布目痕跡を留める。251は古大内式Ⅱ型（小犬丸式）の軒丸瓦（写真図版11）。蓮華文4葉を含む周縁部付近のみを遺存するが、本来は中房に1＋5の蓮子に単弁13葉の蓮華文が配されていたものと考えられる。周縁部は直に立ち上がり、瓦当裏面には溝を掘らずに丸瓦端面を接合させ、接合部の丸瓦凹面側を粘土で補強した痕跡が認められる。

253～294は律令期の須恵器、252のみ杯Ghである。255～263は杯Ａ。264～268は杯Ｂ蓋。270～277は杯Ｂ。279・280は平坦な底部から屈曲して直立気味に体部の立ち上がる脚台付き椀の形状を呈するが、稜椀の一種で底部付近に退化した稜をもつ。281は125と同様の稜椀。丸い底部から体部上半で直立し短い口縁部が開く形状で、この直立する体部上半に移行する部分に丁寧なミガキが施されている。282は大型の鉢で、鉢Ａの中でも鉢Aaと呼ばれるタイプ（池田2003）。283は鉢Ａの系列か、相生市落矢ケ谷4号窯の出土例に類する。

284～293は皿で、284～286・288～290は皿Ａ、287・291～293は輪高台がつく皿Ｃ。

296～301は土師器の小皿。298・299が手捏ね成形であるほかは、回転台成形である。296・301が回転糸切り、297・300が回転ヘラ切りで切り離される。なお、297・298は内面に、299では外面に一面黒色を呈するペースト状の付着物が確認でき、漆の可能性が考えられる。

302～308は土師器の托状皿。305を除いて平高台の突出が顕著で口縁はそのまま水平方向に開くが、306・308に至っては突出が激しく、外方に踏ん張る。いずれも底部は回転糸切りで切り離すが、302がナデ消しているほかは未調整である。

309～311 は須恵器の小皿で、底部はいずれも回転糸切り未調整である。309 は糸の撚りの軌跡が螺旋状に認められるタイプ。

312・313 は平高台が突出し、底部内面が大きくへこむ土師器椀Ｃ３である。312 は底部が外側に踏ん張り底径が 6.2㎝と大きいが、全体の器形もやや小型である。313 は突出の具合、底径はともに小さい。いずれも回転糸切りで切り離される。

314 から 331 は須恵器椀。314～317・324 は底部の突出が顕著で、316・317 は外方に踏ん張り気味である。これに対し、318・321・323・325 は底部が肥厚するものの突出があまく、底部から体部に比較的スムーズに移行する。いずれも回転糸切りで切り離す。320・329 は器高が低く、底部から退部への遺構がスムーズである。320 は回転ヘラ切り、329 は回転糸切りで切り離す。331 は突帯椀(椀Ｄ1)。大きく開く体部に口縁付近で内湾し、体部中位よりやや下位に突帯がめぐり、底部は輪高台がつく。

334・336・337 は土師器の羽釜・335 は土師質の鍋である。334・336 は球状の体部を持ち、口縁部が内傾するタイプの土師器鍋。334 は鍔部が退化せずにほぼ横方向にのびる断面長方形の鍔部をもち、内面はハケ調整が施される。岡田・長谷川分類[3]の播磨型の羽釜タイプのＢ系列のＩ類に該当する（岡田・長谷川 2003）。336 は鍔部が退化し、断面形はシャープなものの短い三角形を呈する。335 は直立する体部からＬ字状の口縁部が屈曲してつくもので、岡田・長谷川分類の鍋形タイプのⅡ類に該当する。337 も断面長方形の鍔部をもち、外面の鍔部の直下は指オサエが顕著である。内面はハケ調整が施される。338 はの三足鍋の足。

陶磁器（図版 31･写真図版 24）　332 は白磁碗で体部下位で露胎する。333 は華南産の褐釉陶器で、四耳壷の肩部であろうか。丸み帯びて膨らむ肩部に本来短く立ち上がる頚部がつく可能性が高く、その境界付近に横耳が取り付けられる。また、横耳の設けられる付近にはヘラ描きで波状に沈線が施されている。12 世紀後半から 13 世紀前半。

377 は華南産の白磁碗（山本分類[4]椀Ⅳ-1a 類）で、低い高台を持つ。12 世紀後半から 13 世紀前半。378 は青磁の碗の口縁付近の小片で、直線的に開く口縁の、端部を外方に突出させる。379 は白磁碗で、口縁は小さい玉縁状を呈する白磁碗Ⅱ類にあたる。12 世紀代に比定されよう。380 も華南産の白磁碗で、内面に櫛描文を持つ。山本分類椀Ⅷ-0 類に相当するであろうか。高台の器壁がうすく径も小さく、外面は釉薬の掛かり具合にむらが認められる。12 世紀後半から 13 世紀前半。381 は白磁の碗で、山本分類Ⅲ-1c 類か。底部付近が露胎する同安窯系の特徴を示す。外面は粗い櫛を施し、内面は櫛描きとヘラ描きで花文様を施す。12 世紀後半から 13 世紀前半。382 は唐津焼の碗で、外面に波状の文様が施されている。18 世紀前半か。383 は青磁の底部片で、器種は不明ではあるが、18 世紀後半から 19 世紀代と思われる。384 は蛇の目高台を持つ青磁の鉢の底部。18 世紀後半から 19 世紀代。

385 はいわゆる「くらわんか手」の系統の青磁の香炉の底部付近で、高台付近は施釉が粗雑で概ね露胎している。18 世紀後半から 19 世紀代。

土製品（図版 31･32･写真図版 24）　339～376 は土錘。以下の３類に分類する。

ａ類（339～448）　上下両端は多少すぼまるものの、二側辺がほぼ平行な直線形となり、平面形が長方形状を呈するもの。すべて土師質である。348 のみ 15.6g と重いが、4～6g に分布の中心があり、他の２者と比較して格段に軽い。

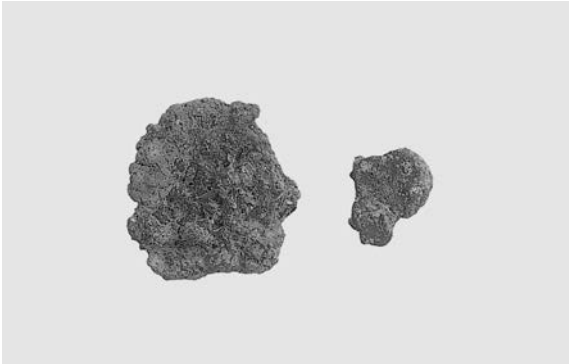
ｂ類（349～362）　上下両端に比べ、中程の大部分が膨らむもの。ただし、ｃ類のように中位付近で明確な最大径を持つのではなく、中程が全体的に膨らみ、この部分の二側辺がほぼ平

行な直線形となるもの。362が須恵質であるほかは、すべて土師質であり、15g前後がピークとなる。

c類（363～376）　中位付近が明確に膨らみ、平面形が六角形状を呈するもの。365・366・369・374・376と土師質が含まれるものの、他の9点が須恵質と数量的には須恵質が凌駕する。重量は13～20gの幅があるが、18g前後にピークがあり、b類より若干重いものが多い。なお、376は62gと他を凌駕する。

石器（図版18・写真図版16）　S1は滑石製の紡錘車。上面は中心の平坦面の周囲に緩やかに傾斜する研磨面を研ぎだす。穿孔は下面側一方向から穿つ。S2は細粒砂岩製の砥石。図化した3面が使用され、各砥面ともによく内湾する。図の左側面では粗い擦過痕が認められ、鋭利な金属を研いだものと思われる。S3は砂岩製の砥石。上面の使用はわずかで、両側面の使用が認められ特に右側面のほうが内湾し、よく使用されている。S5は花崗斑岩製の円礫を利用した敲打具と思われる。見た目の印象よりやや重く感じられるが、特に目立った潰れは認められない。S7は砂岩製の手打ち砥石であろうか。残存する端部にやや弱めの潰れが認められ、敲打具として使用された可能性も考えられる。

鉄器（図版32・写真図版25）　F8は釘である。F10は懸垂状の金具で、棒状の鉄素材の両端を曲げてそれぞれに輪を設ける。両端の閉塞する輪と閉じ切られていない輪が90度ねじれる位置に作られ、前者はお辞儀するように軸より垂直に折り曲げられている。轡もしくは鐙などの馬具の鎖金具に類するものであろうか。F11・12（第4図）は鉄滓である。他に調査区中央部付近の遺構検出面上において椀型滓が出土している。



第4図　包含層出土鉄滓

注

1）森内氏の緑ヶ丘窯跡の器種分類に従っている（森内1995）。なお、10世紀代から11世紀代の須恵器・土師器椀や土師器托状皿をはじめとする平安時代中期の土器の編年観は、岸本道昭氏の小犬丸遺跡出土土器を中心とした作業（岸本1994）および山本雅和氏による白水遺跡出土資料の整理（山本1999）を、11世紀代後半から12世紀代にかけての平安時代後期から中世初めの須恵器椀を中心とする須恵器小皿・土師器皿などの土器編年については、菅本宏明氏による編年観（菅本1993）を参考とした。

2）正岡睦夫1992「1、備前地域」正岡睦夫・松本岩雄（編）『弥生時代の様式と編年』山陰・山陽編　木耳社

3）なお、土師器鍋の編年観は、岡田章一・長谷川眞両氏による編年（岡田・長谷川2003）に拠っている。

4）山本信夫2000「陶磁器分類」宮崎亮一（編）『太宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第49集　太宰府市教育委員会

なお、この他の陶磁器については山本編年および森田編年（横田・森田1978）を参考にしつつ、岡田章一氏よりご教示を賜った。

参考・引用文献

池田征弘（編）2003『緑ヶ丘窯址群Ⅲ』兵庫県文化財報告第253冊　兵庫県教育委員会

岡田章一・長谷川眞2003「兵庫津遺跡出土の土製煮炊具」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第3号　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

岸本道昭1994「第4章　布勢駅家廃絶期の土器」『布勢駅家Ⅱ』龍野市文化財調査報告11　龍野市教育委員会

菅本宏明1993「東播系須恵器出現期における摂播国境地帯の土器様相」広島大学文学部考古学研究室（編）『潮見浩先生退官記念論集』潮見浩先生退官記念事業会

横田賢次郎・森田勉1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4　九州歴史資料館

山本雅和1999「Ⅵまとめ　1．平安時代中期の土器と瓦」『白水遺跡第4次』神戸市教育委員会

森内秀造1995『緑ヶ丘窯址群Ⅱ』兵庫県文化財報告第139冊　兵庫県教育委員会

第２表　出土土器一覧表

報告番号	図版番号	写真図版	出土遺構	出土部位・層位	種別	器種	法量（ｃｍ）			残存
							口径	器高	底径	
1			SH01北西主柱穴		弥生土器	甕	—	(4.5)	3.1	底部のみ
2			SH01		弥生土器	高杯	—	(5.4)	—	脚柱部
3			SH01		弥生土器	高杯	—	(10.9)	—	脚柱部1/3
4			SH01		須恵器	杯身	10.3	3.5	6.25	口縁1/3
5			SH01		土師器	小型平底鉢	12.2	(8.9)		口縁～体部1/4
6			SH01	床面付近	土師器	円筒形土器	—	(51.8)	—	胴部のみ完存
7			SH02中央土坑B		弥生土器	広口壺	19.95	34.1	5.7	口縁4/5、体部2/3
8			SH02中央土坑B		弥生土器	甕	16.0	(5.6)	—	口縁1/8
9			SH02中央土坑B		弥生土器	甕	16.3	24.6	4.4	口縁～肩部1/4、体部～底部1/2
10			SH02中央土坑B		弥生土器	甕	17.0	(8.5)	—	口縁～肩部1/4
11			SH02中央土坑B		弥生土器	甕	13.8	(11.1)	—	口縁～肩部1/4弱
12			SH02中央土坑B		弥生土器	甕	15.6	(6.1)	—	口縁～肩部1/4
13			SH02中央土坑B		弥生土器	壺	—	12.9	5.8	底部・完存
14			SH02中央土坑B		弥生土器	高杯	—	(8.6)	—	杯部1/3
15			SH02中央土坑B		弥生土器	高杯	17.5	(9.8)	—	口縁3/4・脚部
16			SH02中央土坑B		弥生土器	高杯	11.35	(9.95)	—	杯部はほぼ完存
17			SH02		弥生土器	甕	14.7	4.25	7.6	口縁1/8弱
18			SH02中央土坑A･B		弥生土器	甕	14.0	(11.45)	—	口縁～体部1/2弱
19			SH02	床面直上	弥生土器	甕	15.3	22.5	3.0	口縁～体部1/2
20			SH02		弥生土器	甕	15.2	(7.5)	—	口縁～体部1/4
21			SH02	床面直上	弥生土器	甕	14.6	15.85	3.8	口縁1/8・体部1/4
22			SH02	床面直上	弥生土器	甕	—	14.7	5.05	底部3/4
23			SH02	床面検出中	弥生土器	甕	13.0	(11.45)	—	口縁～体部1/4
24			SH02	床面検出中	弥生土器	甕	—	(5.55)	4.5	底部のみ
25			SH02	床面直上	弥生土器	甕	11.3	14.0	4.3	口縁～底部3/4以上
26			SH02		弥生土器	壺	14.4	(4.8)	—	口縁1/4
27			SH02		弥生土器	鉢	—	(6.6)	3.8	口縁付近を欠損する以外は完存
28			SH02		弥生土器	甕	—	(6.25)	3.3	体部～底部・完存
29			SH02		弥生土器	甕	—	(6.7)	2.2	底部・完存
30			SH02		弥生土器	台付甕	—	(3.55)	4.1	底部・完存
31			SH02		弥生土器	鉢	12.4	7.2	3.0	口縁わずか、底部・完存
32			SH02		弥生土器	鉢	45.25	25.1	10.65	口縁わずか 体部から底部1/2
33			SH02		弥生土器	高杯	18.7	6.5	—	杯部・口縁1/3
34			SH02		弥生土器	高杯	19.5	(11.8)	—	杯部・ほぼ完存
35			SH02	床面検出中	弥生土器	高杯	—	(6.7)	—	脚部1/4
36			SH02		弥生土器	高杯	—	(7.7)	12.0	口縁および脚裾をほぼ欠損
37			SH02		弥生土器	高杯	—	(3.6)	—	脚裾部1/5
38			SH02		弥生土器	高杯	—	(3.7)	15.2	脚裾部1/5
39			SH02		弥生土器	手焙形土器	—	15.2	—	1/2（後面側のみ）
40			SB01	P1-3	須恵器	小皿	7.4	(1.0)	6.2	口縁1/8残存
41			SB01	P3-1	土師器	小皿	9.5	2.2	6.6	1/2弱
42			SB02	P3-1	土師器	小皿	8.4	1.85	7.5	口縁3/4
43			SB02	P3-1	土師器	鍋	27.1	(2.75)	—	口縁わずか
44			SB03	P1-2	須恵器	椀	14.6	5.0	6.6	口縁1/4
45			SB04	P3-3	須恵器	椀	14.0	3.95	—	口縁1/5
46			SB04	P2-1	須恵器	椀	16.0	2.5	—	口縁1/5
47			SB05	P1-2	弥生土器	壺	11.8	3.9	—	口縁1/5
48			SB08	P1-1	土製品	土錘	長4.0	幅1.05	厚1.2	完形
49			SB08	P3-1	土師器	托状皿	—	2.5	5.25	底部・ほぼ完存
50			SB08	P3-1	土師器	椀	—	2.55	6.0	底部1/6
51			SB07	P1-4	弥生土器	壺	—	2.25	—	口縁1/8以下
52			SB07	P1-3	土師器	托状皿	8.7	1.9	3.95	ほぼ完形（口縁をわずかに欠く）
53			SB07	P3-2	土師器	托状皿	9.15	2.4	4.7	口縁1/3強・底部完形
54			SB07	P1-2	土師器	托状皿	9.4	2.3	5.0	ほぼ完形（口縁をわずかに欠く）
55			SB07	P2-2	土師器	托状皿	10.2	2.0	5.4	口縁1/6・底部ほぼ完形
56			SB07		土師器	托状皿	10.1	2.3	4.72	口縁1/3
57			SB07	P3-1	土師器	小皿	9.3	5.3	5.6	口縁1/5・底部1/2
58			SB07	P2-2	土師器	小皿	10.15	2.4	5.5	口縁3/4
59			SB07		土師器	小皿	10.0	2.8	5.3	1/2弱
60			SB07		土師器	小皿	10.6	2.3	7.2	1/4弱
61			SB07	P1-2	土師器	小皿	10.3	2.3	7.8	口縁1/6・底部1/3
62			SB07	P3-3	須恵器	小皿	9.6	2.4	6.1	口縁3/4
63			SB07	P2-2	土師器	椀	—	(2.0)	6.7	底部のみ
64			SB07	P1-3	土師器	椀	10.75	2.55	6.65	口縁1/3
65			SB07	P5-1	土師器	椀	—	(2.2)	6.6	底部のみ
66			SB07	P1-2	土師器	椀	—	(3.0)	5.1	底部のみ
67			SB07	P2-2	土師器	椀	13.6	5.2	7.6	口縁若干～底部1/2
68			SB07	P2-1	土師器	椀	10.6	3.9	5.1	口縁2/3
69			SB07	P1-3	須恵器	椀	11.3	(3.9)	—	口縁1/3
70			SB07	P1-2	須恵器	椀	15.4	4.15	—	口縁1/4
71			SB09	P3-1	土製品	坩堝	13.0	4.65	—	口縁部1/3
72			SB11	P1-1	土師器	小皿	10.75	2.55	6.65	口縁1/3
73			SB12	P3-1	土師器	鍋	34.5	(9.6)	—	口縁部1/8
74			SB12	P3-1	須恵器	椀	—	(1.9)	7.7	底部
75			SB12	P2-1	土師器	小皿	10.55	2.45	5.5	口縁若干～底部
76			SB16	P4-3	土師器	小皿	8.1	1.7	6.45	口縁1/8以下

報告番号	図版番号	写真図版	出土遺構	出土部位・層位	種別	器種	法量（ｃｍ）			残存
							口径	器高	底径	
77			SB17	P2-2	土師器	小皿	9.2	1.9	5.9	ほぼ完形（口縁若干欠）
78			SB18	P3-1	土師器	小皿	8.1	1.05	5.0	ほぼ完形
79			SB19	P1-1	須恵器	椀	16.6	(4.85)	—	口縁～体部
80			SB20	P3-3	土師器	小皿	8.5	1.85	4.3	口縁7/8
81			SB20	P3-3	土師器	小皿	8.7	1.7	5.2	口縁1/3
82			SB20	P3-3	土師器	小皿	8.9	1.5	5.2	口縁1/2
83			SB20	P3-3	土師器	小皿	8.0	1.55	6.6	口縁1/4
84			SB20	P3-3	土師器	小皿	8.6	1.6	4.15	口縁1/3
85			SB20	P3-3	土師器	大皿	13.0	(3.0)	—	口縁1/4
86			SB22	P3-2	須恵器	椀	14.1	(3.5)	—	口縁1/4
87			SB24	P5	弥生土器	甕	14.4	(5.9)	—	口縁1/8
88			SB24	P1	弥生土器	高杯	23.1	(6.1)	—	口縁1/5
89			柱穴列1	P5	須恵器	蓋	—	(2.2)	—	1/8
90			柱穴列1	P5	須恵器	杯Ｂ	15.8	4.25	9.1	口縁～底部1/3
91			柱穴列1	P4	須恵器	杯Ｂ	12.4	3.65	8.4	口縁1/6
92			柱穴列1	P5	須恵器	杯Ｂ	13.4	4.4	7.8	1/3
93			柱穴列1	P5	須恵器	杯Ｂ	—	(4.15)	—	底部1/8以下
94			柱穴列1	P5	須恵器	皿Ａ	16.0	2.4	—	口縁1/4
95			柱穴列2	P2	須恵器	皿Ａ	15.8	2.15	14.0	口縁1/8
96			柱穴列2	P7	土製品	土錘	長5.0	幅2.2	厚2.0	完形
97			柱穴列6	P3	土師器	小皿	8.0	1.65	6.4	1/4弱
98			柱穴列9	P2	須恵器	椀	—	(1.9)	5.1	底部付近
99			柱穴列9	P2	須恵器	椀	—	(2.15)	6.0	底部1/2
100			柱穴列9	P2	土師器	椀	—	(2.6)	6.0	底部1/4
101			P29		弥生土器	広口壺	18.8	(5.5)	—	口縁1/8
102			P01		弥生土器	台付直口壺	—	(8.0)	—	体部1/5
103			P13		弥生土器	甕	—	(3.4)	3.1	底部付近
104			P06		弥生土器	甕	—	(3.1)	4.0	底部付近
105			P07		弥生土器	高杯	—	(6.6)	—	杯部1/3
106			P23		弥生土器	高杯	—	(6.2)	—	脚柱部
107			P08		弥生土器	高杯	—	(5.35)	—	脚柱部
108			P06		弥生土器	高杯	—	(3.4)	—	底部片
109			P02		弥生土器	高杯	—	(4.15)	13.4	脚部1/6
110			P22		弥生土器	器台	—	(9.5)	—	体部片
111			P27		土師器	高杯	15.8	(3.85)	—	口縁1/8
112			P12		須恵器	杯身	10.1	2.6	—	口縁1/8以下
113			P11		須恵器	杯身	11.6	3.55	—	ほぼ完形
114			P15		須恵器	高杯	—	(3.45)	12.2	脚端部
115			P16		須恵器	横瓶	—	(6.7)	—	肩部1/4
116			P09		須恵器	杯Gh	13.0	3.0	7.0	口縁端部若干
117			P20		土師器	甕	24.7	(3.7)	—	口縁若干
118			P28		土製品	土錘	長3.1	幅1.15	厚1.15	ほぼ完形
119			P25		須恵器	円面硯	—	(4.0)	23.9	脚端部破片
120			P25		須恵器	杯Ａ	13.9	3.1	10.0	底部1/4
121			P24		須恵器	杯Ａ	14.8	2.75	11.25	口縁～底部1/8
122			P28		須恵器	蓋	13.4	(1.4)	—	口縁1/8
123			P30		須恵器	蓋	17.4	(2.45)	—	口縁1/4
124			P30		須恵器	蓋	19.2	(2.75)	—	口縁1/3
125			P14		須恵器	稜椀	21.0	(5.2)	—	口縁～肩部1/4
126			P10		須恵器	杯Ｂ	13.6	4.05	9.0	口縁～底部1/4
127			P33		須恵器	椀	14.4	5.6	5.15	口縁1/3
128			P03		土師器	小皿	7.5	1.9	5.2	口縁1/3～底部1/2
129			P21		土師器	小皿	8.8	1.4	6.8	口縁若干
130			P34		土師器	小皿	10.1	2.2	6.55	口縁1/6～底部2/3
131			P04		土師器	小皿	10.1	2.1	6.1	口縁含む破片
132			P26		土師器	大皿	13.0	2.3	6.8	口縁1/8
133			P35		土師器	椀	15.55	3.05	5.5	口縁～体部2/3
134			P18		須恵器	小皿	6.1	(1.05)	—	口縁1/3
135			P32		土師器	椀	11.8	4.8	6.2	口縁1/5～底部1/3
136			P33		須恵器	椀	—	(2.2)	6.2	底部1/3
137			P05		須恵器	椀	15.6	(4.45)	—	口縁1/6
138			P39		須恵器	椀	15.55	6.05	5.5	口縁～体部1/3
139			P38		須恵器	椀	13.35	5.05	5.1	ほぼ完形
140			P31		土師器	椀	—	(3.1)	6.4	底部1/3
141			P17		須恵器	椀	14.95	5.0	6.65	口縁1/3
142			P37		須恵器	椀	14.1	4.6	8.9	口縁1/6・底部3/4
143			P19		須恵器	椀	14.8	(3.65)	—	口縁1/8
144			SD01		須恵器	杯Ｂ	13.8	4.3	—	口縁わずか～底部1/8
145			SD01	下層	須恵器	杯Ｂ	—	(5.2)	9.7	体部・底部1/2
146			SD01		須恵器	皿Ａ	15.8	1.4	11.3	1/5
147			SD01		須恵器	壺	—	(18.0)	—	頚部～体部1/4
148			SD01		須恵器	甑？	—	—	—	把手部分
149			SD01		須恵器	甕	21.8	(7.65)	—	口縁～頚部1/4
150			SD02		須恵器	杯Ａ	13.0	3.45	8.4	口縁1/2強
151			SD02		須恵器	蓋	18.2	2.9	—	ほぼ完形
152			SD02		須恵器	杯Ｂ	14.4	3.5	10.9	口縁1/8・底部1/6
153			SD04		須恵器	椀	—	(3.2)	6.4	体部若干～底部1/2

報告番号	図版番号	写真図版	出土遺構	出土部位・層位	種別	器種	法量（ｃｍ）			残存
							口径	器高	底径	
154			SX01		土師器	小皿	8.7	1.6	—	口縁7/8
155			SK01		弥生土器	甕	12.9	(4.1)	—	口縁1/6
156			SK01		弥生土器	甕	14.0	(4.65)	—	口縁1/5
157			SK01		弥生土器	甕	16.6	(3.5)	—	口縁1/8以下
158			SK01		弥生土器	甕	16.8	(5.05)	—	口縁1/8
159			SK01		弥生土器	甕	18.4	(4.45)	—	口縁1/8
160			SK01		弥生土器	甕	—	(4.7)	4.6	底部のみ
161			SK01		弥生土器	甕	—	(5.3)	7.3	底部のみ
162			SK01		弥生土器	器台	—	(5.3)	22.4	裾部1/8
163			SK01		弥生土器	器台		(11.1)	25.4	裾部1/5
164			SK02		弥生土器	甕	13.5	(4.3)	25.4	口縁1/8
165			SK02		弥生土器	甕	14.8	(3.45)	—	口縁1/8
166			SK02		弥生土器	甕	—	(3.15)	4.5	底部のみ
167			SK02		弥生土器	甕	—	(5.45)	3.35	底部のみ
168			SK02		弥生土器	甕	—	(5.8)	4.0	底部のみ
169			SK02		弥生土器	広口壷	29.0	(3.1)	—	口縁1/8
170			SK02		弥生土器	広口壷	11.8	(4.0)	—	口縁1/8
171			SK02		弥生土器	高杯	—	(9.0)	—	脚部1/4
172			SK03		弥生土器	高杯	30.8	(11.55)	—	口縁1/4
173			SK03		弥生土器	高杯	26.65	(11.9)	—	口縁1/2弱
174			SK03		弥生土器	鉢	22.2	9.8	4.1	口縁若干欠くがほぼ完形
175			SK04		土師器	甕	36.0	(8.8)	—	口縁1/8
176			SK05		土師器	甕	20.6	(12.65)	—	口縁～体部1/4
177			SK05		須恵器	杯Ａ	13.25	3.4	9.1	口縁1/2弱
178			SK05		須恵器	杯Ｂ	17.6	3.7	13.6	口縁・底部1/4底部
179			SK06		土師器	甕	24.7	(6.15)	—	口縁1/8以下
180			SK06		土師器	製塩土器	11.1	(6.55)	—	1/4
181			SK06		須恵器	杯Ａ	13.4	3.3	10.1	口縁若干
182			SK06		須恵器	杯Ａ	15.6	2.4	12.55	口縁1/4弱
183			SK06		須恵器	杯Ｂ	18.1	6.2	12.6	口縁1/4・～底部2/3
184			SK06		土製品	土錘	長4.3	幅1.55	厚1.30	完形
185			SK06		土製品	土錘	長3.9	幅1.55	厚1.4	完形
186			SK07		土師器	鍋	42.8	(15.2)	—	口縁1/4
187			SK08		須恵器	椀	13.5	4.0	5.7	口縁1/4
188			SK08		須恵器	椀	15.45	4.9	4.15	口縁1/6
189			SK08		須恵器	小皿	8.0	1.4	4.9	口縁4/5
190			SK08		須恵器	小皿	8.5	1.5	5.1	口縁4/5
191			SK08		備前焼	擂鉢	—	(12.55)	—	口縁1/8以下
192			SK09		須恵器	椀	15.6	4.65	6.9	口縁1/4弱
193			SK10		土師器	大皿	14.8	(2.4)	—	口縁1/8
194			SK10		須恵器	小皿	7.4	1.2	5.4	口縁～底部1/2
195			SK10		須恵器	小皿	7.9	1.45	5.35	完形
196			SK10		須恵器	小皿	7.8	1.35	5.1	口縁3/4
197			SK11		土師器	小皿	10.0	1.8	6.6	口縁1/2
198			SK12		土師器	椀	12.7	4.5	6.2	口縁～体部4/5
199			包含層	杭№９～10間	弥生土器	長頸壷	—	(12.8)	—	頸部～体部1/4
200			包含層	杭№９付近	弥生土器	長頸壷	10.0	(11.5)	—	口縁1/4
201			包含層	杭№９付近	弥生土器	長頸壷	10.3	(4.35)	—	口縁1/5
202			包含層	杭№９付近	弥生土器	壷	—	(4.1)	4.7	底部のみ
203			包含層		弥生土器	甕	10.7	(4.15)	—	口縁1/4
204			包含層	遺構検出面	弥生土器	甕	11.5	(10.4)	—	口縁～体部1/4弱
205			包含層		弥生土器	甕	22.9	(5.5)	—	口縁若干
206			包含層	杭№９付近	弥生土器	甕	—	(8.0)	4.6	底部のみ
207			包含層		弥生土器	甕	5.3	(4.05)	—	底部3/4
208			包含層		弥生土器	高杯	25.3	(2.35)	—	口縁1/8
209			包含層	杭№９～10間	弥生土器	高杯	33.3	(6.0)	—	杯部1/4
210			包含層	杭№９～10間	弥生土器	高杯	—	(6.6)	—	脚柱部1/3
211			包含層	山野里小特設区	弥生土器	二重口縁壷	—	(4.0)	—	二重口縁1/8以下
212			包含層	杭№９付近	弥生土器	甕	14.3	(6.5)	—	口縁～体部1/8
213			包含層	山野里小特設区	弥生土器	甕	14.8	(5.9)	—	口縁1/8
214			包含層	山野里小特設区	弥生土器	甕	—	(3.5)	4.6	底部1/2
215			包含層	杭№７付近	弥生土器	甕	—	(2.25)	3.4	底部のみ
216			包含層	杭№９付近	弥生土器	高杯	14.5	(5.8)	—	杯部1/4
217			包含層	杭№９付近	弥生土器	高杯	—	(3.6)	—	脚部1/4
218			包含層	山野里小・杭７～8間	須恵器	杯蓋	13.0	4.55	—	口縁1/8以下
219			包含層	杭№５～６間	須恵器	杯身	11.1	(3.85)	—	口縁1/3
220			包含層	杭№２～３間	須恵器	杯身	10.9	(3.6)	—	口縁1/8以下
221			包含層	杭№９付近	須恵器	杯身	12.2	(1.9)	—	口縁1/8以下
222			包含層	杭№４～５間	須恵器	高杯	—	(5.5)	—	脚部のみ
223			包含層	杭№２～３間	須恵器	高杯	—	(3.4)	4.55	脚裾部1/5
224			包含層	杭№４～５間	須恵器	高杯	—	(4.65)	—	脚部のみ
225			包含層	杭№８付近	須恵器	器台	—	(4.9)	—	脚部破片
226			包含層	山野里小特設区	須恵器	器台	—	—	—	杯部か？・破片
227			包含層	杭№４～５間	須恵器	器台	—	(10.1)	—	脚部破片
228			包含層	杭№６～８間	須恵器	器台	—	(5.35)	—	脚部破片
229			包含層	杭№７付近	須恵器	器台	—	—	—	脚部破片
230			包含層	杭№４～５間	須恵器	器台	—	(5.0)	27.8	脚裾端部破片

報告番号	図版番号	写真図版	出土遺構	出土部位・層位	種別	器種	法量（ｃｍ）			残存
							口径	器高	底径	
231			包含層	杭№２～３間	須恵器	器台	—	(4.75)	—	口縁1/8以下
232			包含層	杭№１～２間	土師器	甕	11.1	(7.25)	—	口縁1/5
233			包含層	上郡小特設区	土師器	甕	14.5	(4.3)	—	口縁1/8
234			包含層	上郡小特設区	土師器	甕	14.3	(6.7)	—	口縁1/2
235			包含層	山野里小特設区	土師器	甕	23.4	(9.8)	—	口縁～体部1/4
236			包含層	上郡小特設区	土師器	甕	16.3	(9.3)	—	口縁～体部1/8
237			包含層	山野里小特設区	土師器	小型平底鉢	13.45	8.1	9.4	口縁1/8～底部1/2
238			包含層	上郡・山野里小特設区	土師器	高杯	14.05	(5.6)	—	杯部4/5
239			包含層	杭№９付近	土師器	高杯	—	(2.8)	17.3	脚裾部1/4
240			包含層	杭№6+3m～6+6m間	土師器	皿Ａ	18.8	3.15	15.0	口縁～底部わずか
241			包含層	杭№７～７+2m	土師器	直口壺	17.0	(7.0)	—	口縁～体部1/4
242			包含層	杭№0～1西側溝含SD01	土師器	甕	26.4	(10.15)	—	口縁1/8以下
243			包含層	上郡小特設区	土師器	甕	28.0	(7.7)	—	口縁～体部1/4
244			包含層	杭№6+3m～6+6m間	土師器	甕	28.0	(5.0)	—	口縁1/8
245			包含層	山野里小特設区	土師器	甕	30.0	(5.55)	—	口縁1/8以下
246			包含層	杭№6+3m～6+6m間	土師器	甕	32.0	(13.15)	—	口縁～体部1/8
247			包含層	杭№４～５間	土師器	甕	59.8	(7.5)		口縁わずか
248			包含層	杭№６～７間	土師器	移動式竈	—	(11.8)	—	焚き口・庇コーナー部分付近
249			包含層	杭№6-3m～6+3m間	土師器	製塩土器	—	(4.8)	—	底部のみ
250			包含層	杭№５付近	瓦	丸瓦	長(13.35)	幅14.6	厚2.3	玉縁、胴部1/4
251			包含層	杭№6+3m～6+6m間	瓦	軒丸瓦	長(4.0)	幅(12.2)	瓦当厚0.85	瓦当1/6
252			包含層		須恵器	杯Ｇｈ	9.4	(3.5)	5.5	口縁1/4
253			包含層	上郡小特設区	須恵器	杯Ａ	11.2	3.4	8.6	口縁1/8
254			包含層	杭№6+3m～6+6m間	須恵器	杯Ａ	12.4	2.8	10.2	口縁1/8以下
255			包含層	杭№１～２間	須恵器	杯Ａ	9.6	3.7	6.1	口縁1/4弱
256			包含層	杭№6-3m～6+3m間	須恵器	杯Ａ	10.8	2.95	8.6	口縁～底部1/2
257			包含層	杭№４～５間	須恵器	杯Ａ	12.4	3.5	9.2	口縁～底部1/8
258			包含層	杭№４～５間	須恵器	杯Ａ	13.6	2.9	10.5	口縁1/2
259			包含層	杭№6-3m～6+3m間	須恵器	杯Ａ	13.6	2.95	10.1	口縁～底部若干
260			包含層	杭№７付近	須恵器	杯Ａ	14.2	3.2	10.3	口縁1/6
261			包含層	杭№７付近	須恵器	杯Ａ	13.8	2.75	11.5	口縁1/8以下、底部1/3以下
262			包含層	杭№５～６間	須恵器	杯Ａ	14.3	3.1	12.0	口縁1/8
263			包含層	杭№6-3m～6+3m間	須恵器	杯Ａ	15.2	2.9	10.7	口縁1/6
264			包含層	杭№５～６間	須恵器	蓋	16.6	(1.75)	—	口縁1/8以下
265			包含層	杭№９付近	須恵器	蓋	14.8	(2.25)	—	口縁1/3
266			包含層	杭№７～８間	須恵器	蓋	—	(2.3)	—	体部1/4・宝珠つまみ
267			包含層	SH01付近	須恵器	蓋	18.2	(2.2)	—	口縁～体部1/4強
268			包含層	杭№６～６+6m間	須恵器	蓋	15.3	2.4	—	1/4強
269			包含層	杭№３～５間	須恵器	杯Ｂ	13.1	3.5	9.8	口縁～高台1/8
270			包含層	杭№３～４間	須恵器	杯Ｂ	15.0	3.45	11.2	口縁～高台1/8
271			包含層	杭№３～４間	須恵器	杯Ｂ	14.2	4.15	11.4	口縁1/8
272			包含層	遺構検出面	須恵器	杯Ｂ	15.4	3.7	12.2	1/4弱
273			包含層	杭№４～５間	須恵器	杯Ｂ	—	(4.6)	12.05	体部～高台1/4
274			包含層	杭№6-3m～6+3m間	須恵器	杯Ｂ	10.6	3.4	8.4	口縁～高台若干
275			包含層	杭№２～３間	須恵器	杯Ｂ	15.1	4.35	11.3	口縁～高台若干
276			包含層	杭№３～４間	須恵器	杯Ｂ	—	(5.9)	11.5	体部～底部1/4
277			包含層		須恵器	杯Ｂ	27.2	(6.4)	21.1	口縁1/5
278			包含層	杭№6+3m～6+6m間	須恵器	杯Ｂ	13.0	5.8	7.4	口縁1/3
279			包含層	杭№３～４+3m間	須恵器	稜椀	20.1	5.7	—	口縁～体部1/7
280			包含層	杭№４～５間	須恵器	稜椀	19.2	(5.5)	—	口縁1/8
281			包含層	杭№７～７+2m間	須恵器	稜椀	20.2	(5.65)	—	口縁～体部1/4
282			包含層	杭№２～３間	須恵器	鉢Ａａ	26.0	(14.0)	—	口縁～体部1/4弱
283			包含層	杭№0～1西側溝含SD01	須恵器	鉢Ａ	13.55	(4.4)	—	口縁1/8
284			包含層	杭№５～６間	須恵器	皿Ａ	11.3	1.8	9.2	口縁1/8以下
285			包含層	杭№３～４間	須恵器	皿Ａ	14.15	2.1	12.25	口縁1/4
286			包含層	杭№6-3m～6+3m間	須恵器	皿Ａ	14.4	2.1	12.2	口縁～底部わずか
287			包含層	杭№１～２間	須恵器	皿Ｃ	12.4	2.3	6.6	口縁1/4～底部
288			包含層	杭№４～５間	須恵器	皿Ａ	23.0	2.4	20.0	口縁～底部わずか
289			包含層	杭№6-3m～6+3m間	須恵器	皿Ａ	16.9	2.1	14.0	口縁わずか～底部1/8
290			包含層	杭№6-3m～6+3m間	須恵器	皿Ａ	15.8	2.15	11.95	口縁若干
291			包含層	杭№４～５間	須恵器	皿Ｃ	—	(2.1)	9.0	底部1/8
292			包含層	杭№４+3m間	須恵器	皿Ｃ	24.9	2.8	18.9	口縁1/8以下
293			包含層	杭№6-3m～6+3m間	須恵器	皿Ｃ	26.1	(4.0)	—	口縁1/8
294			包含層	杭№４～５間	須恵器	平瓶	11.75	推定13.7	16.0	口縁1/3、体部～底部わずか
295			包含層	遺構検出面	須恵器	不明	—	—	—	破片
296			包含層	杭№７付近	土師器	小皿	7.8	1.0	6.5	口縁3/4
297			包含層	杭№７付近	土師器	小皿	8.0	1.25	6.55	口縁3/4
298			包含層	杭№７付近	土師器	小皿	8.9	1.4	7.55	ほぼ完形
299			包含層	杭№７付近	土師器	小皿	7.9	1.7	—	口縁3/4
300			包含層	杭№６+5m～７間	土師器	小皿	8.0	2.0	5.35	口縁1/2
301			包含層	杭№５付近遺構検出面	土師器	小皿	9.0	2.0	5.0	口縁1/2
302			包含層	杭№２～３間	土師器	托状皿	9.0	2.25	4.9	ほぼ完形
303			包含層		土師器	托状皿	9.1	1.7	5.15	口縁若干～底部
304			包含層	杭№２～３間	土師器	托状皿	9.95	2.0	5.55	口縁2/3
305			包含層		土師器	托状皿	—	(1.95)	4.8	底部ほぼ完存
306			包含層	杭№２～３間	土師器	托状皿	9.5	2.25	5.2	口縁1/3
307			包含層	杭№２～３間	土師器	托状皿	8.9	3.0	5.1	口縁2/5残存

報告番号	図版番号	写真図版	出土遺構	出土部位・層位	種別	器種	法量（ｃｍ）			残存
							口径	器高	底径	
308			包含層	東側溝コーナー付近	土師器	托状皿	8.4	2.5	4.8	口縁1/4
309			包含層	杭№７付近	須恵器	小皿	7.55	1.5	5.05	口縁3/4
310			包含層	杭№6+3m～6+6m間	須恵器	小皿	8.05	1.5	4.95	口縁3/4
311			包含層	杭№6-3m～6+3m間	須恵器	小皿	8.2	1.4	6.0	口縁1/4
312			包含層	杭№３～４間	土師器	椀	—	(2.7)	6.2	底部のみ
313			包含層	東側溝コーナー付近	土師器	椀	10.4	3.75	3.4	口縁1/4
314			包含層	杭№３～４間	須恵器	椀	11.2	4.85	5.2	口縁1/4
315			包含層	杭№２+6m～３間	須恵器	椀	11.3	4.05	4.45	口縁1/6
316			包含層	杭№２+6m～３間	須恵器	椀	11.7	3.9	6.1	口縁2/5
317			包含層	杭№７～７+2m間	須恵器	椀	12.2	4.3	5.35	口縁1/8
318			包含層	東側溝コーナー付近	須恵器	椀	12.4	4.75	4.1	口縁1/3、底部1/2
319			包含層		須恵器	椀	13.0	(4.3)	—	口縁1/4
320			包含層	杭№０～１間	須恵器	椀	15.25	3.3	7.3	口縁若干～底部
321			包含層	山野里小・杭7～8間	須恵器	椀	13.2	4.8	5.2	口縁1/6
322			包含層	杭№２+6m～３間	須恵器	椀	13.3	(4.0)	—	口縁1/8
323			包含層	杭№１～２間	須恵器	椀	13.4	4.45	4.8	口縁～底部1/4
324			包含層	東側溝コーナー付近	須恵器	椀	13.6	4.55	6.1	口縁～底部1/2
325			包含層	杭№２～３間	須恵器	椀	13.7	4.8	5.15	口縁ほぼ欠損
326			包含層	杭№８付近東側溝	須恵器	椀	14.4	(3.45)	—	口縁1/6
327			包含層	杭№９付近東側溝	須恵器	椀	14.6	(4.65)	—	口縁1/8以下
328			包含層	杭№２+6m～３間	須恵器	椀	15.3	(4.5)	—	口縁1/5
329			包含層	杭№6+3m～6+6m間	須恵器	椀	26.1	4.75	7.9	口縁1/4弱～底部
330			包含層	杭№２～３間	須恵器	椀	16.9	(5.7)	—	口縁1/4
331			包含層	東側溝コーナー付近	須恵器	突帯椀	15.8	7.7	6.2	1/8
332			包含層	杭№１～２間	白磁	碗	14.8	(4.15)	—	口縁1/5
333			包含層	杭№７付近	褐釉陶器	四耳壺	—	(6.9)	—	肩部1/8以下
334			包含層	杭№6+5m～7間	土師器	羽釜	41.0	(5.25)	—	口縁若干
335			包含層	杭№７付近	土師器	鍋	28.2	(4.0)	—	口縁若干
336			包含層	杭№6+5m～7間	土師器	羽釜	23.7	(5.6)	—	口縁1/8以下
337			包含層	杭№７～７+2m間	土師器	羽釜	26.4	(4.6)	—	口縁1/8以下
338			包含層	杭№6+5m～7間	土師器	三足鍋	—	推定8.6	—	足のみ
339			包含層	杭№6-3m～6+3m間	土製品	土錘	長(1.85)	幅1.1	厚1.05	1/2
340			包含層	杭№6-3m～6+3m間	土製品	土錘	長(1.95)	幅1.1	厚1.1	完形
341			包含層	杭№6-3m～6+3m間	土製品	土錘	長(2.1)	幅0.95	厚1.0	端部欠損
342			包含層	杭№6-3m～6+3m間	土製品	土錘	長3.3	幅0.95	厚1.0	完形
343			包含層	杭№０～１間	土製品	土錘	長3.65	幅1.05	厚1.95	完形
344			包含層	杭№４～５間	土製品	土錘	長3.95	幅1.15	厚1.15	完形
345			包含層	杭№０～０+3m間	土製品	土錘	長4.1	幅1.2	厚1.15	ほぼ完形
346			包含層	杭№6-3m～6+3m間	土製品	土錘	長(5.1)	幅1.55	厚(1.35)	4/5以上
347			包含層	杭№6-3m～6+3m間	土製品	土錘	長4.7	幅1.25	厚1.15	完形
348			包含層	杭№6-3m～6+3m間	土製品	土錘	長5.7	幅1.55	厚1.5	完形
349			包含層	杭№３～４間	土製品	土錘	長3.1	幅1.2	厚1.25	ほぼ完形
350			包含層	杭№6-3m～6+3m間	土製品	土錘	長(3.7)	幅1.35	厚1.25	端部欠損、ほぼ完形
351			包含層	杭№6+3m～6+6m間	土製品	土錘	長(3.35)	幅1.5	厚1.5	2/3残存
352			包含層	杭№３～４間	土製品	土錘	長4.2	幅1.9	厚1.8	完形
353			包含層	杭№２+6m～３間	土製品	土錘	長4.15	幅2.1	厚2.0	9/10以上
354			包含層	杭№３～４間	土製品	土錘	長(4.1)	幅1.85	厚1.7	7/8以上
355			包含層	杭№３～４間	土製品	土錘	長4.25	幅1.95	厚1.75	完形
356			包含層	杭№３～４間	土製品	土錘	長4.45	幅1.8	厚1.7	ほぼ完形
357			包含層	杭№３～４間	土製品	土錘	長4.6	幅1.95	厚1.9	ほぼ完形
358			包含層	杭№３～４間	土製品	土錘	長4.6	幅1.7	厚1.75	ほぼ完形
359			包含層	杭№３～４間	土製品	土錘	長4.8	幅1.9	厚1.95	ほぼ完形
360			包含層	杭№３～４間	土製品	土錘	長4.75	幅2.05	厚1.8	ほぼ完形
361			包含層	杭№３～４間	土製品	土錘	長4.85	幅2.2	厚2.15	完形
362			包含層	杭№6-3m～6+3m間	土製品	土錘	長4.9	幅1.6	厚1.6	完形
363			包含層	杭№３～４間	土製品	土錘	長4.15	幅1.7	厚1.75	ほぼ完形
364			包含層	杭№２+6m～３間	土製品	土錘	長(4.1)	幅1.95	厚1.85	9/10以上
365			包含層	杭№6+3m～6+6m間	土製品	土錘	長(4.15)	幅1.8	厚(1.65)	2/3残存
366			包含層	杭№２+6m～３間	土製品	土錘	長4.5	幅2.0	厚1.9	完形
367			包含層	杭№１～２間	土製品	土錘	長4.6	幅2.0	厚1.95	完形
368			包含層	杭№３～４間	土製品	土錘	長4.8	幅2.0	厚1.85	完形
369			包含層	杭№３～４間	土製品	土錘	長4.75	幅1.8	厚1.6	ほぼ完形
370			包含層	杭№１～２間	土製品	土錘	長4.8	幅1.9	厚1.9	完形
371			包含層	杭№6-3m～6+3m間	土製品	土錘	長5.0	幅1.95	厚1.95	完形
372			包含層	杭№３～４間	土製品	土錘	長5.0	幅1.95	厚1.9	ほぼ完形
373			包含層	杭№２～３間	土製品	土錘	長5.15	幅1.95	厚(1.8)	ほぼ完形
374			包含層	杭№８付近	土製品	土錘	長5.6	幅2.0	厚1.85	ほぼ完形
375			包含層	杭№３～４間	土製品	土錘	長5.8	幅2.0	厚1.95	完形
376			包含層	杭№6-3m～6+3m間	土製品	土錘	長6.45	幅3.1	厚3.1	完形
377			包含層		白磁	碗	—	(2.95)	7.1	底部ほぼ完存
378			包含層	上郡小特設区	青磁	碗	—	(1.35)	—	口縁1/8以下
379			包含層	杭№6-3m～6+3m間	白磁	碗	—	—	—	口縁1/8以下
380			包含層	杭№６+5m～７間	白磁	碗	—	(1.75)	5.0	底部ほぼ完存（高台やや欠損）
381			包含層	杭№７付近	白磁	碗	—	(4.8)	—	体部1/4
382			包含層	杭№３～４間	唐津焼	碗	—	(1.75)	—	体部1/8以下
383			包含層	杭№４～５間	青磁	?	—	(1.05)	6.0	底部1/4
384			包含層	杭№４～５間	青磁	鉢	—	(1.35)	11.2	底部1/6

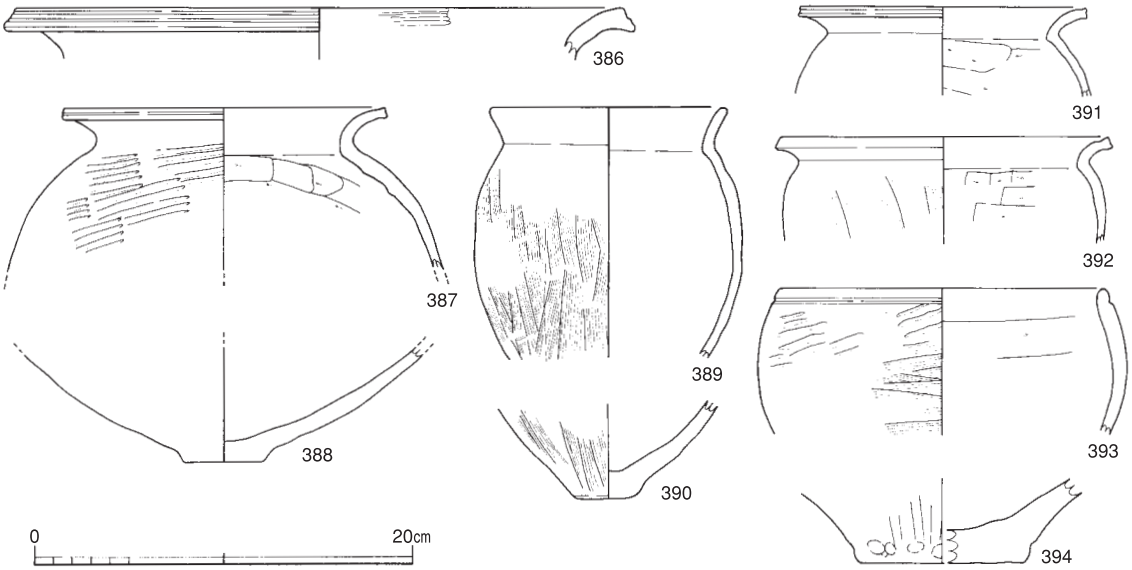
報告番号	図版番号	写真図版	出土遺構	出土部位・層位	種別	器種	法量（ｃｍ）			残存
							口径	器高	底径	
385			包含層		青磁	香炉	—	(2.20)	4.7	底部1/4
386			包含層	3～5層	弥生土器	広口壺	31.8	(2.65)	—	
387			包含層	3～5層	弥生土器	甕	16.70	(8.50)	—	
388			包含層	3～5層	弥生土器	甕	—	(5.95)	4.3	
389			包含層	3～5層	弥生土器	甕	12.0	(13.1)	—	
390			包含層	3～5層	弥生土器	甕	—			
391			包含層	3～5層	弥生土器	甕	15.00	(4.60)	—	
392			包含層	3～5層	弥生土器	甕	17.3	(5.65)	—	口縁1/4
393			包含層	3～5層	弥生土器	鉢	17.0	(7.7)	—	口縁～体部1/4
394			包含層	3～5層	弥生土器	壺か鉢	—	(4.4)	8.8	底部1/2

第３表　出土石器一覧表

報告番号	図版番号	写真図版	出土遺構	出土層位	種別	器種	法量（ｃｍ）			残存
							長さ	幅	厚さ	
S1			包含層	杭№６+1人力掘削	石製品	紡錘車	3.5	3.4	1.3	若干欠損
S2			包含層		石製品	砥石	6.95	2.7	3.6	完存
S3			包含層		石製品	砥石	8.05	3.85	(1.45)	層理に沿って剥落した分を欠損
S4			SB05	Ｐ2-2	石製品	砥石	13.5	4.8	3.25	完存
S5			包含層	杭№７～７+2ｍ間	石製品	球状敲打具	5.1	4.65	4.15	完存
S6			SK08		石製品	台石	(12.1)	(10.5)	(4.95)	半分以上欠損
S7			包含層	杭№４～５間	石製品	敲打具？	(10.15)	(7.1)	4.9	2/3残存
S8			包含層		石製品	砥石				

第４表　出土金属器一覧表

報告番号	図版番号	写真図版	出土遺構	出土層位	種別	器種	法量（ｃｍ）			残存
							長さ	幅	厚さ	
F1			SH02	床面直上	鉄器	刀子？	(3.4)	1.55	0.25	
F2			柱穴		鉄器	刀子	10.7	1.9	0.55	
F3			柱穴		鉄器	刀子状	16.45	1.40	0.7	刃端は研がれず、5㎜程の平坦面となる
F4			柱穴		鉄器	刀子	(18.8)	2.0	0.65	
F5			SB03	Ｐ2-2	鉄器	方頭鏃	6.35	2.25	0.45	
F6			柱穴		鉄器	雁股鏃	14.05	(5.3)	0.55	
F7			柱穴		鉄器	釘	(6.25)	1.0	0.85	
F8			包含層	杭№９付近	鉄器	釘	8.15	0.65	0.75	
F9			SB07	Ｐ2-2	鉄器	鋏	15.45	2.5	0.5	
F10			柱穴		鉄器	懸垂状	9.75	2.5	0.95	



第５図　包含層（３～５層）出土土器

第４章　自然科学的分析

第１節　竹万宮ノ前遺跡出土土器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社
矢作健二・石岡智武

１　はじめに

上郡町に所在する竹万宮ノ前遺跡は、吉備高原東部を流れる千種川とその支流である安室川の合流点付近に形成された狭小な沖積低地上に位置する。発掘調査では、弥生時代から鎌倉時代までに至る期間の集落が確認されており、各時代を示す遺物も豊富に出土している。中でも古墳時代とされる「コンパス文」の描かれた須恵器は、当該期の重要な遺物として注目されている。

本報告では、竹万宮ノ前遺跡から出土した、弥生土器および古墳時代の土師器について、その材質（胎土）の特性を明らかにすることにより、各土器間での胎土の類似性あるいは特異性を見出し、竹万宮ノ前遺跡の各時期における土器の製作事情に関わる資料を作成する。特に今回の試料では、その発掘調査所見から在地とされるものと山陰や讃岐など他地域産の可能性があると指摘されているものとがあり、これらの胎土の類似性や異質性および既存の地質情報との比較などから、その産地の検討もおこなうものである。

２　試料

試料は、竹万宮ノ前遺跡から出土した土器片８点である。内訳は、弥生土器片６点、古墳時代の土師器片２点である。

弥生土器の試料６点のうち、２点の時期はⅤ期とされ、そのうち１点は吉備地域産、１点は在地という産地の可能性が推定されている。他の弥生土器４点の時期は、いずれも庄内式併行とされているが、それぞれ、山陰、讃岐、姫路・太子および在地という産地の可能性が推定されている。

古墳時代の土師器２点は、いずれも古墳時代中～後期とされており、推定産地として１点は山陰あるいは韓国の可能性があるとされ、１点は不明とされている。

各試料には１～８までの試料No.が付されている。各試料の試料No.、種別、器種、時期、推定産地、出土遺構などは一覧表にして第５表に示す。

第５表　分析試料一覧および胎土分類

試料No.	図版	報告番号	種別	器種	検出遺構	検出箇所・層位	時期	推定産地（調査者所見）	胎土分類												
									鉱物岩石				粒径組成					砕屑物量			
									A6	A7	C1	C4	1	2	3	4	5	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
1	28	199	弥生土器	壺		包含層	Ⅴ-2(上東式)	吉備		■							■	■			
2	28	208	弥生土器	高坏		包含層	Ⅴ-1(播磨・畿内)	在地		■						■		■			
3	21	16	弥生土器	高坏	SH02	中央土坑B	庄内併行	山陰		■							■	■			
4	21	9	弥生土器	甕	SH02	中央土坑B	庄内併行	讃岐			■						■	■			
5	22	18	弥生土器	甕	SH02	中央土坑B	庄内併行	姫路・太子	■				■						■		
6	21	15	弥生土器	高坏	SH02	中央土坑B	庄内併行	在地		■							■			■	
7	21	6	土師器	円筒形土器	SH01	床面	古墳時代後期	山陰・韓国				■		■				■			
8	29	237	土師器	小型平底鉢		包含層	古墳時代中期	不明				■			■						■

3　分析方法

当社では、これまでに兵庫県内各地の遺跡より出土した土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法を用いてきた。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは試料間の胎土の区別ができないことが予想される、同一の地質分布範囲内で作られた土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法は適当である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03㎜の厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5㎜間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙･砂粒･基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

4　結果

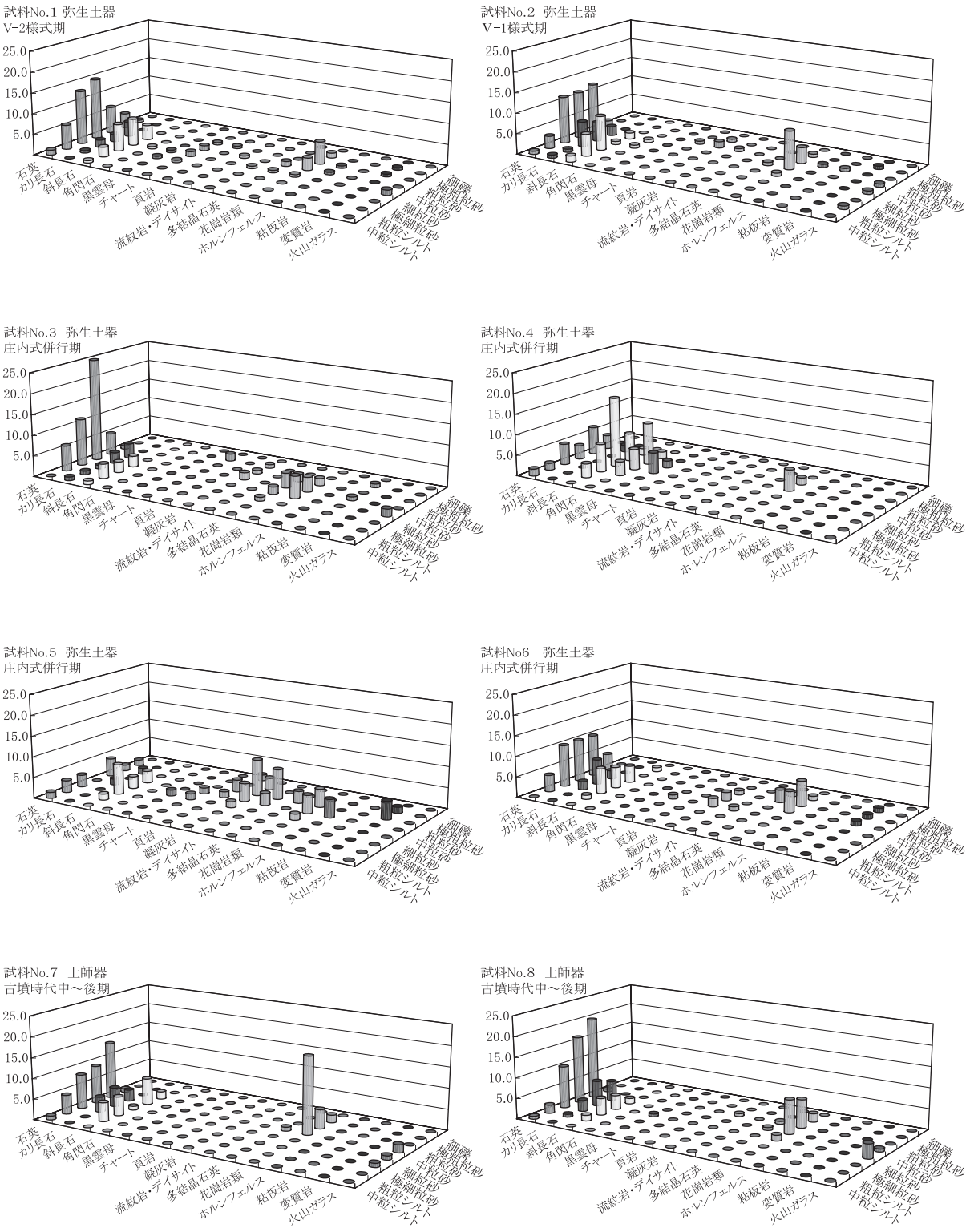
観察結果を第6表、第6図～第8図に示す。鉱物片および岩石片の組成をみると、試料間で類似する組成があり、それが複数あることも看取された。今回の8点の試料からは、大きくは2分類、細分すると4分類の鉱物・岩石組成が認められた。これまでに兵庫県下各地における弥生土器～土師器の胎土分析で認められている鉱物･岩石組成分類と比較し、ここでは、それらを踏襲した分類を示す。

A類：A類の特徴は、岩石片の種類構成が主にチャートや頁岩、砂岩などの堆積岩類と凝灰岩・流紋岩などの火砕岩類および花崗岩類などの深成岩類の3者からなることである。これまでの兵庫県内各地の遺跡における分析例では、A類に分類される胎土が最も多く認められている。また、少量～微量の付随する岩石片または鉱物片の種類からA類の細分もおこなっており、これまでにA1類からA5類までの分類が設定された。A1類は、上述した3種の主要岩石片以外にはほとんど岩石片が含まれない組成、A2類は主要岩石片以外に火山ガラスを伴う組成、A3類は主要岩石片以外に珪化岩および変質岩を伴う組成、A4類は主要岩石片以外に緑色岩、珪化岩、変質岩および火山ガラスを伴う組成、そしてA5類は主要岩石片以外に黒雲母の鉱物片を多く伴う組成としている。今回の分析では、A類に分類される試料は、試料No.1～3、5、6の5点である。これらのうち、試料No.5は、主要岩石片以外にホルンフェルスと変質岩を伴うことが特徴となる。このような特徴は、これまでのA類には認められていないことから、これをA6類とする。一方、試料No.1～3、6の4点は、これまでのA類の組成に比べると、主要岩石片の中で花崗岩類の量比が高く、他の2者が低い傾向が明瞭であり、また主要岩石片以外にも、ホルンフェルス、粘板岩、変はんれい岩、変質岩、珪化岩という多種の岩石片を伴う。これらの特徴から、今回の試料No.1～3、6の4点はA7類とする。

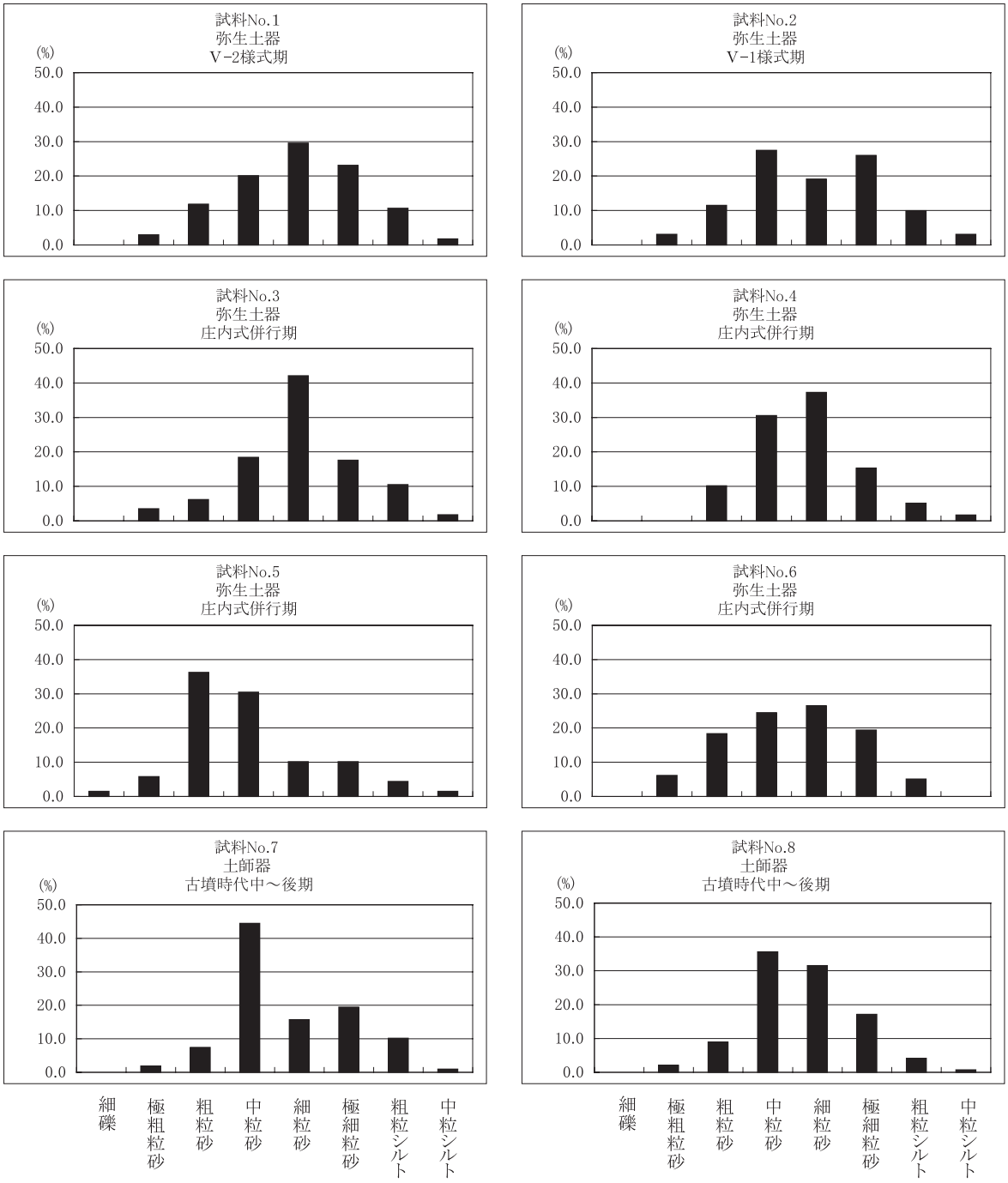
なお、これまでのA類に認められている凝灰岩や流紋岩･デイサイトはいずれも結晶質であることが特徴であり、それは今回の試料でも同様であった。また、今回のA7類とした試料のうちの試料No.1、3、6の3点とC4類とした試料No.7には、いずれも微文象組織を示す花崗岩類の岩石片が認められている。

第６表　薄片観察結果

試料No.	砂粒区分		砂粒の種類構成																										合計
			鉱物片								岩石片															その他			
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	緑廉石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	珪長岩	石英斑岩	ドレライト	ホルンフェルス	粘板岩	変はんれい岩	変質岩	珪化岩	火山ガラス	植物珪酸体	
1	砂	細礫																											0
		極粗粒砂	1															2						1	1				5
		粗粒砂	6								1	1						9				1			1	1			20
		中粒砂	11	6	6						2			1			2	5				1							34
		細粒砂	25	3	11	1		2	1		2				1		1	1									2		50
		極細粒砂	22	3	11			1	1		1																		39
		粗粒シルト	10	1	4			2																				1	18
		中粒シルト	2		1																								3
	基質																												501
	孔隙																												36
2	砂	細礫																											0
		極粗粒砂										1						1							1	1			4
		粗粒砂	2								1	2		1		1		5				1	1	1					15
		中粒砂	16	3	2	1											1	12									1		36
		細粒砂	15	6	1	1												1									1		25
		極細粒砂	15	8	11																								34
		粗粒シルト	4	1	7																						1		13
		中粒シルト	1	1	2																								4
	基質																												340
	孔隙																												13
3	砂	細礫																											0
		極粗粒砂									2			1									1						4
		粗粒砂	1											1			2	2		1									7
		中粒砂	6	4										2			4	4					1						21
		細粒砂	29	3	3		2									1	2	6									2		48
		極細粒砂	13	1	3		1	1									1												20
		粗粒シルト	7	1	4																								12
		中粒シルト		1	1																								2
	基質																												303
	孔隙																												16
4	砂	細礫																											0
		極粗粒砂																											0
		粗粒砂	2	1	1	1												1											6
		中粒砂	4		4	6			1									3											18
		細粒砂	2		10	3	1		3	2																1			22
		極細粒砂	3		4	2																							9
		粗粒シルト	1		2																								3
		中粒シルト	1																										1
	基質																												161
	孔隙																												12
5	砂	細礫										1																	1
		極粗粒砂	1											2											1				4
		粗粒砂	1	1						1		2		6	5		2	3			1				3				25
		中粒砂	3		2						1	1	1	3	2	1		3	1			3							21
		細粒砂		1	2				1		1			1				1											7
		極細粒砂	2		5																								7
		粗粒シルト	2		1																								3
		中粒シルト	1																										1
	基質																												241
	孔隙																												14
6	砂	細礫																											0
		極粗粒砂			1												1	1							1	2			6
		粗粒砂	4										2	1			3	6							1	1			18
		中粒砂	10	2	4									2				5							1				24
		細粒砂	10	6	5					1	1			2	1														26
		極細粒砂	10	2	6		1																						19
		粗粒シルト	4		1																								5
		中粒シルト																											0
	基質																												235
	孔隙																												7
7	砂	細礫																											0
		極粗粒砂																2											2
		粗粒砂	1		2													5											8
		中粒砂	15	3	7												1	20									2		48
		細粒砂	10	5	1																						1		17
		極細粒砂	9	4	5			2																			1		21
		粗粒シルト	5		5			1																					11
		中粒シルト	1																										1
	基質																												309
	孔隙																												2
8	砂	細礫																											0
		極粗粒砂																3											3
		粗粒砂	1											1			1	10											13
		中粒砂	29	7	2												1	12									1		52
		細粒砂	24	9	5				1									2									5		46
		極細粒砂	15	4	6																								25
		粗粒シルト	3	1	2																								6
		中粒シルト	1																										1
	基質																												239
	孔隙																												17

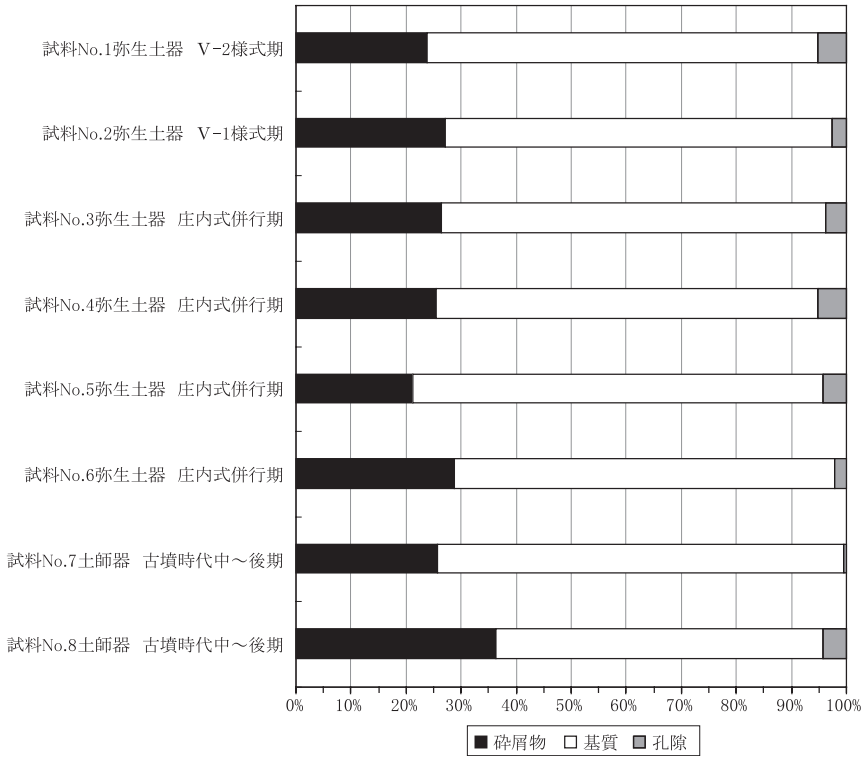


第６図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（%）



第７図　胎土中の砂の粒径組成

Ｃ類：主要岩石片が花崗岩類である組成はＣ類としている。Ｃ類についてはこれまでにC1～C3 類に細分している。供伴する鉱物片のうち、石英と長石類を除いた組成が、角閃石の比較的多い組成をC1 類、黒雲母の比較的多い組成をC2 類とした。また、チャートの岩石片を伴うＣ類をC3 類とした。今回の試



第８図　砕屑物・基質・孔隙の割合

料では、試料No.4 、7 、8 の３点がC類に分類される。これらのうち、試料No.4 はC1 類に相当するが他の２点は、角閃石も黒雲母も極めて微量か含まず、またチャートも含まれていないが、少量の火山ガラスを含んでいる。これらの特徴から、試料No.7 、8 はC4 類とする。なお、C4 類中の火山ガラスの形態は薄手平板状のバブル型である。

各試料の粒径組成は、粗粒、中粒、細粒の各粒径をモードとする試料が認められ、また、第二のピークを示す試料も認められる。ここでは、粒径組成による分類を以下のようにおこなった。

１類：粗粒砂をモードとする組成。試料Ｎｏ.５がこれに相当する。

２類：中粒砂をモードとする組成の中で、モードの割合が突出する組成。試料No.7 がこれに相当する。

３類：中粒砂をモードとする組成の中で、細粒砂の割合も比較的高い組成。試料No.8 がこれに相当する。

４類：中粒砂をモードとする組成の中で、極細粒砂の割合も比較的高い組成。試料No.2 がこれに相当する。

５類：細粒砂をモードとする組成。試料No.1 、3 、4 、6 の４点がこれに相当する。

各試料の砕屑物・基質・孔隙の割合では、砕屑物の割合が25%前後の試料が多く、ここではそれらをⅠ類とする。試料No.1～4 、7 の５点がⅠ類に分類される。砕屑物の割合が約20%の試料No.5 はⅡ類、砕屑物の割合が約30%の試料No.6 はⅢ類、砕屑物の割合が約35%の試料No.8 はⅣ類とする。

以上述べた試料の胎土分類をまとめて表１に併記する。胎土分類結果を土器の時期別にみると以下の状況が示される。

１）Ｖ様式期の弥生土器

鉱物・岩石組成は、２点ともにA7 類であり、砕屑物量はⅠ類である。粒径組成では試料No.1 は５類

であるが、試料No.2はそれよりやや粗粒傾向の4類である。

2）庄内式併行期の弥生土器

鉱物・岩石組成は、試料No.3と6がいずれもV期のものと同じA7類であるが、他の2点は、試料No.4がC1類、試料No.5がA6類にそれぞれ分類された。粒径組成では、試料No.5以外の3点はいずれも5類であるが、試料No.5のみ1類である。砕屑物量は、試料No.3、4の2点はⅠ類であるが、試料No.5はⅡ類、試料No.6はⅢ類である。

3）古墳時代中～後期の土師器

鉱物・岩石組成は、2点ともにC4類であるが、粒径組成は、試料No.7が2類、試料No.8が3類、砕屑物量は試料No.7がⅠ類、試料No.8がⅣ類にそれぞれ分かれた。

5　考察

今回の試料では、発掘調査所見から在地とされた試料が試料No.2と試料No.6の2点あった。分析の結果、いずれの試料も胎土中に含まれる鉱物片と岩石片の組成はA7類に分類された。ここで、竹万宮ノ前遺跡の地質学的背景を確認してみたい。竹万宮ノ前遺跡の位置する千種川上流域周辺の地質については、猪木・弘原（1980）に詳細な記載がなされている。千種川と安室川の合流点に形成された沖積低地を取り囲む山地を構成している地質は、白亜紀の流紋岩質溶岩や同質溶結凝灰岩および火砕岩などを主体とする上郡累層や鶴亀累層であり、これらは兵庫県南部に広く分布する相生層群の一部である。また、竹万宮ノ前遺跡から至近にあるＪＲ山陽本線上郡駅の南側、安室川右岸に迫っている山地は、古第三紀に貫入した花崗斑岩・文象斑岩の岩体により構成されており、岩体の周縁にはホルンフェルスが形成されている。一方、竹万宮ノ前遺跡よりも上流の千種川流域には、上述した相生層群の北側に砂岩やチャートなどの堆積岩類からなる古生代石炭紀の上月層や変斑れい岩類などを主体とする夜久野型複合岩体が分布している。ここまでの記載により、竹万宮ノ前遺跡の地質学的背景とA7類の鉱物・岩石組成とが非常によく整合していることがわかる。特に、A7類では主要岩石片の中でも花崗岩類の割合が高いこととその中に微文象組織が認められていることは、上述した至近にある文象斑岩の岩体の分布を反映している可能性がある。以上のことから、A7類の組成を示す胎土の土器は、在地すなわちここでは竹万宮ノ前遺跡の位置する千種川と安室川の合流点付近で製作された可能性が高いと考えられる。この場合、推定産地が吉備および山陰とされた試料No.1および3も、胎土はA7類であることから、その産地は上述の在地の範囲内である可能性が高い。

A7類が在地を示すことにより、それ以外の鉱物・岩石組成を示す胎土の土器は、少なくとも千種川と安室川の合流点付近の沖積低地以外の地域から搬入された土器であると考えられる。そのうち、A6類に分類された試料No.5は、推定産地が姫路・太子の可能性があるとされている。前述したように、これまでの兵庫県各地の遺跡における土器胎土分析では、Ａ類の胎土が多く認められている。これは、兵庫県内の南半部に広がる共通した地質学的背景に起因すると考えている。すなわち、堆積岩類からなる丹波帯および超丹波帯、凝灰岩や流紋岩類からなる相生層群および有馬層群、花崗岩類からなる白亜紀～古第三紀の貫入岩類という各地質が東西方向に伸びる帯状に並んでいるために、兵庫県南半部における低地の砕屑物は、東部でも西部でもこれらの地質に由来する岩石片が混在することになり、基本的にＡ類の組成を示すと考えられる。そのことが兵庫県南半部における土器胎土にＡ類が多いことの原因になっていると考えられる。そして、Ａ類の細分は、今回のA7類のように、より局地的な地質の違いを反映し

ていると考えることができる。A6 類の胎土に分類された試料No.5 についても、兵庫県南半部の範囲内に産地があると考えられる。したがって、発掘調査所見で推定されている姫路・太子を産地とする可能性もあると考えられる。ただし、これまでの分析例において、揖保川下流域に入る太子町東南遺跡出土の縄文土器ではA4 類の胎土が多くの試料に認められており、それはA4 類の特徴の一つである緑色岩の分布する地質学的背景とも一致している。したがって、緑色岩を含まないA6 類の胎土の土器は、揖保川下流域を産地とする可能性は低い。現時点では、試料No.5 の産地として、姫路の可能性はあると考えられるが、太子町の可能性は低いと言える。

C 類の胎土についても、これまでの兵庫県内各地における土器の胎土分析で認められてはいるが、A 類に比べると数量的には非常に少ない。また、六甲花崗岩の分布する神戸市周辺を除けば、上述した兵庫県南半部の地質学的背景を考慮すると、堆積岩や凝灰岩や流紋岩がほとんど混交することのない砕屑物の分布を、兵庫県南半部で想定することは難しい。その一方で、花崗岩類が主要な地質学的背景となる地域は、近畿地方から中国地方および九州北部さらには韓半島にまで及ぶことから、現時点でC 類の地域性を特定することはできない。今回の分析でC1 類に分類された試料No.4 は、少なくとも搬入品であることは明らかであるが、讃岐が産地であるということもできない。なお、香川県には領家帯の花崗岩類が分布しており、C 類の地質学的背景は存在する。また、C4 類に分類された試料No.7 と 8 の 2 点の土師器についても、搬入品であると考えられるが具体的な産地は不明である。供伴するバブル型火山ガラスは、比較的新鮮であることとその形態から、第四紀に噴出した広域テフラに由来すると考えられるが、その分布域は、多くの場合日本列島全域におよび、九州を給源とするテフラでは韓半島にも分布が認められているため、地域を特定する指標にはならない。なお、加古川市に所在する溝之口遺跡では、古墳時代中期とされる韓式土器の胎土分析例（矢作・石岡, 2006 ）があるが、試料 3 点のうち、2 点がC 類であった。これだけで今回の土師器との関連性を述べることはできないが、今後の可能性を示唆する。

今回の分析では、胎土における鉱物・岩石組成の違いを明らかにしたと同時に、粒径組成や砕屑物量の違いも求めた。これらの分類は必ずしも一致はせず、同じ鉱物・岩石組成でも異なる粒径組成であったり、その逆もあった。胎土における粒径組成や砕屑物量の違いなどは、例えば、土器の種別や時期あるいは器種などによって、それぞれ傾向が異なるという可能性もある。したがって、今後はそのような視点での比較のできる試料において分析し、検討することも必要と考えられる。

引用文献

猪木幸男・弘原海清, 1980 ,上郡地域の地質.地域地質研究報告（ 5 万分の 1 図幅） ,地質調査所, 74p.
松田順一郎・三輪若葉・別所秀高, 1999 ,瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－.日本文化財科学会第 16 回大会発表要旨集, 120-121.
矢作健二・石岡智武, 2006 ,溝之口遺跡出土土器の胎土分析.兵庫県文化財調査報告第 309 冊　加古川市溝之口遺跡-東播都市計画都市高速鉄道ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ-.兵庫県教育委員会, 43-53.

第２節　竹万宮ノ前遺跡出土須恵器（古墳・奈良時代）の産地問題

大阪大谷大学　三辻 利一

１．はじめに

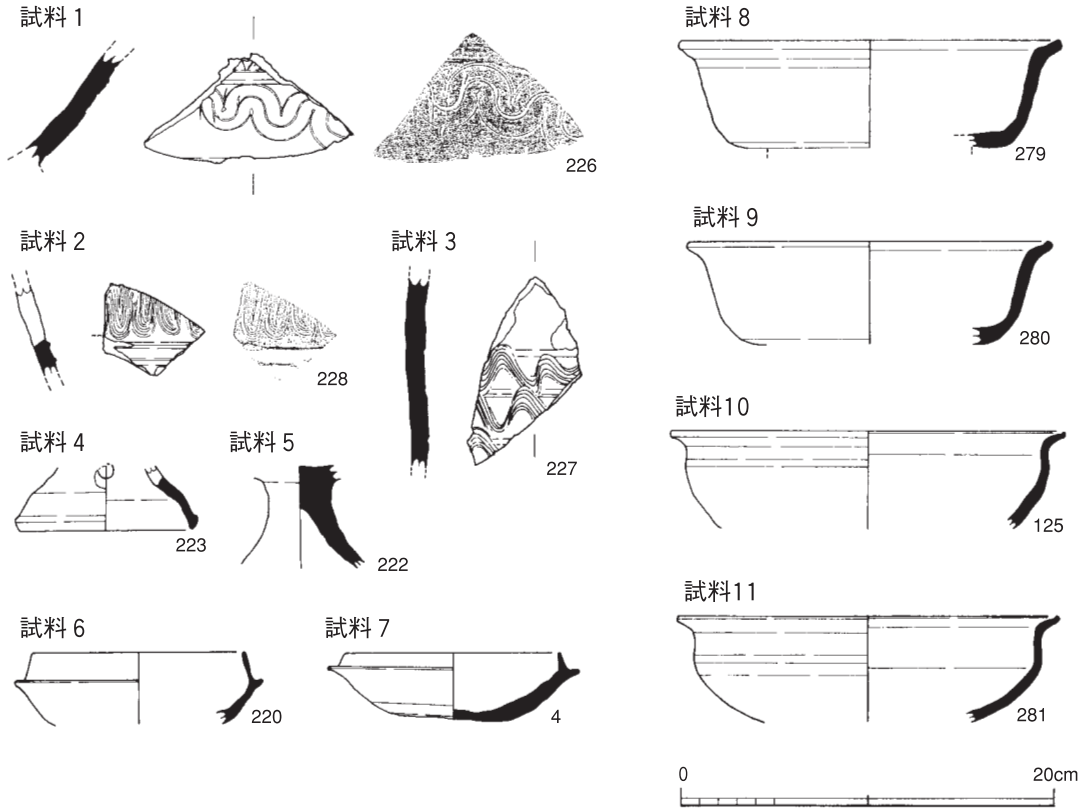
考古学の目的は過去を再現することである。江上波夫によると、人類の活動の跡を残す唯一の物的証拠は地下に埋蔵されていた遺跡・遺物である。したがって、遺跡・遺物を発掘することは過去を再現するための第一歩であるに過ぎない。遺跡・遺物は過去を再現するための骨格ではあっても、それだけで過去を豊かに再現することは困難であるからである。それを肉ずけする何かが必要であるという。それはメソポタミア文明や古代エジプト文明の再現では楔形文字とヒエログリフの古代文字であった。19 世紀代、天才的な古代言語学者たちの努力によって、これらの失われた古代言語の解読に成功した。これらの文字は地下から発掘された遺跡・遺物に書き込まれていた。これらの古代言語の解読によって、今日、メソポタミア文明や古代エジプト文明はどの古代文明よりも豊かに解読されていることは周知の事実である。

一方、日本では文書遺物が出土するのは８世紀代以降である。それ以前の古墳時代、弥生時代、縄文時代の遺跡・遺物は大量に出土しているが、文字がないため、過去を豊かに再現することは困難である。この点で日本考古学はメソポタミア考古学やエジプト考古学に比べれば遙かに見劣りがする。日本考古学を世界の考古学の舞台に乗せようとすると、古代言語に代わる何かが必要である。筆者は土器に注目した。日本では行政発掘という世界では珍しい体形の発掘が進展したため、消費地遺跡のみならず、多数の生産地遺跡も発掘した結果、大量の土器（片）が出土している。しかも、その型式学は世界のどの文明の土器よりも詳細を極めている。しかし、型式学で土器編年は提示されているが、型式学で土器の産地推定法は提示されていない。土器型式を如何に詳細に検討しても、産地推定法が出来あがっていない限り、須恵器の産地推定は困難である。筆者は土器型式学に加えて、自然科学の方法による胎土分析のデータを融合させ、土器を通して、日本の古代を再現しようという遠大な計画を立てた。そのための基礎研究として、日本全域から出土する須恵器の胎土を分析し、その化学特性を比較することが必要であった。この研究の絶好の分析対象が全国各地の窯跡から出土する須恵器片であった。窯跡出土須恵器片はその窯の製品の破片と考えることができるからである。須恵器窯跡は北は青森県から南は鹿児島県にいたる全国各地で発見されており、その数は数 1000 基は越えるといわれる。しかも、そこからは大量の須恵器片が出土している。これらの須恵器片試料を大量に集めて分析すれば、須恵器胎土の地域差に関する情報を引き出せるはずである。こうした考え方から、「窯跡出土須恵器の分析化学的研究」が開始された。その結果、K-Ca 、Rb-Sr の両分布図上で各地の窯跡出土須恵器にみられる地域差を示すことができることが発見された。全国各地の花崗岩類の分析データからも、花崗岩類にも地域差があることが実証された。これら４因子は母岩を構成する主要造岩鉱物の中で最も重要な鉱物である長石類に由来することも確かめられている。

粘土は岩石の風化生成物である。風化の過程でこれら長石系４因子は比較的容易に溶出するため、両分布図上にみられる地域差は花崗岩類の地域差よりも小さくなっている。一方で、一見均質にみえる粘土そのものにも自然界の産物特有の不均質性があることも実験データで示されている。したがって、両分布図における窯跡出土須恵器の分析値のバラツキは粘土の不均質性によるバラツキと、地質の違い、したがって、母岩の構成鉱物の違いによる地域差の両方が表現されていることになる。通常、前者に比

第７表　竹万宮ノ前遺跡出土須恵器の分析データ

試料No.	報告番号	器種	時期	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D2（丸山）	D2（陶邑）	D2（伽耶）	D2（相生）	D2（加古川）	推定産地
1	226	器台（コンパス文）	古墳時代中期	0.378	0.331	1.74	0.810	0.505	0.199	3.8	58.1	63.2			丸山群
2	228	器台（波状文）	古墳時代中期	0.389	0.357	1.81	0.779	0.566	0.207	1.9	58.6	57.5			丸山群
3	227	器台（６世紀）	古墳時代後期	0.365	0.258	1.98	0.651	0.472	0.157	2.6	23.5	32.3			丸山群
4	223	高坏（6世紀前半）	古墳時代後期	0.417	0.319	2.01	0.791	0.547	0.239	3.9	42.1	47.2			丸山群
5	222	高坏（6世紀後半）	古墳時代後期	0.632	0.135	1.33	0.704	0.346	0.198	63.7	12.0	4.4			伽耶
6	220	杯身（TK23～47）	古墳時代後期	0.407	0.044	2.69	0.571	0.266	0.143	24.9	3.4	13.2			陶邑群
7	4	杯身（TK43～209）	古墳時代後期	0.421	0.325	1.56	0.776	0.568	0.232	4.0	40.2	42.8			丸山群
8	279	稜椀	８世紀	0.504	0.173	1.53	0.791	0.388	0.182				1.95	1.90	相生/加古川
9	280	稜椀	８世紀	0.513	0.187	1.55	0.810	0.419	0.201				2.76	1.15	相生/加古川
10	125	稜椀	８世紀	0.395	0.092	1.28	0.775	0.310	0.103				5.89	19.2	相生群
11	281	稜椀	８世紀	0.385	0.098	1.27	0.773	0.291	0.094				6.88	21.7	相生群



第９図　分析対象試料

べて後者のほうが大きいので、両分布図上での地域差が目立って表現されることになる。しかし、地質が類似すると、母集団間の地域差も小さくなり、粘土そのものの不均質性による広がりのため、生産地間の分離は不完全となる。その場合には、両母集団の相互識別に２群間判別分析法の適用が必要である。現在、分析結果はまず、K-Ca 、Rb-Sr の両分布図上にプロットされ、定性的にデータを把握したのち、２群間判別分析が適用されるという手法はほぼ出来上がっている。その結果は判別図上にプロットされて、産地推定されている。考古遺物である須恵器の産地問題の研究では、二つの母集団は考古学の諸条件をいれて選択されることは当然のことである。発掘された土器は小破片といえども科学的発掘によって歴史空間上に位置づけられたものである。すなわち、「考古遺物」であり、この点で現代の「やきもの」

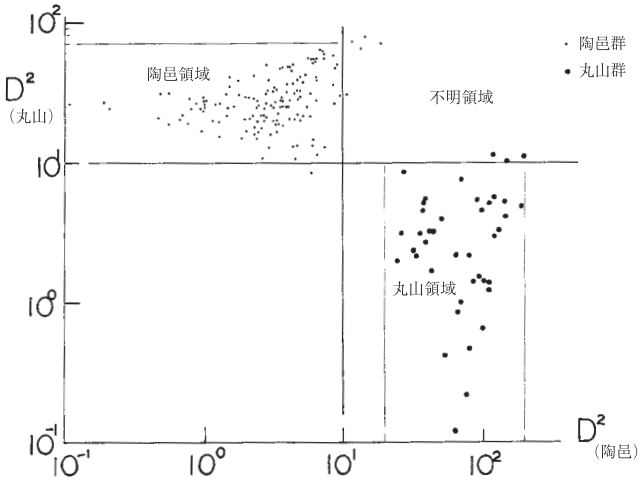
とは根本的に異なるという意識をもつことは必要である。したがって、須恵器の産地問題の研究は自然科学の研究ではなく、自然科学の方法を取り入れた考古学研究であるという認識が不可欠である。

2　分析結果

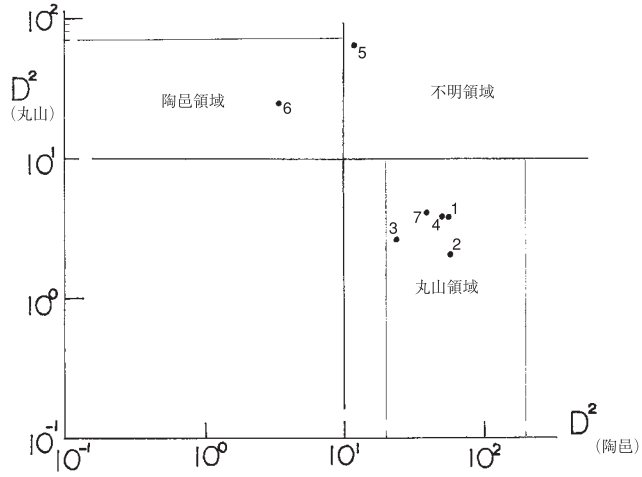
分析結果は第７表にまとめられている。全分析値は同日に測定された岩石標準試料 JG-1 の各元素の蛍光Ｘ線強度をつかって標準化された値（JG-1 による標準化値という）で表示されている。

分析結果はまず、古墳時代の須恵器については、これまでに開発されている「古墳時代の須恵器の産地推定法」にのっとって、地元産か陶邑からの搬入品かを問う２群間判別分析を試みた。さらに、朝鮮半島からの搬入品の可能性がある場合には、伽耶群と陶邑群間の判別分析を試みた。また、平安時代の須恵器については地元、相生群と隣接する加古川群間の２群間判別分析を試みた。

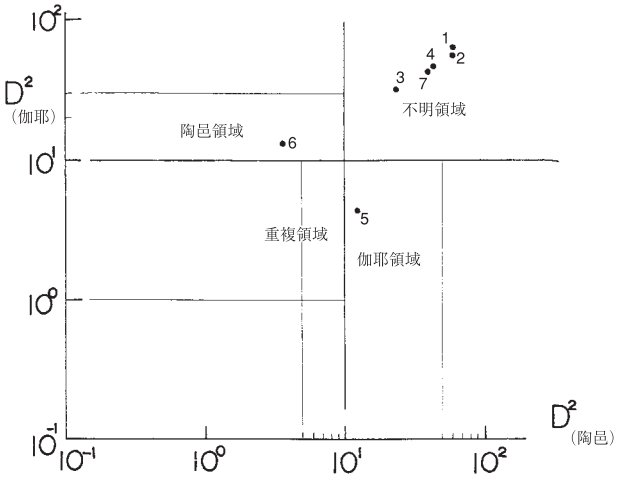
古墳時代の須恵器の産地推定の結果から説明する。第10図には地元丸山群と陶邑群間の相互識別の結果を示す。両軸にとったD^2（丸山）、D^2（陶邑）はそれぞれ、丸山群、陶邑群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値であり、K、Ca、Rb、Sr の分析値を使って計算された。また、５％の危険率をかけたホテリングのT^2検定に合格する条件はこの程度の試料数ではD^2（母集団）＜10 である。通常、これが各母集団に帰属するための必要条件でなる。また、互いに、相手群の重心からのD^2（相手群）をつかって十分条件を求めることも出来る。この結果、丸山領域はD^2（丸山）＜10、D^2（陶邑）＝20～200 であり、陶邑領域はD^2（陶邑）＜10、



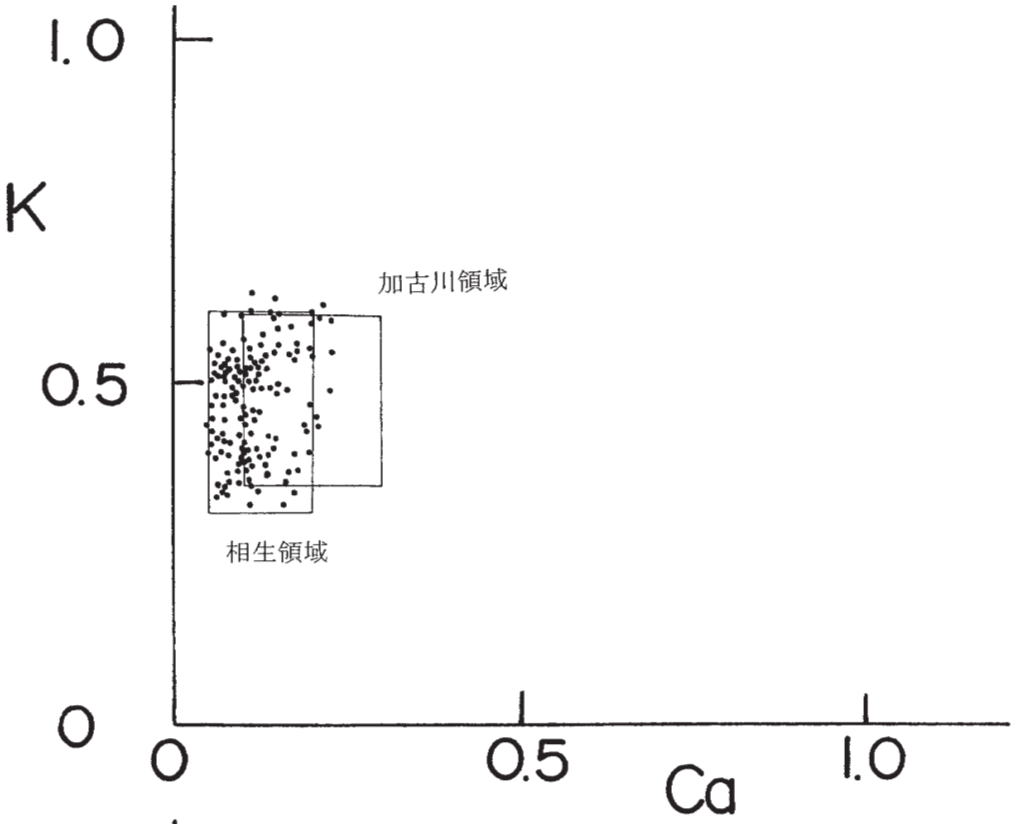
第10図　丸山群と陶邑群間の相互識別（K、Ca、Rb、Sr）

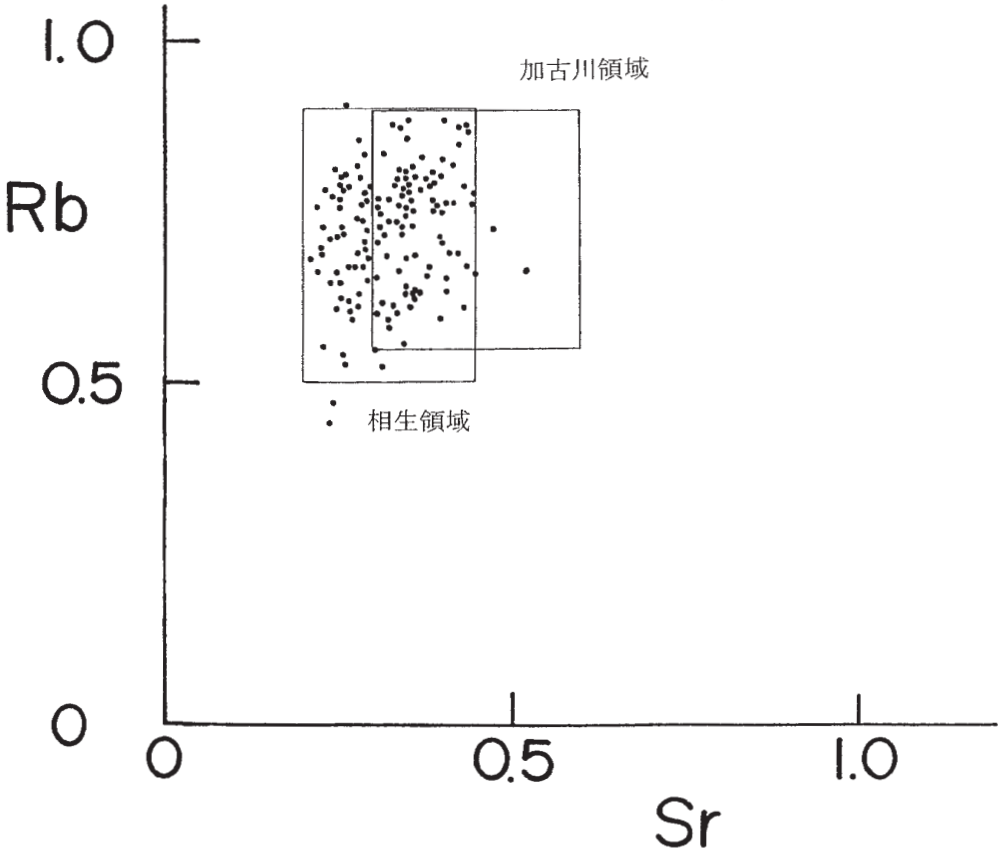


第11図　古墳時代の須恵器の産地推定（１）（K、Ca、Rb、Sr）

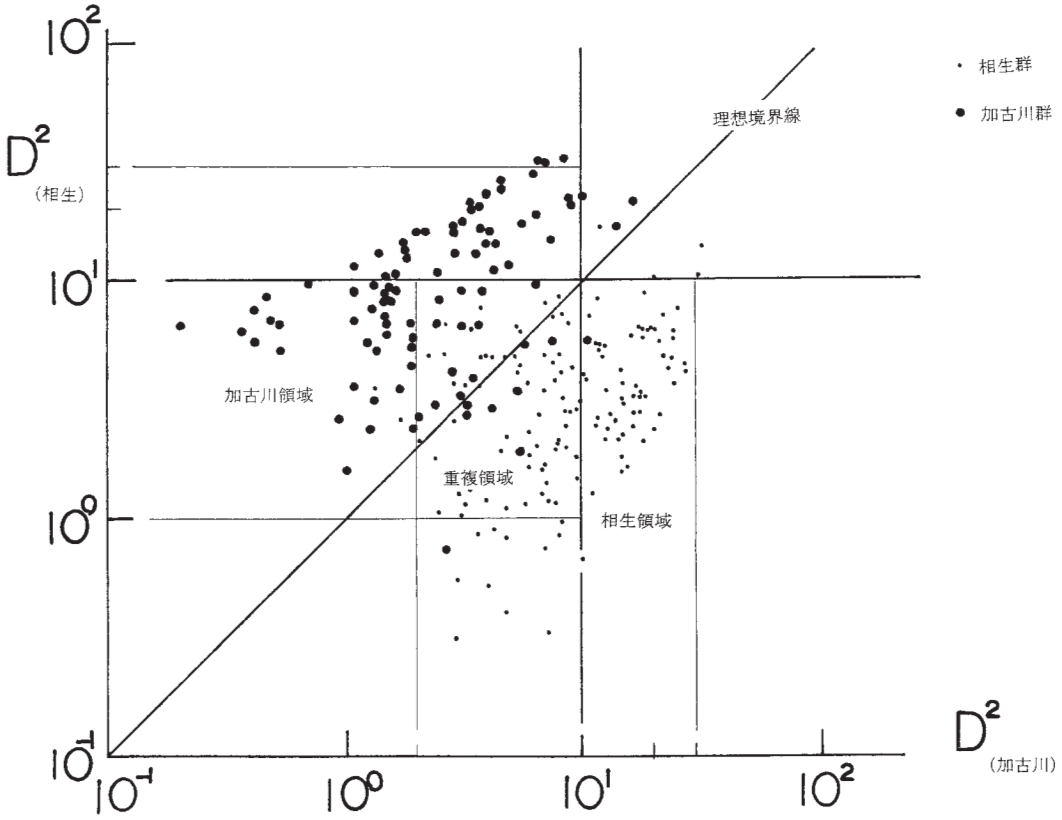


第12図　古墳時代の須恵器の産地推定（２）（K、Ca、Rb、Sr）

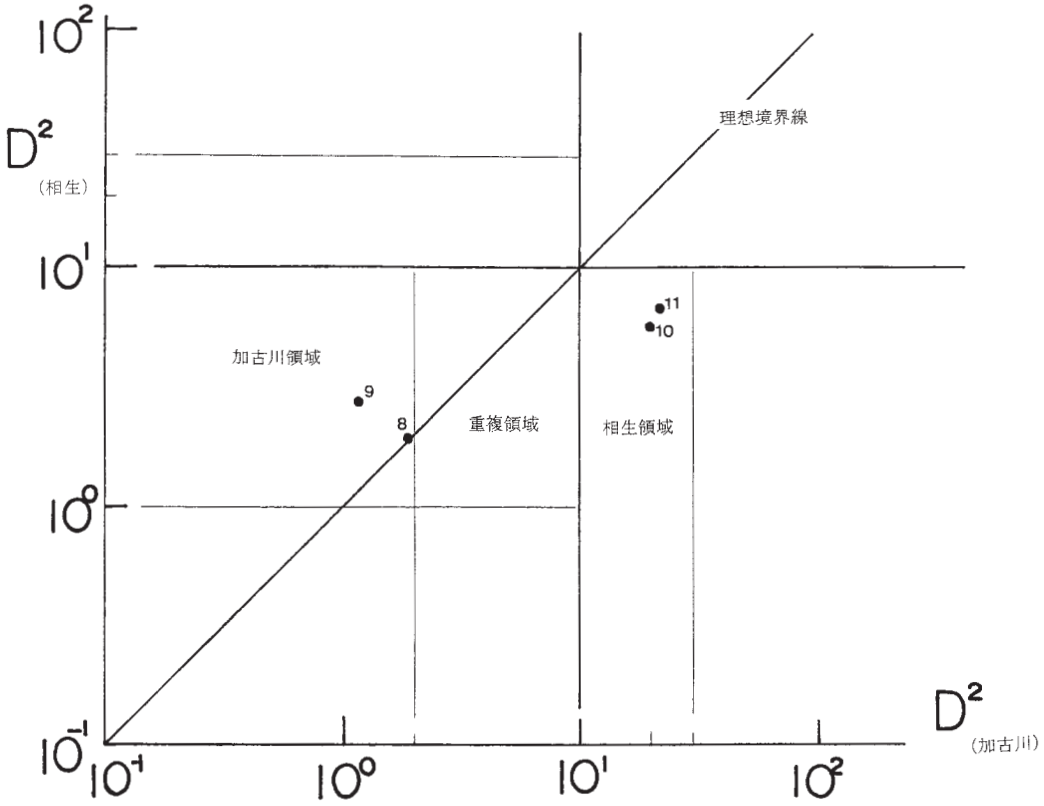




第 13 図　相生窯群出土須恵器の両分布図



第 14 図　相生群と加古川群の相互識別（K、Ca、Rb、Sr）



第 15 図　8 世紀代の須恵器の産地推定（K、Ca、Rb、Sr）

D^2（丸山）＝ 10 ～ 70 であることが第 10 図からわかる。この結果、もし、今回分析した古墳時代の須恵器の中に、地元、丸山製品があれば、丸山領域に分布するはずであるし、陶邑からの搬入品があれば、陶邑領域に分布するはずである。産地推定の結果は第 11 図に示してある。第 11 図 1 、 2 、 3 、 4 、7 の 5 点の須恵器は丸山領域に分布しており、地元、丸山窯群の製品と推定された。他方、No.6 は陶邑領域に分布しており、陶邑からの搬入品と推定された。No.5 は不明領域に分布しており、この判別図を見る限り、産地不明の須恵器である。この須恵器が朝鮮半島産の陶質土器であるかどうかみるため、陶邑群と伽耶群間の 2 群間判別分析の結果を第 12 図に示す。伽耶群としては高霊の内谷洞窯と尚寧の余草里窯の試料を使用した。そうすると、No.6 は伽耶領域に分布しており、伽耶地域からの搬入品と推定される。また、この判別図では地元、丸山製品は不明領域に分布することが分かる。この結果、 7 点の古墳時代の須恵器のうち、 5 点は地元、丸山窯の製品であり、 1 点は陶邑からの、また、残る 1 点は朝鮮半島からの搬入品と推定された。

平安時代の須恵器の産地推定でも 2 群間判別分析の母集団として、優先的に地元窯群が選択される。この場合は地元、相生窯群である。西後明窯群、入野窯群、光明山窯群、緑ヶ丘窯群の試料が使用された。相手群として隣接する加古川窯群の試料が選択された。相生窯群の須恵器の両分布図を第 13 図に示す。大部分の試料を包含するようにして、相生領域を描いてある。他方、比較のために、加古川領域も描いてある。両者の化学特性は比較的類似しており、両分布図でも両領域はかなり重複する。しかし、相生群に比べて加古川群の須恵器には Ca 、Sr がやや多く、その相互識別は不可能ではないことが分かる。両者の相互識別の結果は第 14 図に示す。両分布図から予想されるように、重複領域はかなり大きい。しかし、両群の試料は理想境界線を挟んで分離しており、その相互識別は不可能ではない。もし、今回分析した試料の中に、地元、相生窯群の製品が含まれておれば、相生領域に分布するはずであるし、加古川製品があれば、加古川領域に分布するはずである。産地推定の結果は第 15 図に示す。 8 世紀代ミガキを施す須恵器稜椀である No.10 、 11 は相生領域に分布しており、地元、相生製品と推定された。他方、 8 世紀代と推定される No.8 、 9 の 2 点の須恵器は加古川領域に分布しており、加古川窯群からの搬入品である可能性がある。しかし、第 14 図からこの領域には相生製品も分布する可能性もあるので、相生製品ではないと判断することもできない。ただ、No.10 、 11 と No.8 、 9 は第 15 図でもその分布位置が離れているところから、胎土は異なっており、同じ相生窯群内でも別の窯の製品とみられる。

以上の産地推定の結果は D^2 値とともに、第 7 表にまとめてある。

第５章　まとめ

第１節　弥生時代後期の遺構と遺物について

１　後期前葉の遺構と遺物

後期前葉に属する検出遺構は土坑と柱穴に限られ、SK01・SK02が主要なものである。また、後期末の土器とともに、後の遺構埋土や包含層、調査区南半の河川堆積層にも一定量含まれていることから、調査区北側や周辺一帯に当該期の遺構が本来存在し、洪水などにより削平された可能性が想定される。

後期前葉の土器は、概ね周世Ⅰ式（甲斐1990）、西播磨後期Ⅱ古相（岸本1998）に相当する。土器には吉備系の要素が認められる。199は上東式系の長頸壺で、備前Ｖ－２（正岡1992）の特徴を持つ。筒状の頸部に多条のヘラ描き沈線をめぐらし、その直下に刺突文を施す。胎土分析の結果、在地産の可能性が指摘されている。102は台付きの直口壺の体部中位から上半にかけてと考えられる。199の長頸壺、102の台付直口壺の両者ともに、赤穂市東有年･沖田遺跡においても類例が認められる（中田2003）。

SK02より出土した絵画土器（169；写真図版11）には、広口壺の口縁部内面直下に、４本足の竜のような動物が上下を区画された斜格子文の物体に（境界に足を突き抜けていることから）乗り、背景に二等辺三角形が描かれている。よく観察すると、斜格子文の上部に三角形とその中に３本の縦線が横方向に連続して施され鰭を表現した痕跡が認められる。福岡県前原市潤地頭給遺跡（江野編2005）では、壺肩部外面に細長く区画された斜格子文の上下に二等辺三角形を配した龍が描かれている。本遺跡例も区画された斜格子文が龍を表現している可能性があり、龍の上にさらに小さな４本足の動物が乗っている状況も想定できる[1)]。この絵画土器の破片は、残存部位のほとんどが絵画の描かれている範囲で占められ、あたかもその範囲を残すように広口壺から打ち欠かれたかのようである。共同体での祭祀に用いられるなどの役割を終えた土器の絵画部分のみを割り取り、お守りのように持ち続けられたことも想定される。

２　後期末の遺構と遺物

庄内併行期の遺構は、竪穴住居跡SH02と掘立柱建物SB24、土坑SK03が主なものである。竪穴住居跡SH02は６本の主柱穴を持つと考えられ、２つの中央土坑を伴う。南側に配された細長い中央土坑Ａが楕円形の中央土坑Ｂと比較して浅く、埋土下部に炭を多く含んでいた。この２つの中央土坑はセットで、いわゆる「イチマル（「10」）型中央土坑」を構成すると考えられる。床面から10㎝ほど浮いて出土した大型の鉢32がやや古相（周世Ⅲ式）を呈するのをはじめ、若干古い要素を持つものも含まれるものの、概して後期後葉から庄内併行期の所産（周世Ｖ式とその後続型式）と考えられる。

「イチマル型中央土坑」は弥生時代中期後葉に播磨一円と三田盆地や丹波に分布し、後期には北播磨から西播磨にかけて範囲に分布域を狭めつつ後期後葉から末まで存続するとされる（山下1999）。山下氏によれば、後期中葉以降は円形プランの５～６本主柱穴の住居が主流であるという。後期後葉から庄内併行期にかけては、播磨町大中遺跡や西脇市大垣内遺跡など例が限られていたが、近年になって姫路市和久遺跡において多数確認される（小柴2001）など、類例が増えつつある。

確実に搬入品と識別できるのは下川津Ｂ類の讃岐産の甕（9）のみで、18はその影響のもとに在地で製作されたと考えられる。一方、高杯（16）は山陰の鼓形器台の上台部のような杯部を持ちつつ、脚部は在地の形態である円形の透かしを穿つ裾広がりの円錐形を持つ。胎土分析では播磨南部産とされる。

第２節　古墳時代における渡来系の要素を持つ遺物について

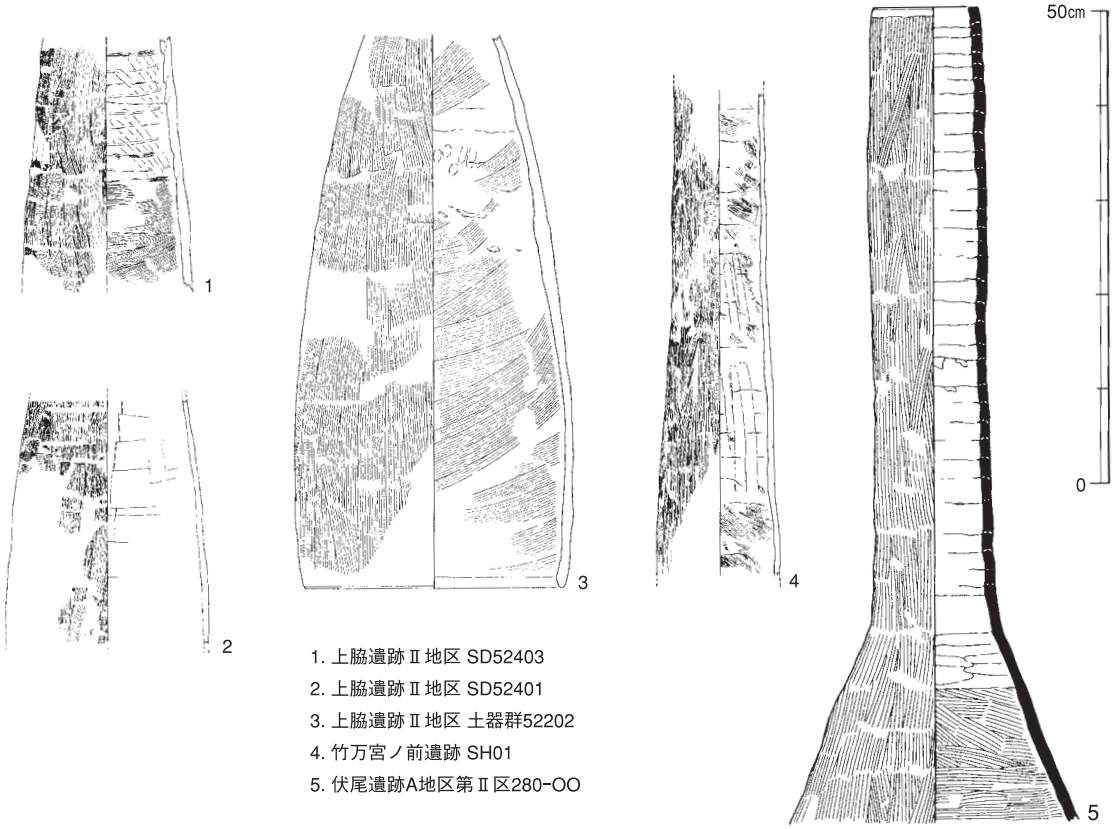
１．円筒形土器（土製品）について

古墳時代後期の竪穴住居跡SH01では、竈前方の床面において円筒形土器（土製品）が倒れ込んだ状態で確認された。この土器（土製品）の底部から口縁部にかけて漸移的に先細りとなる筒形の形状と、竈前方の床面直上という出土状況から、煙突（排煙管）である可能性が指摘される。ただし、外面には帯状に煤けた暗褐色の変色部分が認められるものの、内面は目立った煤の付着は認められない。

類例を探すと、播磨では神戸市西区上脇遺跡で出土している（岸本編 2000）。特徴的なものでは残存中位に突帯がめぐり、上端に排煙孔と考えられる円窓を持つ。第16図１～３は内湾気味に底部に向かって裾広がりとなる釣鐘状を呈する。この３点の内面にも煤の付着は認められない。大阪府堺市伏尾遺跡例（５）では口径と同規模の筒状の体部が続いた後、底部付近で開く漏斗状の形状を呈する（近藤 1985）。

百済地域とわが国の円筒形土器（土製品）の形態･使用方法を整理した坂靖氏によれば、まず器高50㎝を境に大型品と小型品に分けられた上で、「直線的な体部を持ち、底径と口径がほぼ等しいもの（Ａ類）、同様の形状で、底径をやや上回り、先細りとなるもの（Ｂ類）、同様の形状で底径が口径の二倍以上に及ぶもの（Ｃ類）、底部付近が裾拡がりになるもの（Ｄ類）、口縁部が大きく開くもの（Ｅ類）、瓦の玉縁部のような長い突出部をつけ、接合部とするもの（Ｆ類）」と分類がなされている（坂 2007）。

本遺跡例の出土状況に合致する使用方法としては、排煙管と支柱が想定される。排煙管としてはＤ類単独か、Ｂ類をＣ類の上に載せて組み合わせて用いられ、支柱としてはＡ類が竈の焚口から出土した事例に対し土器を支えた使用の可能性を指摘している。伏尾例は坂氏の分類のＤ類、上脇例はＣ類に該当し、本遺跡例はＡ類の形状とは若干異なり、Ｂ類か、Ｄ類の筒部である可能性が考えられる。

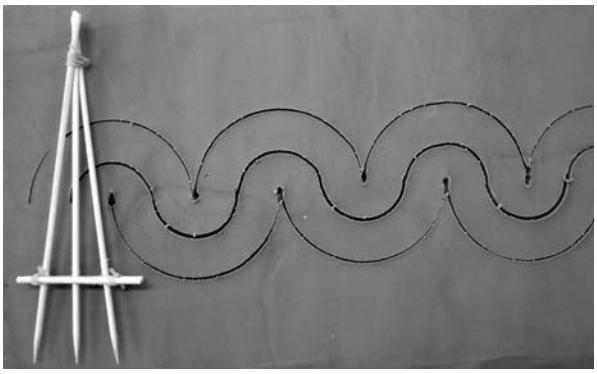


1. 上脇遺跡Ⅱ地区 SD52403
2. 上脇遺跡Ⅱ地区 SD52401
3. 上脇遺跡Ⅱ地区 土器群52202
4. 竹万宮ノ前遺跡 SH01
5. 伏尾遺跡A地区第Ⅱ区280-OO

第16図　竹万宮ノ前遺跡の円筒形土器と類例

２．初期須恵器について

須恵器器台片(226)に施されたコンパス文は、２重の同心円半円を上下に反転しながら連続的に描く文様で、第17図のような３本足のコンパス状の施文具により描かれたことが実験により確かめられる[2)]。



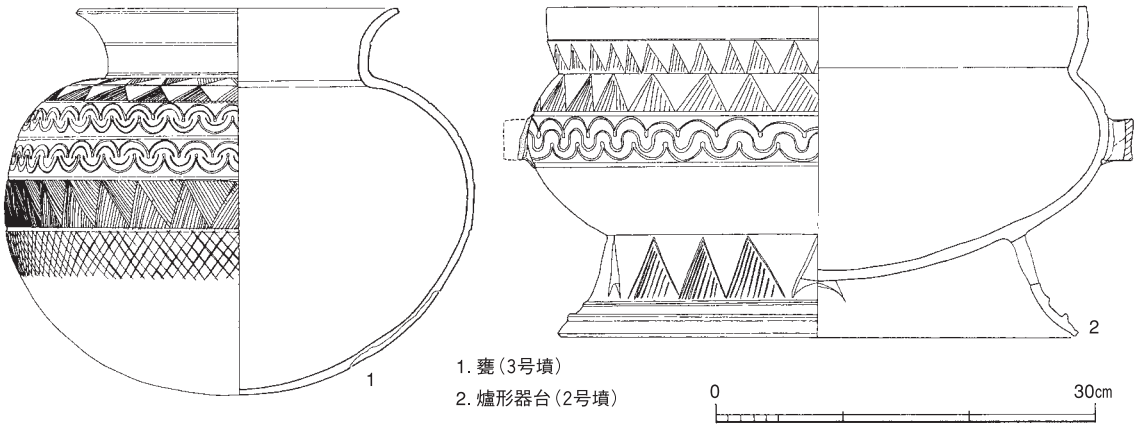
第17図　コンパス文の施文具と文様

韓半島では１重の半円を繰り返すコンパス文を施す例が多く、慶尚南道金海市では礼安里３９号墳(釜山大学校博物館編 1985)で器台に、慶尚北道慶州市では皇南大塚(朝鮮総督府 1924)や金冠塚(文化財管理局 1985)では器台に、味雛王陵地区第９号区域(尹 1976)では台付長頸壺蓋に認められる。２重の同心円半円によるコンパス文を施す例は、管見触れた限りでは、金海市の大成洞古墳群で甕や爐形器台に認められる(第18図;申･金 2000)。

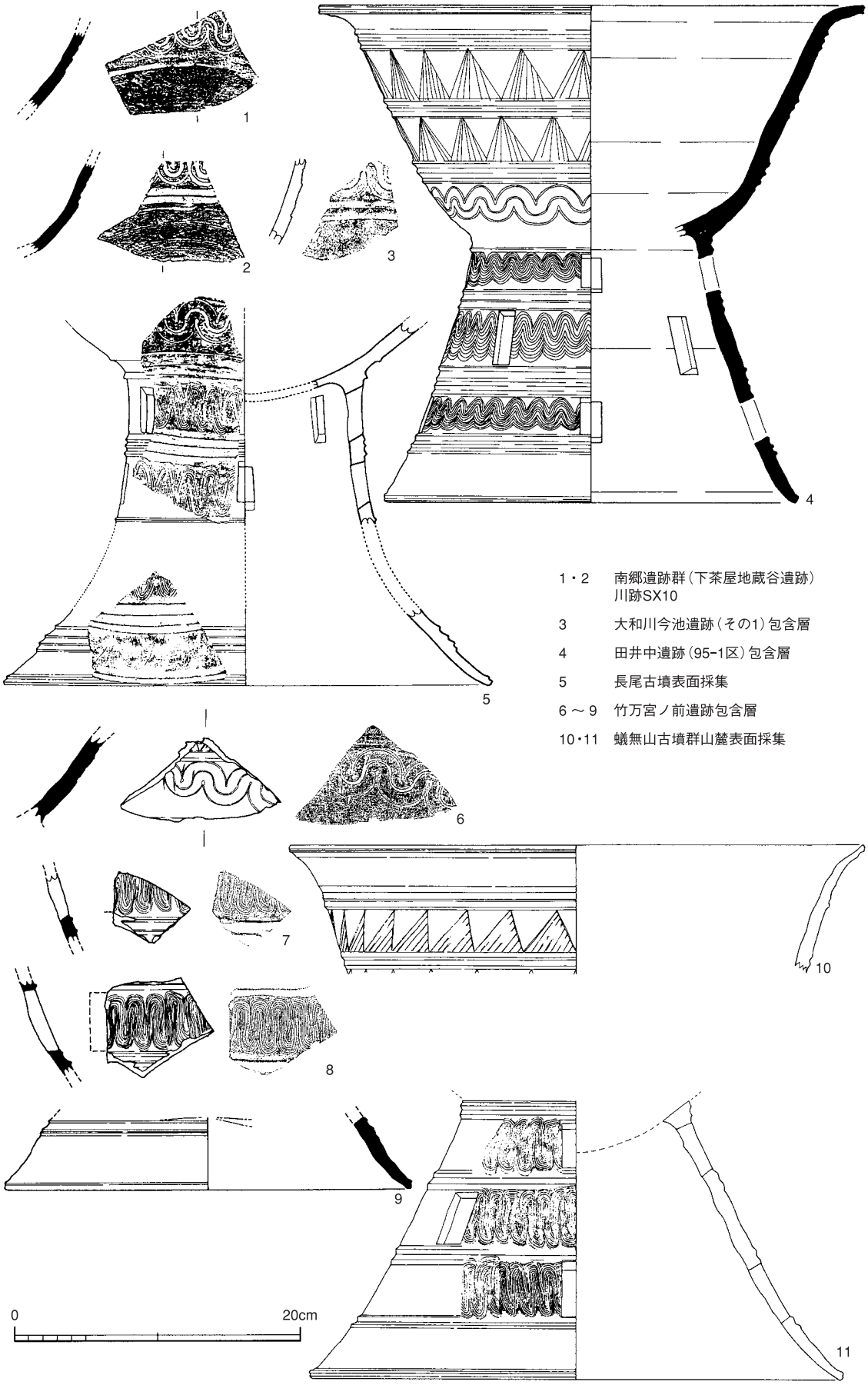
わが国において本遺跡例(226)と同様の施文具を用いて描かれたと考えられる類例を探すと、島根県安来市長尾古墳例(川原 1978)と大阪府八尾市田井中遺跡例(本間編 1997)、同府松原市・堺市北区大和川今池遺跡例(村上編 2000)、奈良県御所市南郷遺跡例(坂他 2000) の４例に限定される(第19図)。

いずれの例も、轆轤の回転が静止した状態で左から右へと同心円を反転して施文している[3)]。田井中例(第19図４)と長尾古墳例(5)では、コンパス文が器台の杯部最下段に施されており、さらに田井中例ではコンパス文が施された上段には上向きの鋸歯文帯が認められる。本遺跡例(6)においても、コンパス文の施文された文様帯の直上に２条突帯を設けたさらに上段の文様帯に、鋸歯文を構成すると考えられる斜線４本が認められる。最も左側の沈線はほぼ垂直に、最も右側の沈線はやや右斜め上方向に引かれ、鋸歯文内部の斜線が平行方向ではなく放射状であることが窺われる。なお、蟻無山例(10)は図では鋸歯文内部が平行する斜線で示されているが、松岡秀夫氏の紹介した拓本(松岡 1979)によれば鋸歯文右半分の斜線は右のものほど垂直方向に近く、本遺跡例もこのタイプである可能性が残されていよう。

また、南郷例(1･2)は、同心半円どうしが反転して結合する部分が縦方向に長く、反転する同心円の中心が水平一列に並ばず上下に揺れ動いている。これに対し、他の３例および本遺跡例では反転する同心半円の中心が最も外側の約180度分の円弧の始点・終点とほぼきちんと合致することで、上下の幅なくスムーズに反転して描かれている。さらに、南郷例(1･2)および大和川今池例(3)は他の２例および本遺跡例と比べて、隣接する同じ向きの同心半円どうしの水平方向への重なりが大きい。



第18図　大成洞古墳群のコンパス文の施された陶質土器



1・2　南郷遺跡群（下茶屋地蔵谷遺跡）川跡SX10

3　大和川今池遺跡（その1）包含層

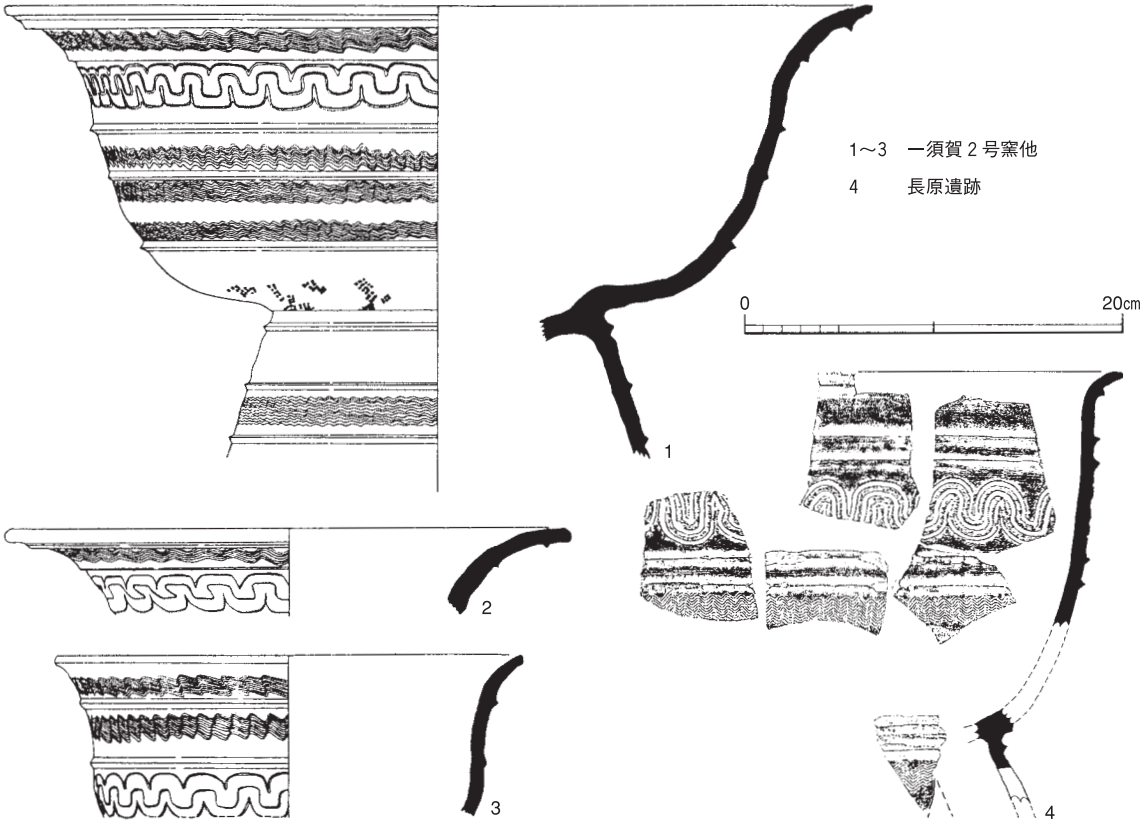
4　田井中遺跡（95-1区）包含層

5　長尾古墳表面採集

6～9　竹万宮ノ前遺跡包含層

10・11　蟻無山古墳群山麓表面採集

第19図　竹万宮ノ前遺跡の初期須恵器と類例



第20図　ヘラ描きコンパス文の例

さらに、ヘラ描きによってコンパス文を模した文様には大阪府河南町一須賀２号窯例（堀江･中村1980･田辺1981）、大阪市平野区長原遺跡例（大庭編2005）がある（第20図）。一須賀例のヘラ描きコンパス文は、まず中央の波状軸線を基準線として設けた後、その上下に波状のヘラ描き沈線を施したものと見受けられる。一須賀例では、この基準線となる波状軸線が上下・左右ともに施文幅の揃った位置に描かれており、先に反転する同心区画線の外側を描いてから次に軸線に描こうとした場合上下の外側の線に影響されてこのように整った線は描けないと思われるのである。波状軸線を引くにあたって波状文全体が施されるべき文様帯の範囲･ストロークの規模が予め設計され、波状軸線を設ける作業によって上下左右の空間に厳密に割り付けがなされたのではないだろうか。

これに対し、長原例(4)では、軸線の後に設けられたと考えられる外側の線が、同心区画中心部(凹部)で折り返す際に隣と密着せず余白が生じている。コンパス描きコンパス文の円弧を忠実に模倣しようとしたものの、フリーハンドによるヘラ描き手法のため限界が出てしまっているのであろう。そして同心区画の中心が先ほど南郷例で触れたように上下しており水平方向一列に並ばない。なお、長原例は平行する３条一体のヘラ状の施文具で描いたと考えられる。

このように、ヘラ描きコンパス文はフリーハンドで描くようになった長原例、中軸線を最初に描いて割り付けを行った後に外側を描き足す一須賀例の段階を経て、さらに３条のうち中間の線が上側に偏り中軸線としての意匠すら失った「♡」形の文様が連続する姫路市船場川東区整遺跡第６地点例（福井編2008）の段階を迎えるに至る。すなわち、コンパス描きコンパス文を模倣しながらヘラ描き手法を用いるうちに、モチーフは保たれながらも全く異なった手法によって描かれる文様に変容していくのである。

さて、コンパス文の施された須恵器器台のうち長尾例、田井中例の脚部には、櫛描をＵ字形に折り返したストロークの長い波状文が施文されている。このような波状文は、赤穂市蟻無山遺跡で採集された

器台にも認められる（志水･岸本 1991）。蟻無山例（第 19 図 11）は本遺跡例（6）同様、１往復あたりの横幅が狭く重なりが認められる程密で、折り返しが入念で幅広く膨らみ、「コ」字状に角張る。折り返し部分の膨らみとは対照的に、縦幅の中位付近ですぼまり、「Ω」字状を呈する。この折り返し部分の「コ」字状の膨らみや角張りの特徴は、轆轤の静止した状態で手首のひねりによって描かれるものであろう。一方、長尾例と田井中例の波状文は折り返し部分が丸みを帯びて下方は裾広がりとなる山形の波状文であり、１往復あたりの横幅が広い。轆轤の回転を利用したやや後出傾向の要素であるようにも思われる。ただし、長尾古墳例のほうが田井中例に比べ、折り返し部分がやや膨らみ、横幅が狭く重なる部分も認められる。これらの要素が必ずしも新旧の変遷を示すとは限らず、系統差の可能性も残しておきたい。

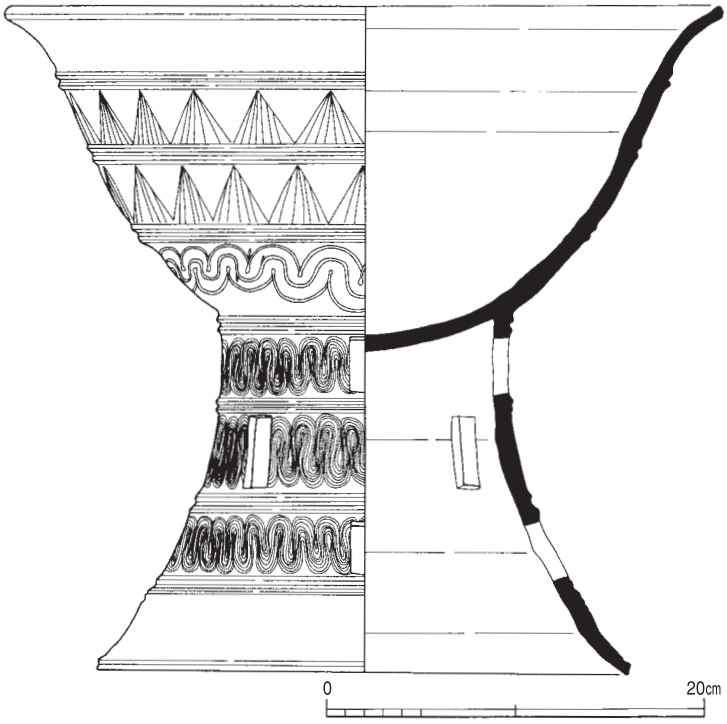
これらの特徴を踏まえると、本遺跡例（6）のコンパス文を施した杯部の下位には、波状文の折り返しが入念で１往復あたりの幅が狭い 7･8 が同一個体として脚部を構成していた可能性が十分に考えられる。

器台の器形全体が窺われる田井中例（4）は、杯部が深く底部から屈曲して急角度で立ち上がって直線的にのび、口縁部がさらに外反する。脚部は裾が広がらず、直線的に急角度で立ち上がっている。このような杯部が逆台形状となる器形の特徴は、TG231・232 窯の須恵器器台の分類を行った岡戸哲紀氏による高杯形器台Ｇ類（岡戸 1995）の典型例であり、TG231・232 窯の中では少数派・別系譜とされる。

蟻無山例は杯部（10）と脚部（11）が必ずしも同一個体とは限らないが、杯部の底部は若干丸みを帯びると考えられ、次第にゆるやかに立ち上がり、口縁端部も緩やかに外反する。脚部は裾広がりで、端部付近で外方へと緩やかに傾斜する。一方長尾古墳例（5）は、杯部はやや丸みをおびた底部を持ち、脚部は上部が直立気味であるが、裾部では緩やかに開く。

竹万宮ノ前例のコンパス文の施された破片は、断面形を観察する限り緩やかに内湾し、田井中例のコンパス施文部上部付近に見られるような目立った屈曲は認められない。蟻無山例は杯部の底部を欠くが、長尾古墳でも残存する範囲に大きな屈曲が認められず、杯部の器形は蟻無山例や長尾例に近いと思われる。また、竹万宮ノ前例の脚裾端部付近は長尾古墳例同様、最下段の二条突帯直下で内湾し、わずかに屈曲し外反して外方に広がる。しかしながら、口縁端の緩やかな外反は岡戸氏の高杯形器台分類（以下、大庭寺分類）Ａ類～Ｃ類の各種には認められず、Ｇ類に含めてそれらとは別の系譜と位置付けられている。ただし、田井中例やヘラ描きの長原例といった典型的なＧ類とは屈曲の度合いがかけ離れているため、器形のバリエーションまたはより細かな系譜の異なることも考える必要があるのかもしれない。

このような比較をもとに、本遺跡例の想定復元を試みた（第 22 図）。脚部を構成する要素を考えると、脚部の明らかな蟻無山例および田井中



第 21 図　竹万宮ノ前遺跡須恵器器台の想定復元図

例では文様帯４段が２条ないし３条の突帯で区画され、最下段は施文されず、下から３段目が長いストロークの波状文、２・４段目が比較的短めのストロークの波状文が施文されている。本遺跡例では、(8)は突帯間が4.1㎝と高く、下から３段目と考えられる。(7)は上方の突帯が残存しないものの波状文のストロークが(8)に比べて短く、突帯間は3.6㎝に復元される。(7)の下部の２条突帯間の間隔が開き目で最下段(9) の上部の２条突帯と合うこと、(7)の２条突帯の下位に残存するスペースに波状文の痕跡が認められないことから、最下段と考えられる。これに下から４段目に２段目と同様の突帯間距離および波状文と、各段の境に２条突帯を設け、最下段を除いた下から２～４段目に千鳥状に長方形透かし孔を穿った。脚部の上端径がTG232窯で16～20㎝となる[5]ことから、底径からの自然なカーブを鑑みつつ16㎝として[6]脚部形態を復元したところ、長尾例や礼安里117号墳出土器台のような傾斜変換点をもつ形態となった。なお、杯部の口径は40㎝程度がTG232窯の通有品とされ、脚部の規模を考慮して口径38㎝に復元し、蟻無山例の緩く外反する口縁部形態を参考に、残存する底部付近断面と底部径の状況からやや緩やかに立ち上げ、外面に蟻無山例と田井中例に共通する放射状鋸歯文を組み合わせた。

なお、本例の杯部最下段のコンパス文および脚部の波状文はともに左から右の方向へと施文されている。濁り池窯出土器台の波状文の施文方向から製作工程における施文の段階の推定を行った伊藤純・内田好昭両氏の考察(伊藤・内田1995)を援用すると、本例の杯部最下段のコンパス文は杯部の形状が完成し口縁を下に伏せた状態で施され、脚部の波状文もまた天地が反転した状態で施された蓋然性が高い。

３．渡来系の要素をもつ遺物の性格について

渡来系の要素を持つ遺物として、５世紀代のものに、コンパス文須恵器器台と須恵器高杯、小型平底鉢、６世紀代のものに円筒形土器(土製品)および小型平底鉢、陶質土器の可能性の指摘された高杯脚部がある。これらの特徴的な土器の産地推定のために、円筒形土器および小型平底鉢には土器胎土分析を、コンパス文や波状文の施された須恵器器台片については蛍光Ｘ線を用いた分析を、それぞれ対照資料と比較しつつ実施した(第４章参照)。その結果、円筒形土器(土製品)や小形平底鉢では搬入品の可能性が、コンパス文須恵器器台については韓国・山陰・陶邑産の可能性が退けられ、在地産(丸山窯)の可能性が指摘された[4]。

集団はコンパス文や折り返しの入念な流水状波状文を施す初期須恵器と関係し、西播磨在地で初現となる須恵器を製作している。TG232型式期の器台脚部は裾が大きく開き、脚部の透かしは短冊形のものを千鳥状に配置するなどの特徴から、陶質土器の特徴を色濃く反映させた機種と言える(岡戸1995)。本遺跡や他遺跡におけるコンパス文の施文された須恵器器台の形態はTG232窯では少数派のタイプ(大庭寺分類Ｇ類)に限定される可能性が高い。大成洞２・３号墳や礼安里117号墳(釜山大学校博物館編1993)といった金海地域の陶質土器器台には、コンパス文は施文されないもののまさしくこのＧ類の特徴がよく認められる。また、一須賀窯跡の須恵器器台ではＧ類が主体となる状況も認められる。わが国でのコンパス文と流水様波状文を持つ須恵器器台の出土遺跡の分布を第23図に示した。一須賀窯跡でヘラ描きコンパス文を持つ器種が多数出土しているのを除くと、コンパス描きコンパス文須恵器器台が１遺跡から確実に複数個体出土している例はない。例えば陶邑周辺に集中が認められるというような地域的な偏りもなく、要所要所の地域に拠点的な分布のあり方を見せる。

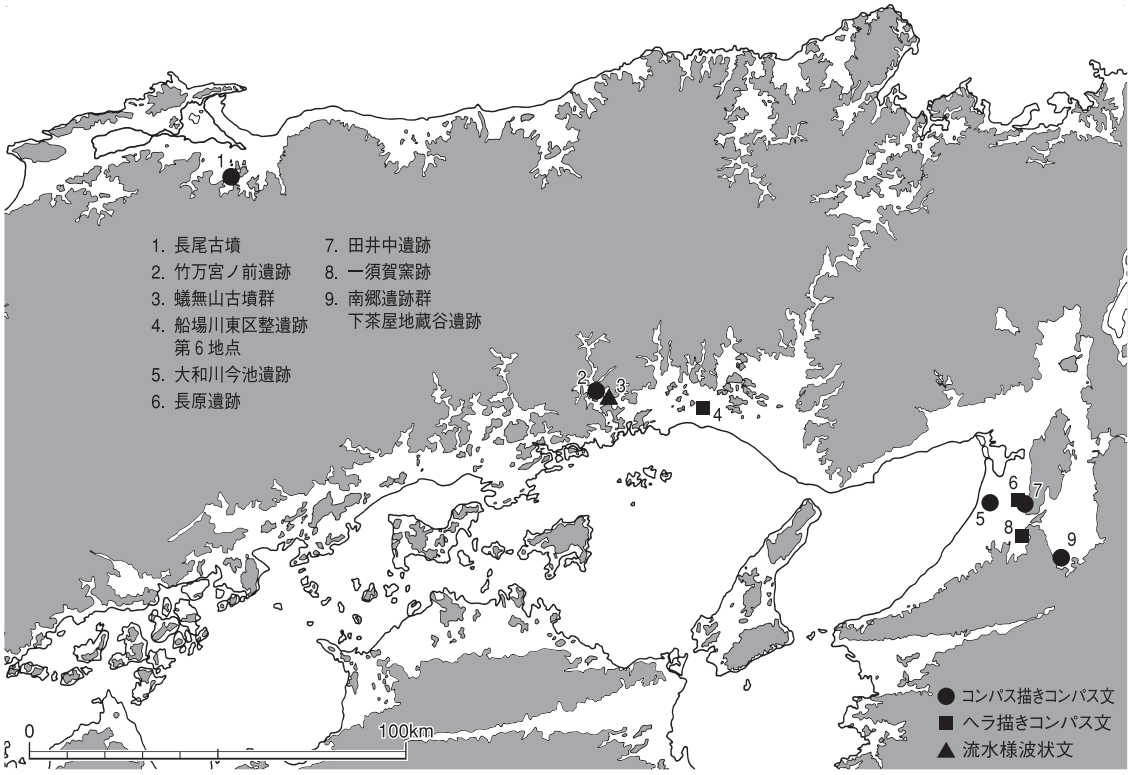
須恵器器台に施されたコンパス文・波状文や器形を比較したが、それが必ずしも帰属時期の新旧や一元的に集団の故地から到達した先の経路や到達の先後関係を示すとは限らない。集団の出自や複数の系譜の複合を示す可能性もある。ただし、古墳時代中期において竹万宮ノ前遺跡や蟻無山古墳群にはさほ

どクッションをおかず到達している可能性は考えられる。一須賀例や長原例のヘラ描きコンパス文のプロトタイプとみられる陶邑産大和川今池例や田井中例の集団と同時か前後する時期に西播磨に到来している段階が想定される。各地に到達した集団と同出自ないしは若干の系統を違えるものの韓半島洛東江下流域を故地とし、陶邑を介さずに西播磨に到達した直接渡来型（亀田 1993）の移住集団として、千種川を遡ってきたのかもしれない。想像をたくましくすれば、各地域において須恵器生産などを開始するために必要とされた技術者が韓半島から招聘され、自らが保持しあるいは死後古墳に伴うような器台を製作した際に、故地である金海周辺の文様を施しアイデンティティの表示がなされたのではないか。

大成洞古墳群の詳細な時期比定は困難であるが、2号墳は4世紀末、3号墳は4世紀後半との見方も存在する（早乙女 2000）。本遺跡例は包含層資料であり、他のコンパス文も施文された須恵器器台も包含層資料や表採資料が多い。採集資料の中でも、本遺跡例に近い蟻無山古墳群では円筒埴輪が川西編年Ⅲ期（一部Ⅳ期）のものが見られ（松岡 1979）、早く見積もって5世紀前半代の所産である可能性が考えられる。またヘラ描きコンパス文について、一須賀2号窯はTK73型式の前半段階に位置づけられ、長原例は田中清美氏によりTG232型式期からON231型式期に属す年代観が与えられている（田中 2007）。これらのことから、コンパス描きコンパス文はわが国にTG232型式期頃に導入された可能性が想定される。昨今の年輪年代測定の成果により、TG232窯の操業開始年代が4世紀末にさかのぼりつつある（田中 2006）。

一方、高杯（114）は脚柱と裾の境界と裾端部にそれぞれ突帯をめぐらす初期のタイプである。TG232段階にも裾の傾斜が急なものは含まれるが、多くは裾の傾斜がもっと緩く、若干後出する大庭寺1-OL溜り出土例に近い形態（大きく言えばTK73型式段階であるが、TK73とTK83の過渡的様相）である。

本遺跡では、他の渡来系要素を帯びる遺構・遺物としては小型平底鉢および円筒形土器があるが、甑や蓆状文の施された甕などを含めたセットは認められない。しかしながら、小型平底鉢がわが国の食生活には受容されず、渡来人やその子孫の存在した傍証として積極的に評価されうる（亀田 1985）。しか



第22図　コンパス文・流水様波状文の施された須恵器器台出土分布図

も、小型平底鉢は古墳時代中期と後期の２時期のものが認められ、ともに底部が丸みを帯びたり、中期のものでは底部にまでタタキが及ぶなど、若干の変容が認められる。

また、６世紀代では、円筒形土器（土製品）は搬入品の可能性が指摘され、竪穴住居内の調理施設であるとともに住居構造を渡来的要素で構成する備品である。少なくとも、円筒形土器（土製品）と小型平底鉢の存在により、これらの使用者が在地の人々と異なった生活様式を伴った集団として区別されてよいのではないか。また、小形平底鉢に若干の変容が認められるとともにこの竪穴住居跡には在地産の須恵器杯身が伴う一方で、包含層から出土した６世紀のものと考えられる高杯脚部は、半島産すなわち陶質土器の可能性が指摘されている（第４章）。陶質土器高杯や円筒形土器を携えて他地域から赴いた集団が、前代に移住者が存在するなど渡来系集団を受容しうる素地の形成された状態の集落に入り込んでいき、現地に適応していく状況もうかがえる。

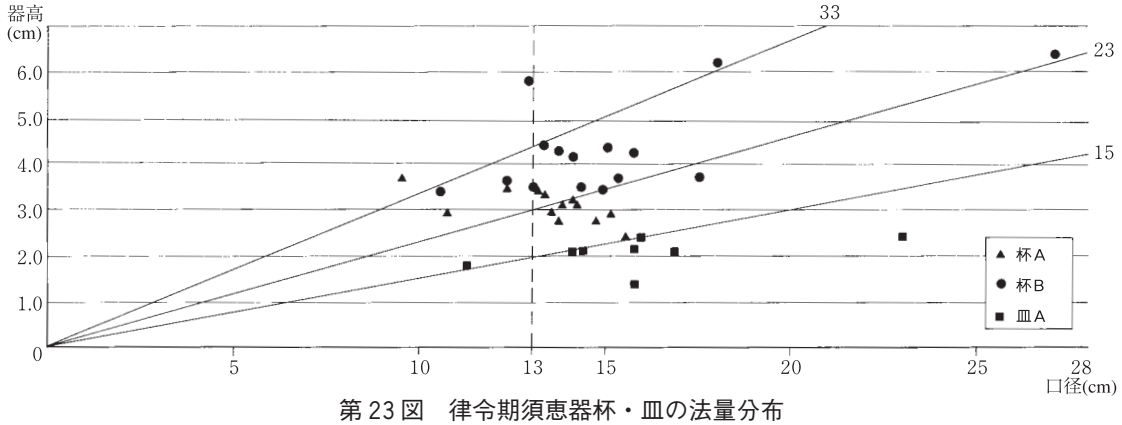
第３節　律令期の遺構・遺物について

律令期の遺構では掘立柱建物跡は検出されず、柱穴列１・２やSK07およびSD02といった調査区中央部付近に律令期の土器を出土する遺構の一群が認められた。

須恵器の特徴を概観すると、まず杯Ｂ蓋では天井部が平坦化するものの端部にかけての外反化が進んでいないが、一方で杯Ａの底部は平坦化が進んでいるものとそうでないものの両者があり、杯Ａ・Ｂともに口縁の開き具合も一様ではなく、杯Ｂでは例えば同じ柱穴列１においても高い高台がやや内側につく233と低い高台が外周端近くにつく90が共存するなど、時期幅が考えられる。

杯Ａ・杯Ｂ・皿Ａの器高および直径の法量分布の相関関係を第24図に示した。杯Ａと皿Ａは高さ2.4㎝、口径指数15付近で分かれ、杯Ｂは径高指数23～33の範囲に集中する。杯Ａ・Ｂには器高の高い一群と低い一群が認められず、平城Ⅳ以降の両者が一体化し区別がなくなる傾向（玉田・岸本1993）に合致する。杯Ａ・杯Ｂの口径も13㎝以上に集中する傾向も認められるが、大小の法量分化もさほど明瞭ではない。

SD02出土土器や、包含層出土の278・282・283・287など９世紀代に下るものも一部含まれるが、概ね８世紀中葉から後葉に属すると思われる。なお、特異な形態を持つ稜椀４点について蛍光Ｘ線分析を行った結果（第４章第２節）、279・280の体部下位で直立気味に立ち上がり口縁近くで外反する森内氏の中谷分類Ｌbタイプ（森内2000）に近いものは、加古川・相生群両群の重複する分布領域にある。ただし森内氏によれば、加古川市志方窯跡群の中谷４号窯や投松６号窯の出土例に比べて底部の平坦化や直立気味に立ち上がり、短く屈曲した口縁がわずかに内湾し口縁端部が上方に跳ね上がり気味の形状が特有であるという。また、体部最大径付近に帯状にミガキを施す稜椀125・281は、分布領域が相生群



第23図　律令期須恵器杯・皿の法量分布

と合致した。森内氏によりこの資料の類例が竹原窯址群西後明窯採集品に存在するとのご教示を頂いた。

特筆すべきものとして、古大内式Ⅱ型（小犬丸式）の軒丸瓦片が出土した。日常的什器の時期より若干後出する感はあるものの、ほぼ同時期の所産と考えてよいだろう。調査区の北側を古代山陽道の推定ルートとみる説もあるが、瓦葺きの建物に見合った官衙的ないし寺院関係の遺構も存在せず、この軒丸瓦の由来に関しては解釈に窮するところである。ただし、1点のみながら円面硯（119）が出土しており、役所本体でなくとも関連する何らかの施設が存在した可能性も想定されるが、あくまで想像の域は出ない。

第4節　平安時代後半期の遺構と遺物について

平安時代中期から鎌倉時代末期頃にかけての遺構・遺物が認められるが、11世紀代から12世紀代にかけてのものが中心となる。特にSB07では、11世紀前葉から中葉にかけての土師器椀C1・小皿・托状皿や須恵器小皿が多く出土し、周辺（杭No.2～3）の包含層からも同様の遺物の集中が認められる。

これら各遺構の変遷を概観するために、遺物の椀類と皿類について若干の検討を行った。

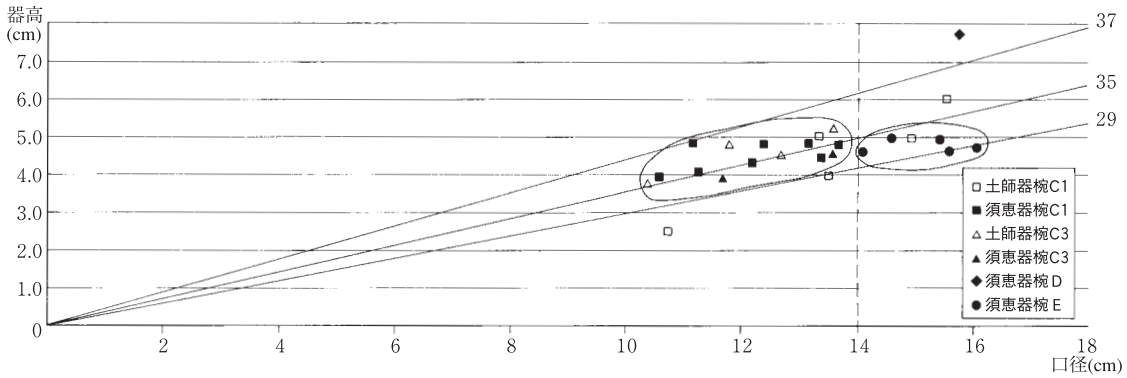
椀類であるが、須恵器・土師器の各椀C1・C3と、須恵器突帯椀の椀D、それから須恵器椀の底径の大きいものを新たに椀Eとして、器高および直径の法量分布の相関関係を示したのが第25図である。

全体を通して器高は5㎝を超えるものは須恵器椀Dを除きほとんどなく、ほぼ4～5㎝の範囲に集中している。口径と器高指数に着目するとまず、E類が口径14.1～15.6㎝、器高指数が28.8～34.2の範囲内に収まり、竹原4号窯の椀類同機種の分布と合致する。なお、底径は6.6～8.9㎝である。次に須恵器椀C1は10.6～13.6㎝、器高指数が33.2～36.8の範囲内に収まる。須恵器椀C3は2点のみであるが、須恵器椀C1の分布範囲内に収まり、器高指数は33.3と33.5である。土師器椀C3も須恵器椀C1の分布範囲に収まるが、器高指数は36.1～40.7とやや高めである。土師器椀C1は口径15㎝前後のものが加わり、器高指数も23.7～38.9と幅広い。これらの範囲は落矢ケ谷1号窯の須恵器椀C1の範囲と重なり、また大陣原窯跡の須恵器椀C1のうち小型のものの分布範囲とも合致する。これらは森内氏の年代観（森内1995）によれば、11世紀後半から12世紀前半の範囲に合致する。

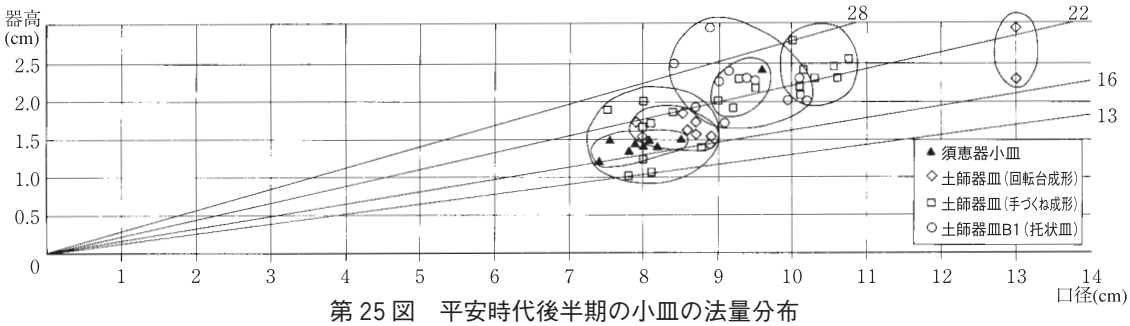
須恵器小皿を含めた皿類の器高および直径の法量分布の相関関係を示したのが第25図である。

このうち須恵器小皿では、大半が直径7.4㎝～8.5㎝に収まり、器高が低いため器高指数も16.2～19.9と最もコンパクトな分布範囲に収斂する。ついで、手づくね成形による土師皿の大半が直径7.9㎝～8.9㎝、器高指数15.7～21.8と、須恵器小皿より若干法量の大きめの分布範囲となる。

回転台成形の土師器皿では、器高指数12.8～28.0の範囲内で、器高指数は14および22付近に集中が認められる。分布範囲は大きく3群に分かれる。最も小さなものは口径9㎝以下のまとまりで、須恵器



第24図　平安時代後半期の椀の法量分布



第 25 図　平安時代後半期の小皿の法量分布

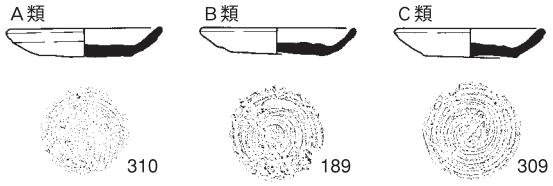
小皿と手づくね成形土師器小皿の集合域を合わせた範囲を包括する。もう 2 つは中間の 9 ㎝台のもの、10 ㎝台の大きなものに分かれる。回転台成形土師器小皿の縮小化傾向について、口径は 11 世紀中葉に 10 ～ 11 ㎝、11 世紀後葉に 9～10 ㎝、12 世紀前葉で 9 ㎝、12 世紀中葉以降は 8～9 ㎝が中心とされる（菅本 1993）。口径 9～11 ㎝のもののほとんどは底径が 5.0 ㎝～ 6.65 ㎝と小さく、口縁が緩やかに開くものが大半を占めるが、60・61 では底径が 7.2 ㎝、7.8 ㎝と大きく、立ち上がり気味に開く形態である。

托状皿（皿 B1）は底部が回転糸切りによって切り離される「円柱状」の平高台を持ち、皿部はわずかに内面がくぼむ程度の器形が特徴的である。SB07 の柱穴埋土内を中心に付近の包含層からの出土に限定されている。底径の小さいもの（5.1 ㎝以下）では底部が外側に踏ん張るものが多く、307・308 のように円柱高台の高いものが認められる。11 世紀代において、円柱高台の径は小さく、高台は高くなり、皿部の退化（深さおよび口縁の開き具合と長さ）が進行する傾向が認められるようである（岸本 1994）。

ところで、須恵器小皿の回転糸切り痕跡のうち、底面に切り離しに用いられた糸の撚りの軌跡が典型的な指紋状の痕跡を留めるのは 190 と 310 のみで、淡い灰白色を呈する（A 類）。一方、189 は糸の撚りの軌跡がやや幅の広い指紋様の痕跡を留め、かなり濃い青灰色を呈する（B 類）。また、194～196・309 は螺旋状の糸の撚りの軌跡が認められ、青灰色を呈する（C 類）。回転糸切りによる底部切り離し方法について実験にもとに技法の復元を試みた小川貴司氏の分類（小川 1979）によれば、A ～ C 類はいずれも「離し糸切り」に該当する。「離し糸切り」は両手で糸切りを開始し途中で片手を離す手法であるが、小川氏によれば片手を離した後の切り離しには、次第に轆轤の回転力を利用するようになるという。切り離しの間の轆轤の見かけの回転角度は、A 類（310）では 229°と 1 回転強であるが、B 類（189）は見かけの回転角度が 281°と 1 回転半を上回り、C 類（309）に至っては、ほぼ 3 回転半もの回転が観察される。つまり、A 類→B 類→C 類の順に切り離す際の轆轤の回転速度が速く、換言すればこの順に切り離しに轆轤の回転を利用する比重が高くなっている。

これらの底部切り離し痕跡の差異は、生産地もしくは窯、工人の相違を反映している可能性がある。土師器小皿や托状皿、須恵器小皿などの生産に関しては、森内氏により播磨や丹波では煙管状窯において須恵器工人が補完的に土師器生産を行った可能性が指摘され（森内 2007）、例えば大陣原窯跡においても須恵器を焼成する窯に付属する小規模な窯で土師器椀・小皿が焼成される（種定他 1995）など、須恵器椀類とは異なった生産ラインが存在した可能性が考えられる。

これらの土器の特徴から考えられる各遺構の時期については、報文中に示したとおりである。11 世紀代は遺構の分布が調査区南部において主体となり、12 世紀代には調査区南部北側から調査区北部にかけてに移動していることが看取される。



第 26 図　須恵器小皿底部糸切りの各種

注

1）金関恕氏より、『淮南子』に龍の上に蛇が乗って天に昇るというくだりがあるとのご教示を賜った。斜格子文の区画に立つ動物を蛇とするには足が問題となるが、乗っている状況を強調するために足が描かれたとも考えられる。

2）当博物館の種定淳介が2001年度の本発掘調査時に復元した施文具を再現し、粘土を用いてコンパス文を施す実験をした。

3）田井中例に関しては、財団法人大阪府文化財センター資料活用課のご厚意により、実見する機会を得た。

4）那波野丸山窯跡では3号窯が最古でありTK23型式併行とされる（森内1989）。本遺跡のコンパス文の施された須恵器器台とは2型式以上の隔たりがあると考えられ、より古い窯跡の存在を想定する必要がある。

5）大庭寺分類G類の形態を特徴的に復元に反映させるならば、脚部上部径とともに杯部底部径を大きくし、杯部体部を直立気味に考えたいが、残存する杯部体部下端において屈曲が積極的には認められないため、口径38㎝の通有形態を効果的に支えうる最小限の脚部上部径の範囲内を取り、16㎝と小さくすることにした。

6）大庭寺分類G類が少数派であるにもかかわらず、TG231･232窯の器台の法量の傾向を参考にするのは、一見タイプの異なる器形の属性を抽出してしまいむしろ不適合な要素となる可能性を内包するが、G類の完形品となる例に恵まれず傾向を窺い知れない現状と、タイプは異なるものの杯部口径や脚部上部径などは器台を構成する例えば杯部を脚部が支える力学的要素など製作上基本的な必要条件として想定しうることから、あえて傾向を援用した。

参考・引用文献

尹世英1976　「味雛王陵地区第9号区域（A号破壊古墳）発掘報告」文化財管理局『慶州地区古墳発掘調査報告書』第一輯　社団法人韓国文化財普及協会

伊藤純･内田好昭1995「波状文の施文方向から見た須恵器高杯形器台の製作手順」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』財団法人大阪府埋蔵文化財協会

江野道和（編）2005『潤地頭給遺跡』前原市文化財調査報告書第89集　前原市教育委員会

大庭重信（編）2005『長原遺跡発掘調査報告』XⅡ　財団法人大阪市文化財協会

岡田章一･長谷川眞2003「兵庫津遺跡出土の土製煮炊具」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第3号　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

岡戸哲紀1995「第Ⅶ章遺構・遺物の検討　第1節TG232号窯の初期須恵器」『陶邑・大庭寺Ⅳ』㈶大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第90輯　大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会

小川貴司1979「回転糸切り技法の展開」『考古学研究』第26巻第1号　考古学研究会

甲斐昭光1990「弥生後期土器の編年」『周世入相遺跡』兵庫県文化財調査報告書第70冊　兵庫県教育委員会

亀田修一1993「考古学から見た渡来人」『古文化談叢』第30集（中）　九州古文化研究会

岸本一宏（編）2002『上脇遺跡Ⅰ』兵庫県文化財調査報告第232冊　兵庫県教育委員会

岸本道昭1998「播磨弥生後期前半土器の実態と編年」『小神辻の堂遺跡』龍野市文化財調査報告20　龍野市教育委員会

小柴治子2001「和久遺跡」『第4回近畿弥生の会　奈良場所』（発表資料）　近畿弥生の会

近藤康司1985「第Ⅳ章　第Ⅱ区の調査結果」岸本道昭・岡戸哲紀（編）『陶邑・伏尾遺跡　A地区』㈶大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第60輯　大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会

早乙女雅博2000「金海の古墳」『朝鮮半島の考古学』世界の考古学⑩　同成社

志水豊章・岸本道昭1991『有年考古館蔵品図録』財団法人有年考古館

申敬澈・金宰佑2000『金海大成洞古墳群Ⅰ』慶星大学校博物館研究叢書第4輯　慶星大学校博物館

田中清美2006「初期須恵器生産の開始年代」『韓式土器研究』Ⅸ　韓式土器研究会

田中清美2007「長原遺跡の初期須恵器」『2005年度共同成果報告書』財団法人大阪府文化財センター

田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店

種定淳介・吉田昇・池田征弘1995『大陣原古窯跡群』兵庫県文化財調査報告第140冊　兵庫県教育委員会

玉田芳英・岸本直文1993「平城宮土器研究の現状」『平城宮発掘調査報告XⅣ』奈良国立文化財研究所

朝鮮総督府1924『慶州金冠塚と其遺寶』古墳調査特別報告第三冊

中田宗伯2003「千種川流域出土の吉備系土器」『東有年･沖田遺跡』赤穂市文化財調査報告書56　赤穂市教育委員会

坂靖2007「筒形土製品からみた百済地域と日本列島」小笠原好彦先生退任記念論集刊行会（編）『考古学論究』真陽社

福井優（編）2008『渡来人の考古学』（平成20年度秋季企画展展示解説）姫路市埋蔵文化財センター

堀江門也･中村浩1980「一須賀古窯跡出土遺物について」中村浩（編）『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告書第30輯　財団法人大阪府文化財センター

本間元樹（編）1997『田井中遺跡（1～3次･志紀遺跡（防1次））』㈶大阪府文化財調査研究センター調査報告書第23集　財団法人大阪府文化財調査研究センター

坂靖他2000「下茶屋地蔵谷遺跡」『南郷遺跡群Ⅳ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第七十六冊　橿原考古学研究所

釜山大学校博物館（編）1985『金海礼安里古墳群Ⅰ』釜山大学校博物館遺跡調査報告書　第8輯　釜山大学校博物館

釜山大学校博物館（編）1993『金海礼安里古墳群Ⅱ』釜山大学校博物館遺跡調査報告書　第15輯　釜山大学校博物館

文化財管理局･文化財研究所（編）1985『皇南大塚　慶州市皇南洞第98號古墳北墳發掘調査報告書』文化財管理局・文化財研究所

松岡秀夫1979「赤穂地方の円筒埴輪とその編年」『考古学研究』第26巻第2号　考古学研究会

正岡睦夫1992「1　備前地域」正岡睦夫・松本岩雄（編）『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編　木耳社

村上富喜子（編）2000『大和川今池遺跡（その1･その2）』㈶大阪府文化財調査研究センター調査報告書第53集　財団法人大阪府文化財調査研究センター

森内秀造1989「窯跡資料」相生市史編纂専門委員会（編）『相生市史』第5巻　相生市・相生市教育委員会

森内秀造2000「第8章　まとめ」『志方窯跡群Ⅰ―中谷支群――山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXXⅠ―』兵庫県文化財報告第203冊　兵庫県教育委員会

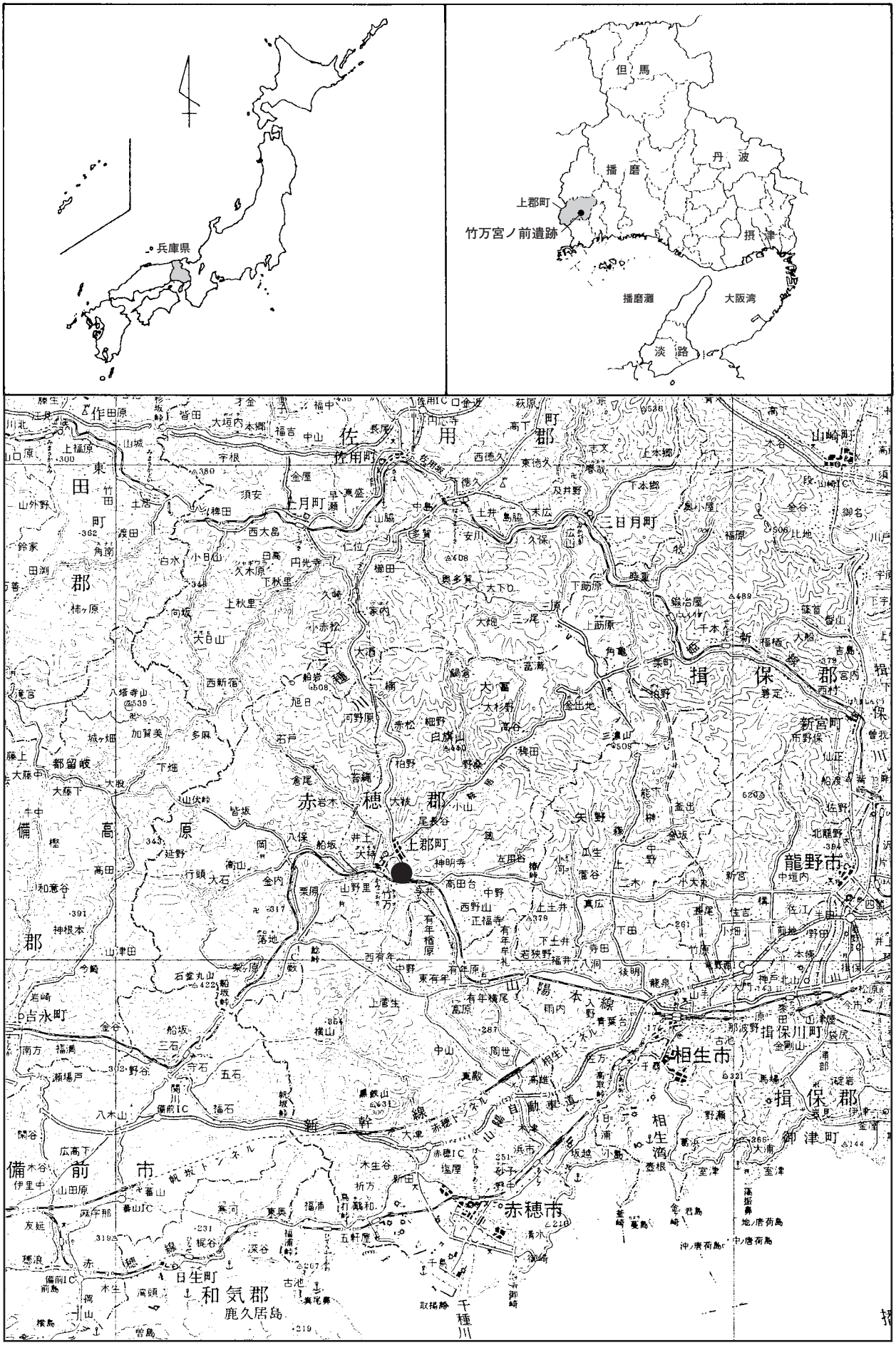
森内秀造2001『志方窯跡群Ⅰ―投松支群――山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXXⅣ―』兵庫県文化財報告第217冊　兵庫県教育委員会

森内秀造2007「第3章　平松八幡神社窯跡群」森内秀造･鈴木敬二（編）『平松八幡神社窯跡群　平松古墳群　石材大池遺跡』兵庫県文化財調査報告第312集　兵庫県教育委員会

山下史朗1991『大垣内遺跡』兵庫県文化財調査報告第98集　兵庫県教育委員会

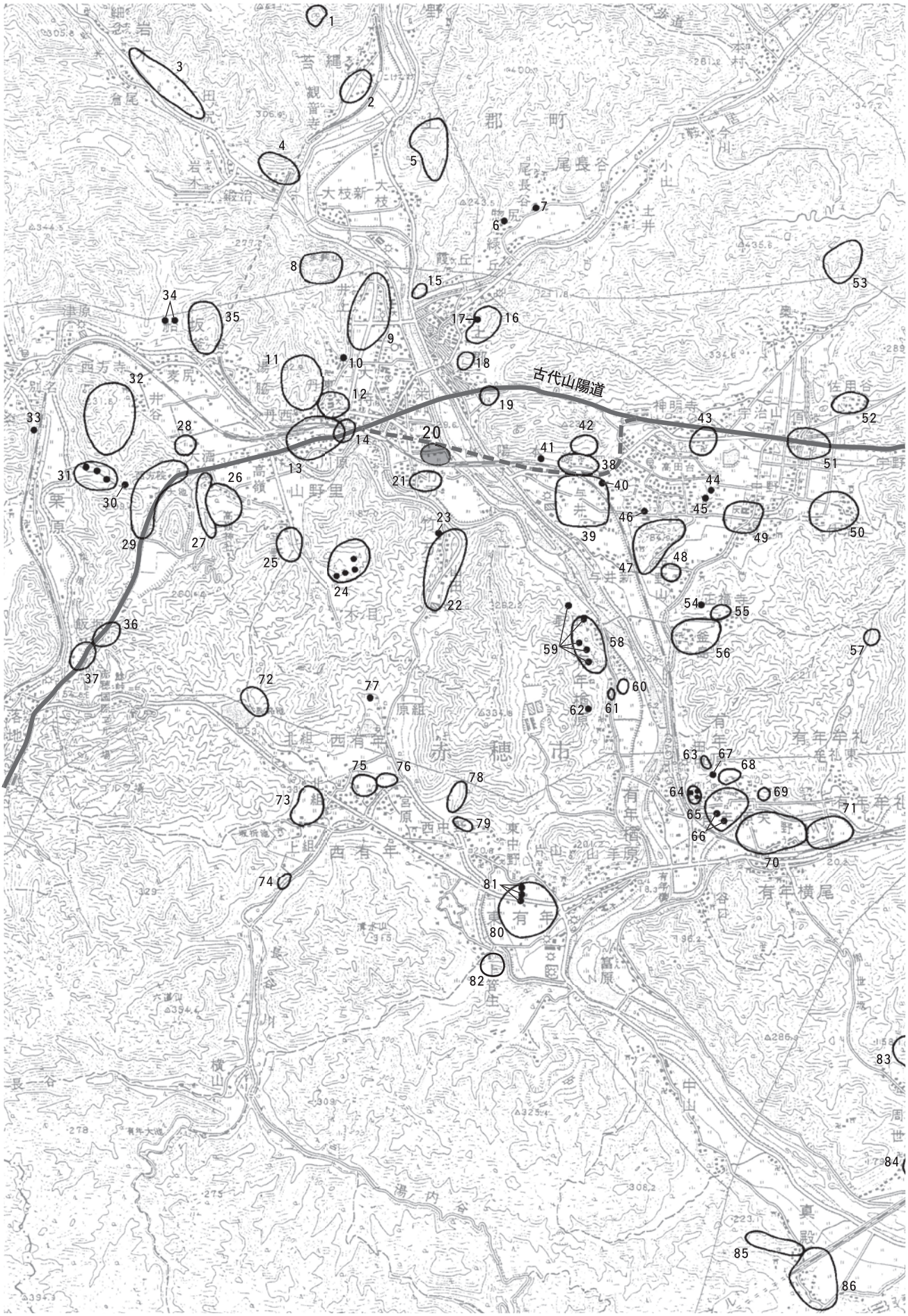
山下史朗1999「第4章　まとめ」『清水遺跡』兵庫県文化財調査報告第183冊　兵庫県教育委員会

図版



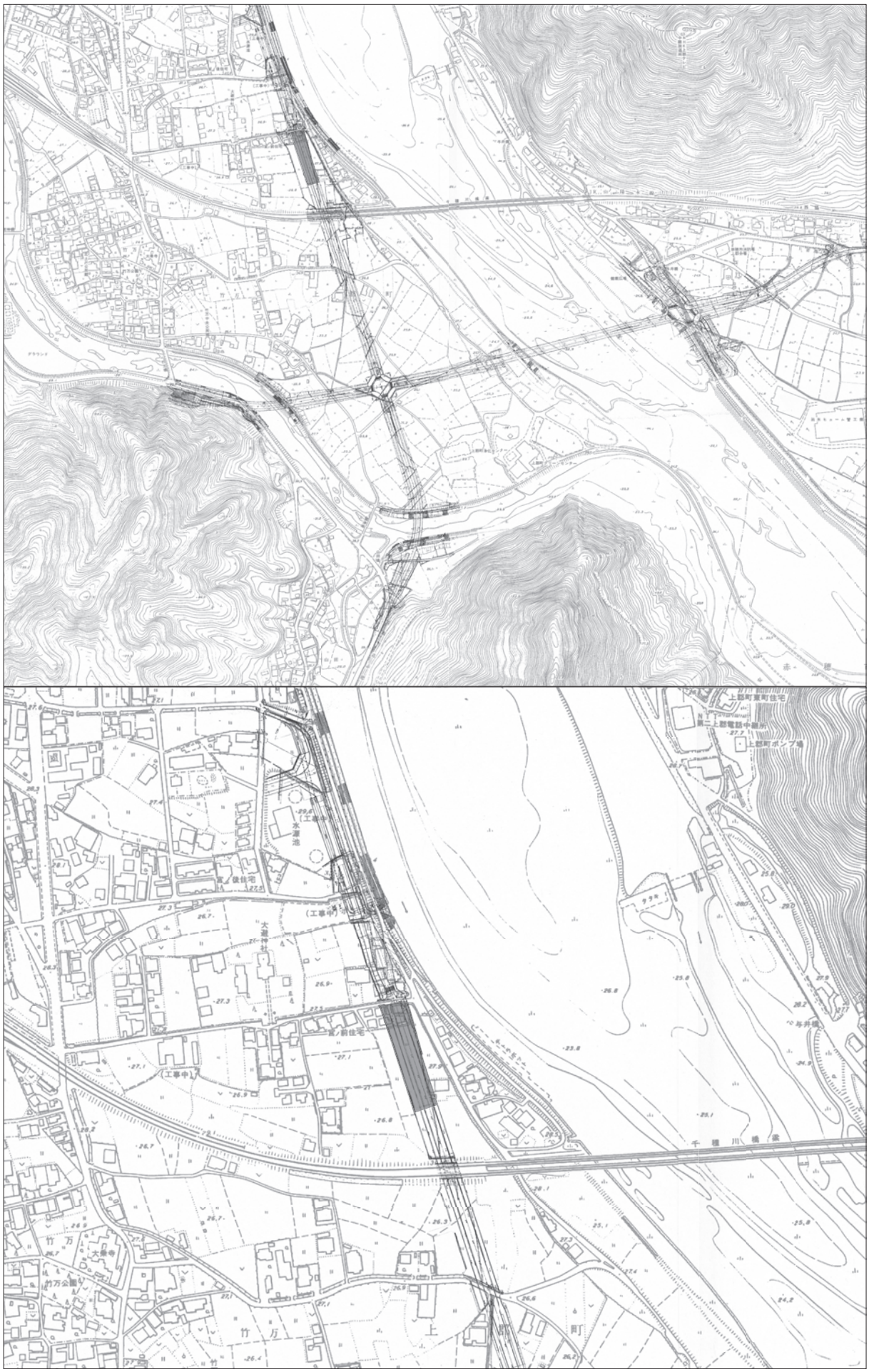
図版1　兵庫県・上郡町・竹万宮ノ前遺跡の位置

図版２　竹万宮ノ前遺跡と周辺の遺跡



S＝１／50,000（番号は第１表（Ｐ６）と対応）

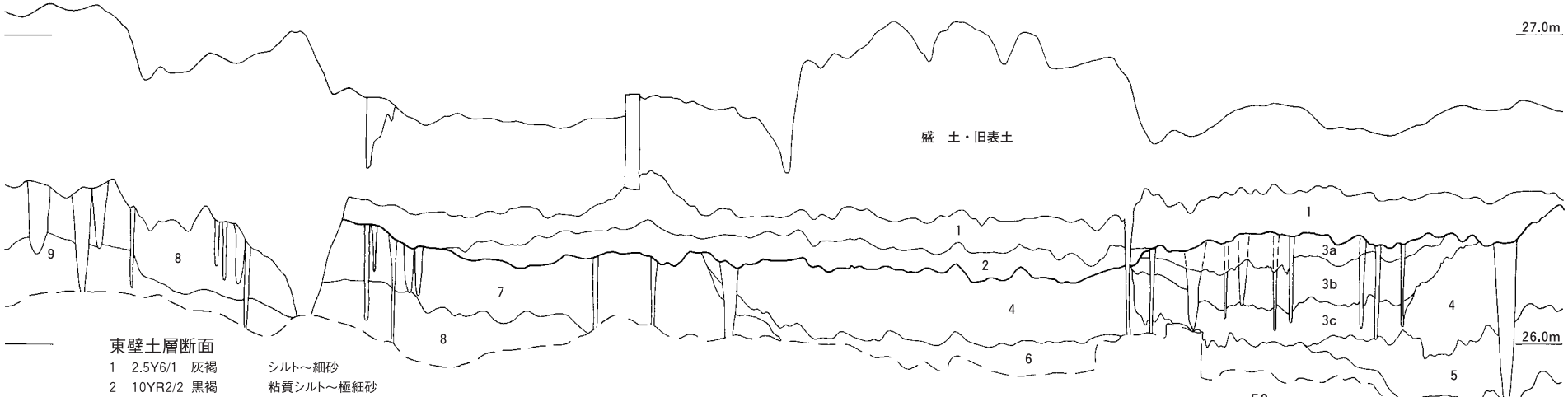
図版3　事業計画地と調査位置



上段　主要地方道姫路上郡線・赤穂佐伯線の事業計画地（S＝1／10,000）
下段　事業計画地と調査位置（S＝1／5,000）

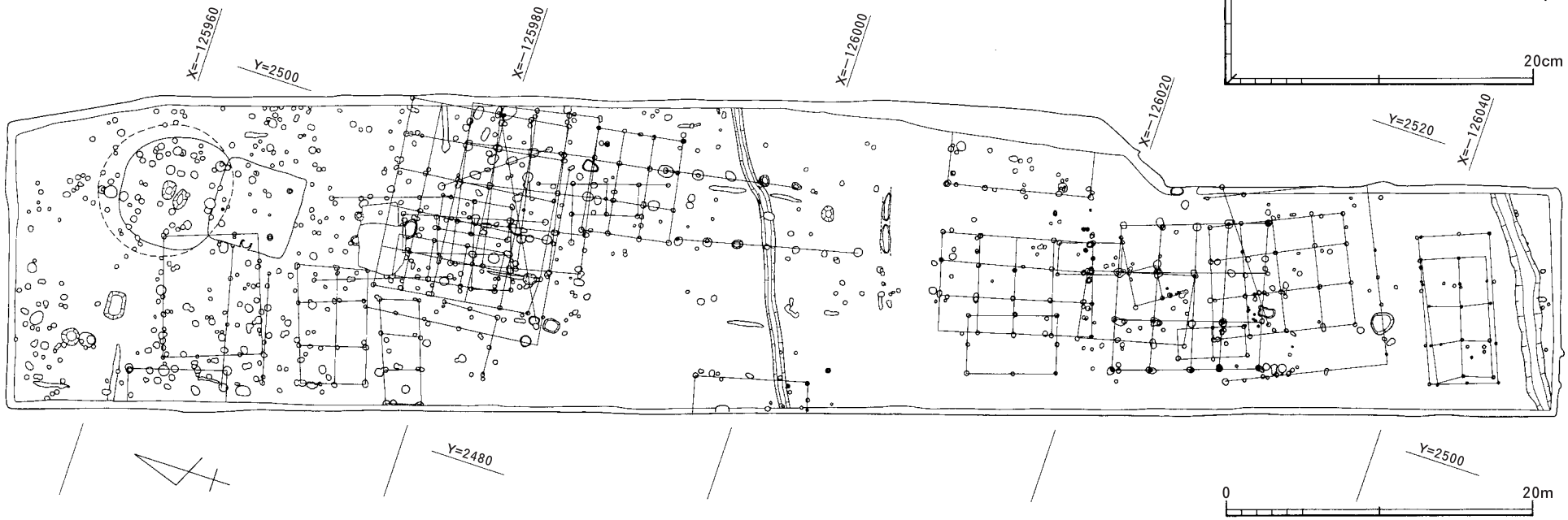
図版４　確認調査トレンチおよび本発掘調査の調査区

図版5　調査区平面図・土層断面図

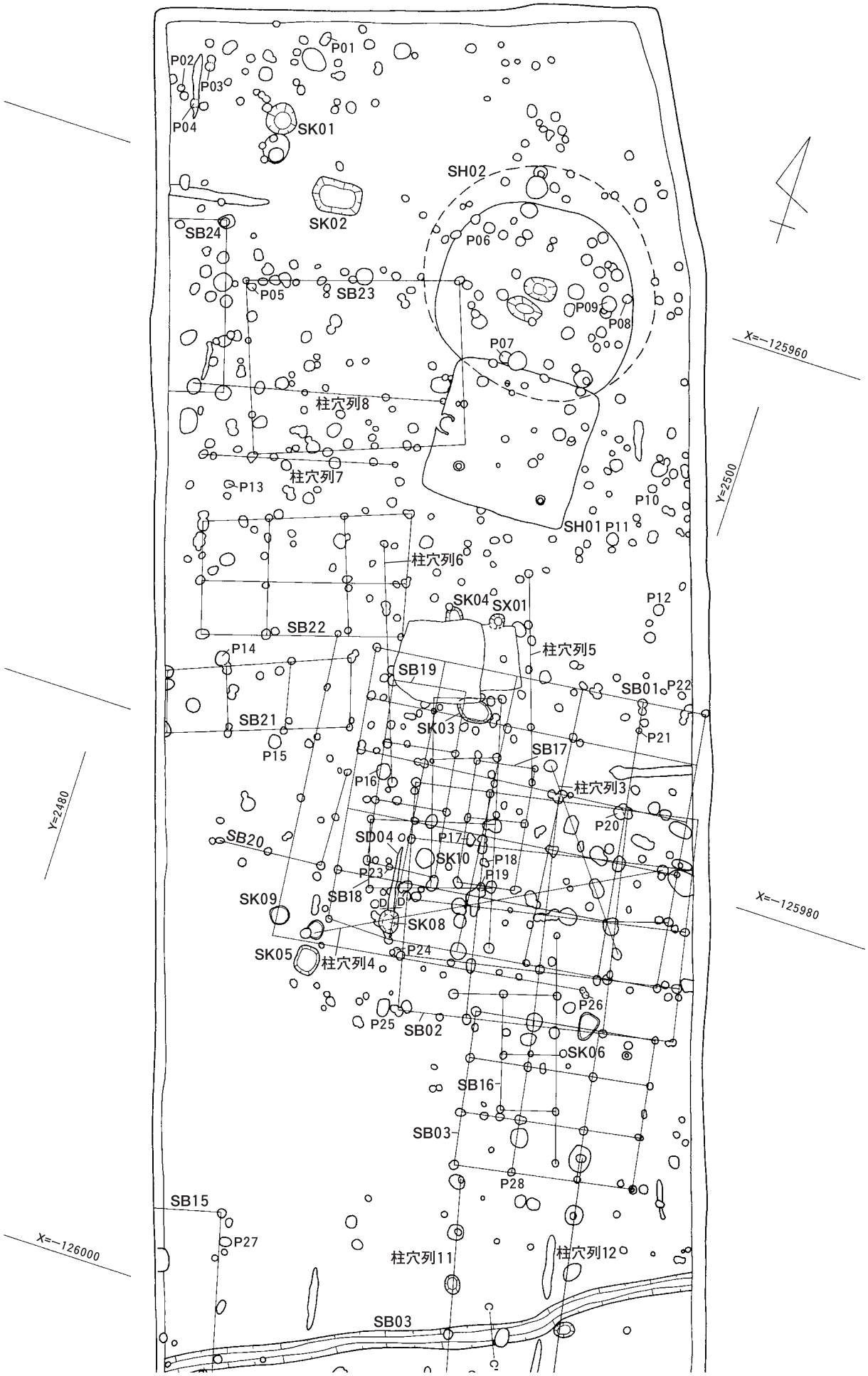


東壁土層断面

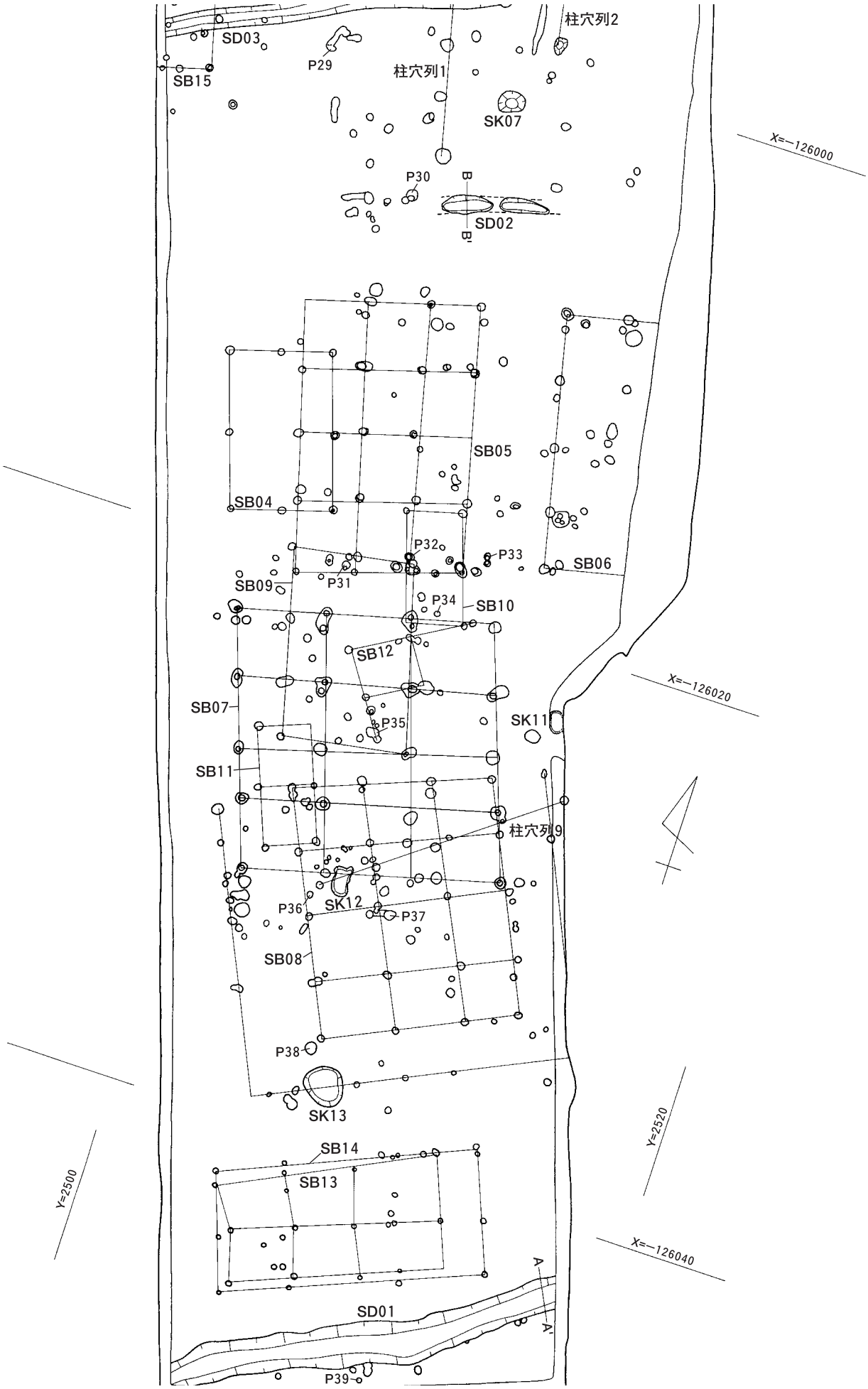
1	2.5Y6/1	灰褐	シルト～細砂
2	10YR2/2	黒褐	粘質シルト～極細砂
3a	2.5Y4/4	灰黄	粘質シルト～細砂
3b	10YR4/3	にぶい黄褐	極細砂～細砂
3c	10YR5/4	にぶい黄褐	極細砂～中砂
4	2.5Y5/3	黄褐	粘質シルト～極細砂
5	10YR4/4	褐	細砂～中砂
6	10YR3/4	暗褐	極細砂～中砂
7	2.5Y5/2	暗灰黄	極細砂～細砂
8	2.5Y5/3	黄褐	細砂～中砂
9	10YR4/3	にぶい黄褐	極細砂～細砂



図版6　調査区北部平面図

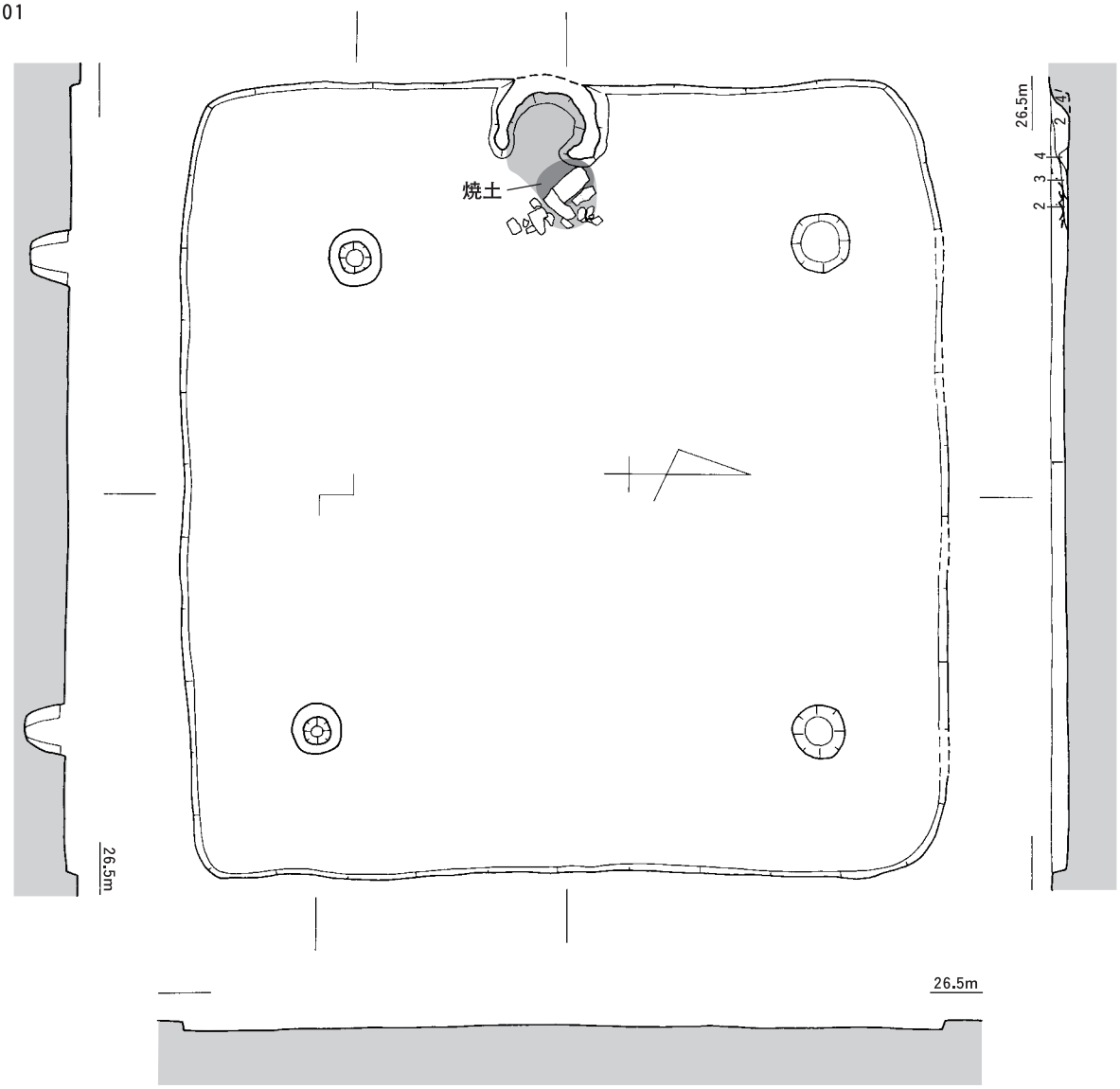


図版7　調査区南部平面図



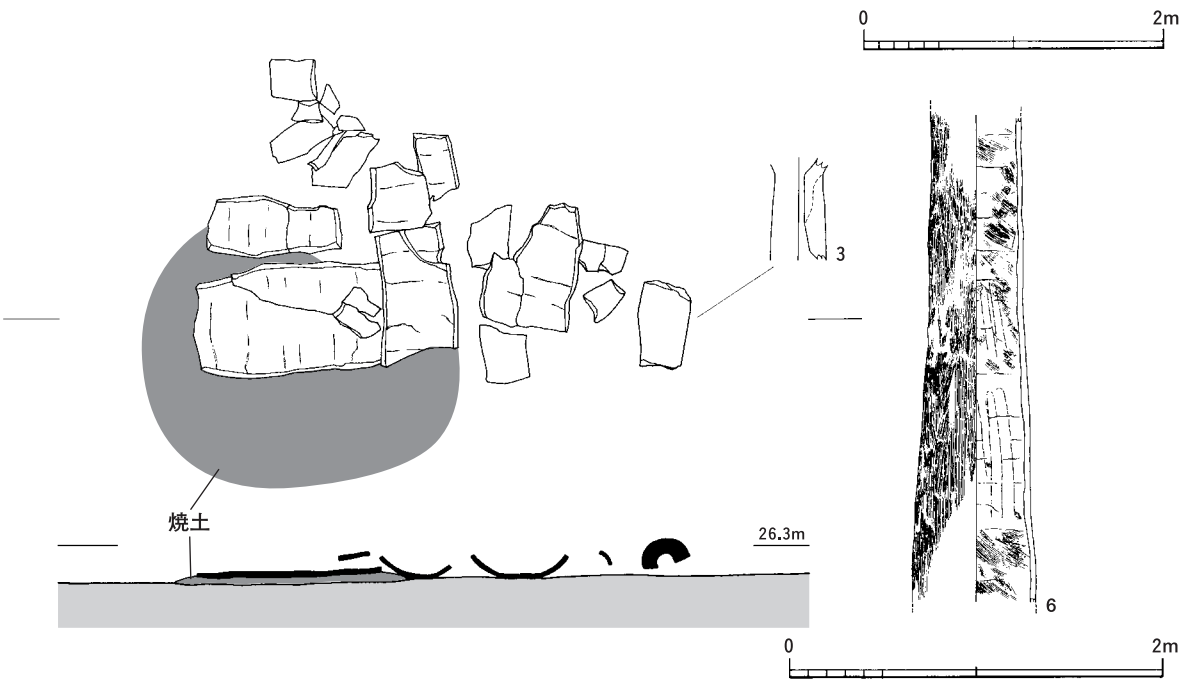
図版8 SH01

SH01



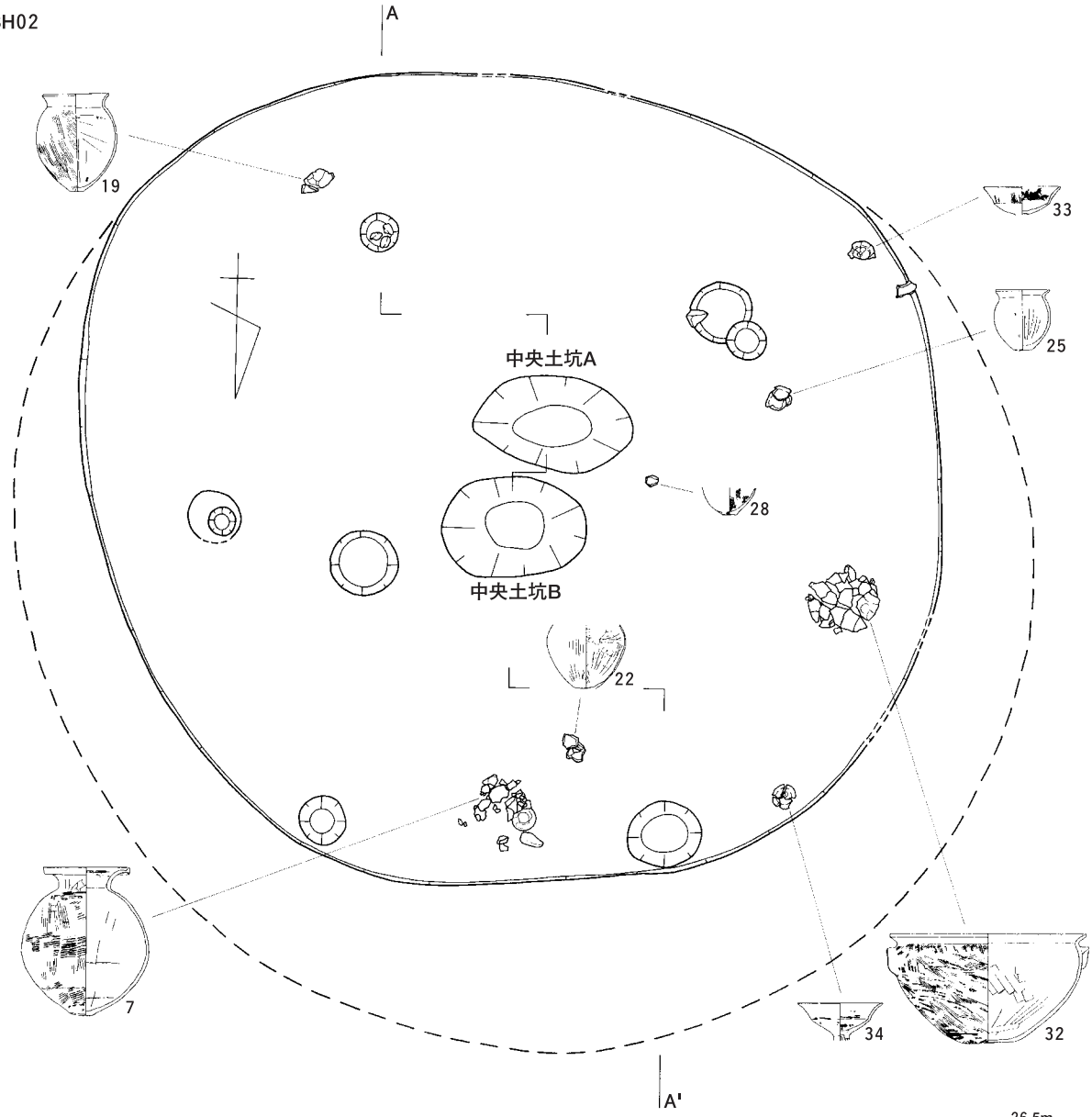
1　2.5Y5/2　暗灰黄　極細砂～細砂
2　10YR4/2　灰黄褐　極細砂～細砂　焼土を散漫に含む
3　7.5YR5/6　明褐　焼土（粘質シルト～細砂）
4　2.5Y4/2　暗灰黄　粘質シルト～細砂

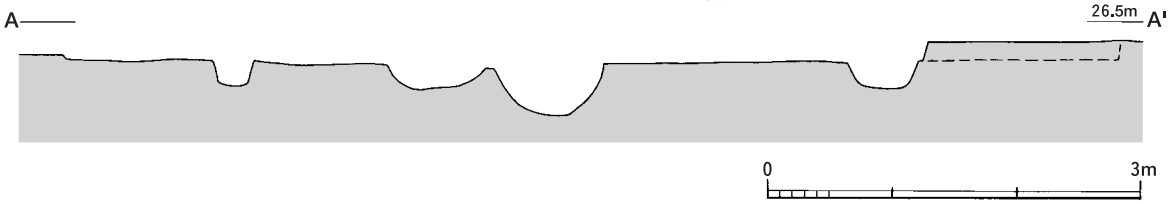
床面土器出土状況

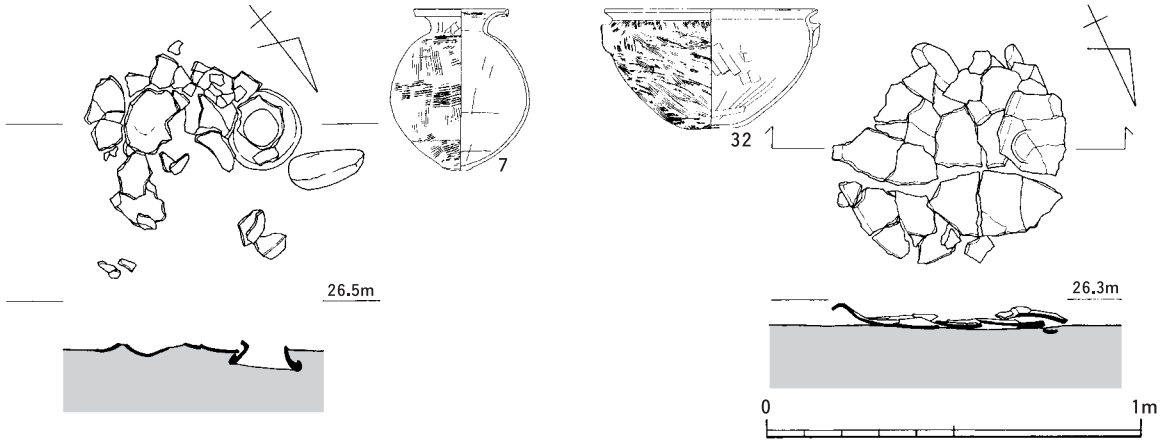


図版9 SH02

SH02





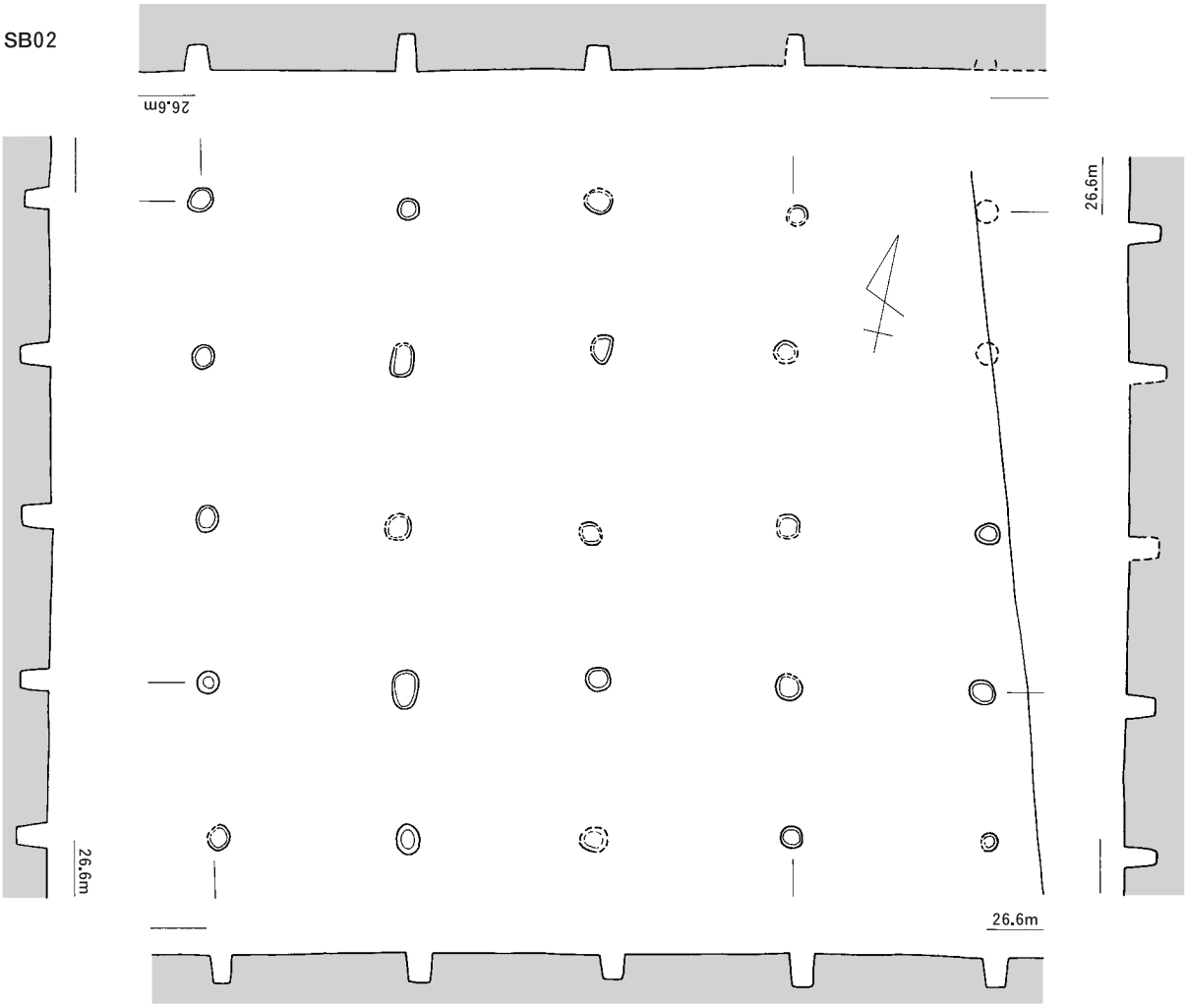


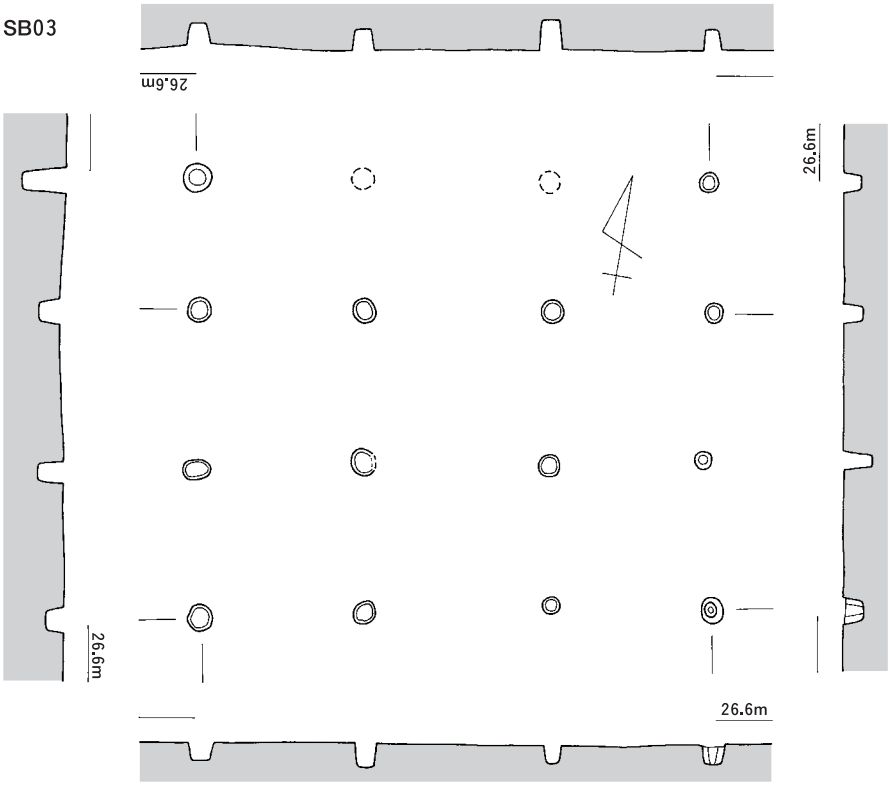
図版10

SB01

SB01

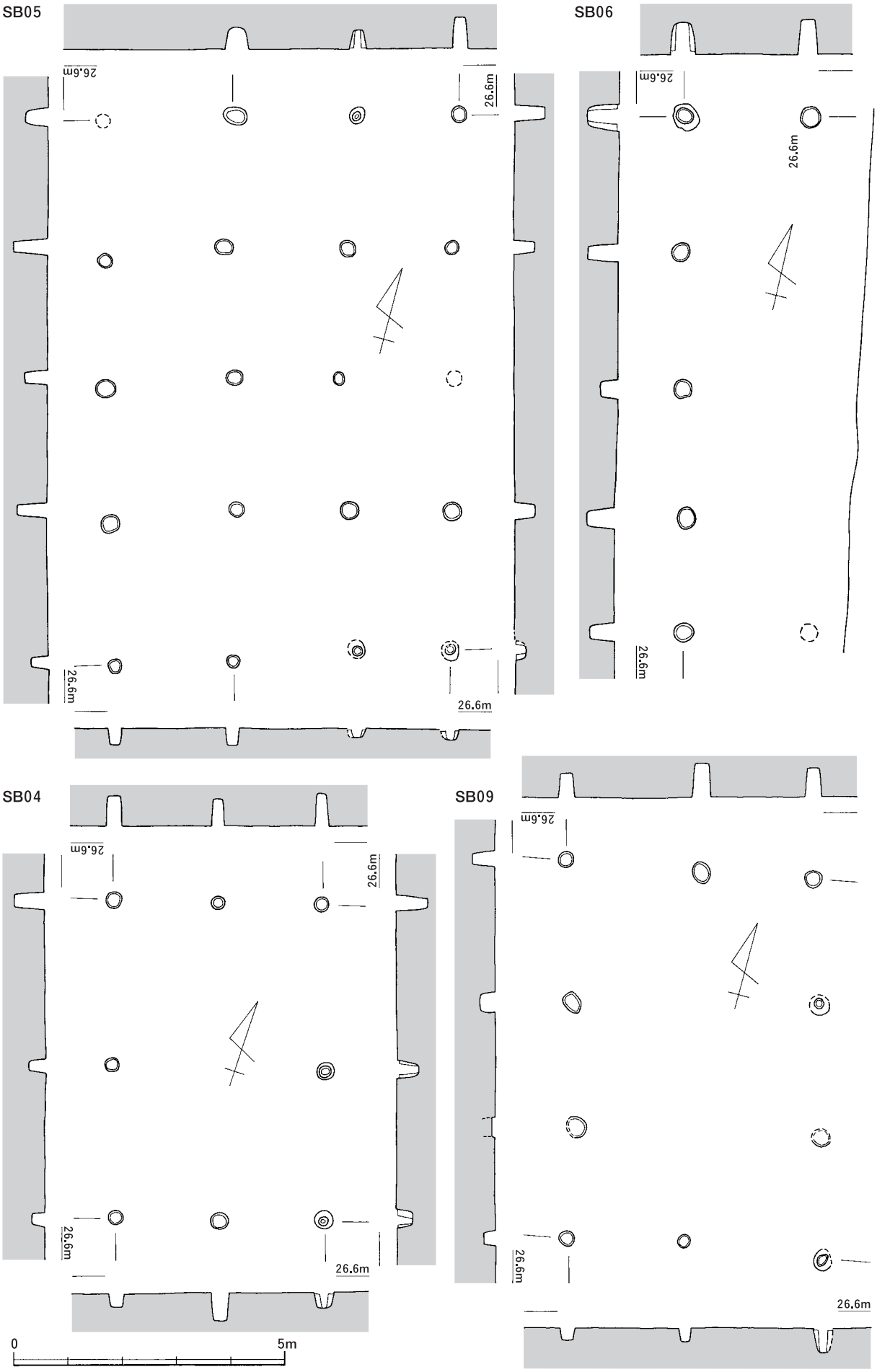
図版11 SB02・SB03



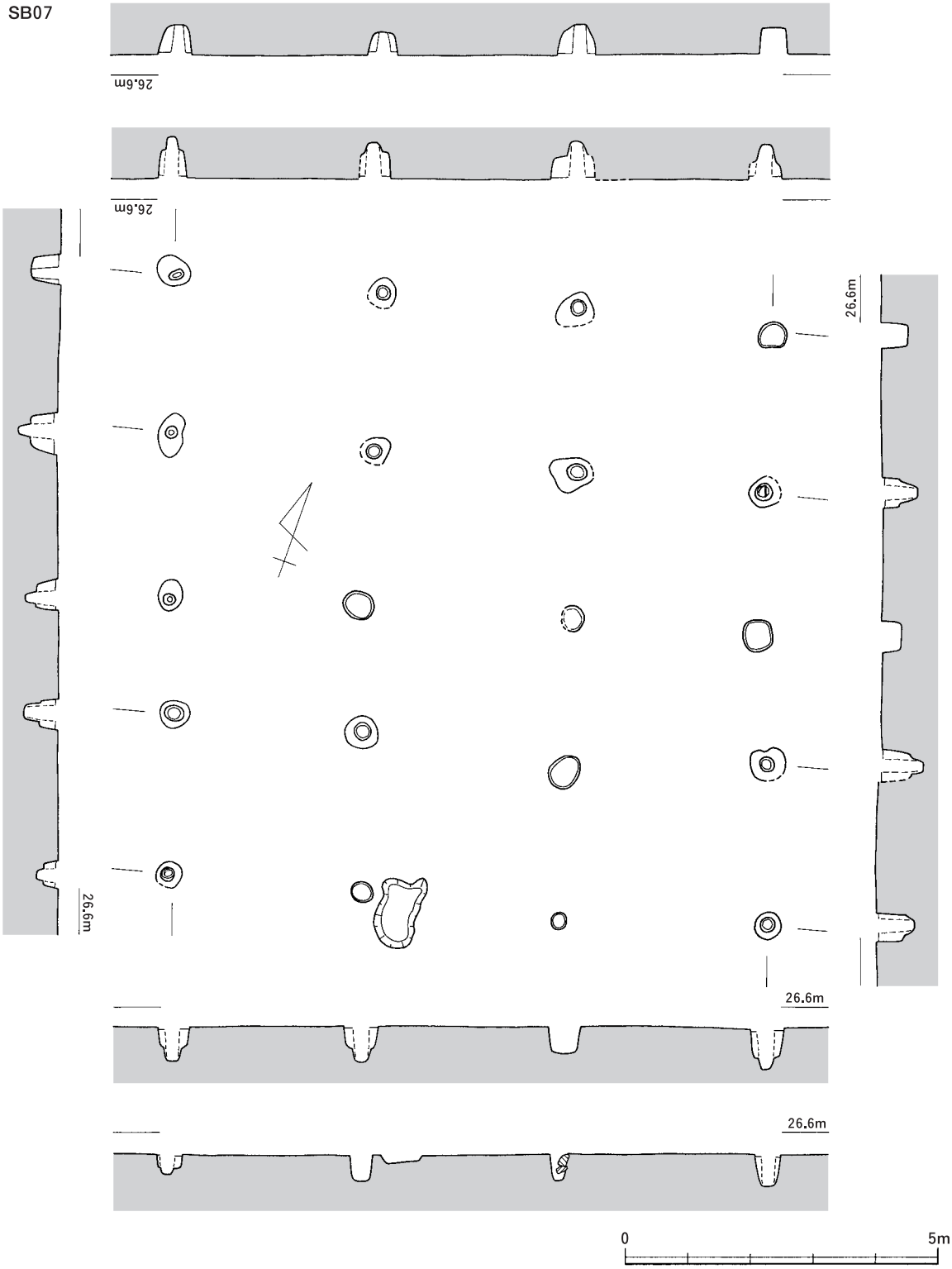


0 5m

図版12 SB04～SB06・SB09



SB07

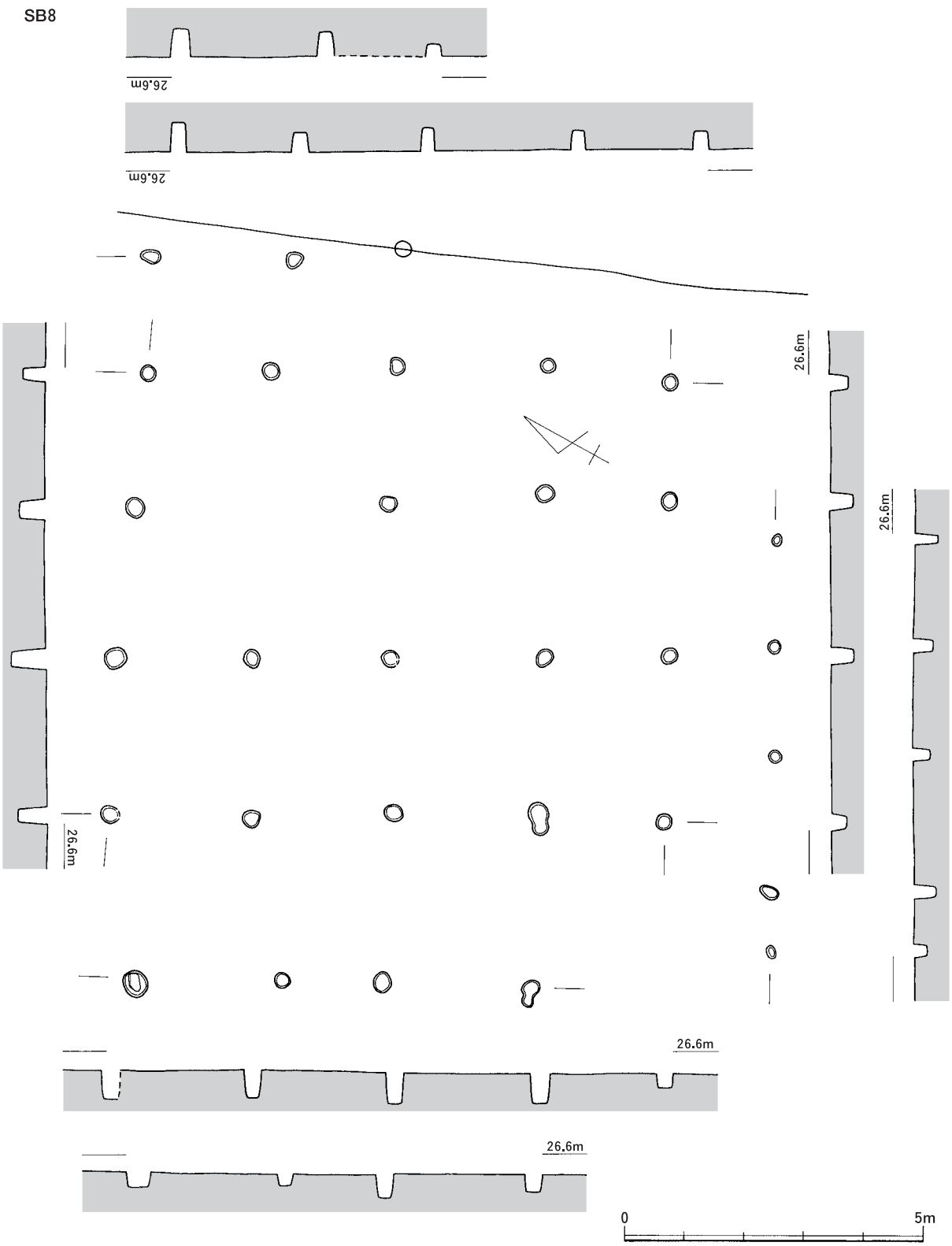


図版13

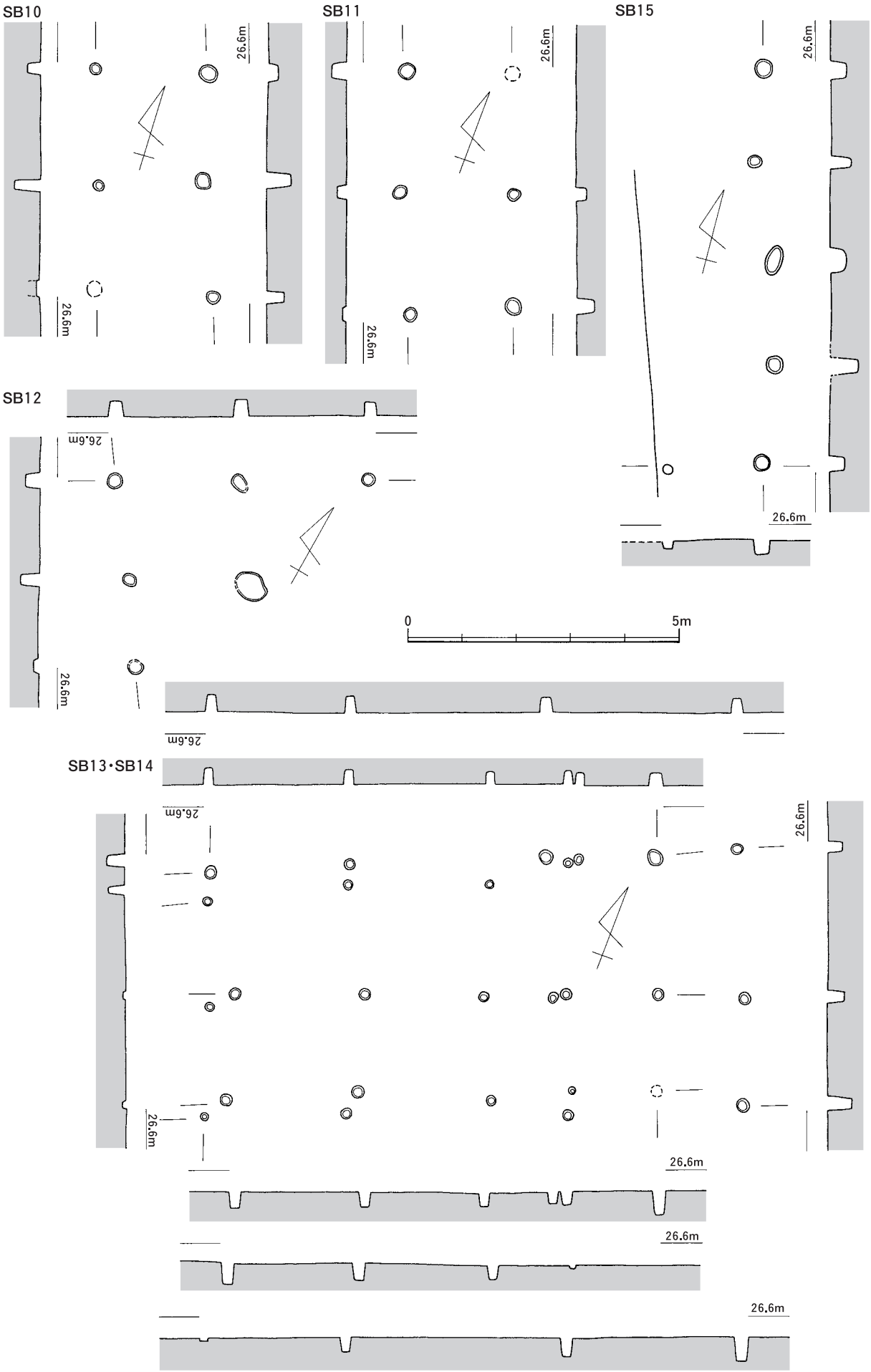
SB07

図版14

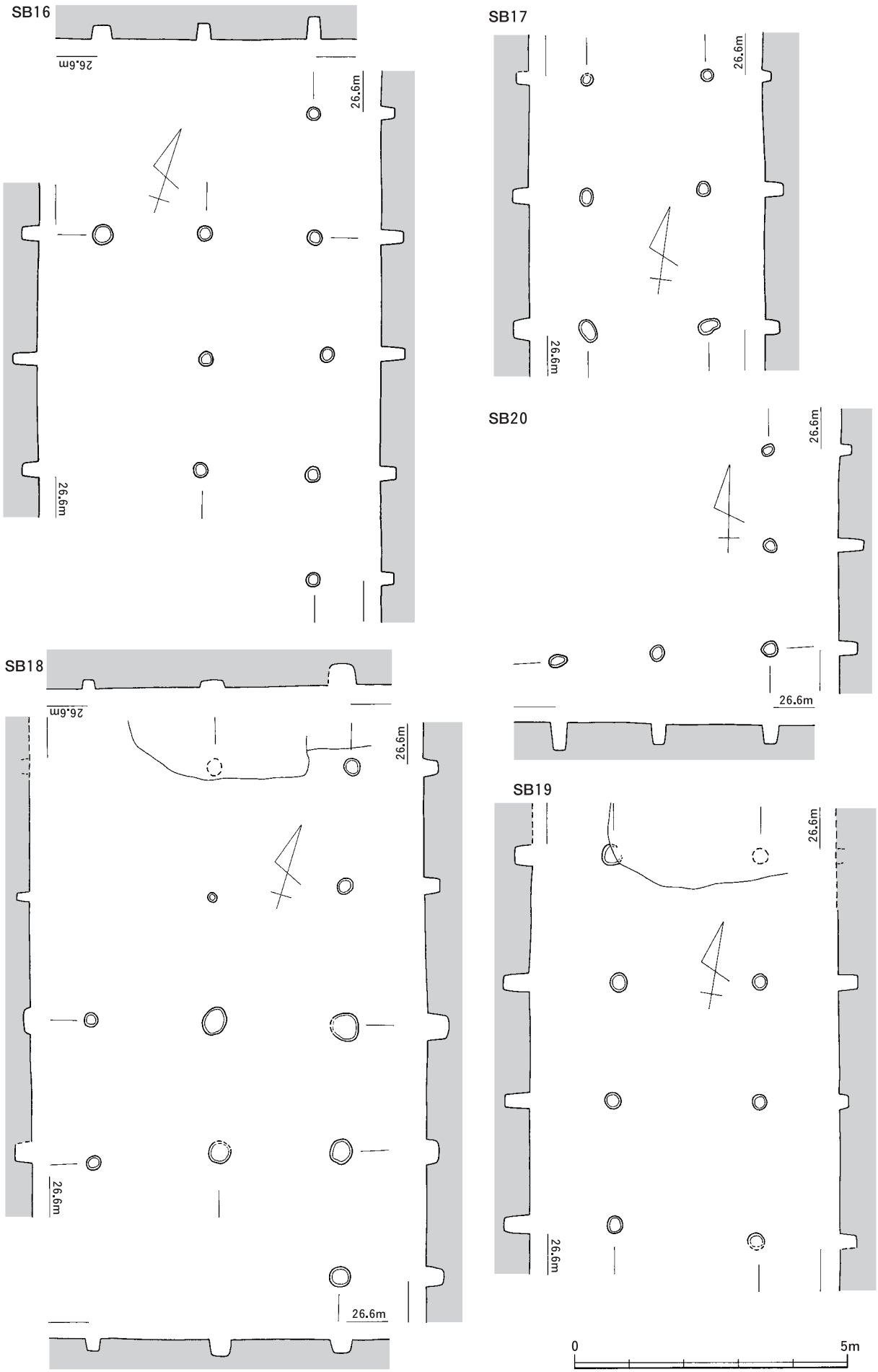
SB08



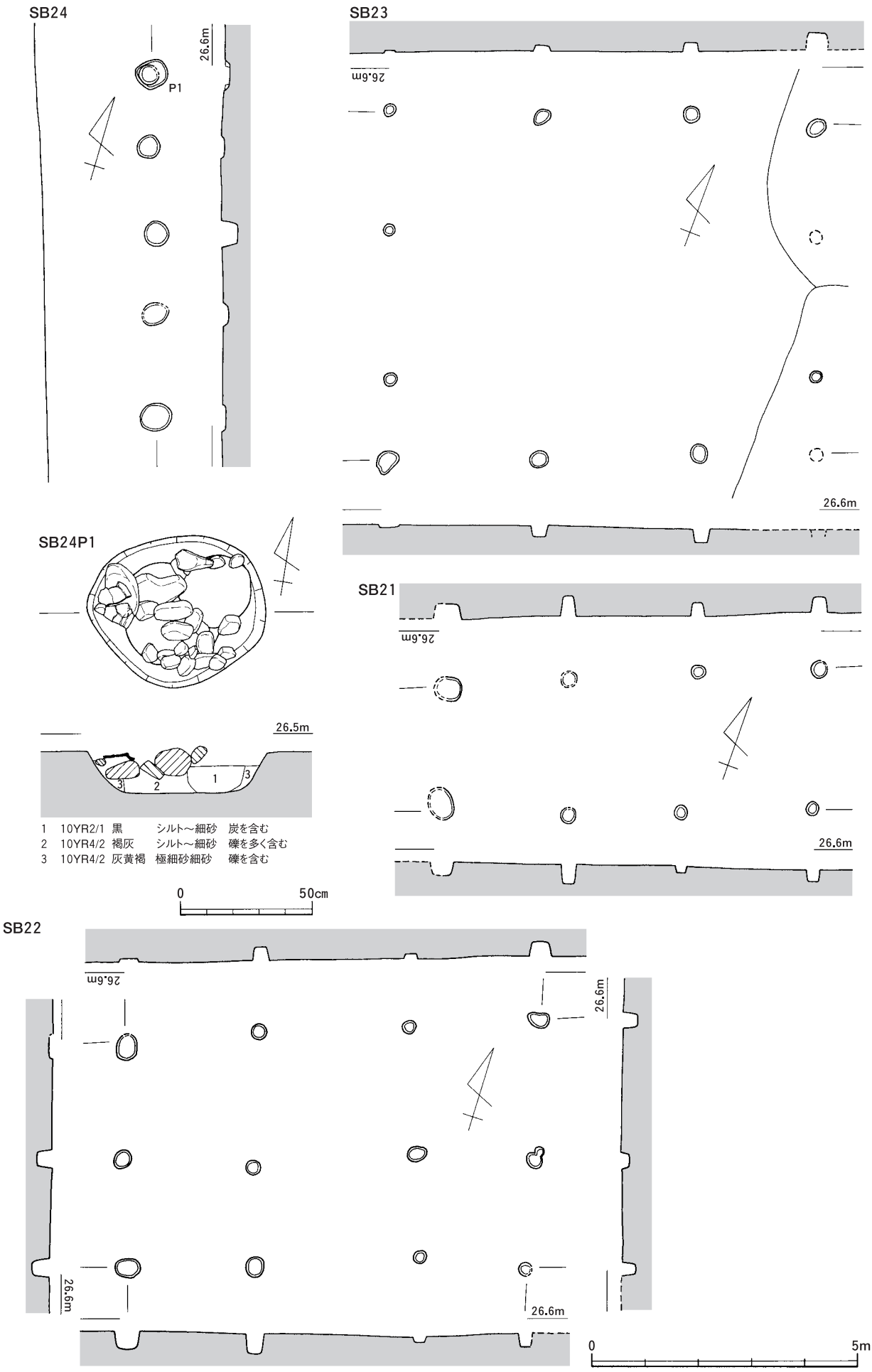
図版15 SB10～SB15



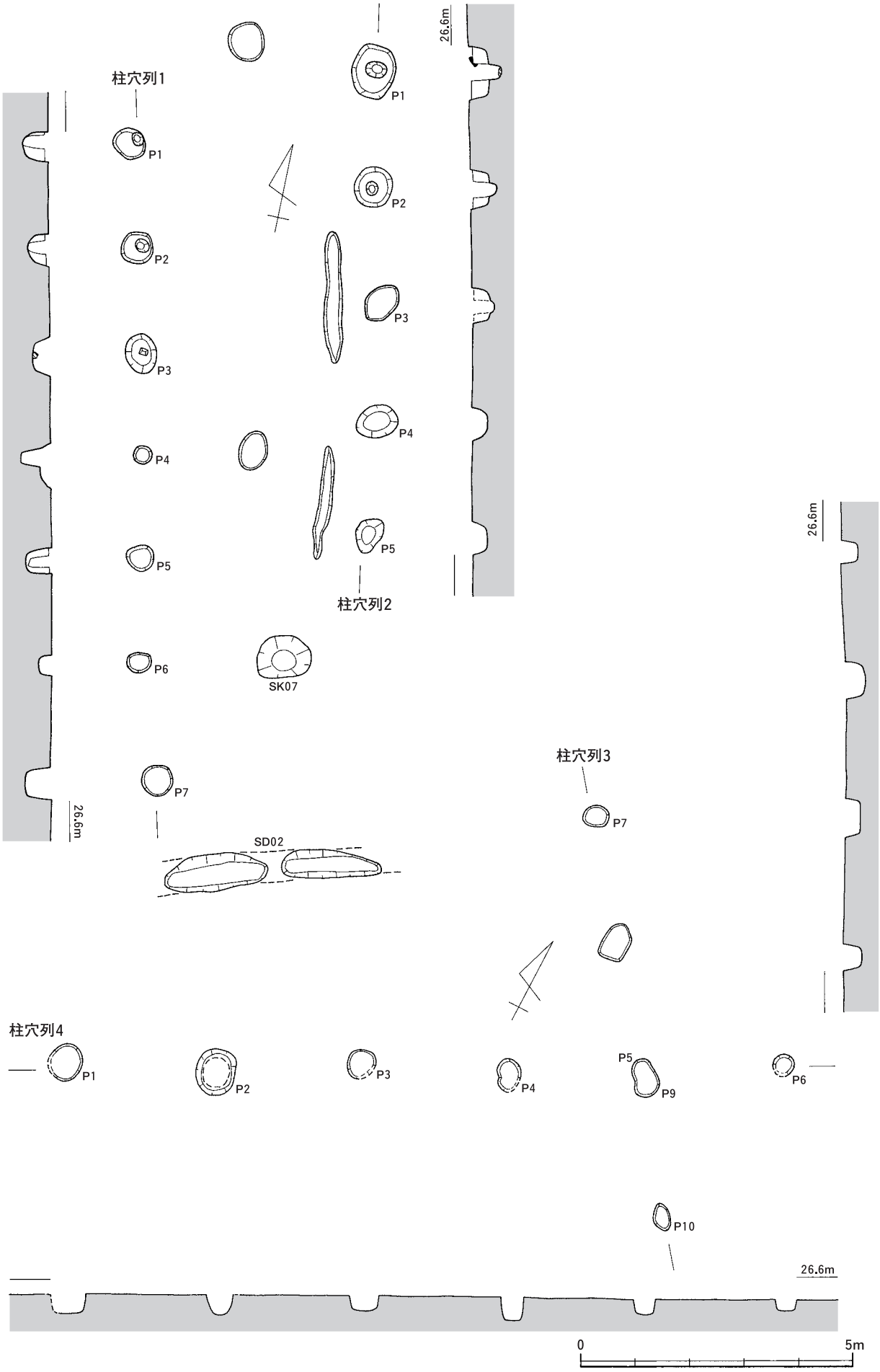
図版16 SB16～SB20



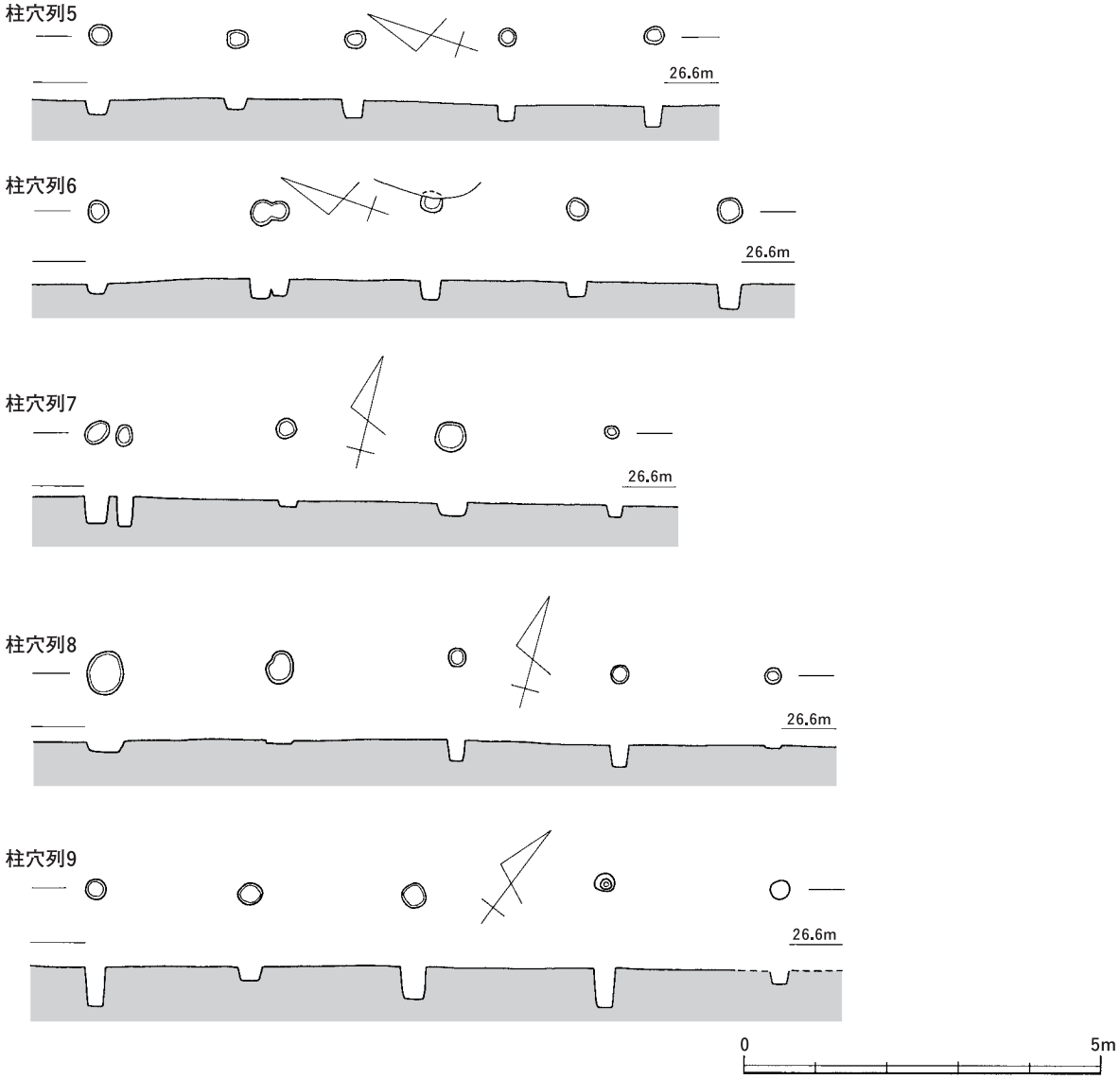
図版17 SB21～SB24

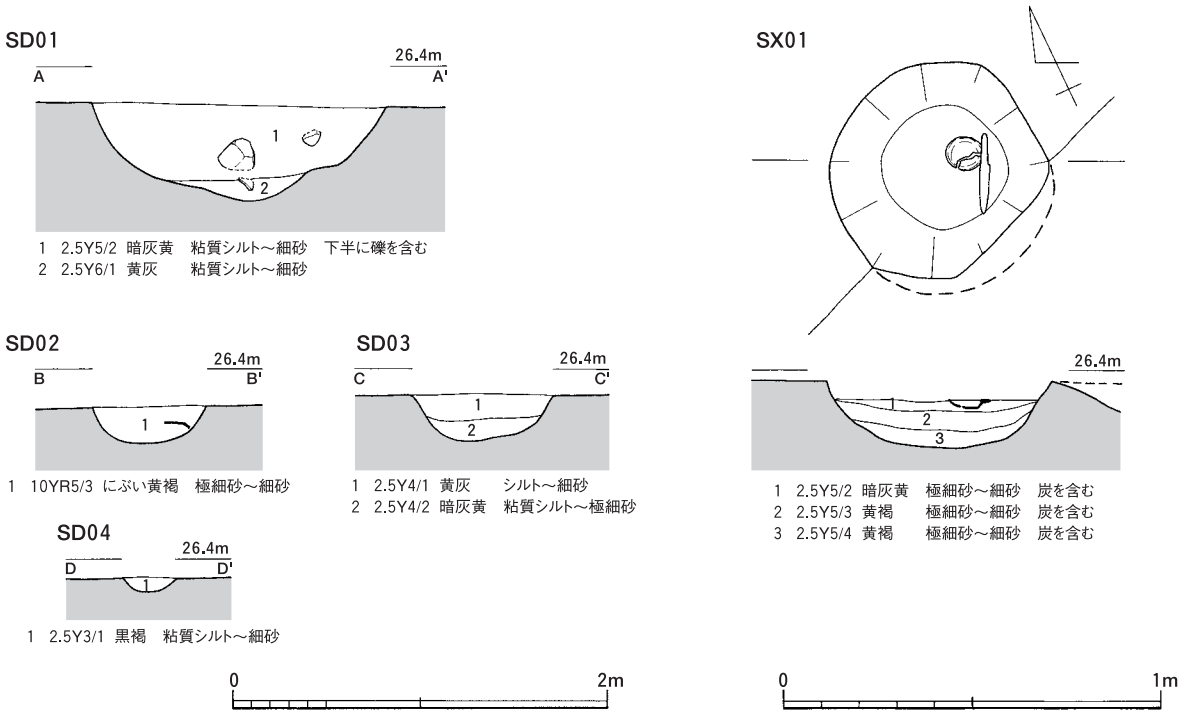


図版18　柱穴列1～4

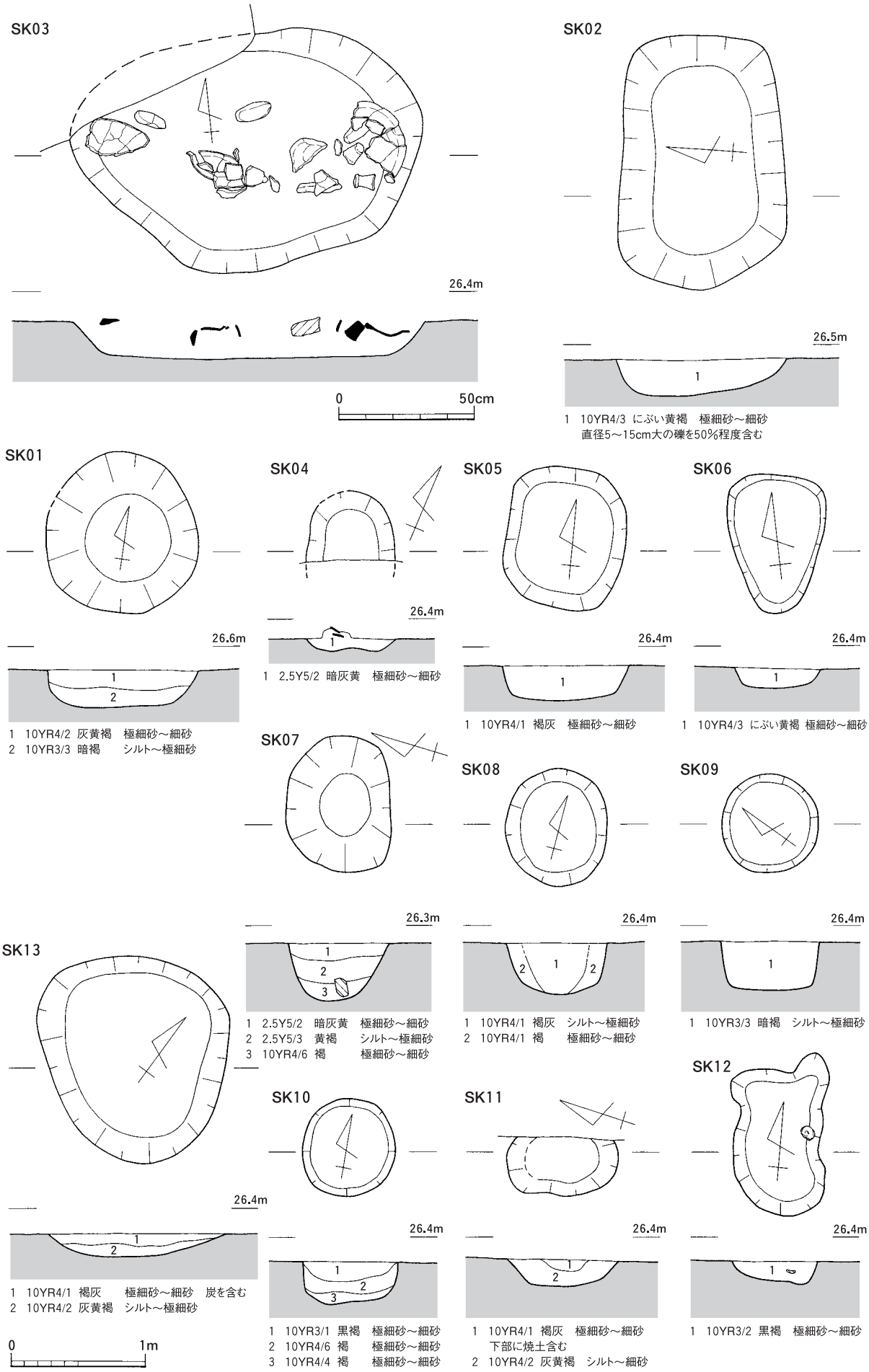

柱穴列1
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
26.6m
柱穴列2
SK07
SD02
柱穴列3
柱穴列4
P9
P10
0
5m

図版19　柱穴列5～9・SD01～SD04土層断面図・SX01



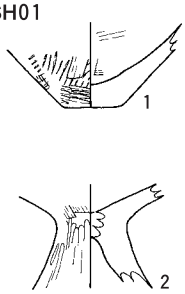


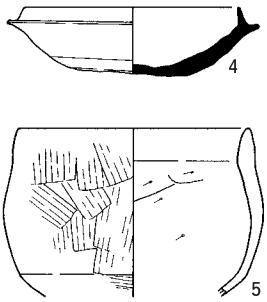
図版20　土坑（SK01～SK13）



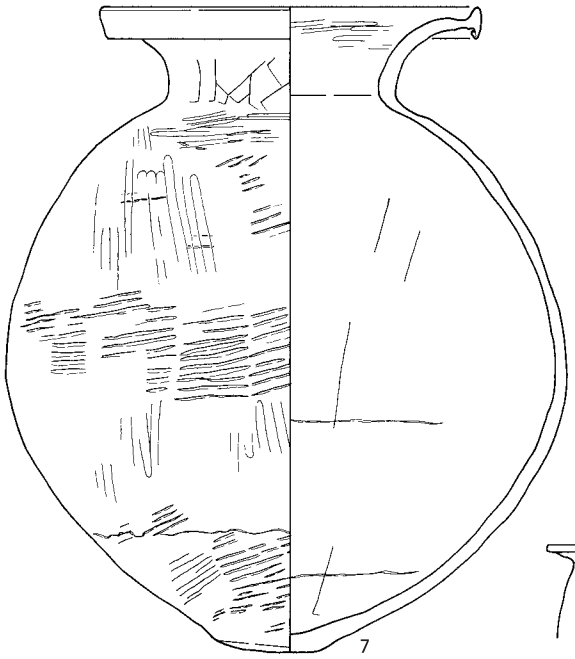
図版21　出土土器①（竪穴住居跡①）

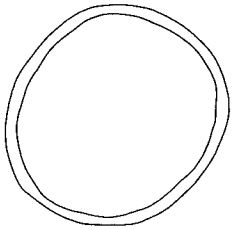
SH01

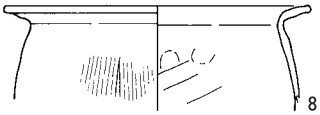


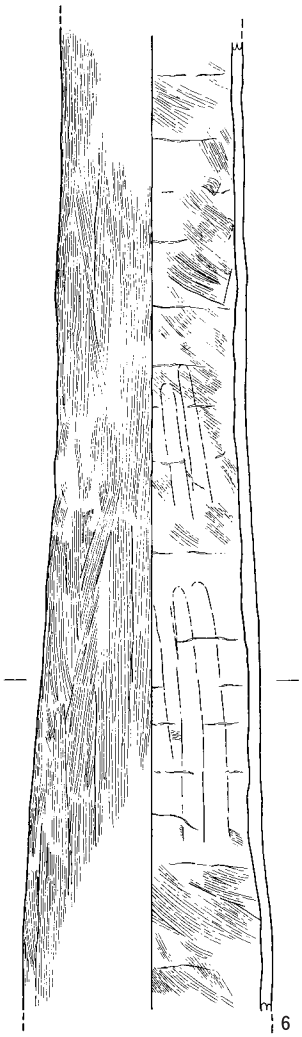


SH02 検出面

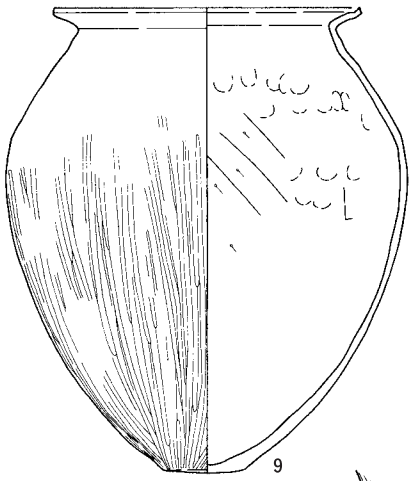


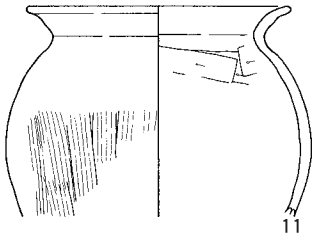


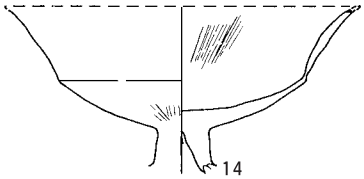


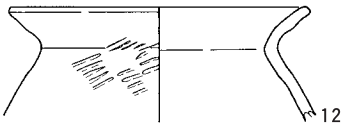


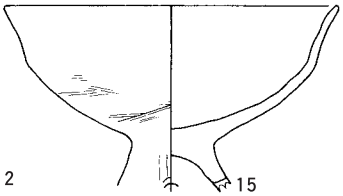
SH02 中央土坑B

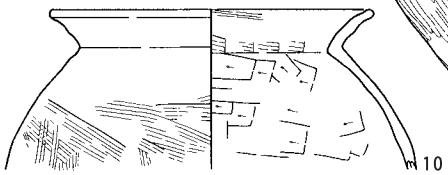


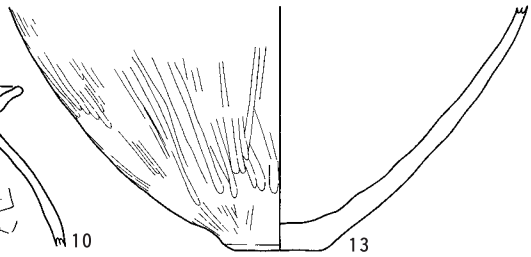


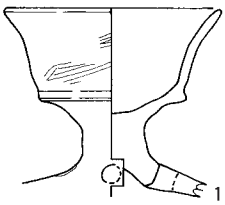


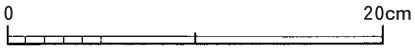




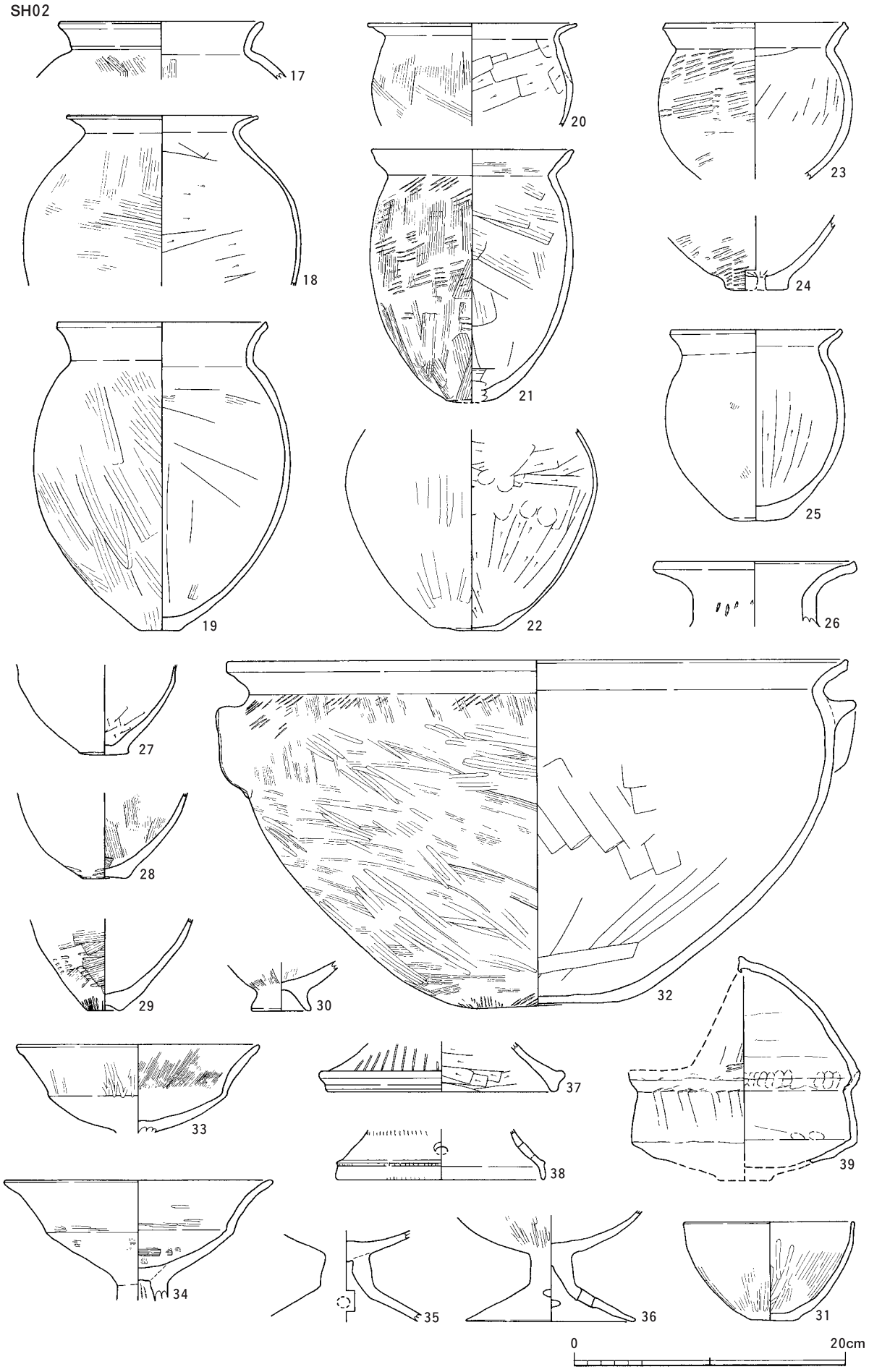




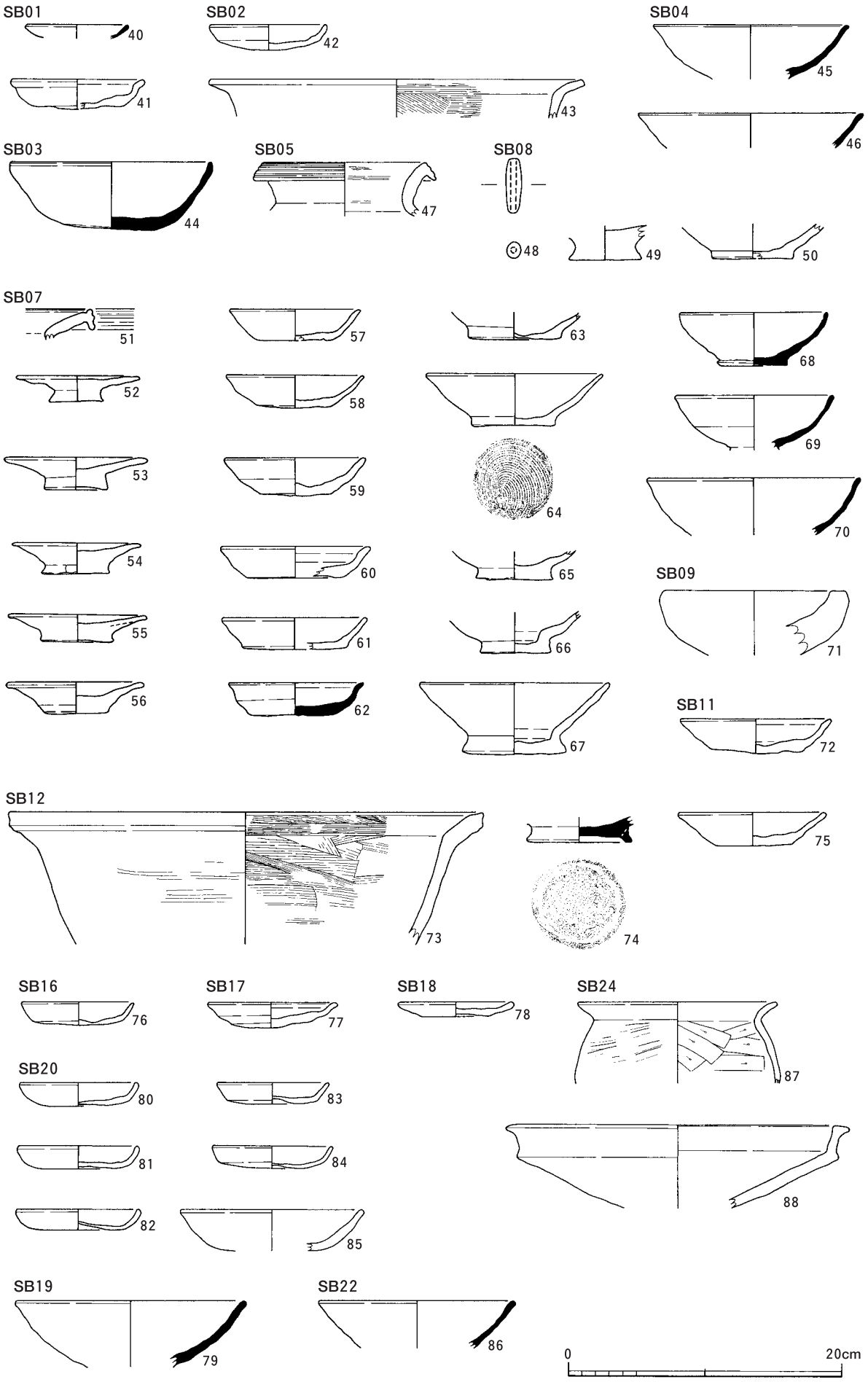




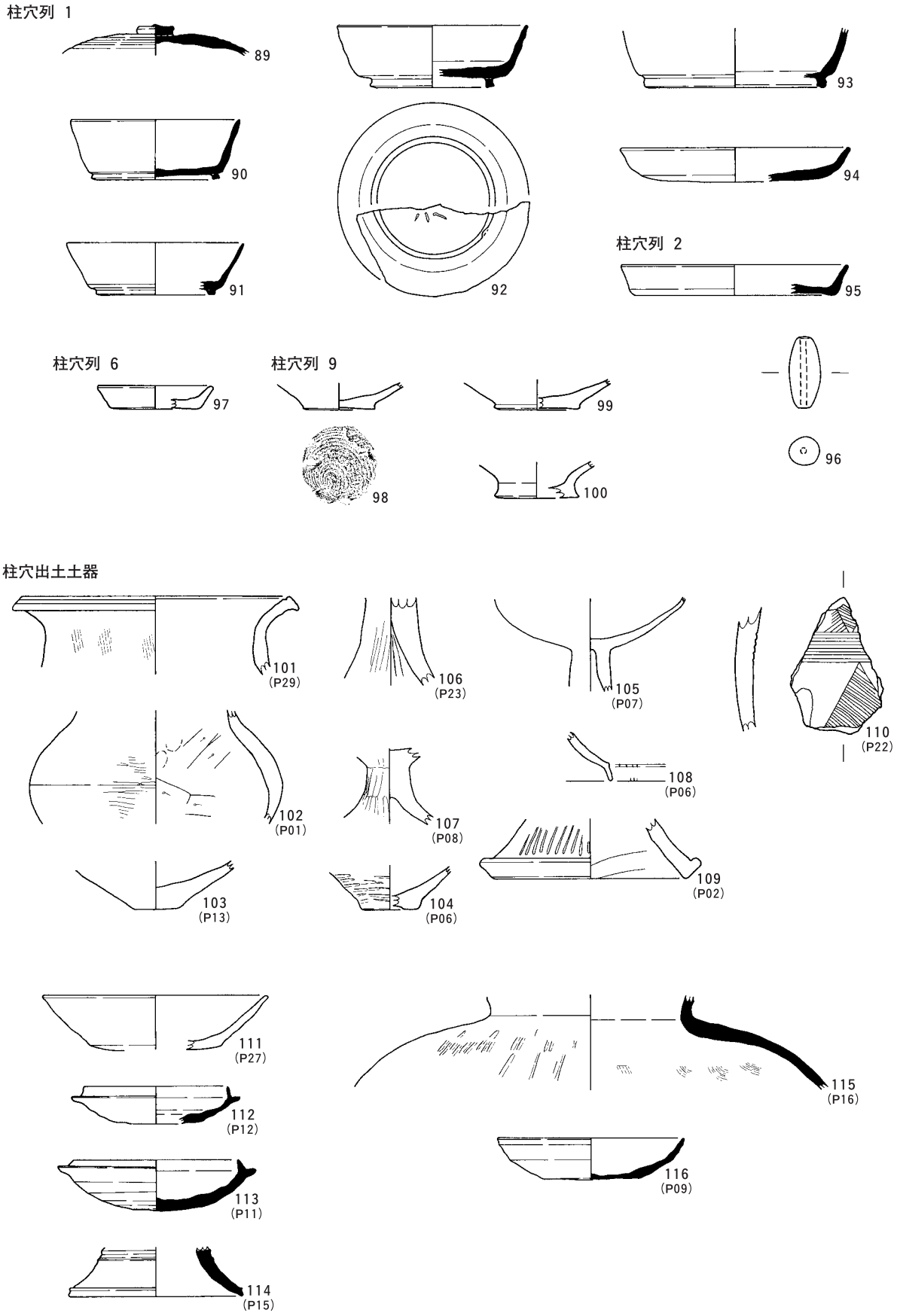
図版22　出土土器②（竪穴住居跡②）



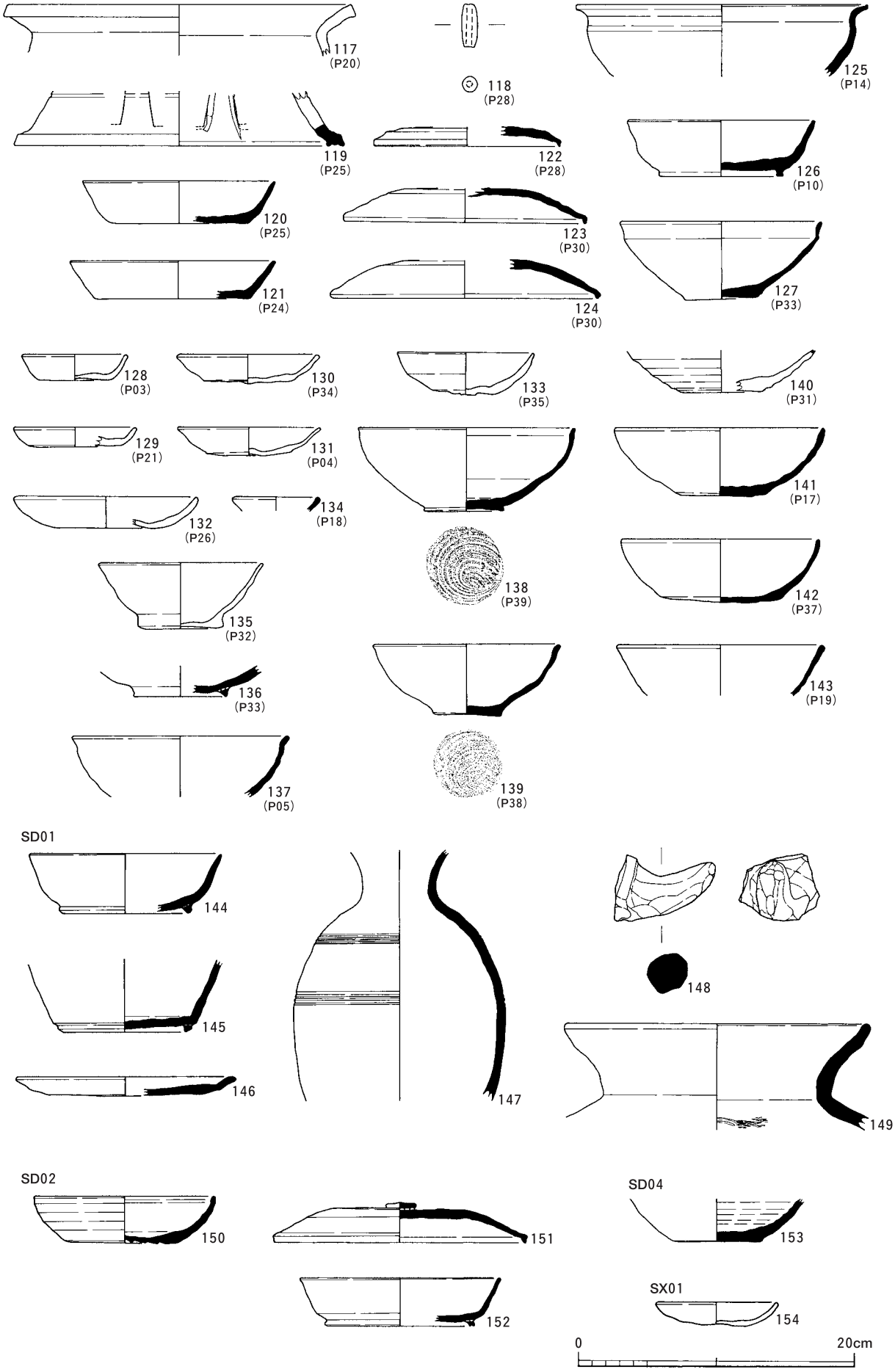
図版23 出土土器③（掘立柱建物跡）



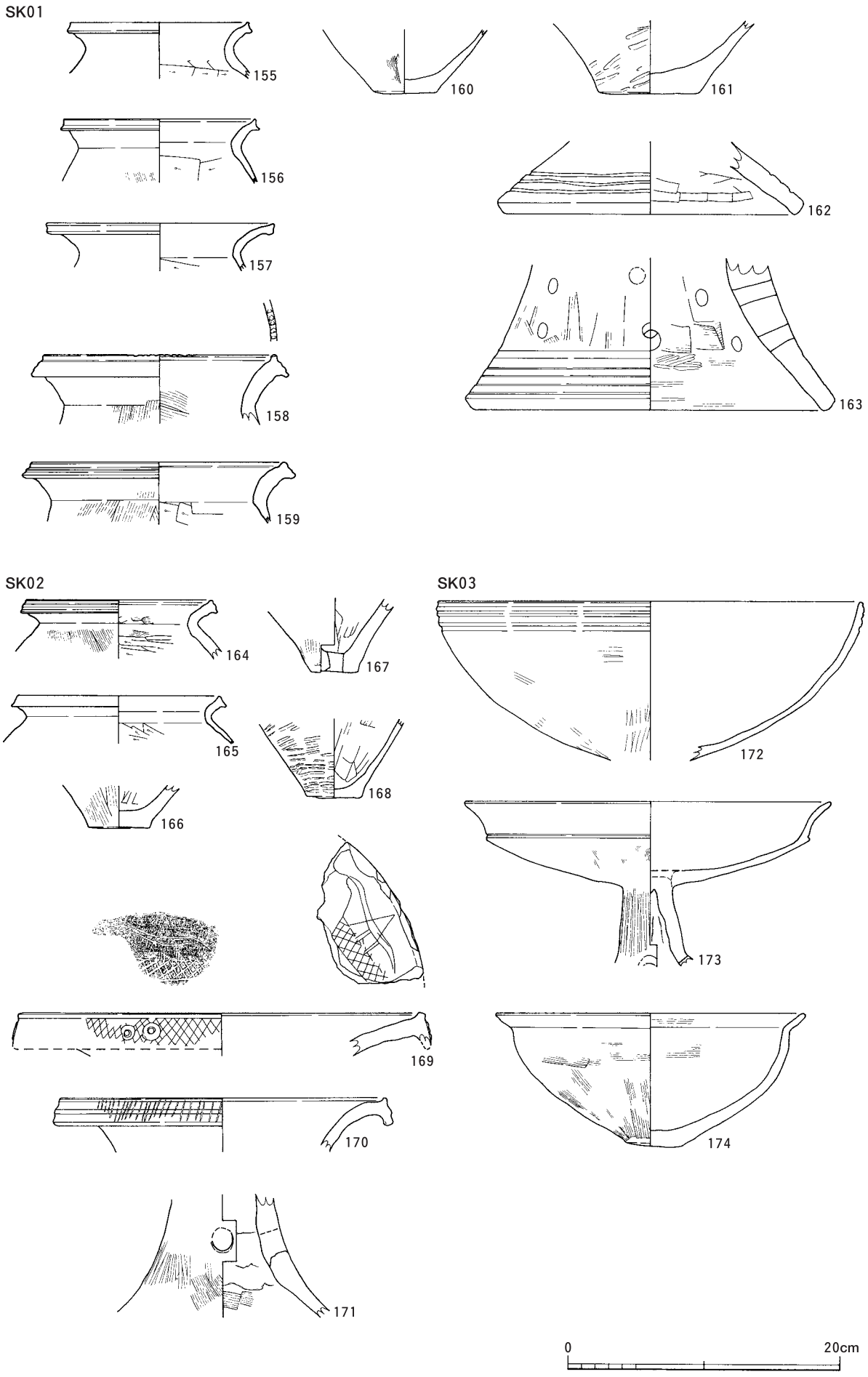
図版24　出土土器④（柱穴列・柱穴①）



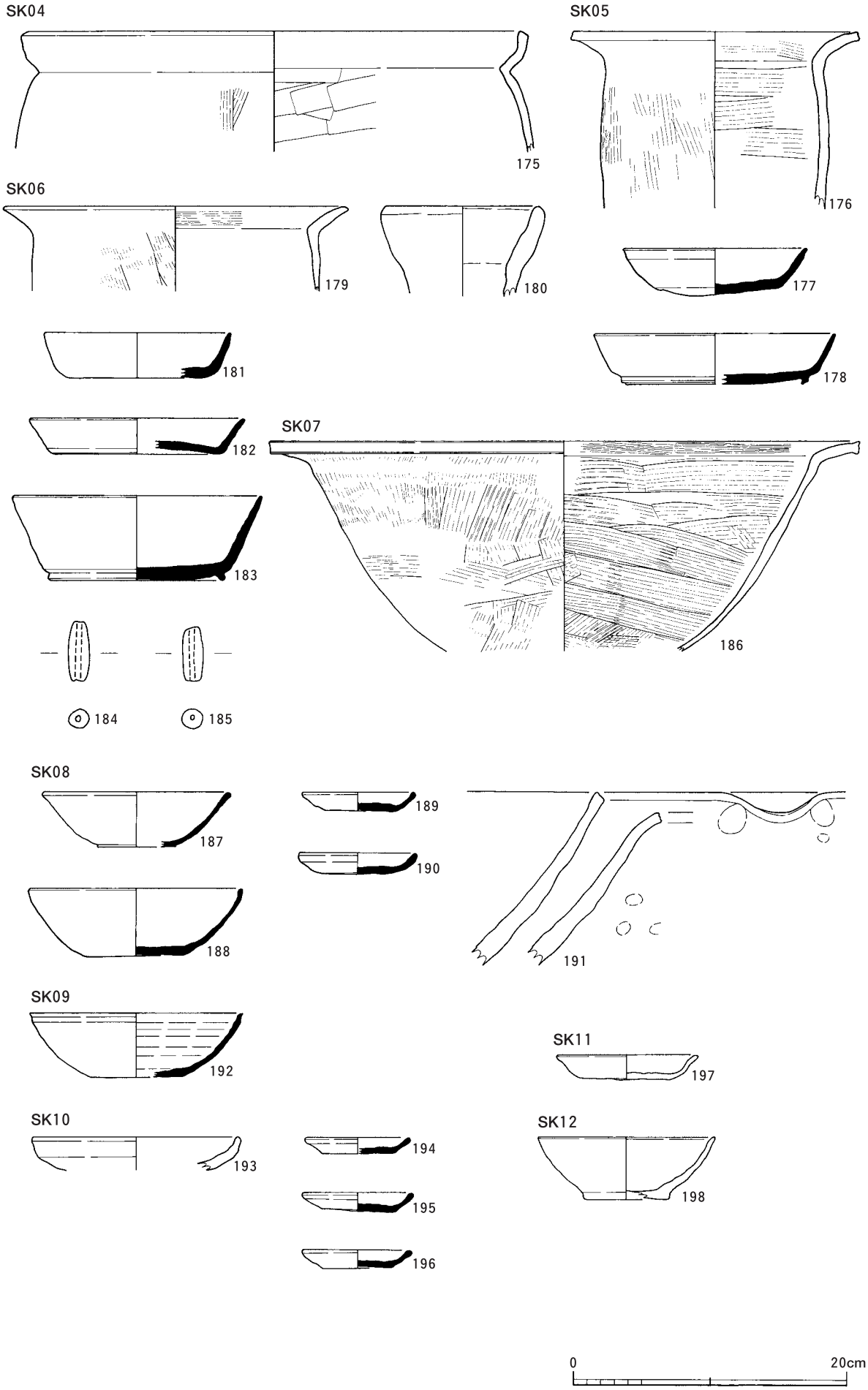
図版25 出土土器⑤（柱穴②）



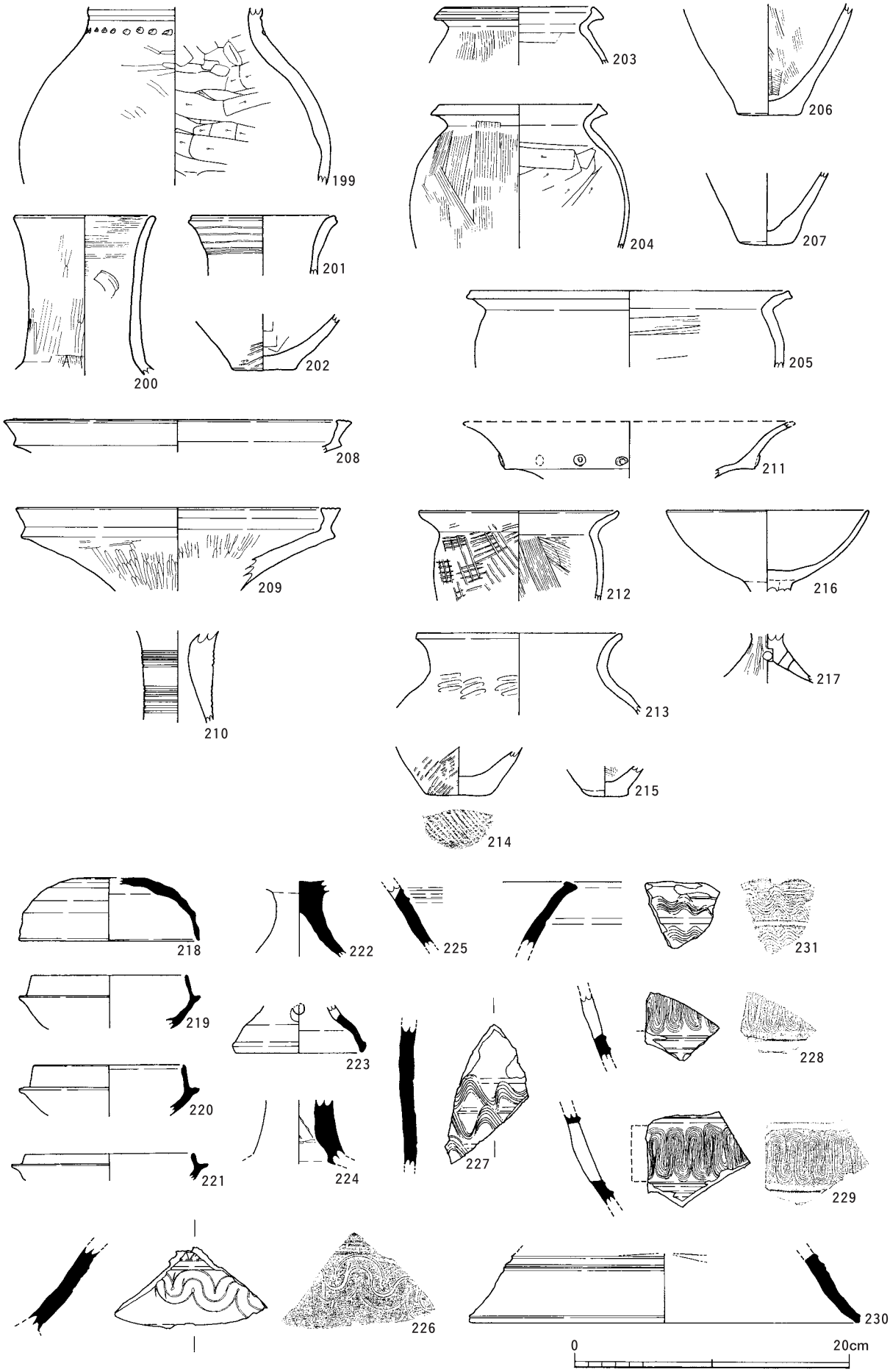
図版26　出土土器⑥（土坑①）



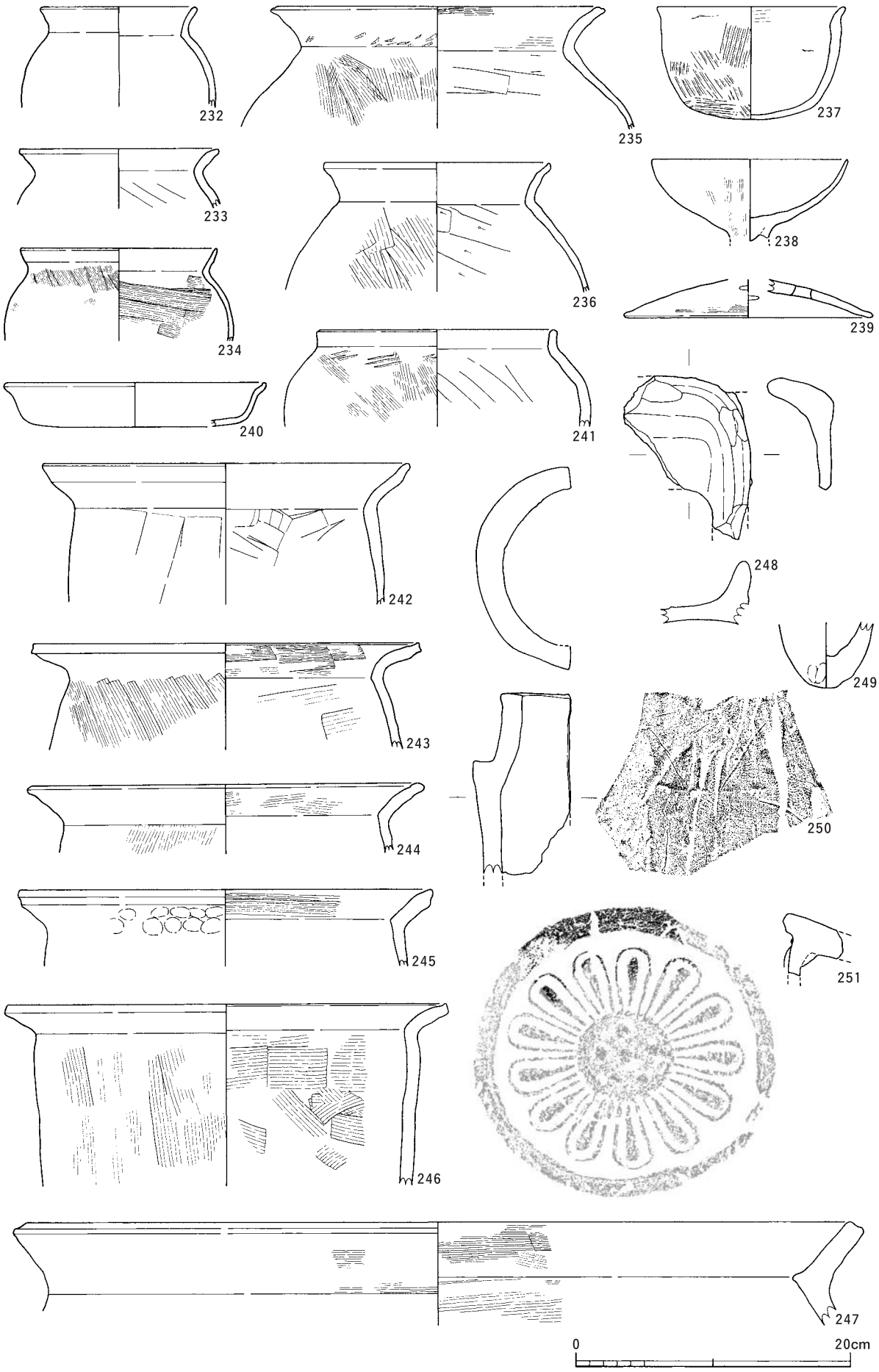
図版27　出土土器⑦（土坑②）



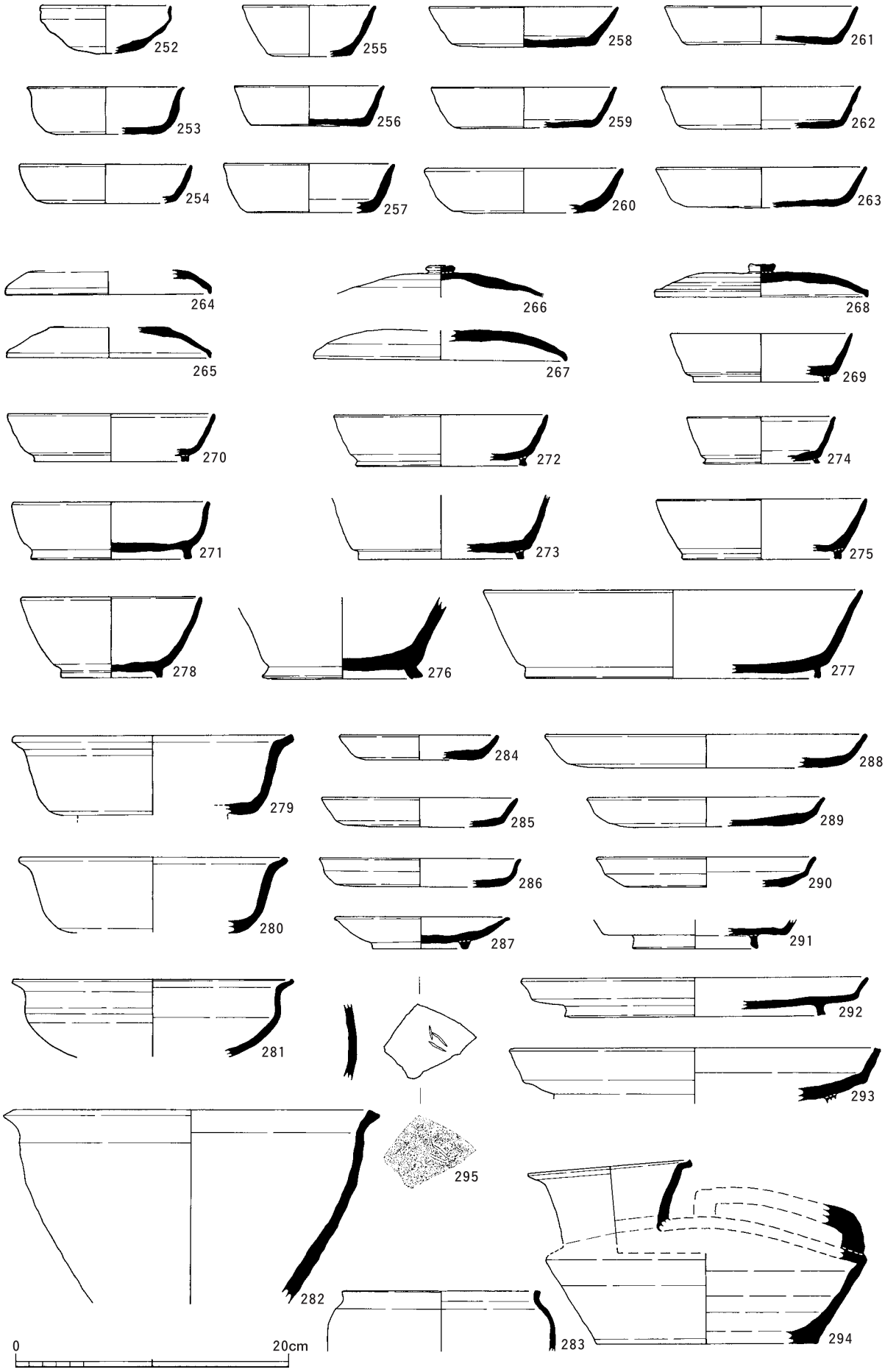
図版28　出土土器⑧（包含層①）



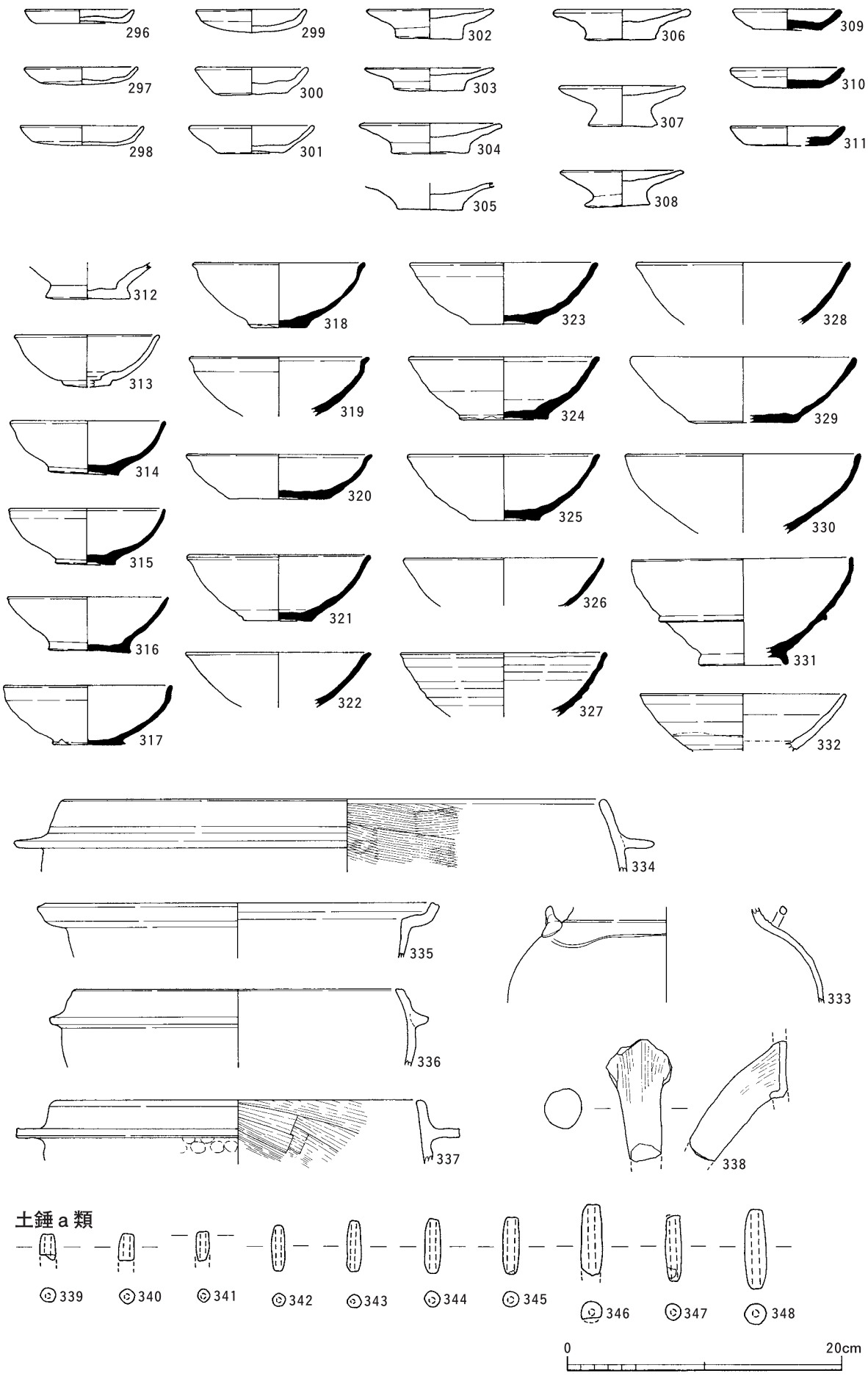
図版29 出土土器⑨（包含層②）



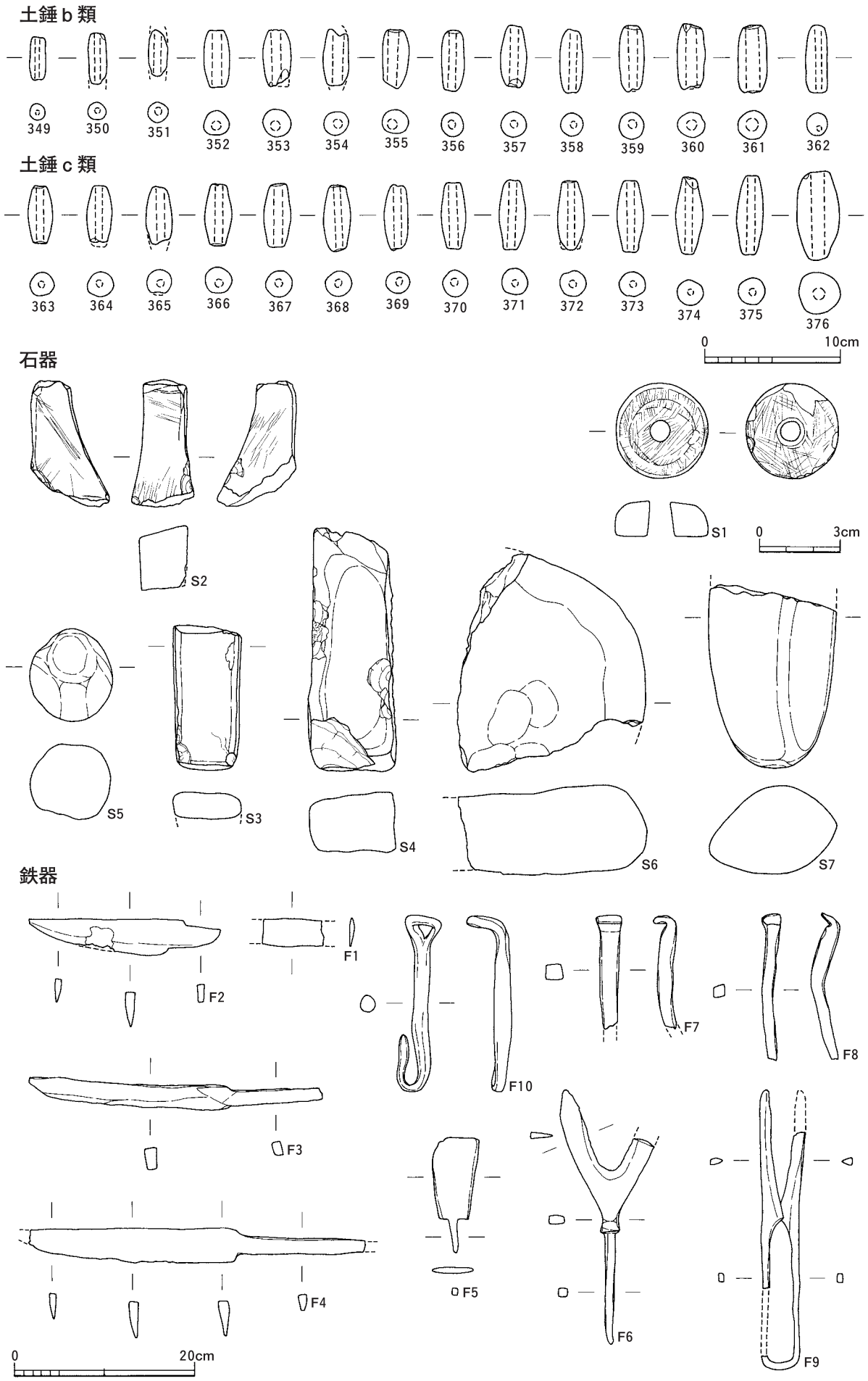
図版30　出土土器⑩（包含層③）



図版31　出土土器⑪（包含層④）・出土土製品（土錘①）



図版32　出土土製品（土錘②）・出土石器・出土鉄器



写真図版

写真図版1　空中写真

竹万宮ノ前遺跡遠景（北から）

竹万宮ノ前遺跡遠景（南から）

写真図版2　空中写真

竹万宮ノ前遺跡遠景（北西から）

竹万宮ノ前遺跡遠景（北西から）

写真図版3　遺跡

調査区全景（空中写真）

写真図版4　遺跡

調査区全景（南から）

調査区全景（北から）

SH01（北から）

竈検出状況（西から）

竈と円筒形土器（南西から）

写真図版6　遺構

SH01・SH02（北から）

SH02（西から）

左　中央土坑Ｂ土層断面（西から）
右　高杯出土状況（南東から）

左　甕出土状況（南から）
右　小型甕出土状況(南東から)

SB01～SB03（南から）

SB04・SB05（南から）

SB07・SB08（南から）

写真図版8　遺構

SB24P1（南から）

柱穴列１P3（西から）

SD01（東から）

写真図版9　遺構

SX01（南西から）

SK02（北から）

SK03（北から）

SK08と柱穴列４P2との切り合い（南から）

SK07（南から）

SK12（西から）

SK13（南から）

169

絵画土器（SK02出土）

226

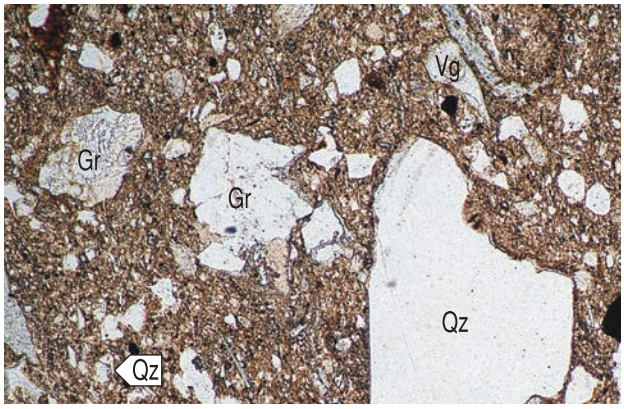
コンパス文須恵器器台片
（包含層出土）

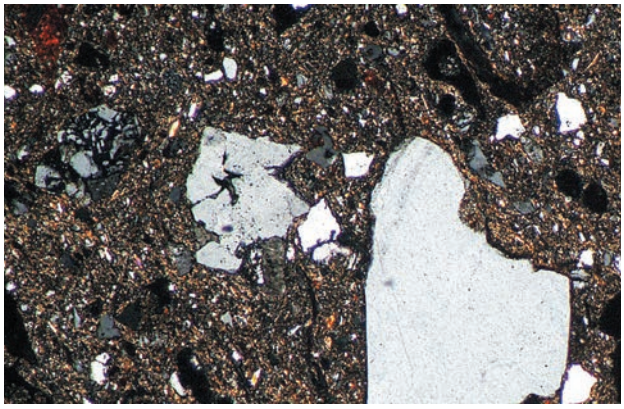
251

古大内式Ⅱ型（小犬丸式）
軒丸瓦（包含層出土）

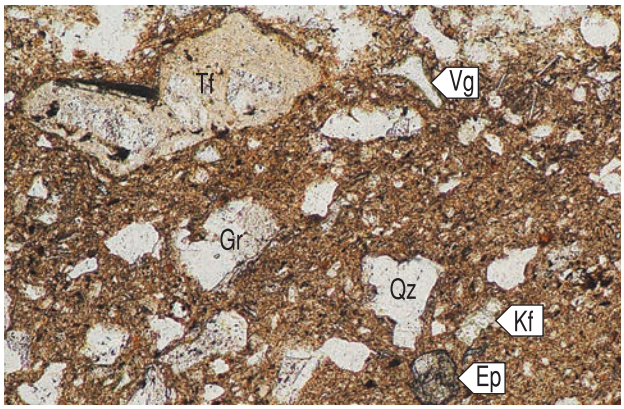
SH02 出土主要土器

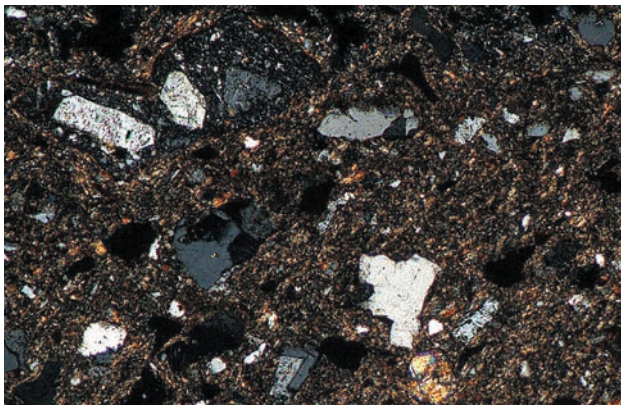
古墳時代の渡来系の要素を持つ遺物



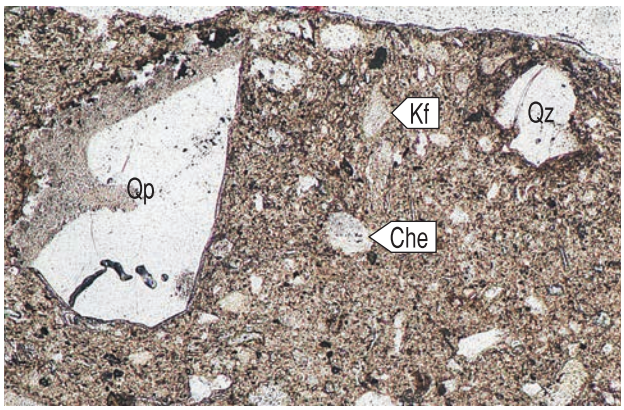


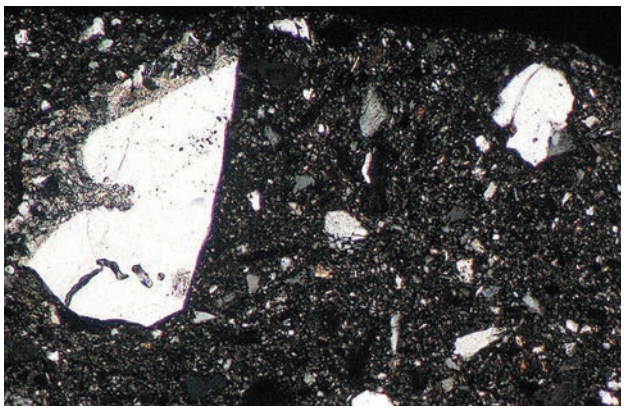
1. 試料No.1（弥生土器　壺　V-2（上東式）　包含層　ネーミング番号83　実測番号371）



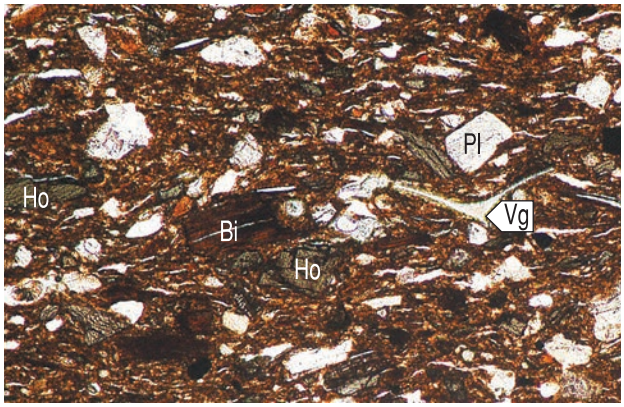


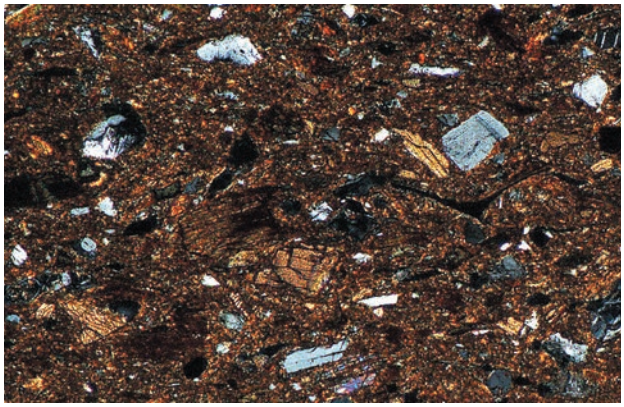
2. 試料No.2（弥生土器　高坏　V-1（播磨・畿内）　包含層　ネーミング番号127　実測番号34）





3. 試料No.3（弥生土器　高坏（山陰系）　庄内併行　SH02中央土坑Ｂ　ネーミング番号108・776　実測番号11）



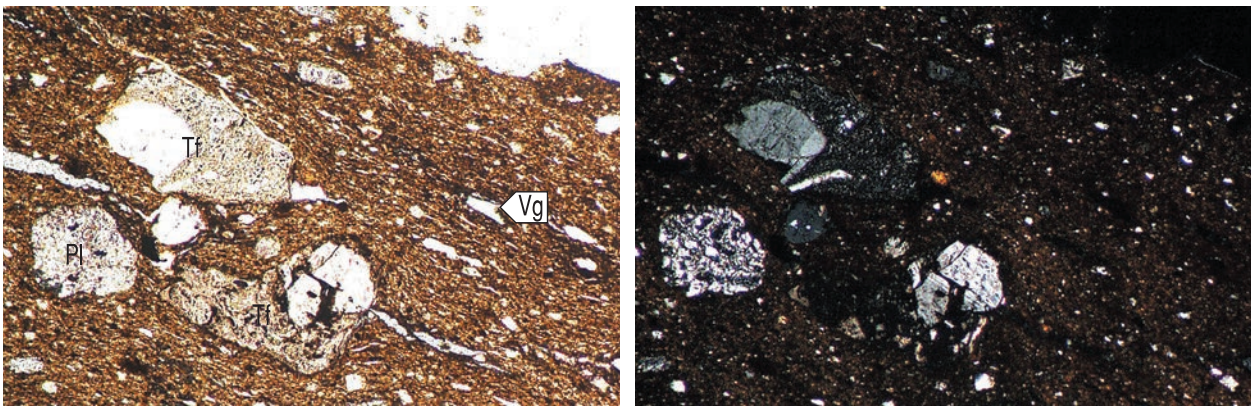


4.試料No.4（弥生土器　甕　庄内併行　SH02中央土坑Ｂ　ネーミング番号775　実測番号13）

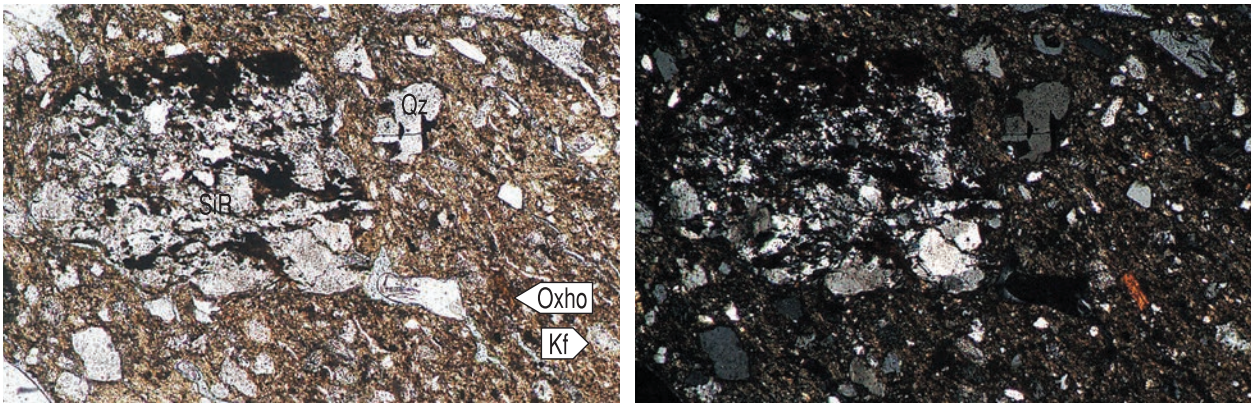
Qz:石英．Kf:カリ長石．Pl:斜長石．Bi:黒雲母．Ho:角閃石．Ep:緑レン石．
Che:チャート．Tf:凝灰岩．Gr:花崗岩．Vg：火山ガラス．Qp:石英斑岩．
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

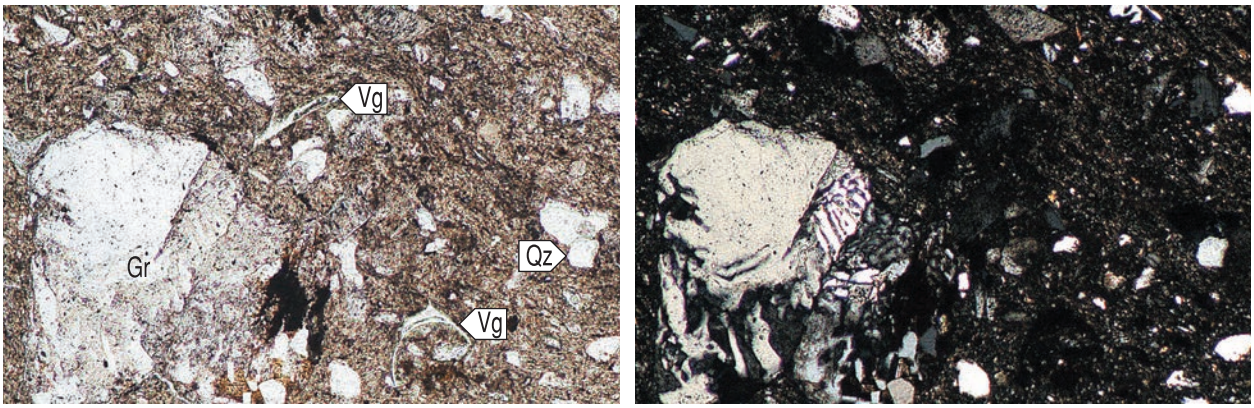
写真図版14　分析（胎土薄片（2））



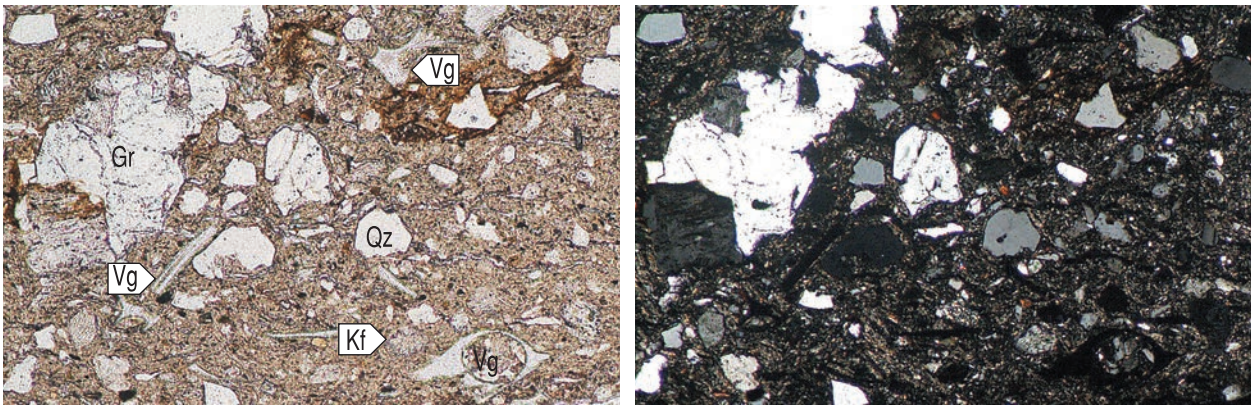
5. 試料No.5（弥生土器　甕　庄内併行　SH02中央土坑Ｂ　実測番号7）



6. 試料No.6（弥生土器　高坏　庄内併行　SH02中央土坑Ｂ　ネーミング番号776　実測番号15）



7. 試料No.7（土師器　円筒形土器　古墳時代後期　SH01床面　ネーミング番号165）



8. 試料No.8（土師器　小型平底鉢　古墳時代後期　包含層　ネーミング番号69　実測番号213）

Qz:石英．Kf:カリ長石．Pl:斜長石．Oxho:酸化角閃石．Tf:凝灰岩．Gr:花崗岩．
Vg:火山ガラス．SiR:珪化岩．

0.5mm

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

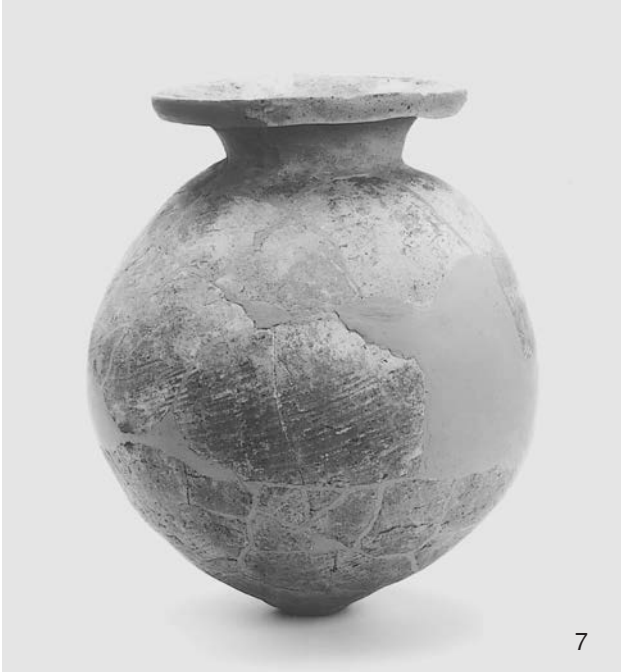
写真図版15　遺物

4

5

6

9


7

10

13

写真図版16　遺物

11

18

14

16

15

20

19

22

21

25

23

28

24

30

27

31

写真図版18　遺物

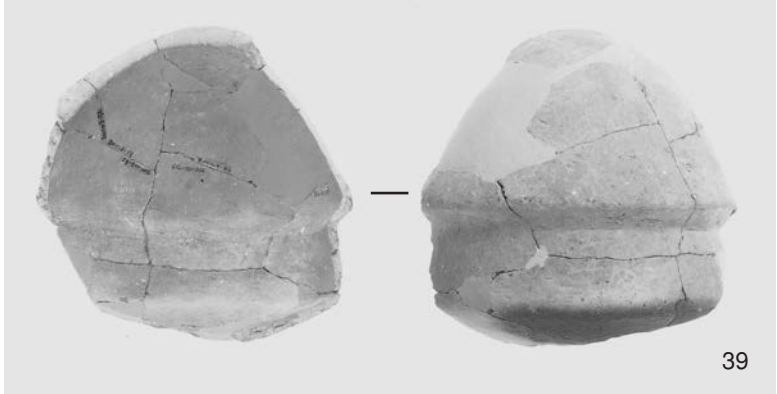
32

33

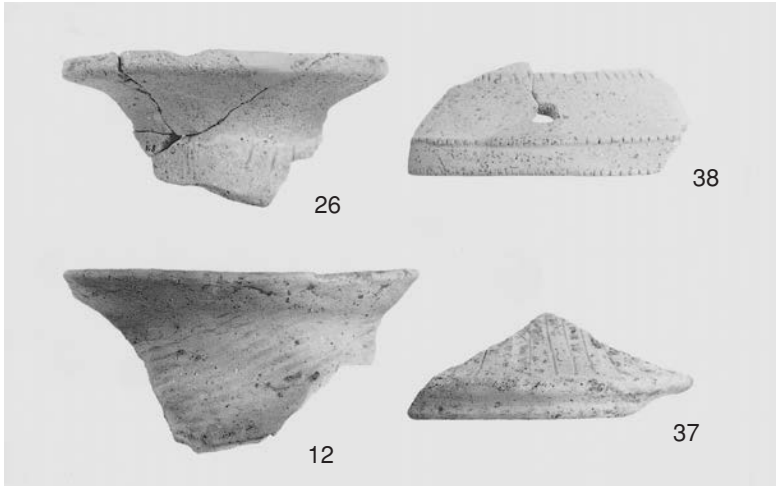
34

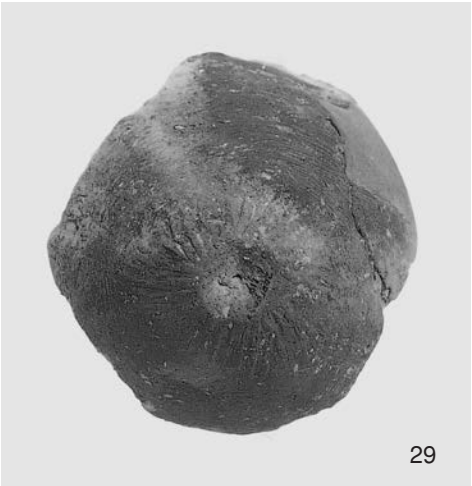
35

36


39

1


26
38
12
37


29

41

59

76

42

61

77

44

62

78

52

64

80

53

66

81

54

67

82

55

68

83

56

72

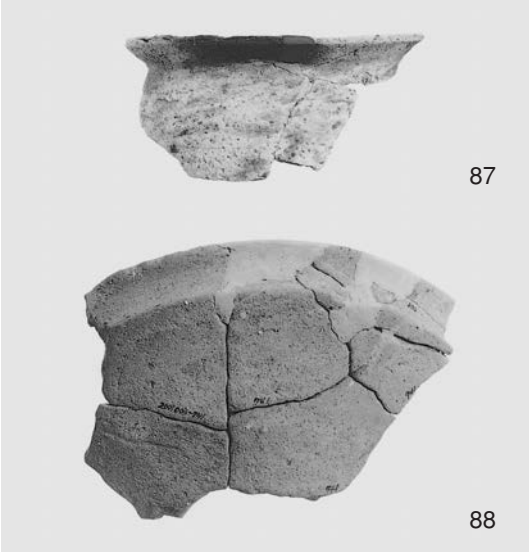
84

58

75

85

71


87

88

写真図版20　遺物

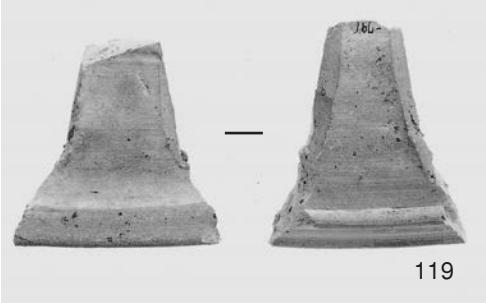
100

101

105

110

113


119

123

124

125

126

127

131

130

133

135

138

139

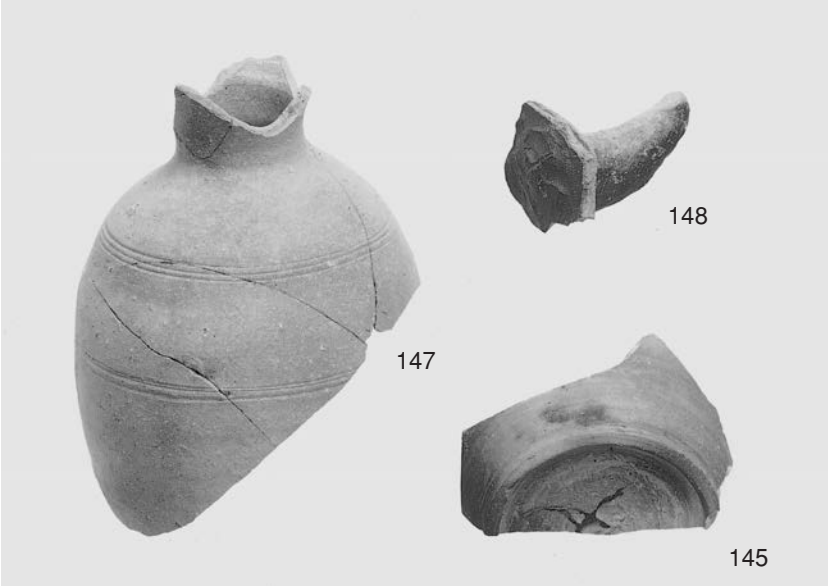
141

142

150

151

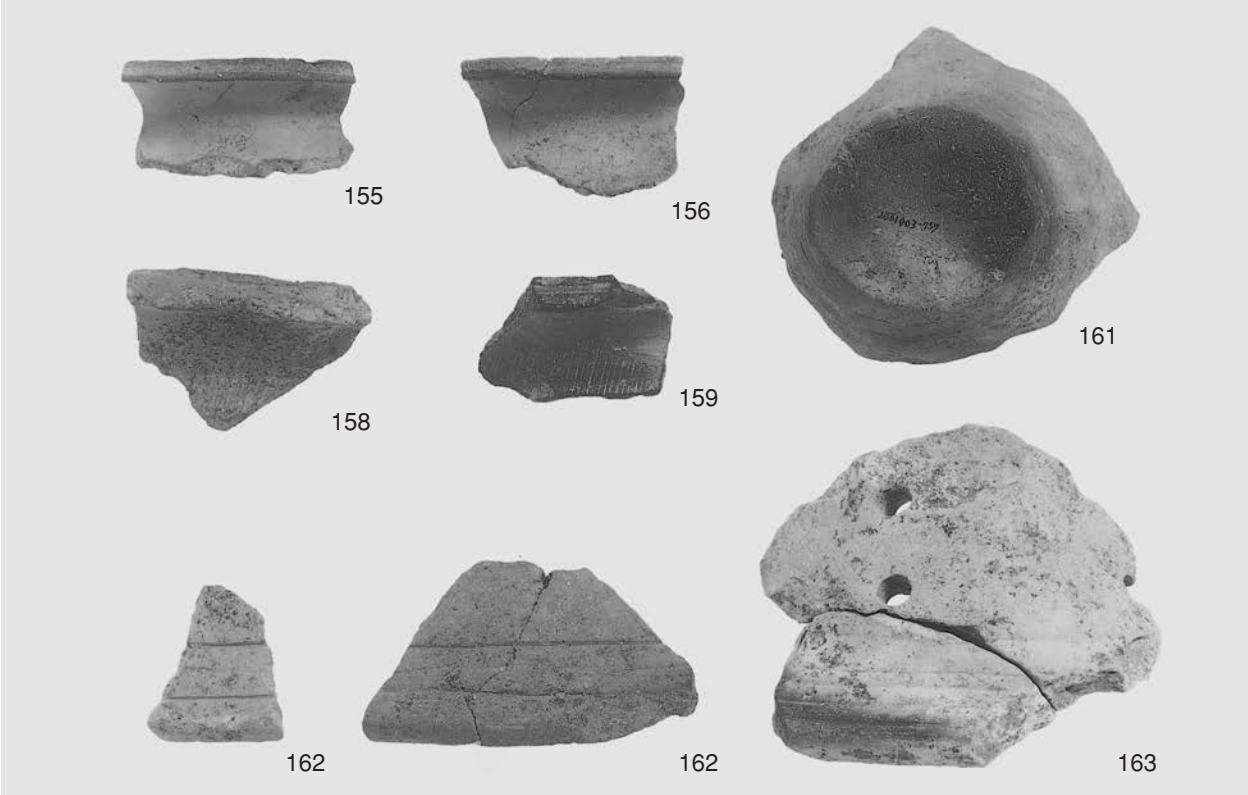
154


147

148

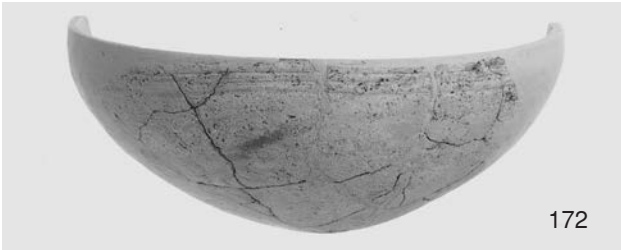
145

写真図版21　遺物


155
156
161
158
159
162
162
163

170
164
165
167
166
168

160


172

174

173

写真図版22　遺物

177

186

178

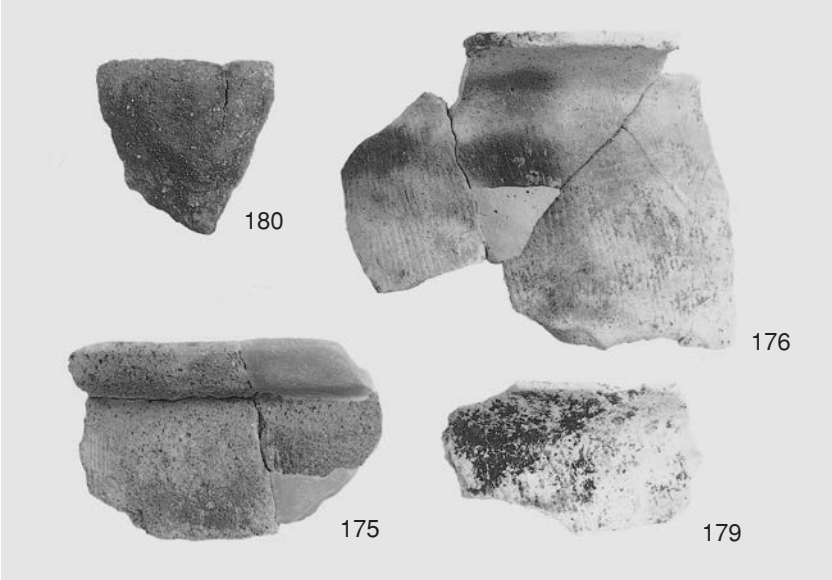
188

182

192

183

198



190

194

195

196

197

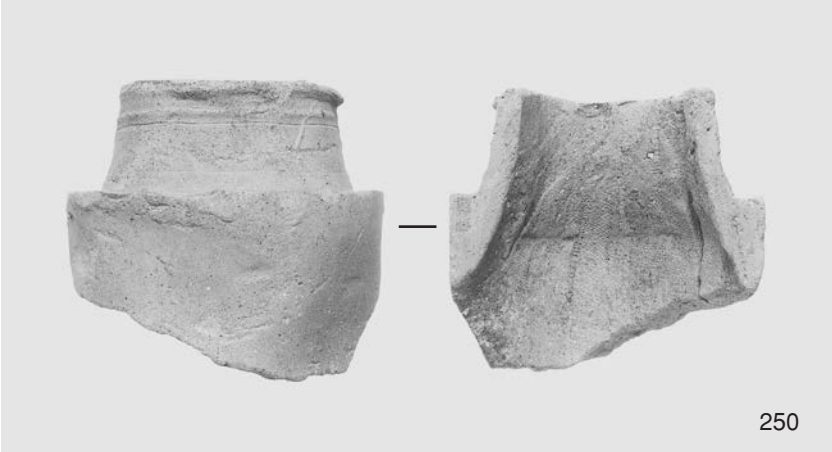
189

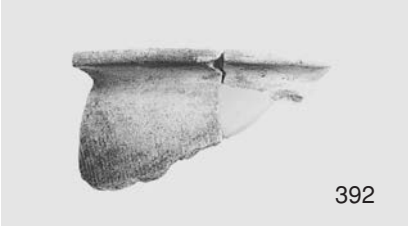
237

241

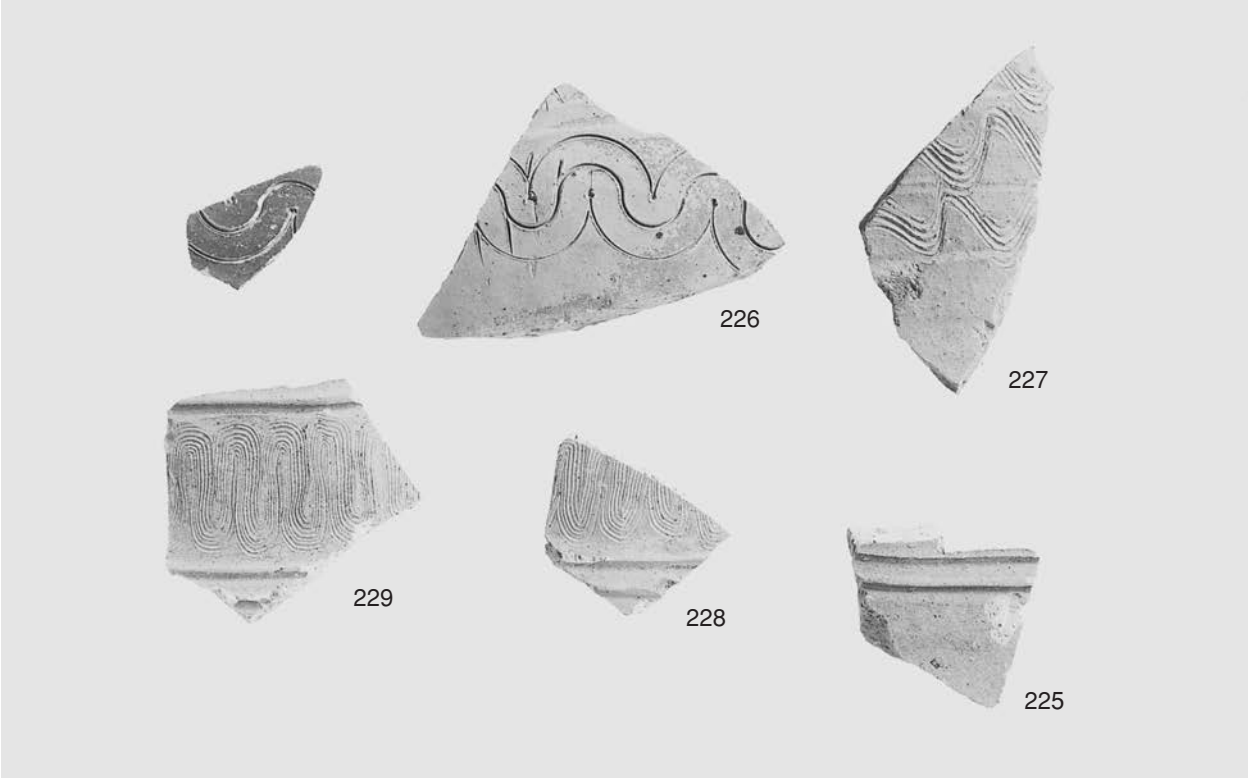
281

234

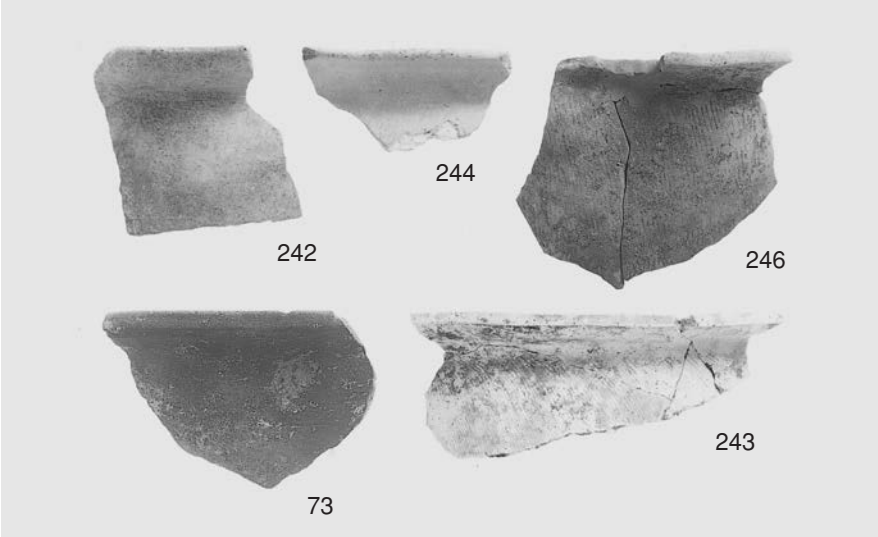

250

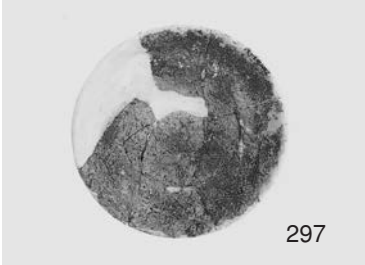

392

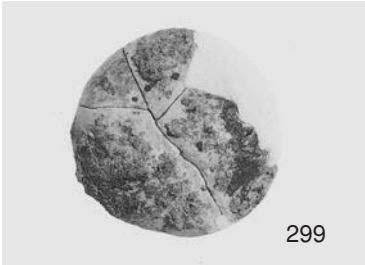
393

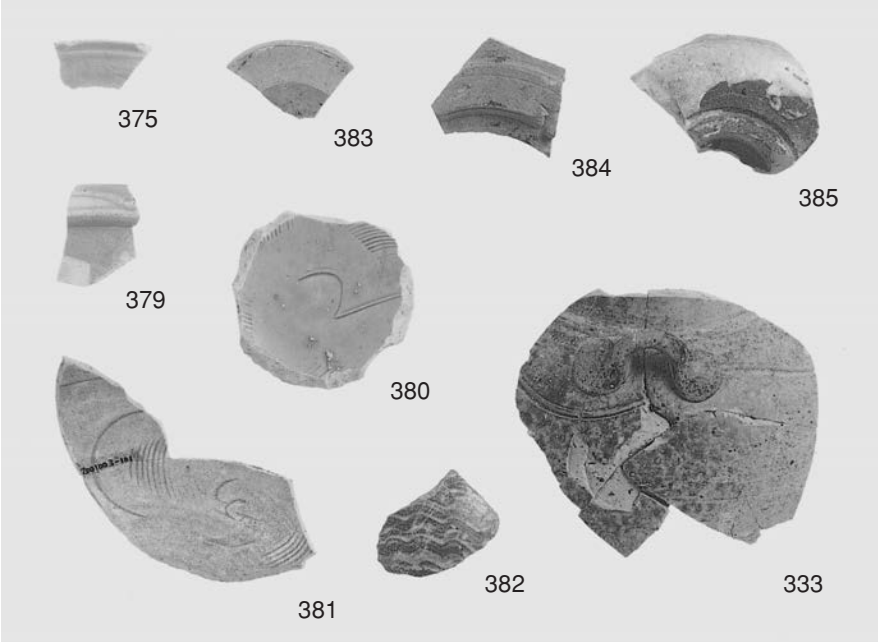


写真図版24　遺物

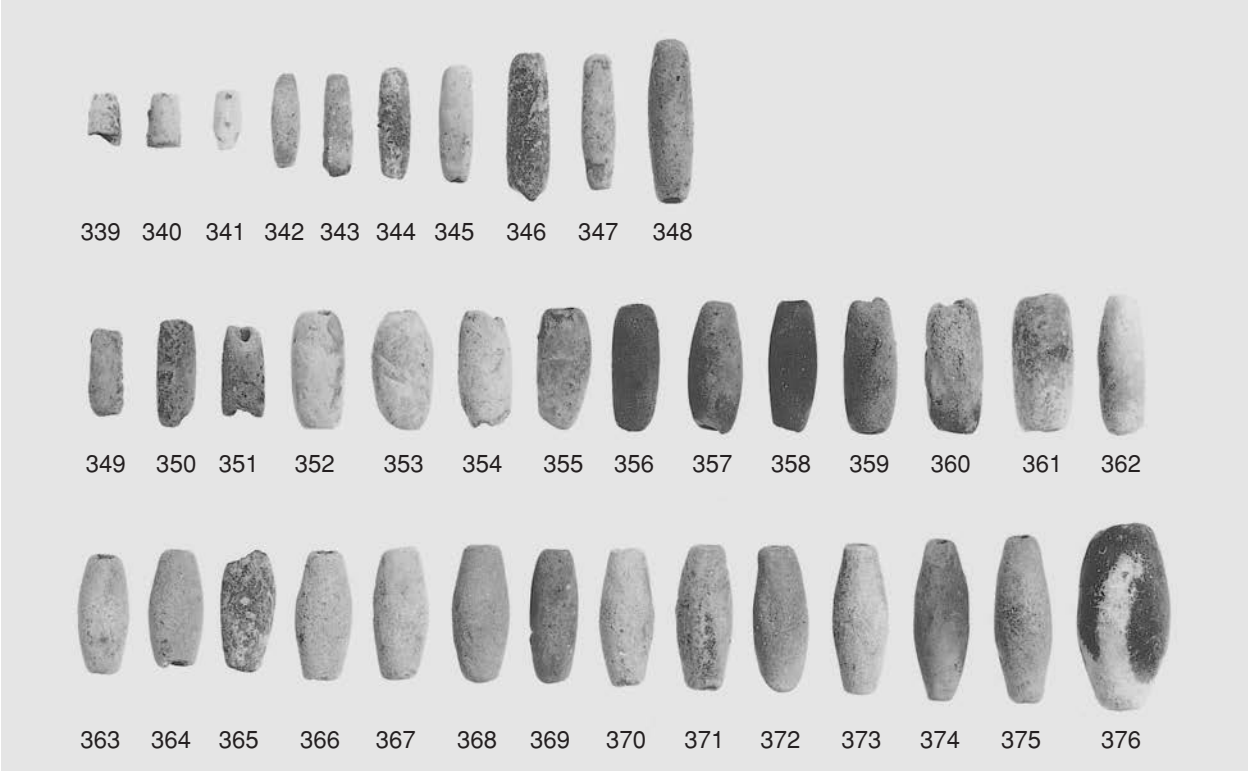

242
244
246
73
243

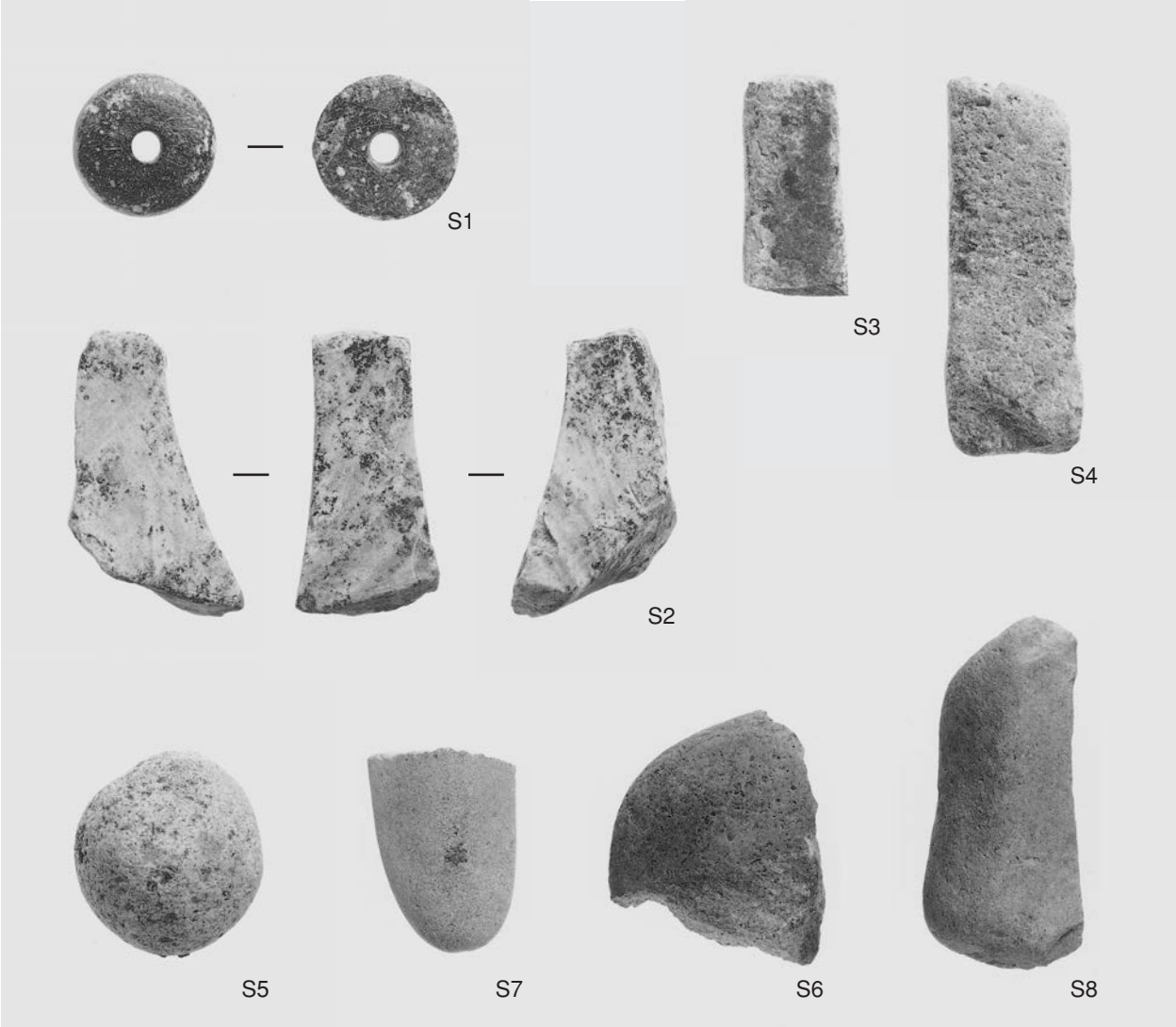

297

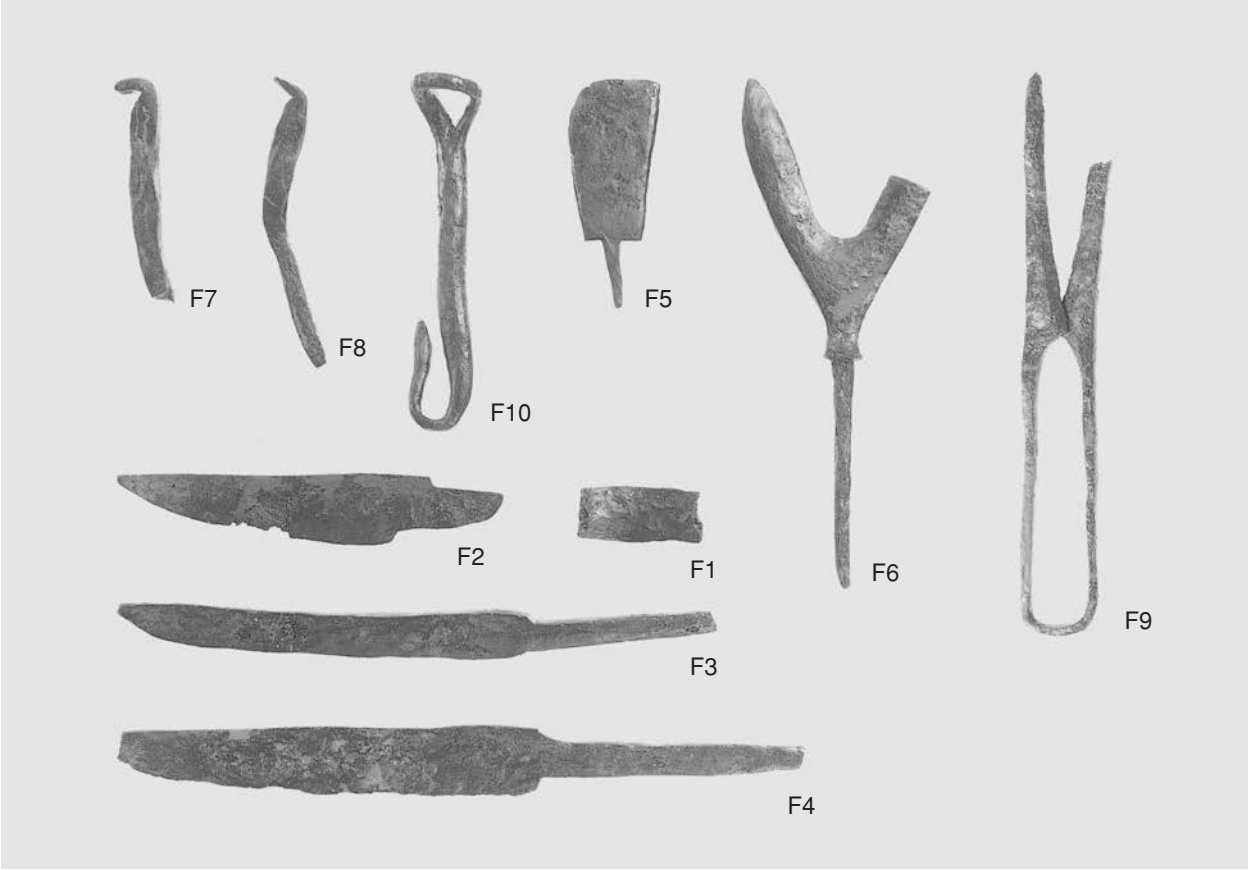

299


375
383
384
385
379
380
381
382
333

377


339 340 341 342 343 344 345 346 347 348
349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362
363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376


S1
S3
S4
S2
S5
S7
S6
S8


F7
F8
F10
F5
F6
F9
F2
F1
F3
F4

発掘調査体験学習会①

発掘調査体験学習会②

発掘調査体験学習会③

現地説明会風景

報　告　書　抄　録

ふりがな	ちくまみやのまえいせき
書名	竹万宮ノ前遺跡
副書名	（主）姫路上郡線住宅宅地関連道路整備促進事業に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第357冊
編著者名	上田健太郎・三辻利一・パリノ・サーヴェイ株式会社（矢作健二・石岡智武）
編集機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中500　TEL079-437-5589
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650-8567　神戸市中央区下山手通5丁目10-1　TEL078-341-7711
発行年月日	2009（平成21）年3月23日

（ふりがな）所収遺跡名	（ふりがな）所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡調査番号					
竹万宮ノ前遺跡（ちくまみやのまえ）	赤穂郡上郡町竹万（あこうぐんかみごおり ちょうちくま）	28481	2001003	34度51分51秒	134度21分38秒	20010524～20010824	1,833㎡	（主）姫路上郡線住宅宅地関連道路整備促進事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
竹万宮ノ前遺跡（ちくまみやのまえ）	集落遺跡	弥生時代後期	竪穴住居・掘立柱建物・土坑	弥生土器・鉄器	絵画土器が出土。
		古墳時代中期～後期	竪穴住居	須恵器・土師器・韓式系土器・紡錘車	渡来系集団の影響を想わせる初期須恵器や韓式系土器、円筒形土器（土製品）が出土。
		奈良時代	柱穴列・溝・土坑	須恵器・土師器・瓦・土錘	古大内式Ⅱ型（小犬丸式）軒丸瓦が出土
		平安時代後期～中世	掘立柱建物・柱穴・溝・土坑	須恵器・土師器・備前焼・陶磁器・鉄器・砥石	

兵庫県文化財調査報告　第357冊

竹万宮ノ前遺跡

（主）姫路上郡線住宅宅地関連道路整備促進事業に伴う発掘調査報告書

平成21年3月23日

編集　兵庫県立考古博物館

〒675－0142　兵庫県加古郡播磨町大中500

TEL 079－437－5589

発行　兵庫県教育委員会

〒650－8567　神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷　株式会社　邦栄堂

〒675－2213　兵庫県加西市西笠原町766